山岳

二〇一三年

第百八年（通巻一六六号）

山岳　二〇一三年　目次

［記録］

キャシャール南ピラー初登攀……花谷泰広……7

パタゴニア・ポローニ縦走とフィッツロイ縦走トライ……横山勝丘・増本亮……33

未開の地・ザンスカールの未踏峰に立つ……2012年　日本山岳会学生部ザンスカール遠征隊……37

［調査・研究］

立山連峰の積雪と氷河……飯田肇・福井幸太郎……45

未踏の岩峰、禁断の山塊――四川省西部高地2012秋……中村保……63

［読物］

河口慧海を支えた財界人とその時代……藤本慶光……87

俳句と登山……広渡敬雄……109

静観的登山者生涯の山岳詩……倉知敬……118

大正2年夏、上高地……関塚貞亨……130

武田久吉の書簡をめぐって……湯口康雄……148

図書紹介

雪線（大阪市立大学山岳会）……松家　晋…156／垂壁のかなたへ（S・ハウス）……近藤雅幸…158／最後の辺境　チベットのアルプス（中村　保）……池田常道…162／炉辺10号（明治大学山岳部）……迫田泰敏…164／探検家、36歳の憂鬱　アグルーカの行方（角幡唯介）……江本嘉伸…166／梅棹忠夫―「知の探検家」の思想と生涯（山本紀夫）……平井一正…171／針葉樹15号（一橋山岳会）……絹川祥夫…173／地図を作った男たち（山岡光治）……児玉　茂…176／知られざる世界への挑戦（京都外国語大学附属図書館）……田村俊介…178／On Top of the World The New Millennium（R・セール）……南井英弘…180

追悼

吉村公一さん（平林克敏）…190／宮下啓三さん（松本恒廣）…193／西丸震哉さん（長岡正利）…197／廣谷光一郎さん（伴　明）…202／阪本矩祥さん（大森久雄）…206／岩瀬晧祐さん（横山厚夫）…209／手塚宗求さん（さとう宗幸）…212／村木潤次郎さん（児玉　茂）…215／西澤健一さん（田上敏行）…220／松永敏郎さん（大橋　晋）…223／梅木秀徳さん（加藤英彦）…226／史　占春さん（斎藤惇生）…229

会務報告……235
支部の活動報告……271
委員会の活動報告……317
山岳図書目録（2012年）……A16

表紙デザイン＝小泉　弘
表紙版画「タンボチェの娘」＝塚本晴雄

キャシャール南ピラー初登攀

花谷泰広

ご縁とは不思議なものだ。当初の計画は、馬目・横山・花谷の信州大学山岳会トリオでカラコルムにあるバインターブラックに行くものであった。信大の先輩方が挑んで登り切れなかったライン。そのラインをベースに自分たちでアレンジを加えて完成させる。そんな計画で話を進めていた（後日談ではあるが、このラインは２０１２年の夏にアメリカ・チームによって登られ、キャシャールと同じく第21回ピオレドール賞を受賞）。

しかし、いろいろあってこの計画はキャンセルになってしまった。非常に残念だったのだが、僕としては代案を考える楽しみができた。僕はそのとき、横山とともにパタゴニアにいた。辛うじてフィッツロイのノースピラーを登ったに過ぎなかったが、世界中からたくさんのクライマーが集まるパタゴニアで受けた刺激は大きかった。一方でフィッツロイ山群では、表現は適切ではないかもしれないが、いわゆる冒険的な要素を感じることができなかった。どちらかと言うともっと手軽に楽しめるし、発想次第ではとても挑戦的で夢のあるラインを描くことができる。事実横山は、そのラインを夢見て２０１３・14シーズンもパタゴニアに出向く予定だそうだ。ぜひとも日本人クライマーによって成功させてもらいたいものだ。本当に何度も行ってみたいと思わせてくれる魅力的なエリアではあったが、自分自身が何をしたいかという結論は出ないまま、贅沢な悩みを抱えて帰国した。

自分は何がやりたいか。考える時間はあまりなかったが、やはりパタゴニアでは感じることができなかった登山がしたかった。つまりは、もっと未知であること。誰も登っていないこと。そして、山が大きく山頂が遠いこと。結論を保留にしてもらっていた馬目に連絡し、やはりヒマラヤ方面に行きたいことを申し出た。この時点では、具体的にどこに行くのかは決まっていなかったが、青木がすでに手を挙げていたので全く新しいチームができ上がった。そして、3人で気になる山を挙げて議論した結果、馬目が以前より目をつけていたキャシャール（６７７０ｍ）の南ピラーの初登攀を目指すことになった。この時点で4月に入っており、準備をするには十分な時間はなかったが、とにかく20代（青木）・30代（花谷）・40代（馬目）の、だんご三兄弟のようなトリオでのチームが完成し、一つの夢に向かって動き出すことになった。

［キャラバン］

私にとってネパール・ヒマラヤ方面での登山は今回が8回目となったが、これまでになくコンパクトな規模になった。ルクラで雇用したポーターはたった5名。ベースは食事・ベッドともにロッジを利用することにより、同行するネパール人スタッフは1名のみとなった。これほど身軽にヒマラヤに行けるとは、恥ずかしながらこれまで考えもしなかった。反面、これまでのヒマラヤのような賑やかさはなく、ちょっと寂しい感じもした。この方法は、馬目が２００９年のテンカンポチェ東壁の登山で取り入れたスタイルだ。その翌年のランタンの遠征でもこのスタイルだった。結果としてコスト的にもかなり安く上げることができ、よりコンパクトでシンプルな登山が可能となる。

4日間のキャラバンは順調そのものだった。初日はルクラからチュタンガ（およそ３５００ｍ）まで。この日はゆっくり目の行動となった。2日目に４６００ｍの峠越えがあり、その前後をどうするかがポイントだったが、この日は頑張って長めに行動して、一般的な宿泊地である４１００ｍの集落（チェトラブック）を通過して、標高３６００ｍにある小集落のタクトールまで下げた。体力的には辛い一日になったが、おかげでこの日も快適な睡眠を楽しむことができた。3日目にキャシャールをこの目で初めて見ることができた。惚れ惚れするピラミッド。こんなに目立ってカッコいい山の、ど真ん中のラインがまだ残っていたとは。この出会いには感謝せずにはいられなかった。長く未解禁だったこの山がオープンになったのは２０００年。２００

3年に我々が下降した西稜から初登された。南ピラーは過去何度かトライされていたが、いずれも6000m付近までで断念していて、いまだ未踏であった。

ベースを置くタンナ（4300m）には4日目に到着。我々にはおあつらえ向きの宿を確保することができた。滞在期間中、食事はすべてロッジで注文することを前提に、1泊600ルピーで大部屋を貸切。3人で使うには広過ぎるスペースで、ベースを空けるときも、気兼ねなく荷物を広げっぱなしにすることができた。男3人が一つの部屋で籠る様はまるで合宿だ。でも、個人的にはこの空間はゴキゲンだった。宿のご主人夫婦はとっても親切なシェルパ族の人たちで、毎日毎食、心のこもった美味しい食事を提供してくれた。外見は小さくて古い建物だったが、このベースは我が家のようにくつろぐことができた。

宿には昨年春の英国隊が残していったキャシャールの写真があって、そこには何本かのラインが引かれていた。この山についてはかなり調べたつもりでいたが、何本か知らないラインが入っていた。しかし、どれも途中で終わっていて、やはり2003年の西稜以外に頂上まで抜けた記録はないようだ。宿の主人は、今年は偵察に留めておいた方がいいのではないか、と丁寧にアドバイスしてくれたが、残念ながらこちらは一度で決める気満々だ。

［メラ・ピーク高所順応登山］

10月24日から高所順応でメラ・ピークに出かけた。メラ・ピークは今やヒマラヤでも人気のトレッキング・ピークの一つに数えられ、登山者やそれをサポートするガイド・ポーターがひっきりなしに往来する賑やかな山だった。ルートもほとんどの部分が緩やかなスロープをたどり、高所順応さえ失敗しなければ比較的簡単に登ることができる。おまけに展望が素晴らしく、近くにそびえるマカルーはもちろんのこと、エベレストやローツェ、遠くはカンチェンジュンガまで見通せる素晴らしい展望だ。我々にとっても好都合で、キャシャールの南ピラーを正面から観察できる、唯一の山でもある。

ところが、最初の順応は青木がハイ・キャンプで不調を訴えいったんタンナに下山。青木の回復を待つ間、馬目と花谷で下部岩壁の偵察と試登を行なった。麓からの偵察には高倍率のスコープを用い、かなり細かい部分まで観察することができた。その結果、南西壁側（南ピラーの左側）は落石が頻発していて、とても登れそうな状況ではないこ

とが分かった。南東面は一見良さそうだったが、上部の緩斜面帯の水平距離が長く、時間がかかりそうな気配。最後に２０１０年に英国隊が登ったラインを試登した結果、４９００ｍ付近まであっという間に登ることができたことから、今回のコンディションには最良のラインであると判断した。２回目の順応では無事にメラ・ピークの頂上を踏むことができた。これでキャシャールにトライする準備が整った。

出発前からこのルートを登るには、ある程度の時間がかかるだろうとは予想していた。そして、実際にこの目で見て、その予想は確信へと変わった。

下部岩壁の標高差はベースからおよそ９００ｍほど。ここは途中で水を得ることができそうなポイントがないので、一番スピードが上がりそうなラインで、１日で抜ける必要があった。しかし、プラトーを挟んで上部岩壁は様相が一変し、まずはボロボロな岩場がおよそ３００ｍ。ここはスピードを上げたくても上げにくいポイントだ。それにルート・ファインディングも慎重にしなければならない。この岩場を抜けると標高がおよそ６０００ｍ。過去のトライはほぼこの辺りで敗退している。６０００ｍから上部はミックス壁が出てくるが、ここは弱点を繋げて行けそうだ。そして、そこを抜けると雪稜。場合によっては一番厄介なパートかもしれない。続いて頂上直下の岩壁。ここもできる限り弱点を繋いで抜けたい。最後にはオンサイトで下る西稜が待っている。軽量&速攻は通用しないと判断した。必要な日数は１週間。これだけの時間はどうしても必要になるだろう。そのためには、ある程度荷物が重くなることは受け入れなければならない。

［キャシャール南ピラー登攀］

11月6日

ついにこの日がやってきた。感情が高ぶっていたせいか、夜はほとんど眠ることができなかった。朝3時に起床。宿の主人が密かに仕入れていてくれた日本のお米を炊いてくれた。腹いっぱい平らげて4時半ごろ出発。ここから2時間ほどかけてゆっくりと岩場の取付まで歩く。絶対にここを戻らない。いつになく強い意志で誓う。ここを下るということは、どこかで敗退して戻ってきたということだから。下部岩壁の標高差およそ７００ｍは、今日中にこなさなければならない。終日、花谷がトップで登る。1週間分の食料・燃料を詰め込んだザックを背負ってユマーリング

する2人のことを考えると、少しでも楽なラインで登らなければと思う。ラインは明瞭だが、岩に付着した土やコケが多くて、不快な部分もあった。中間部の大きなバンドまでは緩傾斜のクライミング、上部にかけてはやや傾斜が増し、岩が脆くなってきたが、日暮れ前に予定のビバーク・ポイントに到着。ラッキーなことに、水も確保できた。夕日に照らされたメラ・ピークが美しい。どこまでも続く雲海に心癒される。ユマーリングで疲れたという馬目に対して、「いい運動だった」と振り返る青木。若さって素晴らしい。

11月7日

2日目も若干脆い岩場を3ピッチ登ると、中間部のプラトーに繋がる氷河に出た。長い雪稜をだらだらと歩き、上部岩壁を5ピッチ登ってビバーク。ここで標高およそ5800m。ベースからすでに1400mを登った計算になるが、明らかにここからが勝負と言わんばかりの上部の様相だ。重荷が体力をじわりじわりと奪っていくが、まだまだ元気。

11月8日

気が休まることがほとんどなかった3日目。赤色の岩壁帯。脆くて急峻で、この部分の突破はこの登山を成功させる重要なパートであった。この日のトップは馬目に託す。雪がほとんどない岩場が続くため、トップはクライミング・シューズで登る。積み木を積み重ねたような岩場が続いた。核心部のかぶり気味のクラックだけが硬い岩で、「クライミングはこうでなくちゃ！」という馬目の歓喜の声が響く。この傾斜でのユマーリングは地獄そのものだったが……。そこからはまた積み木に戻る。馬目は終始ロープが岩を跳ねるのを嫌い、最低限のランナーでじりじり延ばしていった。しかし岩場が尽きるころ、ついに恐れていた事態が起こってしまった。気温の上昇のせいか、上部からの自然落石が青木を直撃。頬の辺りにヒットした落石の痕は痛々しかったが、幸いなことに登山は続行できた。その後も落石は続いたが、なんとか上部岩壁の中間部、我々が「すべり台」と名付けた雪壁に突入。負傷したばかりの青木がロープを延ばして進み、最後は馬目が最高のビバーク・ポイントを発見して、一日を締めくくった。標高はおよそ6100m。

ここまでを振り返ると、青木の落石だけが唯一のアクシデントではあったが、順調そのものであった。懸案の赤壁

帯は突破できたし、標高も６０００ｍを超えた。すべり台上部のミックス壁も予想より傾斜はあったが、問題はなさそう。ちょっと余裕が出たような気がしたので、調子に乗って貴重な1食分をデザートとして平らげた。本当の核心がここから始まるとは考えもしなかった。

11月9日

４日目の壁は、昨日とはまるで違って硬い岩となった。快適なミックス壁にルートを延ばす。無風快晴。こんなに快適なクライミングがこの標高でできるなんて、夢のようだ。６２００ｍ付近に目視できた最後の残置支点があった。しかし、最後の最後で状況ががらりと変わった。ある程度ロープが延びた地点から動きがない。ようやくコールがしたときには、ずいぶんと時間が経っていた。フォローして行ってみると、愕然とするような光景が広がっていた。恐竜の背中のようなシュガースノーのリッジ。これが頂上岩壁まで続いているではないか。夕暮れが迫るなか、危ういスノーリッジを削り、なんとかテントを設営できるスペースを確保。どうやら昨日の楽勝ムードは取り消さなくてはならない。

11月10日

キャシャールに取り付いて5日目の朝を迎えた。今日も暖かい朝日が、僕たちの凍えた体を弛緩させてくれる時間がやってきた。しかし、気持ちまで緩むことはなかった。明るくなって、改めて僕らが置かれている危うい状況がはっきりした。現実を目の当たりにして、言葉少なげに出発準備を整えていった。

出発前から悪い雪の部分はまかせてくれと豪語していた割には、厳しい現実を前に少し気後れしている自分がいた。ここで落ちることは絶対に許されない。腹をくくって1ピッチ目のトラバースに入る。動き出してすぐの氷にスクリューを1本決める。これが最初で最後のプロテクションとなった。後は自分を信じるのみ。危ういヒマラヤ襞のリッジを、一つ一つ丁寧に越えていく。たっぷり時間をかけて最初の50ｍをこなし、さらにうんざりするほど雪を掘って、少しでも安定した氷になんとかスクリューを決めて、アンカーとした。

「そっから先に進めそう?」

ビレイを解いた馬目が聞いてきた。馬目とは3度目の海外遠征。国内でもよくロープを組んだ仲だ。その声の調子で、つまり何が言いたいのかは聞き返すまでもない。言う

までもなく、ここが分岐点だ。つまりは引き返すならここ。突っ込むなら、ここから先は頂上経由でなければ下降は不可能になるだろう。興奮した脳味噌を冷やして、先の様子を改めて観察した。これまで以上の傾斜の雪が続いている。だが、ここから見たところで行けるかどうかなんて分からない。一方では、必ずここを突破できるという強い自信がみなぎっていた。根拠はなかったが、体の中から沸き上がってくるこの気持ちに、素直に従おうと決めた。

「大丈夫！」

そう覚悟を決めた後、心の中である誓いを立てた。

「田辺さん、鍛えてもらったすべてを出します」

思い返せば12年前、当時大学生だった僕は、ガネッシュ・ヒマールⅡ峰（７１１１ｍ）に挑んでいた。僕たちの先輩方が過去2度にわたってトライしたものの、頂上には達していなかった。それを阻んでいた一番の理由は、困難なミックス壁のクライミングではなく、延々と続く雪の稜線のトラバースだった。3度目の挑戦となったこのときも決して順調とは言えなかったが、1ヶ月ほど時間をかけて、いよいよ未知の領域へ足を踏み入れることになった。チームを引っ張っていたのが、僕のヒマラヤの師匠と言うべき田辺さんだった。田辺さんはその計り知れない経験値を武器に、恐ろしげなヒマラヤ襞を何食わぬ顔で次々と越えていった。足元には３０００ｍ近い南壁の空間が広がっていた。そんな場所のトラバースをフォローするのは、気持ちいいものではない。コールが聞こえたところでなかなか進む決心がつかず、体も硬直して思うように動かない。あまりの恐ろしさに完全にビビっていた。若くて経験の少ない僕は、体力的には余裕があっても心が追いつかなかった。結局、最後は心が折れてしまい、頂上まで残り数百ｍを残して敗退した。苦い思い出となった。

思えばこのときが、ヒマラヤ襞を経験した最初の登山でもあった。その後の登山においても、このときの悪さが基準となった。田辺さんとは、翌年のローツェ南壁の遠征を最後にしばらく行動をともにすることはなくなったが、あの悪い稜線を進む先輩の姿は目標となった。それからの8年間は、良いことも悪いこともたくさんあったが、ガネッシュのときに打ちのめされた思い出は、やはり常に自分を奮い立たせてくれる力になった。

２００９年秋。田辺さんとは8年ぶりにチームを組むことになった。アルパイン・スタイルでのヒマラヤは、田辺さんにとって初めてのことだったようだ。当時48歳だったが、ヒマラヤへの情熱は変わることはなかった。このとき

はヒムルン・ヒマール（７１２６ｍ）でプレ登山を行なった後、ネムジュン（７１３９ｍ）西壁に取り付いた。ベースを出て４日目、頂上へはヒマラヤ襞の稜線を残すのみとなった。田辺さんとロープを組んでいた僕は、「あのときを思い出しますね」と、思わず昔のことを口にしていた。だが、あのときと違うのは、先頭に立つのは僕自身だということだった。今回もガネッシュのような稜線ではあったが、今度は確実に自分の力でルートを延ばせるようになっていた。西壁を初登攀して同ピークの第２登に成功した事実よりも、「花谷も成長したなぁ……」という師匠の言葉を聞いた瞬間の方がよほど誇らしく、そして嬉しかった。

覚悟を決めたこの先の３ピッチは、生涯忘れることができないクライミングになった。部分的ではあるが、傾斜が70度から80度くらいの雪の壁。どうやったらこんな地形が生まれるのだろうか。もはやアックスのピックは役に立たない。シャフトを根本まで突き刺し、足はできるだけ深く蹴り込んだ。同じ動作を確実に繰り返して登っていくしかなかった。途中のスノーバーは、墜落を止めてくれることはないだろう。行き詰まれば襞のトラバースやクライム・ダウンを繰り返し、悪夢のような雪のリッジを突破した。

だが、このときのクライミングは、12年前に目の当たりにした田辺さんの登り方そのものだったように思う。襞に切れ目を入れてロープを引っ掛けるのも、シャフトを深々と打ち込んで我慢強く登るのも、襞を乗り越えるタイミングもその方法も、すべて田辺さんの真似でしかなかったかもしれない。12年前の苦い記憶も、今となってはこのときのためにあったのかとさえ思う。

ここを重荷でユマーリングするのは、本当に大変だったと思う。３人の内誰か１人でもミスをしたら、全滅するかもしれない。そういう恐怖感があった。危ういキノコ雪の上で一夜を過ごす。標高６５００ｍ。ようやく明日は頂上に抜けられそうだ。

11月11日

６日目の朝は鉛のような体の重たさを感じた。これまでで一番冷え込み、太陽が昇っても暖かくない。今日は頂上を越えて下降を始めなければ、体力的にも限界が近い。一番の弱点と判断した左上のラインにルートを取る。馬目がトップで壁に取り付く。もはやスピードは上がらないが、２ピッチを確実に登った。しかし、まだ終わらない。最後の最後で、とても硬い氷でできたセラック越えが残っていた。あまりの硬さに馬目が途中で力尽き、最後は青木が粘

りのクライミングでようやく二足歩行の世界に到達できた。

よろよろと頂上に向かって歩く。なんともない歩きが、果てしなく続くように思えた。頂上はキノコ状の雪でできていた。登頂を喜ぶと言うより、もう登らなくてもいいという安堵感の方が大きかった。

下降は真夜中まで続いた。最後は暗闇と疲労とが重なり、頂上から５００ｍほど下ったシュルントで眠れぬ一夜を過ごした。すでにシュラフは凍りつき、手の指の爪はほとんど浮いてしまっている。

11月12日

まだ標高差２０００ｍを残した7日目。顔はむくみ、体は思うように動かないが、まだ心がしっかりしている。幸運なことに、フランス隊のものと思われるトレースに合流できた。途中で雪が降り出し、霧が濃くなって手こずったが、この日の深夜にタンナに戻ることができた。

［登攀を振り返って］

思えば毎日、太陽が味方してくれた。テントの中が一瞬にして暖められ、凍えた体が弛緩していくのを感じた。そして、苛酷な一日を乗り越える力となった。太陽の暖かさに癒され、励まされ続けた7日間だった。ルートに付けた「The Nima Line」に込められた思いは、Nima＝シェルパ語で「太陽」に対する感謝の気持ちだ。

下山後しばらくは、登ったという事実を受け止めることが難しかった。喜びと安堵が静かに、少しずつ膨らんでいく感じだった。バック・キャラバンが不安になるほど消耗していたけれど、心は満ち足りていた。「本当にあそこを登ったんだね」と言いながらも、実はまだ少し信じられない気持ちも混じっていた。一方で、これまでにない苛酷な登山を乗り越えられたことで感じた新しい可能性と、これ以上リミッターを外してしまうと危うい、という本能的なものを垣間見ることができた。多分、現時点ではこれ以上のことはできなかっただろう。しかし、今回このラインを成功できたことは、失敗も成功も含めてこれまでコツコツと積み上げてきたものが実った成果だと思う。愚直に山登りを続けてきて良かった。

山はクライマーの技量だけで登れるものではない。それは必要最低限身に付けておかなければならないことだ。一

緒に登る仲間との出会い、山と出会うタイミング、天候、体調……それらが一つでも欠けたらうまくいかない。そういう意味で、今回は何一つ欠けるものがなかったと思う。それを運が良かったと言うのには抵抗がある。だから、こう言いたい。今回はこの山にご縁があった、と。

＊本稿は、今回の登山の後に『岳人』２０１３年３月号とパタゴニア社のブログ「クリーネストライン」に寄稿した文章に加筆・訂正し、まとめたものです。

（写真＝馬目弘仁・青木達哉・花谷泰広）

デリケートな雪稜が続く中間部

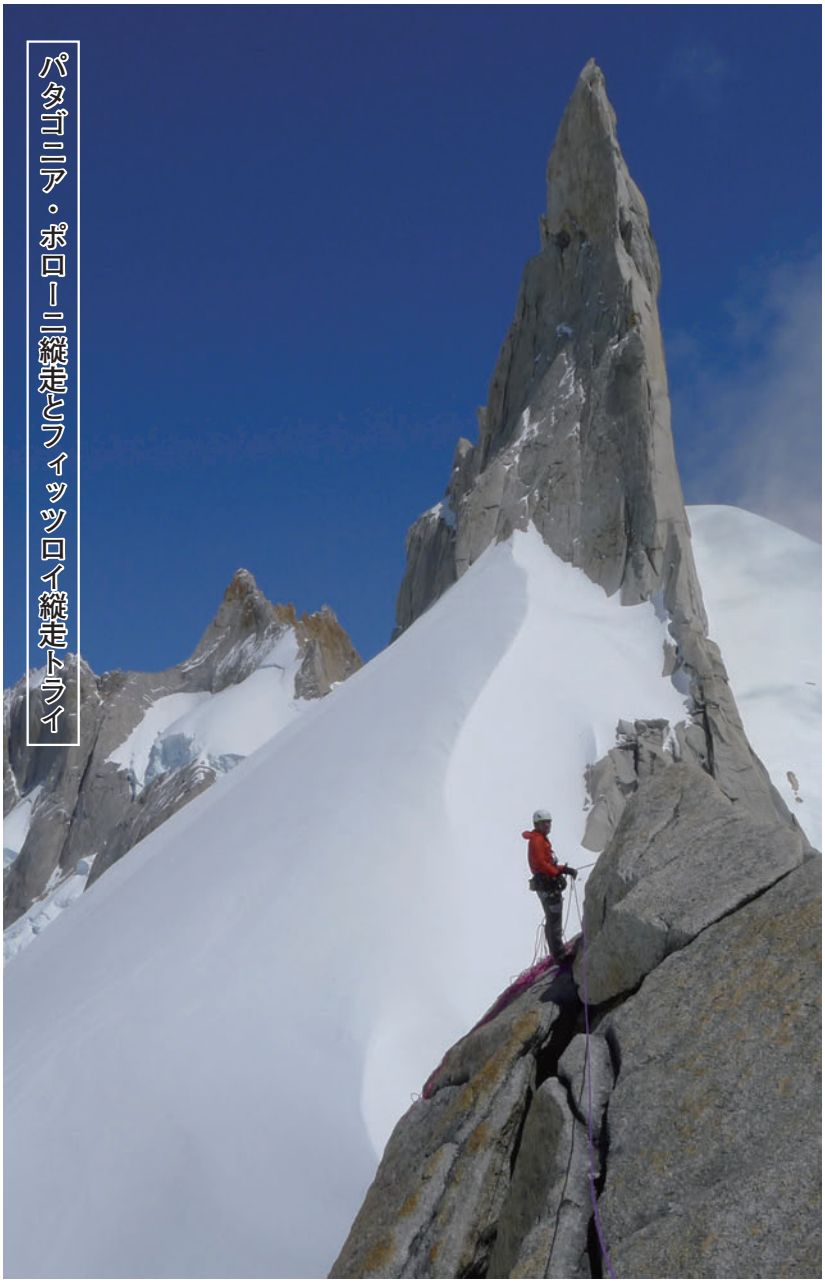
ヘッド・ウォールにルートを探る馬目

南ピラー上部岩壁帯を望む

登攀の核心となったシュガースノーのリッジ

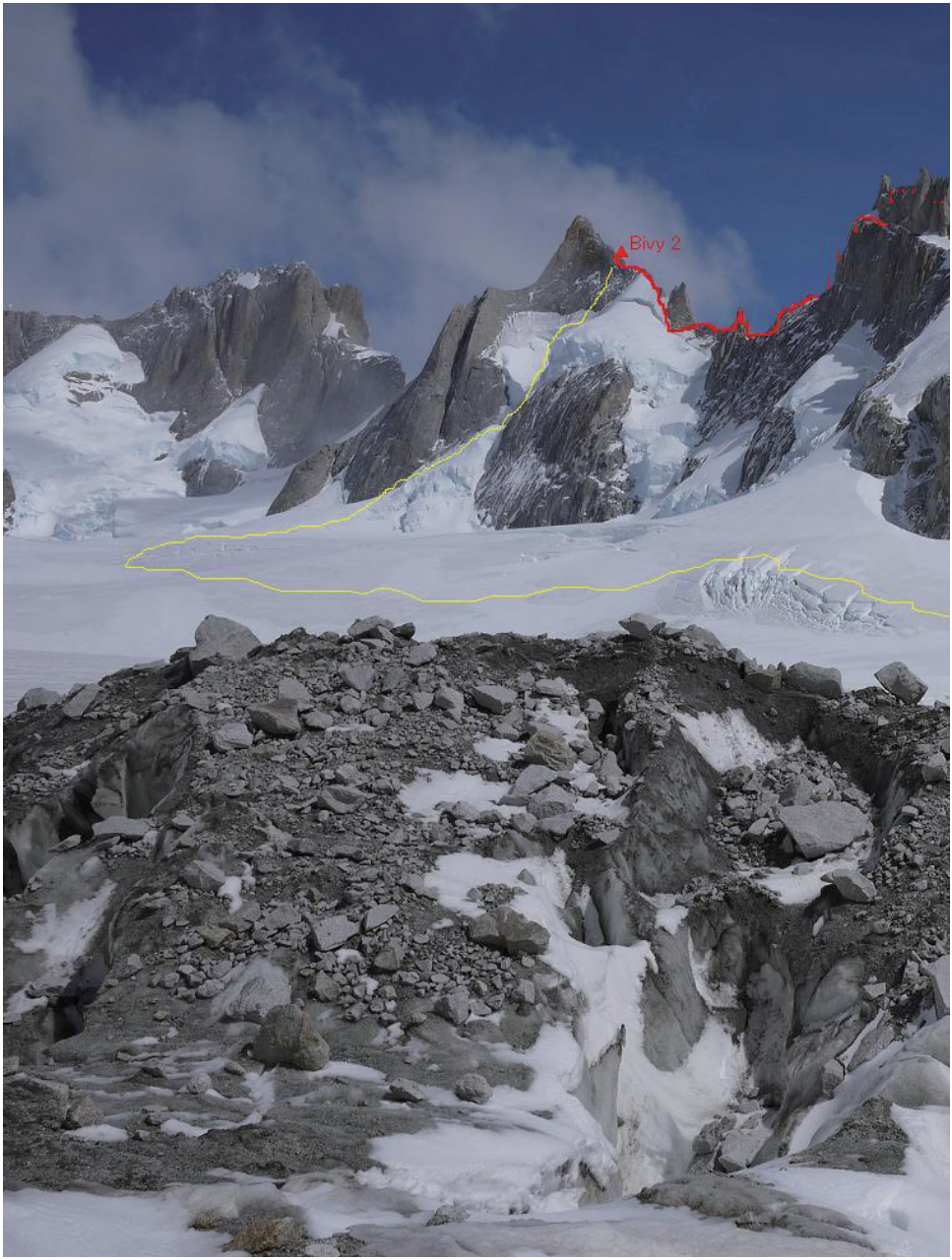
頂上に立つ青木達哉（左）と馬目

それまでの好天が一転。辛い下山を強いられた



東稜下部岩壁上部から望むアグハ・ポローニ

Rappel 90'
Bivy 1



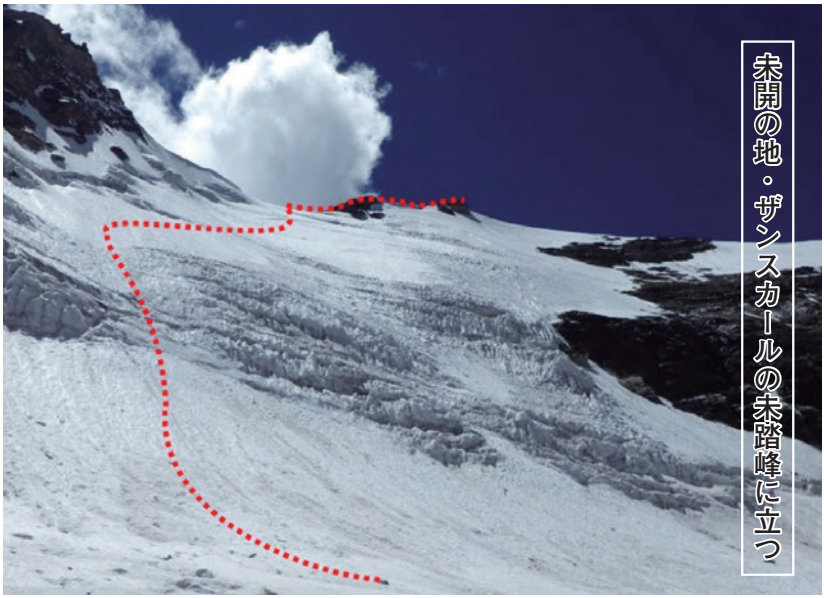
ポローニ縦走ルート

スカイラインがケアベア・トラバース

左からアグハ・ギジャメ、アグハ・メルモス、そして最高点のフィッツロイへと続く

セロ・ポローニ東峰を目指すも悪天候に阻まれ、完全縦走はならず

ポインセノット南西壁「ジャッジメント・デイ」のフリー初登に成功する



PT6165 への登頂ルート

レナク氷河上から見た PT6165（右奥）

ルート下部を登高中。眼下はレナク氷河

メンバー全員で山頂に立つ

登頂後、高度 6000 m 付近を下山する

パタゴニア・ポローニ縦走とフィッツロイ縦走トライ

横山勝丘・増本亮

横山にとって2度目となった今回のパタゴニア。昨年とは比べものにならないほど天候に恵まれ、オーバーワーク寸前の充実した時間を過ごすことができた。

今年は縦走に焦点を当てた。とはいえ、日本アルプスを歩くようなイメージとはほど遠い。大岩壁を取り囲むように鋭い岩峰、岩稜が走り、それが山頂に向かって複雑に延びている。これを繋ぐ、それがこの場所での縦走だ。なにより、組み合わせ次第でさまざまな遊び方ができるという点が魅力だ。

頭に浮かんだ案は二つ。一つ目はポローニ縦走。この山は、フィッツロイ北面に入った者なら誰もが目を見張るほどの印象的な針峰である。去年の遠征の際、何度もこの山の麓を歩いたおかげで、ぼくの頭の中に完全にスタックしてしまった。そしてもう一つが、フィッツロイ縦走である。これはもう、説明の余地もない。衣料メーカーのパタゴニアのロゴでご存じの方も多いだろう。7つあるピークを北から南へ繋げて登る。単純かつカッコいい。分かりやすい。

[ポローニ縦走トライ]

最初の晴天周期はクリスマス後に訪れた。フィッツロイ方面に向かうにはまだ季節が早過ぎるため、標高の低いポ

ローニを目指す。２０１２年12月25日、未踏の下部岩壁に取り付く。最初の6ピッチは想像以上の良質の花崗岩を楽しめた。そこを越えると一転、複雑なリッジが始まる。ルート・ファインディングに苦労し、何度も登り返しを強いられた。想像以上に長い下部岩壁は13ピッチに及んだ。

中間部の雪稜をたどって上部壁の既成ルートに取り付こうとしたところ、下部の2ピッチは雪に覆われていた。そこで、事前に目をつけておいた右のラインから取り付く。ここは未踏だったようだが、内容は素晴らしいのひとこと。どこまでも一直線に続くクラックは、ヨセミテにあっても三ツ星と言える質の高さであった。上部の既成ラインに合流してからも、楽しいクライミングが続いた。

アグハ・ポローニの山頂に立ったのがちょうど日暮れ。急いで裏側を下降する。計6ピッチで雪面に降り立ち、平坦地を探してビバークしたが、結局、寝たのは午前3時を過ぎていた。

翌日はアグハ・ステファンからセロ・ポローニ東稜へと縦走。技術的にも難しい場所は少なくて比較的順調に進むことができたが、既成ルートに合流してからの雪の処理と、傾斜の強い北面のトラバースに苦労した。そして、そのころには風が強まり、雪も降り始めた。残念ながら良いビバーク地を見つけることができず、北面に見つけた幅30cmほどの外傾したレッジに腰掛けてビバークするよりほかなかった。翌朝は朝から風雪。下降することだけにエネルギーを費やす。南面を、眼下の氷河に向かって一直線に下った。

アグハ・ポローニまでは新ルート、そこから先も未踏のリッジをトレースして既成ルートまでは合流した。でも、セロ・ポローニ東峰までは残り１００m、計画していたラインのトレースは失敗に終わった。もちろんそれは悔しいが、内容は非常に充実していた。それなりに満足はしている。

[フィッツロイ縦走トライ（ケアベア・トラバース第5登）**]**

待ちに待った長期の晴天周期は、２０１３年1月中旬にやってきた。フィッツロイ山群最北端のギジャメのコルを目指し、コルでビバーク。翌日、雲一つない快晴の下、快調にロープを延ばす。技術的には5・11を超える部分はなく、登ることそのものに苦労する部分はない。それよりも、リッジの縦走部分こそが難しい。技術的には最高でも5・10前半なのだが、右に左にリッジを縫うようにして進み、膨大な数の懸垂下降を強いられる。そしてまた、そういう

タクティクス変更の判断を瞬時に行なう能力こそが必要である。

ギジャメとメルモスを越えて、フィッツロイの基部に着いたのは2日目の夕方だった。ここから標高差１２００ｍの北ピラーである。ここは技術的にもそれなりに高く、5・11が連続する。しかし、普段からフリー・クライミングに慣れてさえいれば、登るのに苦労することはあまりない。それよりも、ロープを傷ませないで登るのに気を遣うことの方が大変だった。登攀3日目の夕方にはフィッツロイのヘッドウォールを登っていたが、なんとか持ちこたえていた2本のロープの外皮がついに破れた。これ以上の登攀は続行不能である。とりあえず山頂を目指し、夜11時には山頂に着き、そこでビバークした。

翌朝、傷んだロープに怯えながら南東稜を下降。コルから先の登攀は望むべくもなく、氷河に向かって懸垂を続けた。チャルテンの町に戻ったのは午前3時半を過ぎていた。

体力的な余裕はまだまだあったし、気力だって萎えてはいなかったはずだ。でも、ロープが傷んだのは不運だったのか？　いや、そうではない。結局のところ、そういう細かな部分に気を遣えるかどうかの話なのだ。そしてまた、そういう自分たちを取り巻くことすべてに気を遣い、すべてうまくやりくりしてもなお、気力体力を失わずに登り続けること、それこそがこの縦走の核心なのだ。そういう意味では、まだまだ僕たちはこの縦走を完成させるだけの実力が整っていなかったと考えてよい。きっと、この先の稜線を繋げて登って行ったときに、想像もしないくらいの疲労が心身ともに訪れるに違いない。それはまた、楽しみでもある。

［ポインセノット南西壁ジャッジメント・デイ第2登（フリー初登）］

残された日程を無駄に過ごすのももったいないので、フィッツロイ縦走における最大の核心となるであろうポインセノットの下降ラインを、偵察を兼ねて登りに行った。とはいえ、南西壁でベストと言われるこのルートのフリー化を試みるということにこそ魅力を感じていた。

ルートは一部脆いセクションはあるものの、それも許容範囲内。中間部のすっきりした岩壁部分は、どのピッチも非常に質が高かった。懸案のエイド・セクションでは、フリー化するという興奮は相当のものだった。純粋にクライミングそのものを楽しむことができて、それまでの二つの

縦走とは違った楽しみが味わえた。ビバークを挟んだ2日目の夕方、僕たちはポインセノットの山頂に立った。滞在50日間、充実したクライミングの連続だったけれど、成功と呼べるものは一つもなかった。そういう意味で、山頂でのひとときは贅沢かつ幸せな時間だった。山頂からの下降は、ここを登って来たからこそ迷わずに降りることができたけれど、想像以上に複雑だった。そういう意味でも、ここに来ておいて良かったと心底思った。

すでに来年の再訪は決定している。ギアや生活用具も、現地に残置してきた。これから一年、やるべきことはたくさんある。やれることはやったとしても、成功できない可能性だって高い。でもそれだからこそ、挑戦する意味がある。集中して一年を過ごしたい。

（会報「山」２０１３年3月号・８１４号より転載）

横山勝丘（よこやま　かつたか）
１９７９年神奈川県生まれ。信州大学入学と同時に山岳会に入会。以後、先鋭的なクライミングを続け、２０１０年に岡田康とともに登ったマウント・ローガン南東壁「I-TO」の初登でピオレドールを受賞。パタゴニア・クライミングアンバサダー。

増本亮（ますもと　りょう）
１９７９年静岡県生まれ。２０１１年、中国ミニヤ・コンカ山群ダッドメイン東壁「雨ニモマケズ」を初登攀し、ピオレドール・アジア「ゴールデンマウンテンブーツ賞」を受賞。同人クライミングファイト所属。

未開の地・ザンスカールの未踏峰に立つ

２０１２年　日本山岳会学生部ザンスカール遠征隊

今回のこの遠征は私にとって初めての遠征だった。私だけではなく、５人中４人が初の海外遠征で、平均年齢は22歳。遠征経験がほぼない、若手だけで行く未踏峰遠征。これを聞くだけで自分でもワクワクしてしまっていた。

もちろん、たくさん登られていて情報が豊富な山で、遠征経験の多い隊員がいれば、それだけ安全に快適に遠征ができることは分かっていたが、敢えてそうしなかったのは、遠征の面倒な部分も嫌な部分も、未踏峰挑戦という未知の開拓、経験の浅い隊員のみで右往左往すること、その何もかもを味わいたかったからだ。結果として、私は初めての遠征を真っ白な気持ちで味わうことができた。

この遠征が私自身にどんなものをもたらしたか、またほかの隊員にもどのような影響を与えたかは分からない。それは現時点では分からないが、私たちの登山人生のみならず、人生を豊かにする一つの経験となったことは確かである。

この遠征の目的は「未開の地の未踏峰に、遠征未経験者のみで挑む」ということであり、結果としてその目的は果たすことができた。

２０１２年８月15日に出国してインドに降り立ち、16日に食糧の買い出し、ＩＭＦ（インド山岳協会）訪問、日本大使館訪問などを慌ただしく済ませ、17、18日は車で12時間以上、悪路を走った。

デリーの町から景色が変わっていき、車の座席でお尻が痛くなり、車が故障し、信号で止まれば物売りが窓を叩く。18日には本格的な山岳地帯に入り、日本にはない景色に隊員一同興奮した。そうして着いたダルチャニ村には、キャラバン隊が待っていた。

現地交渉のためのガイド、コック、キッチン・ボーイ、馬方、馬、そしてデリーから一緒のリエゾン・オフィサー。こうして隊員5人と現地人7人と15頭のキャラバンが始まった。

高度４０００ｍを超えると、症状に差はあるものの高山病に頭を抱え始めた。富士山以上の高さに上がったことがないから当然だ。

ガイドに相談すると、ニンニク生姜ミルクティーという強力な血行促進飲料を作ってくれた。これの効能は素晴らしく、飲んだその場で体が熱くなり、このまま走って行けるのでないかと思うほど体が元気になった。

ヒマラヤ特有の昼と夜の寒暖の差と天候の変化は目まぐるしく、夜は必ず暴風雨になり、昼は照りつける太陽で水が欠かせない。しかし、その水も生で飲むことには細心の注意を払わないといけない。毎日の料理もやはり新鮮なものは減っていき、慣れない異国の味と慣れない遠征に、多少苦労したこともあった。しかしそれ以上に、隊全体にやっと遠征に来られた喜びが溢れていて、初めて見る、日本にはないさまざまなものに心を躍らせていた。

キャラバン開始から12日目、ＢＣ予定地に到着した。ＢＣから目標とする未踏峰ＰＴ６１６５が望めた。これからあの頂を目指して登山を開始するのだ、初めて登る海外の山、海外遠征の本番が始まると、緊張と期待と不安が入り混じった複雑な気持ちになったが、それでも期待が多くを占めていた。

ＢＣにて隊荷の整理、最終的な体調管理、心の準備を済ませ、登山を開始した。

8月29日　ＡＢＣ（５４００ｍ）設営および荷揚げ

ＢＣ（５１００ｍ）からガレ場を通り、ＰＴ６１６５へと繋がるレナク氷河末端からＡＢＣ適地を探す。ＢＣからＡＢＣまでは最初は約2時間かかったが、その後の往復活動で、最終的には1時間半を切るようになる。ＡＢＣ建設後ＰＴ６１６５の下部から上部までの全容が見える所まで久保田、大堀が行き、ＰＴ６１６５から東に出ている尾根

の北面にラインを見出した。その後ＢＣに下山。

8月30日　荷揚げ終了

前日は4割程度の荷揚げ。残りの6割を荷揚げした。一人18kgほど。スピードに個人差はあったものの、全員2時間以内にＡＢＣに到着した。到着後、高所順化も兼ねて５７００ｍ地点まで全員で登った。氷河の上はどんな所なのか、想像もできなかった。クレバスが開き、いつ崩壊するか分からないセラックがひしめく、そんなイメージを持っていたが、平坦な氷河は歩きやすく、日本の雪渓を思わせた。取付に登攀具をデポしたのちＡＢＣに帰還、そのまま一泊する。

8月31日　ルート工作

4時に出発、6時過ぎからいよいよルート工作を開始。取付に行くまでに高山が頭痛を訴え、ＡＢＣ待機。氷壁への最初の一振りは隊長の大堀。最も面白そうなセラック帯をリード。傾斜は70～80度ほどの氷壁。アイス系のプロテクションを取付に置いてきたことを後悔する。１２０ｍロープを延ばして、強傾斜を抜ける。その後、雪の斜面を右上ぎみに3ピッチ（以下、Ｐと表記）、トラバース1Ｐ、最初の1Ｐと合わせて5Ｐ延ばした所でロープが尽きたので下山開始。その時点で稜線まで後2Ｐか3Ｐと目測できた。

ＡＢＣで高山と合流後、翌9月1日をレスト日とした。その間に順化のできていない高山がこの日中にＢＣへ下山し、ＢＣにあるフィックス・ロープ１００ｍを持って、翌日合流することにした。

9月1日　休養日

高山と無事に合流。翌日の行動の細かいことを決めて、全員休養。

9月2日　山頂アタック

1時半出発、3時登高開始。最初のときよりも8割くらいの時間で取付に到着する。大堀、高山、飯田、久保田、三井の順番で登っていった。5Ｐ目の最終地点から真上に１００ｍ高山がロープを延ばし、飯田が最後に50ｍ延ばして稜線に出た。順番が入れ替わり、大堀が最後に稜線に上がった。先に稜線に上がった4人から歓喜の声が聞こえてくるが、まだ山頂ではないはずだ。しかし、まだ途中段階と思われるが、稜線に着いたときの達成感は大きかった。

大堀も含めて皆、「初」という状況に喜び勇んでいた。休憩後、ガレ場や硬い雪面を息絶え絶えに登り、7時20分、6165mの頂に立った。

初めて見る6000mからのパノラマは、写真や文章で見て想像し、憧れてきた世界そのものだった。氷河が蜘蛛の巣のように広がり、どこを登ればいいのか想像もつかない山々が聳えて、地平線はかすかに丸みを帯びて眼下に広がっていた。大学山岳部をやってきた一つの集大成がこれかと思うと感慨深く、泣きそうになる。皆それぞれ写真を撮り、下山を開始した。

隊長の大堀は6000mではしゃぎ過ぎて、酷い頭痛に襲われた。フィックスの回収工作は手伝わずに指示だけ出して、先にフィックスを伝って2P降りる。その後、下から隊員の下降を見守り、緩い氷河上に全員無事にたどり着いた。ABCで休憩後、BCに下山。リエゾン、コック、キッチン・ボーイ、馬方、皆が自分のことのように喜んでくれて、ようやく実感が湧いてきた。未踏の6165m峰を登ったのだ、と。

なお、PT6165に登頂した結果、山の命名権を得ていたのだが、実際に山名を付けるとなるとなかなか決まらなかった。山名をラダック語にするために、現地ガイドと再び連絡を取ることでも時間がかかってしまった。

帰国後、しばしの時を経てから、隊員それぞれが遠征を自分の中に経験として、思い出として吸収していく過程で、改めて山名を話し合った。その結果、この遠征で得たものは我々の今後の可能性を広げてくれたはずであるから、「可能性」という言葉をラダック語にした「THUKPA」にしようと決めた。そして、最終的に「峰、氷河の果て、頂上」などの意味持つ「KANGRI」と合わせて山名を申請し、「THUKPA（ツクッパ） KANGRI（カンリ）」が自分たちの初めての遠征で登った未踏峰の名前となった（現在、IMFに申請中）。

[遠征を振り返って]

インドのザンスカールについて知ったのは、日本山岳会の理事の方から声をかけられたときです。インド・ヒマラヤと聞いて、なるほどネパールだけでなく、グレート・ヒマラヤ山脈はインドにも及んでいるから当然、その山域もヒマラヤだ。今まで考えもしなかった山域でした。

まだ遠征するかどうかも確定しておらず、とりあえず京都大学山岳部のOBの方に去年の11月ごろ、詳しい話を聞

きに京都に行ったときには、今の遠征メンバーがすでに全員いました。いつの間にかこのメンバーでした。何かと縁があり、気の合う山仲間が、誘うとか誘わないということがほぼないまま集まったのは、それだけ意気投合していたのだと思います。

京都から帰ると、まずは登山許可を得ることから始めましたが、これの手続き書類を揃えるにも一苦労、現地との交渉にも苦労しました。苦労したというよりは、要領が悪かったのだと思います。

装備も、相手が未踏峰だけにありとあらゆる危険要因が考えられて、そのすべてに備えていたら無限に装備を持って行かなければならず、唯一ある一枚の写真を見ては悩みました。ここはスノーバーで行けそうだ、ここは何mくらいのピッチになりそうだ、ここにはクレバスが……etc。結果として、スノーバー系が決まる軟雪が多いと判断し、氷系のプロテクション類を少なくしました。それは結果的に大きな失敗となりましたが、それもまた経験になりました。氷河地形の見極めは、氷河地形がない日本では養えないということなのだと思います。

登山以外での苦労は、食事でした。この苦労は登山よりも上かもしれません。最初はカレー王国インドのカレーやナン、ナンより安いチャパティなどを美味しい、さすがインドはスパイスが違うね、などとバクバク食べて楽しんでいたのですが、10日、20日と食べ続けていくうちに全員が飽きました。コックの作る料理は美味しいのですが、やはりうどん、そば、天ぷら、寿司、日本食が恋しくて仕方がありませんでした。三井隊員とは、行ったこともない高級寿司店の話で腹を膨らませたものです。しかし、たまに出る焼きそばもどきやツナパスタは、歓喜して食べました。

キッチン・テントに入り浸っていたころに、コックが調味料を足しては私に味見をさせて、「ジャパニーズ・テイスト?」と日本人好みの味かを聞いてきたのが、とても嬉しかったです。残念ながら調味料自体がインドの香辛料なので、日本の味にはなりませんでしたが、心遣いから食欲が戻りました。

キャラバンでは、ひたすら広大な谷を歩くことに日本とのスケールの違いをものすごく感じました。電車に1、2時間乗っていれば県が変わる日本と違い、歩いて3日で次の村、しかもあまりに広いので進んでいる気がしないという状態です。

遠征の46日間で得られたものは膨大で、文章にするのも難しいです。隊員一人一人が独自に得たものもあるはずで

す。

私が思ったことは大きく二つです。海外はとても近いということ、あの楽しくて仕方のない遠征を、皆もやればいいのに、ということです。

そして、私は次の遠征もその次の遠征もやりたくて仕方がありません。それは恐らく、国内から海外へ一歩踏み出したことで、世界中に無限の山々があり、それらを垣間見たからだと思います。

この文章を書いている現在、遠征から1ヶ月しか経っていないことが信じられないくらい、普通に過ごしています。しかし、確実に私の心にはこの遠征により新しい風が吹き込んで、今も静かに渦巻いています。山に、新しい挑戦がしたい、より高いレベルに行きたい、また冒険がしたい。それほどに、この遠征は私にとって宝物になりました。

（大堀　泰祐・記）

［隊員のコメント］

大堀　泰祐（中央大学山岳部）

ついにやってやった、海外遠征をやったぞ、という気持ちです。自分が隊長、学生のみ、未踏峰。自分が最初にやる遠征はこうだ、と決めていた遠征を実現させました。遠征自体のレベルは高くないですが、そのなかでも学ぶことは山ほどありました。今後はもっと技術・知識・経験をつけて、より自分の納得できる形で遠征のレベルを上げていきたいです。この遠征で得たものは、今後の私の登山人生の大切な土台の一部であり、4年間の山岳部活動から次の段階に行く、最高の一歩となりました。

飯田　祐一郎（日本大学山岳部）

遠征を終えた多くのクライマーが言っているように、遠征を終えたころに感動的な言葉が素直に出てくるのだと、僕自身そう思っていました。しかし、そうではないのです。今回の遠征で得たこと、感じたことを言葉で表そうとしても、それがなぜだか上手くできないのです。なぜ言葉で表わせないのか。それは恐らく、今回の遠征から得たことがあまりにも多過ぎるために、その経験を言葉にできないからだと思います。僕にとって今回の遠征はどのようなものだったのか。今現在、この問いに僕自身が答えることはできませんが、いつかきっと素直に今回の遠征を語れる日が来ると思っています。そして、今回の遠征で得た大きな経験が、今後の僕の人生においての重要な鍵になってくるのだと、遠征を終えた今、そう感じています。

高山　智之（三重大学ワンダーフォーゲル部）

僕はフィックス工作の日に、高山病で一人だけ行動できませんでした。これまで皆と一緒に登ってきたのに、この日の登攀に加われないのは本当に悔しくて、登頂日には皆がそれを汲んでくれたのか、フィックス・ロープの一番先へ行かせてくれました。僕がリードして１００ｍロープを延ばし、さらに１Ｐ登ってコルに着きました。コルから周りのザンスカールの山々と山頂までの短い道のりを見て、このメンバーで1年間一緒に同じ目標を目指して頑張ってきたこと、そして、それを達成しかけていることにとても深い感慨を覚えました。

三井　健生（立教大学）

1年生の秋から行きたいと思うようになった海外遠征。現在4年の秋を迎えているので、ここまで来るのに3年かかりました。ただ、その分すごく感慨深いです。山頂を目指して雪壁を登っていくさなか、後ろを振り返ったときに見えた景色が強く印象に残ります。自分のトレースがずっと下の氷河まで続いていて、奥には壮大なザンスカールの山々が控えている。「ようやく自分もここまで来れたんだな」と、しばらく見つめていました。

久保田　真平（法政大学山岳部）

これは僕にとって2回目の遠征になります。今年の2月にヒマラヤのニレカ・ピーク（６１６９ｍ）を攻めましたが惜しくも敗退。だから、今回こういった形でリベンジを果たすことができ、心から嬉しく思います。

そもそも同期がおらず、同年代の人たちとあまり登ったことのない僕にとって、この遠征は正直すべてが新鮮で、本当に楽しかったです。ときたま衝突もしましたが、実のところ、僕はそれすらも楽しんでいました。「同じ地平に立って、同じ目標のために意見をぶつけ合える」それがどれだけ尊いことなのかを、今回しっかり学んだので……。

立山連峰の積雪と氷河

飯田　肇・福井幸太郎

1. はじめに

北アルプス・立山連峰は、日本の山岳の中でも顕著な豪雪地帯として知られている。そこにはさまざまな時間スケールを持つ雪が存在する。春の立山の風物詩である雪の大谷「雪の壁」は季節積雪であるが、稜線付近には多年性雪渓（万年雪）が分布する。最近の研究から、特に規模の大きな多年性雪渓の中には、日本で唯一の現存する氷河があることが確認された。立山連峰のこれらの特色ある雪氷環境は、氷河時代の遺存種といわれるライチョウや高山植物の生息環境と一致するばかりでなく、登山の基礎環境としても大変重要な意味を持つ。ここでは、これまでに分かってきた事実を基に、立山連峰の知られざる雪の姿を概観してみよう。

2. 1年間の積雪

図1に、立山西斜面に沿った平野から立山までの積雪深の季節変化を示す。雪に覆われた期間を見ると、標高10mの富山市内では1月から3月中旬までだが、標高2450mの室堂平では10月から7月中旬までとなり、なんと9ヶ月間も地面が顔を出さないことになる。また、一般に標高が増すほど積雪深が増え、富山市の最大積雪深が71cmなのに対し、室堂平では870cmで、10倍以上の値となってい

る。また、標高１０００ｍの美女平では４５０㎝で、ちょうど中間の値を示す。

春の立山の風物詩は、雪の大谷「雪の壁」だ（**写真１**）。雪の大谷は室堂平でも特に積雪が多い場所で、その積雪深は平均で16ｍにも達する。立山のような高山では雪は風を伴って降るため、風で雪が吹き飛ばされる場所（吹き払い）と、風に運ばれた雪が溜まる場所（吹きだまり）ができる。雪の大谷は典型的な吹きだまりであるため、降雪と飛雪が合わさり多量の積雪深となる。まさに世界でも有数の豪雪地帯である。

図２にレーザー・スキャン測量で計測された雪の大谷付近の積雪深分布を示す（iida, 2008）。これより雪の大谷（○印）では積雪深が15ｍとなっているが、すぐ西側の尾根部では１ｍ程度であり、大きな差がある。高山の積雪深が風の影響で不均一に分布し、風上側の尾根で少なく、風下側の谷で多いという傾向は、立山全体に見られる。さらに注目したいのは、雪の壁の積雪は晩夏から初秋までにすべて融けて、消失してしまうことだ。多量に積もり多量に融けることが、立山の積雪の大きな特徴といえる。

それでは、立山の降雪量（冬期降水量）はどのように測ればよいのだろうか。高山では珍しく平坦な室堂平の積雪深は、その付近の降水量を反映した平均的な値を示すと考えられる。そこで、室堂平の平坦部において積雪深を多点で測定し、その平均値を示す地点で毎春３月下旬（最大積雪深時期）に積雪断面観測を実施している。**図３**に２００２年から２００７年までの観測結果を示す。室堂平の最大積雪深は６～９ｍで推移している。また、室堂平の雪の密度は４００～５００kg／㎥に達する。これより冬期降水量を求めると、５年間の最大値は２００３年冬期の４３４５㎜、最小値は２００４年冬期の２７５９㎜となった。５冬期間平均すると３２６４㎜で、冬期の雪だけでも３０００㎜を超す降水量があることが分かる。富山市の年降水量の平年値は２２４５㎜なので、室堂平の冬の降雪だけで富山市の２年分の降水量にあたることになる。

３．多年性雪渓

立山連峰の３０００ｍ級の主稜線の東側には、特に積雪が多い地帯が存在する。冬期間、北西の季節風とともに降雪がもたらされるため、稜線の風下側に多量の吹きだまりが発生し、さらに雪崩による堆積が加わって、その積雪深は20ｍ以上に達する。このような場所では、積雪は越年して残り続ける。これを多年性雪渓と呼んでいる。立山連峰

には、御前沢雪渓、内蔵助雪渓、剱沢雪渓、三ノ窓雪渓、小窓雪渓などの多年性雪渓が、日本で一番多く分布している。各雪渓の位置を**図4**に示す。

規模の大きな多年性雪渓の一つである内蔵助雪渓では、氷体の詳しい調査が実施されている（**写真2**）。内蔵助雪渓は、立山（３０１５ｍ）東面の内蔵助カール内に位置し、下部に厚さ30ｍにも及ぶ氷体が存在する。氷体の内部構造を**図5**に示す（山本ら、１９８６）。ここでいう氷体とは氷河氷のことで、積雪が長期間にわたり圧密されて密度を増し、やがてすべての気泡が独立して通気性をなくした状態をいう。また、末端には氷河が存在した証拠となるエンド・モレーンが見られる。残雪が少ない年の10月、大きさが最小になるころに雪渓を訪ねると、まるでヒマラヤの氷河のような景観だ。雪渓表面に氷が露出し、幾筋もの水流が見られる。アイゼンを着けないと歩けないほどだ。水の集まる所には氷の縦穴（ムーラン）が数十個口を開けていて、深さは最深で20ｍに達する（吉田ら、１９８３）。名古屋大学などでムーランに潜っての調査が実施された（**写真3**）。穴の内壁からは、何層もの透明氷の層や汚れ層が見つかった。また、５ｍの深さを境に氷中に不整合面が存在し、その上部では氷の結晶粒が小さく、雪渓表面に近い水平な層構造をしているが、下部では40度以上の急傾斜で下流方向にせり上がり、氷の結晶粒も飛躍的に大きくなっていた（**写真4**）。さらに底部では、**写真5**に示すように、底の岩石が氷の層に沿って持ち上げられた、氷河の流動の痕跡を示すスラスト構造も見られた（飯田ら、１９９０）。

さらに、底近くの氷中から木片および葉片を採取し年代測定を行なったところ、約１７００年前という結果が得られた。さらに、不整合面の少し下の層より採取された木片は約９００年前という結果を示した（樋口ら、１９８８）。これらから、下部の氷体は約９００～１７００年前に形成されたものであると推定され、日本最古の氷河氷ということができる。

これらより内蔵助雪渓は、かつて存在した氷河の氷が融けきらずに残存している、いわば「氷河の化石」であることが分かった。現在のところ内蔵助雪渓では氷体の流動が実測されておらず、現存する氷河と確認するには至っていない。しかし、この内蔵助雪渓の氷河流動の痕跡を残す氷河氷の存在は、日本にも氷河が現存している可能性を大いに示唆するものであった。

4．現存する氷河

氷河とは、「重力によって長期間にわたり連続して流動する雪氷体」（日本雪氷学会編『雪と氷の辞典』、２００５年）と定義され、厚い氷体を持つこと、氷体が流動していることがその条件となる。それでは、立山連峰の多年性雪渓の中にこの定義を満たす氷河は現存していないだろうか。内蔵助雪渓の氷体からも示唆されたこの疑問を解明するために、立山カルデラ砂防博物館の研究チーム（福井幸太郎、飯田肇）は、立山連峰に存在する多年性雪渓の中で特に規模の大きい、立山東面の御前沢雪渓（**写真6**）、剱岳東面の三ノ窓雪渓、小窓雪渓（**写真7**）において、氷体の厚さと流動の観測を実施した。

氷体の厚さは、アイス・レーダーにより表面から下向きに電波を飛ばし、岩盤から跳ね返る電波を捉えて測定した。この機材は近年、登山用ザックに入るくらいまで小型軽量化が進み、剱岳のようなアプローチが悪い場所でも観測が可能となった。

また、氷体の流動観測は以下の方法で実施した。９月にアイスドリルで雪渓表面の積雪を貫通して氷体に達するまで穴を開け、長さ４・６ｍのポールを挿入して、その先端位置を高精度ＧＰＳで測定する。次に10月にポール先端位置を再びＧＰＳで測定し、氷体の流動量（水平方向の移動量）を求めた。

4-1　三ノ窓雪渓（氷河）

三ノ窓雪渓は、剱岳の八ッ峰と三ノ窓尾根の間の谷を埋める長大な雪渓で、長さは１６００ｍ、幅は１００ｍ、標高は１７００～２４００ｍに達する。２０１１年６月のアイス・レーダー観測の結果、氷体の厚さは最大で60ｍに達し、日本最大であることが分かった（**図6**）。また、同年９～10月に行なった高精度ＧＰＳを使った流動観測の結果、三ノ窓雪渓の氷体では、１ヶ月間で最大30㎝を超える比較的大きな水平方向の流動が観測された（**図7**）。流動観測を行なった秋の時期は融雪末期にあたり、積雪荷重が最も小さく、流動速度が１年で最も小さい時期にあたると考えられる。このため三ノ窓雪渓は、日本では未報告であった現存する「氷河」であると考えられる。

三ノ窓雪渓は豪雪地帯に位置し、さらに八ッ峰と三ノ窓尾根という急峻な尾根に挟まれているため、積雪期に雪崩が頻発する。豪雪と雪崩による積雪深にして20～25ｍに及ぶ膨大な量の雪の集積が、氷河の形成に大きく寄与していると考えられる。10月になると積雪の大部分は融け、氷体が一部露出してクレバスやムーランといった氷河特有の地

写真１　雪の大谷「雪の壁」

写真２　内蔵助雪渓全景

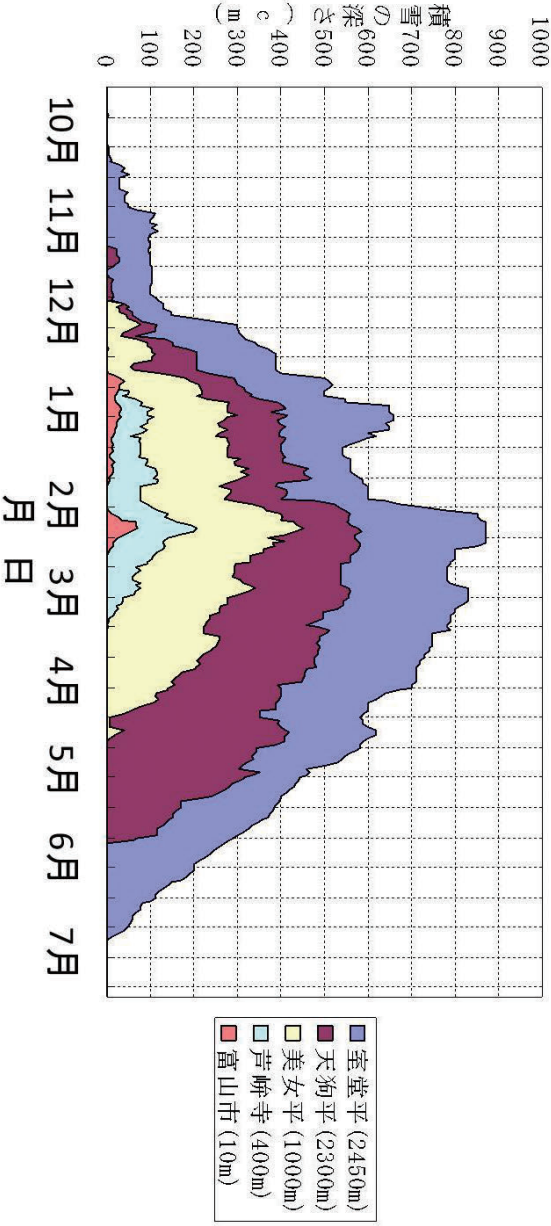


図１　立山西斜面沿いの標高別積雪深の季節変化　1990～91 年冬期

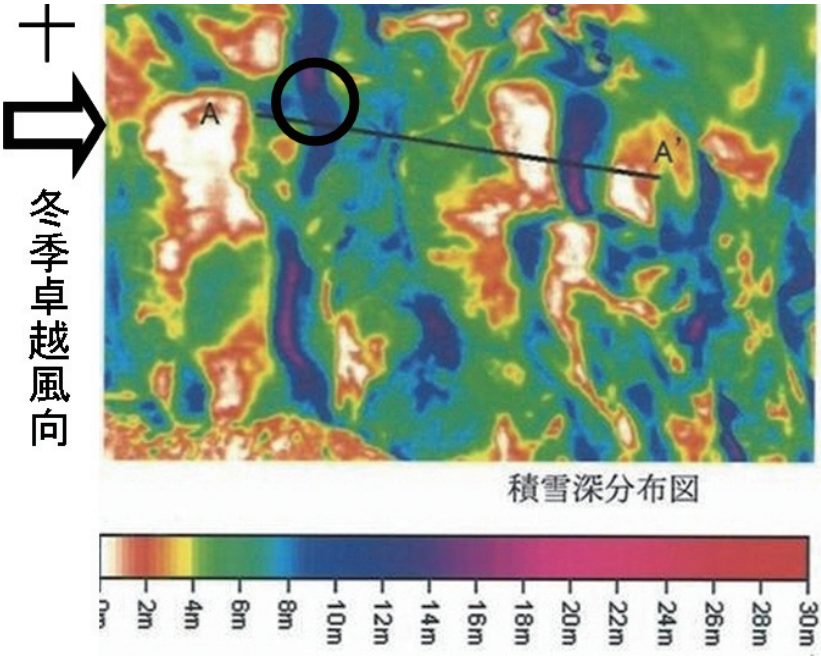


図 2　立山・室堂平(2450 m)の積雪深分布

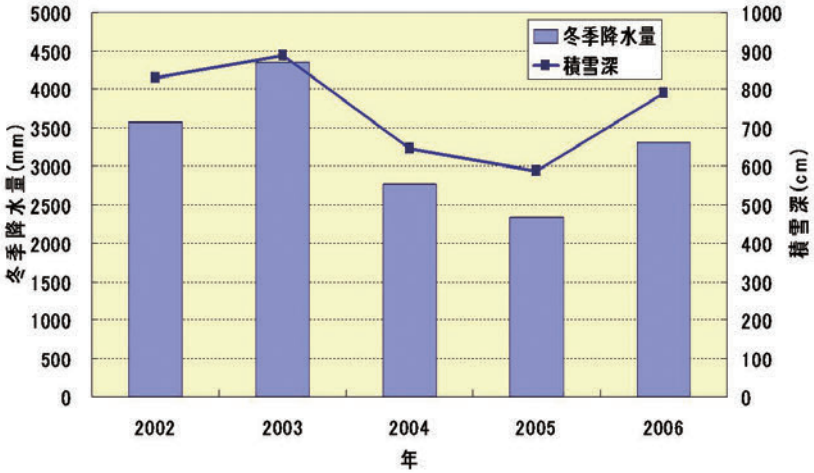


図 3　立山・室堂平の積雪深と冬期降水量

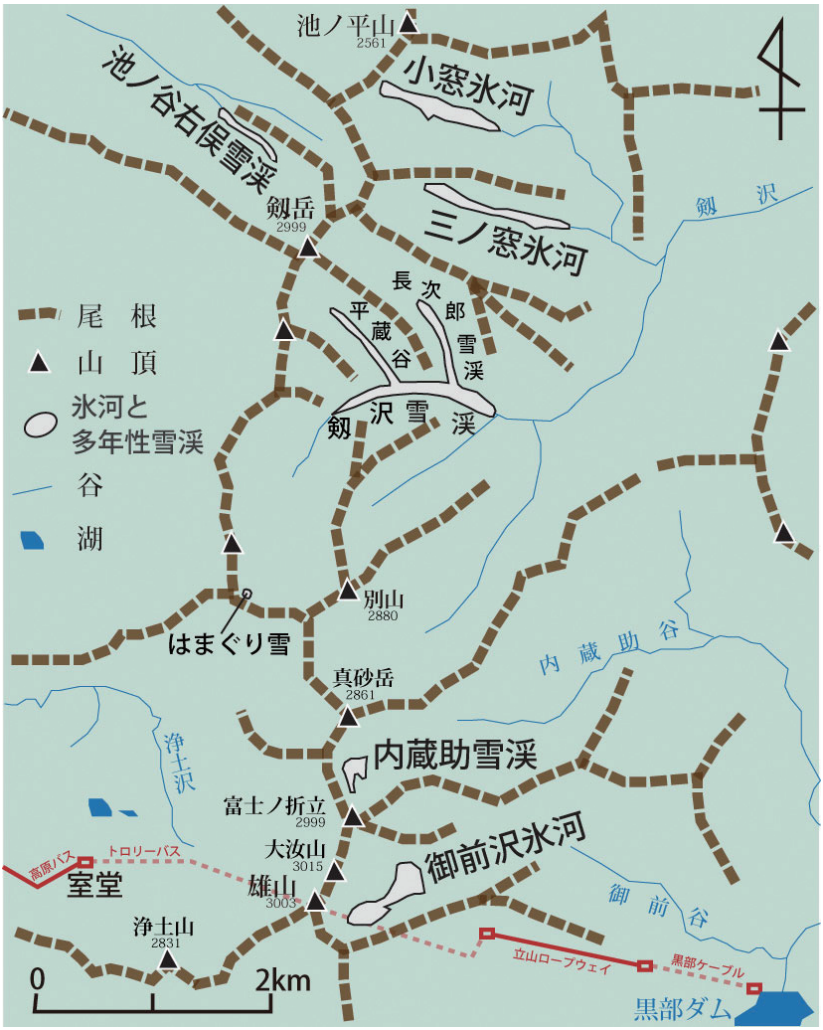


図 4　立山連峰の雪渓・氷河分布

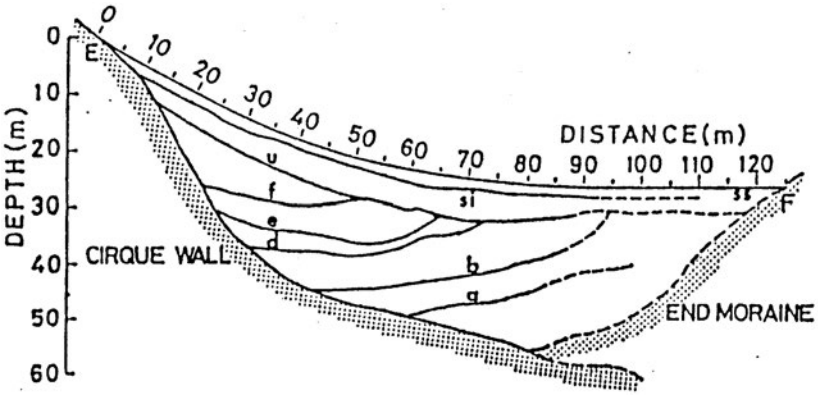


図 5　内蔵助雪渓の氷体断面図

写真 5　内蔵助雪渓底部の氷河氷の構造

写真３　内蔵助雪渓のムーランの調査

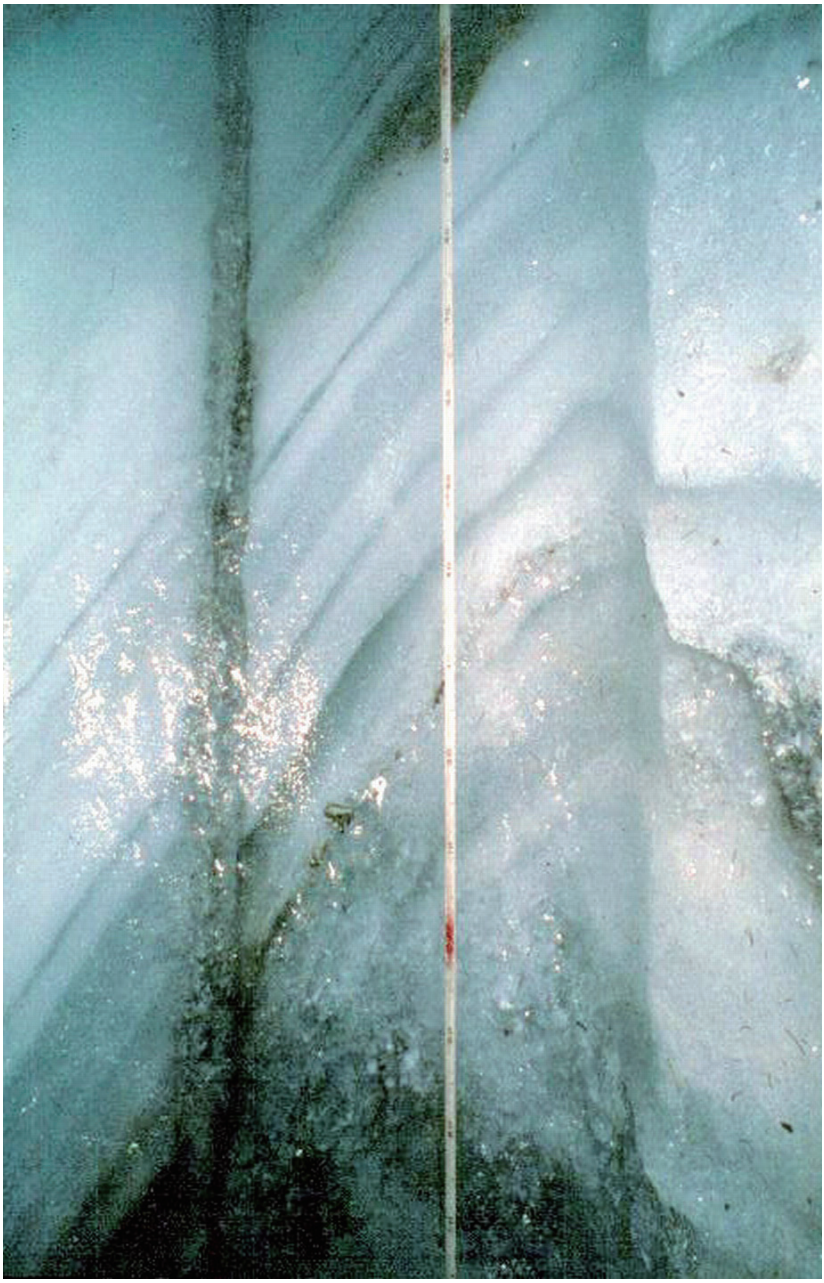


写真 4　内蔵助雪渓のムーラン内の層構造

写真 6　立山の氷河、御前沢雪渓

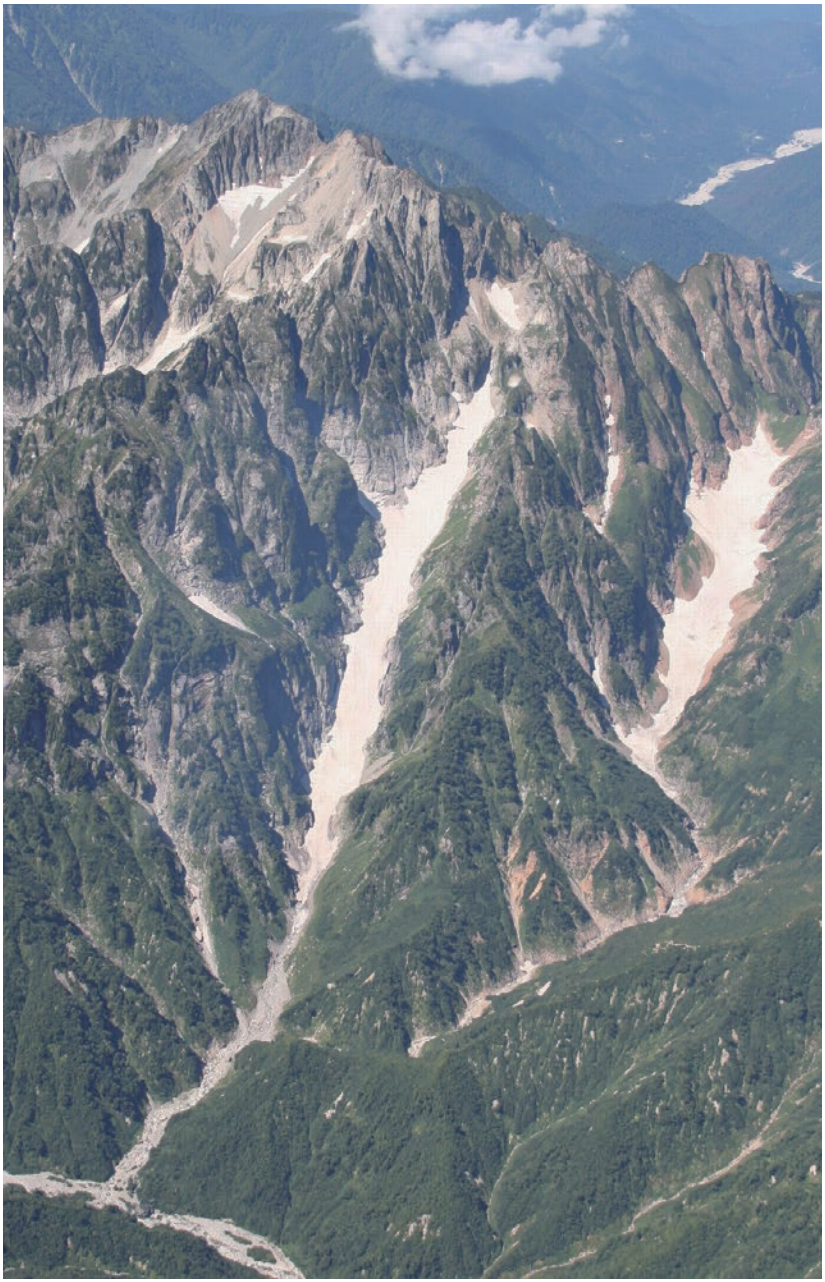


写真７　剱岳の氷河、三ノ窓雪渓（左）と小窓雪渓（右）

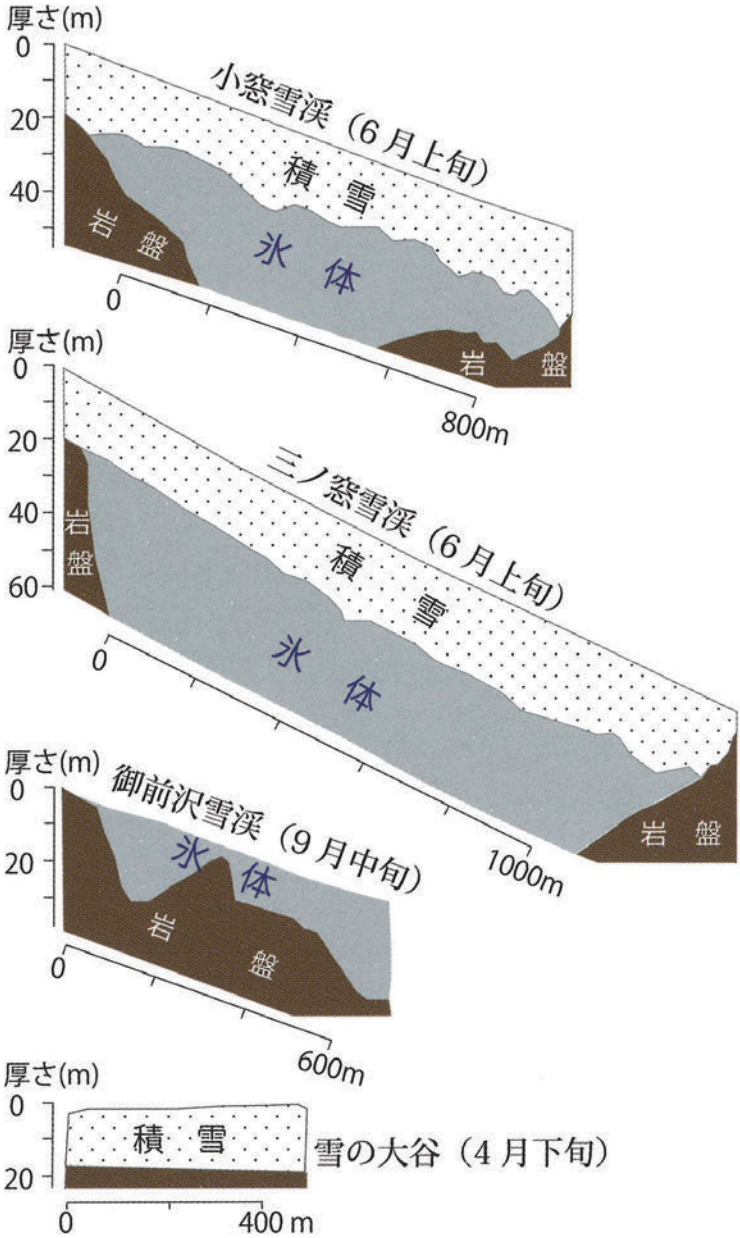


図6　三ノ窓雪渓・小窓雪渓・御前沢雪渓の氷体断面図

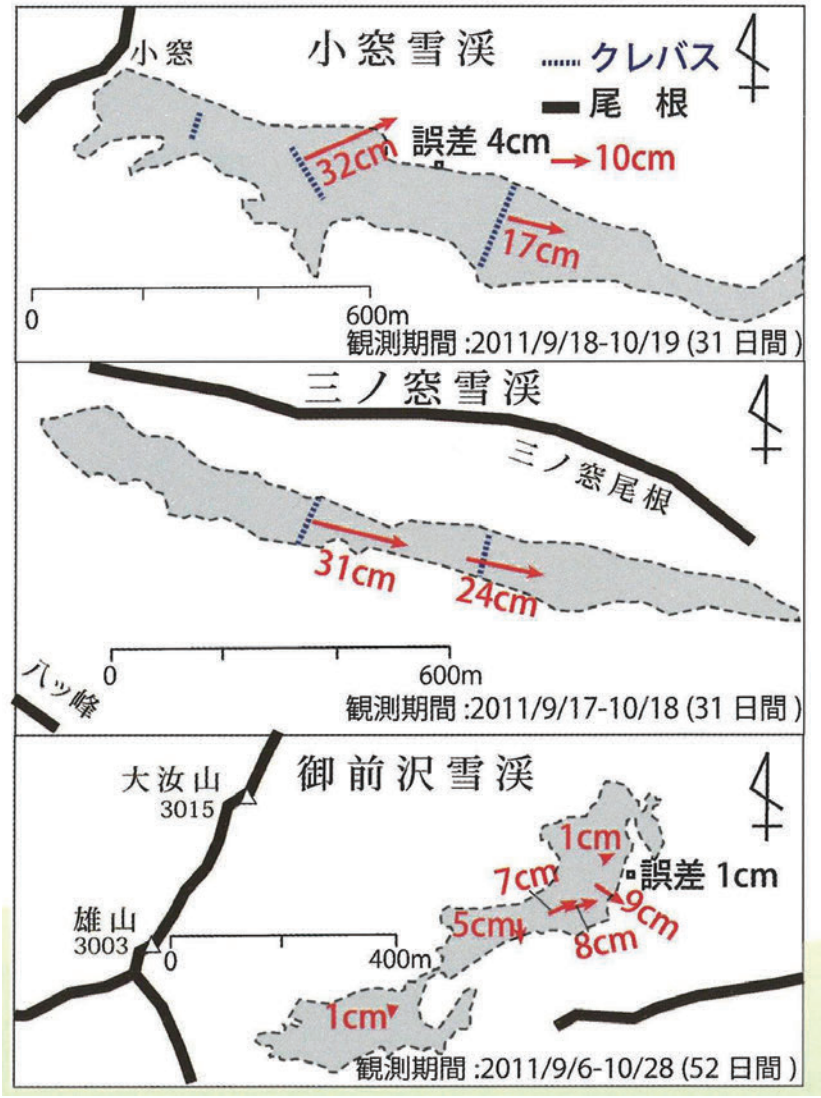


図 7　三ノ窓雪渓・小窓雪渓・御前沢雪渓の氷体の流動量

写真８　小窓雪渓（氷河）のクレバス調査

形が出現する。

4-2　小窓雪渓（氷河）

小窓雪渓は、剱岳の三ノ窓尾根と池ノ平山南東面の間の谷を埋める雪渓で、長さは１２００ｍ、幅は２００ｍ、標高は２０００～２３００ｍに達する。２０１１年６月のアイス・レーダー観測の結果、厚さ30ｍ以上、長さ９００ｍの三ノ窓雪渓に次ぐ規模の氷体の存在を確認した（**図６**）。また、同年９～10月に行なった高精度ＧＰＳを使った流動観測の結果、１ヶ月間で最大30㎝流動していた（**図７**）。これらの結果から小窓雪渓も現存する「氷河」と考えられる。

小窓雪渓にも、秋になるとクレバスやムーランといった氷河特有の地形が現れる。小窓雪渓は三ノ窓雪渓よりも幅が広いため、クレバスは全長２００ｍに達する。クレバスの断面の観察では、表面から深さ１～２ｍまで積雪で、その下には気泡を多く含む氷層がクレバス底まで続いていた（**写真８**）。

4-3　御前沢雪渓（氷河）

御前沢雪渓は、立山の主峰、雄山東面の御前沢圏谷に位置し、長さは７００ｍ、幅は２００ｍ、標高は２５００～２８００ｍである。この雪渓は、雄山山頂から眺めることができ、末端にはサル股モレーンと呼ばれる氷河地形が存

在する。

２００９年秋にアイス・レーダー観測を行ない、上流部に厚さ23ｍ、長さ２００ｍ、下流部に厚さ27ｍ、長さ４００ｍの２つの氷体を確認した（**図6**）。また、２０１０年と２０１１年の秋に高精度ＧＰＳを使って氷体の流動観測を行なった結果、上流部の氷体はすでに動きを停止していたが、下流部の氷体から１ヶ月あたり10㎝弱の水平方向の流動が観測された（**図7**）。流動速度は小さいものの、２年連続で秋の時期に流動していたことから、御前沢雪渓も現存する「氷河」であると考えられる。

三ノ窓雪渓と小窓雪渓の流動速度は、１ヶ月あたり最大30㎝程度、１年当たりに換算すると3～４ｍで、これはヒマラヤやパタゴニアなどの小型氷河の流動速度に匹敵する。

これらの結果は、２０１２年4月に日本雪氷学会に学術論文として投稿、受理され、立山・剱岳の3つの多年性雪渓は現存する氷河と学術的に認められた（福井・飯田、２０１２）。その後、同年6月30日に日本雪氷学会氷河情報センターの主催で、日本の氷河・万年雪研究に関するシンポジウムが富山市で開かれ、国内の氷河研究者の間で意見が交わされた。その結果、3つの万年雪を「氷河」と呼ぶことに異議は出なかった（白岩ら、２０１２）。

日本では、昭和初期から80年の長きにわたって国内に「氷河」があるのか否か議論が続いてきたが、ようやく「氷河」が現存していることが学術的に認められた。

これにより、極東地域の氷河の南限がカムチャツカ半島から立山まで大きく南下することになる。また、これらの氷河は世界的に見れば最も温暖な地域に存在する氷河といえ、今後の調査でその独特の形成維持機構の解明が期待される。

5. おわりに

これまで見てきたように、立山連峰の雪は、その量、質、時間スケールで国内に比類のないさまざまな特色を持つ。また、世界的に見ても、一冬で20ｍ近く積もった雪が一夏ですべて融解するような現象は大変珍しい。さらに、氷河が現存することが確認されたことにより、立山連峰の雪氷の学術的な価値がより高まり、「氷河を抱く山」としてのロマンと魅力が加わったと考えられる。これを契機に、未知の部分が多い立山連峰の雪氷環境について、今後のますますの調査研究が望まれるとともに、研究成果が登山活動に

も活かされることが期待される。

（立山カルデラ砂防博物館）

〈参考文献〉

Hajime IID A:Characteristics of Snow Distribution on the West Facing Slope of Mt.Tateyama, Northern Japanese Alps（2008）Proceedings of 36th IAH Congress, T5, 1-6.

山本勝弘・飯田肇・高原浩志・吉田稔・長谷川浩（１９８６）：インパルスレーダーによる内蔵助雪渓の内部構造調査．雪氷、48、1-9.

吉田稔・伏見碩二・池上宏一・竹中修平・高原浩志・藤井理行（１９８３）：北アルプス、内蔵助雪渓の氷体部に存在する縦穴の分布と形状．雪氷、45、25-32.

飯田肇・竹中修平・上田　豊・伏見碩二（１９９０）：北アルプス内蔵助雪渓氷体の内部構造．樋口敬二編：日本最古の化石氷体（北アルプス内蔵助沢）の構造と形状に関する研究．平成元年度科学研究費補助金（総合研究Ａ）研究成果報告書、19-30.

樋口敬二・山本勝弘・吉田　稔・大畑哲夫（１９８８）：北アルプス内蔵助雪渓の下部氷体の形成年代について．名古屋大学加速器質量分析計業務報告書（1）、33-35.

福井幸太郎・飯田肇（２０１２）：飛騨山脈、立山・剱山域の３つの多年性雪渓の氷厚と流動―日本に現存する氷河の可能性について―．雪氷、88、２１３-２２２.

白岩孝行・内藤望・飯田肇・福井幸太郎（２０１２）：氷河情報センター公開シンポジウム報告「日本の多年性雪渓と氷河―これまでの研究と今後の展望―」．雪氷、74、３５３-３５７.

未踏の岩峰、禁断の山塊――四川省西部高地２０１２秋

将来のアルパイン・パラダイス――沙魯里山・岡嘎山群
チベット族の聖山――工卡拉山・卡洼洛日山塊

中村　保

今年、２０１２年は前年にも増してチベットの政治状況は不安定で、テンションが高かった。私のフィールドである東チベットは、外国人はオフリミットのため、「最後の辺境」易貢蔵布の踏査継続は断念せざるを得なかった。

代案として考えたのが、四川西部高地の長大な沙魯里山（Shaluli Shan）山系の北端に位置する岡嘎（Gangga）山群と揚子江の一大支流・雅龍江（Yalong Jiang）を挟んで東側、大雪山山系の北西に延びる工卡拉山（Gonkala Shan）山系の卡洼洛日（Kawarori or Kawaroni）山塊の調査と山座同定である。雅龍江と甘孜の町から南側に指呼の内に望める岩峰群を擁する岡嘎山群は、２００５年に長野県の隊が試登を行なった。しかし、主峰の特定すらできず、有用な情報を持ち帰れなかった。卡洼洛日山塊は後述のとおり〝禁断の聖山〟である。両山塊ともすべて未踏峰である。四川省の後、雲南省の南部を旅し、19世紀後半のフランスのメコン川探検隊の足跡をたどったが、本稿での報告の対象外である。

２０１２年は岡嘎山群と卡洼洛日山塊でも外国人の入域には制限があった。春から頻発したチベット仏教徒の僧侶

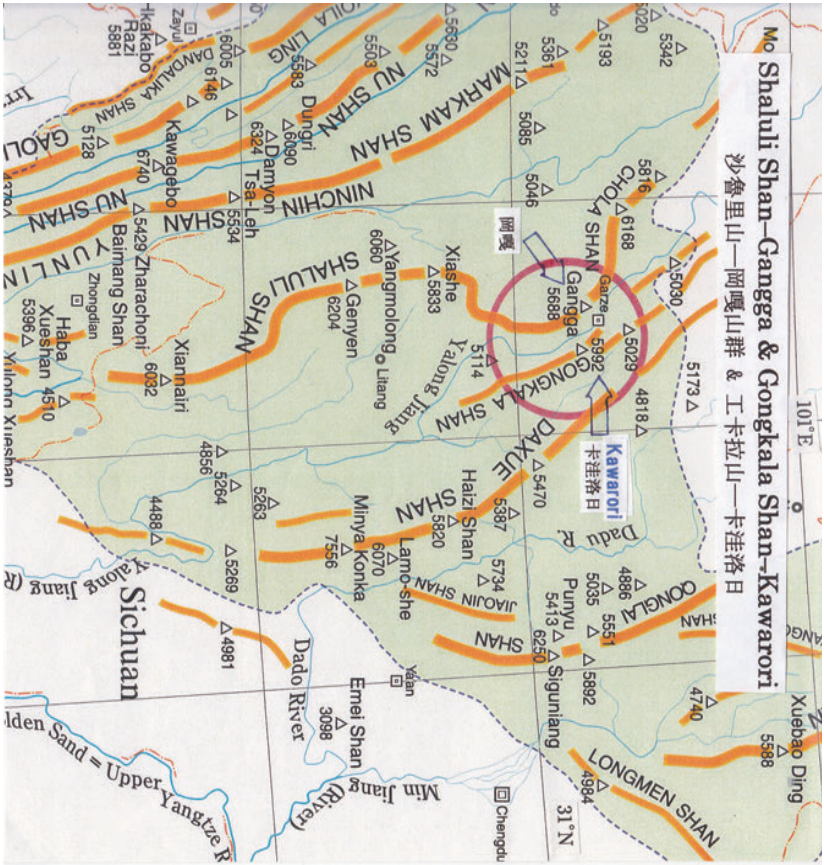
焼身自殺事件の影響である。焼身自殺が多発したのは、四川省阿覇州と我々が目指す山域のある甘孜蔵族自治州の甘孜県とその周辺である。この地域は四川省では阿覇州とともに大きい立派なチベット僧院が多く、政府に反抗的なチベット族カンバの土地である。

四川省はすでに外国人に開放されており、東チベットの未開放地域と違って甘孜蔵族自治州は、表向きは外国人が旅遊局や公安局、人民解放軍の許可を必要とする場所ではない。しかし、焼身自殺発生後当局は警戒を強め、春以降神経質になり、外国人旅行の制限を始めていた。この状況は２０１３年になっても続いている。折しも、尖閣諸島問題の反日暴動の直後でもあり躊躇したが、公に禁止令が出ていた訳ではないので、四川大地探検公司の判断で９月下旬から10月上旬までの２週間の踏査を実行することになった。焼身自殺や騒擾事件の発生直後でなければ問題はなかろう、との見通しに基づいた。実際、旅行中に公安局の検閲はなかった。が、日本への携帯電話は通じなかった。外国人旅行者を見かけたのは甘孜の町で、西欧人カップル１組だけだった。日本人旅行者には会わなかった。いつ何が起こるか分からないのが中国である。尖閣問題の直後だったこともあって、いつも以上に心して慎重に行動した。

ヒマラヤの東、チベット・アルプスは登山の視点からは世界で「最後の辺境」である。　添付の地図「270 Unclimbed 6000m Peaks in Alps of Tibet 2012」で示したように、念青唐古拉山東部、崗日嘎布、ゴルジュの国には、２６０座もの６０００ｍ峰が手付かずで残されている。

一方、同じチベット族が住む四川省西部高地に残された未踏の６０００ｍ峰は、10座前後と少ない。しかし、５００ｍ峰に目を向ければ未踏峰の宝庫である。聖山故に登山許可が得られない秀麗な貢嘎雪山三山は別にすれば、四姑娘山のチョライ山系の岩峰群は登り尽くされた感じだが、理塘高原南縁のケニ峰山塊の岩峰登攀は、緒についたばかりである。まだまだ開拓の余地が残されている。今回の山座同定を調査した岡嘎山群と卡洼洛日山塊は、これから注目すべき山域である。

いつもの横断研老年探検隊３人、永井剛（80歳）、中村保（77歳）、新谷忠男（68歳）は、９月28日に成都を出発した。準備はすべて四川大地探検公司が整え、今回は社長の張継躍（46歳）が隊員兼運転手としてメンバーに加わった。成都から康定までのコースは変わっていた。二郎山トンネル


Mo Shaluli Shan–Gangga & Gongkala Shan–Kawarori
沙魯里山—岡嘎山群 & 工卡拉山—卡洼洛日
101°E
31°N
Xuebao Ding
5588
LONGMEN SHAN
4740
4984
Chengdu
Siguniang
5892
5551
5035
4886
Punyu
5413
6250
CONGLA
SHAN
Dadu R.
5173
4818
5029
5992
Garze
Kawarori
卡洼洛日
Gangga
5688
5470
DAXUE
SHAN
GONGKALA SHAN
Yalong Jiang
5114
Haizi Shan
5820
5387
5734
JIAOJIN SHAN
Lamo-she
6070
Yaan
Emei Shan
3098
Minya Konka
7556
Mtn Jiang (River)
Dado River
5030
5342
5020
5816
CHOLA SHAN
6168
5193
5361
5211
5085
5046
岡嘎
MARKAM SHAN
Xiashe
5833
5630
5572
Yangmolong
6060
Litang
Genyen
6204
SHALULI SHAN
NINCHIN
5503
NU SHAN
5583
Dungri
6090
Damyon
6324
Tsa-Leh
5534
LING
6005
6146
DAMDALIKA
Zayul
Kawagebo
6740
5429
Zharachoni
6092
Xianmairi
4856
5264
5263
5269
4981
4488
Sichuan
Yalong Jiang (R
Razi
5881
Ikakabo
SHAN
5128
Baimang Shan
Zhongdian
Haba
Xueshan
5396
4510
Yulong Xueshan
GAOLI
NU SHAN
YUNLIN
Golden Sand = Upper Yangtze R

甘孜の町より望む

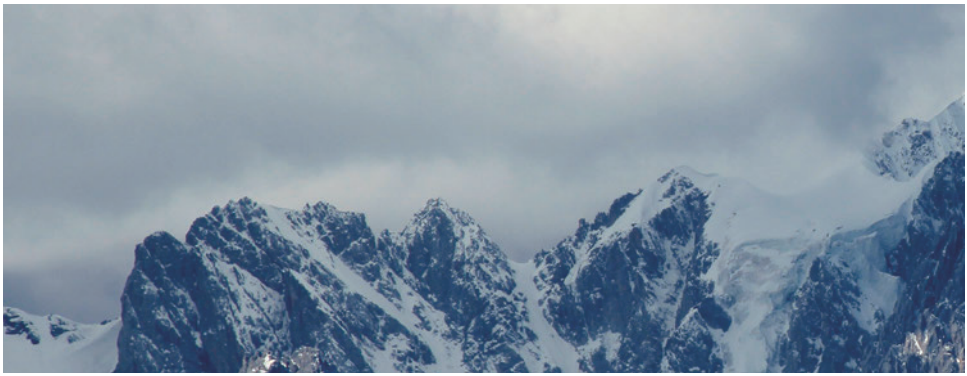
岡嘎山群中央部。岡嘎Ⅰ峰グループの中央峰(5670 m、左)と北峰(5650 m、右)東面。

撮影＝城　隆嗣

中央峰(5670 m)、北峰(5650 m)東面

岡嘎山群中央部の東面のパノラマ

岡嘎山群最南東部のピークの東面。5690 m峰(左)と 5241 m峰(ロシア地図 5641 m、中央)



岡嘎山群中央部の岡嘎Ⅲ峰(5525 m)と岡嘎Ⅰ峰グループ。左から主峰(5688 m)と

岡嘎山群の最南東部のピーク(5241 m、ロシア地図 5641 m)東面

岡嘎山群中央部の 5492 m峰(左)と 5286 m峰(右)東面

岡嘎山群中央部の 5492 m峰(左)と 5400 m峰(中央)、5286 m峰(右)東面

岡嘎山群中央部の岡嘎Ⅱ峰(5582 m)東面

岡嘎山群中央部、岡嘎Ⅰ峰グループの西、5318 m峰東面。甘孜の町より望む

岡嘎山群中央部の 5241 m峰(ロシア地図 5641 m)北面

岡嘎山群中央部の 5567 m峰(左)と 5690 m峰(右)南西面。4820 mの峠より望む

卡洼洛日山塊の卡洼洛日Ⅰ峰(5992 m、左)と卡洼洛日Ⅱ峰(5928 m、中央)、5568 m峰(右)北西面。甘孜の町より望む

卡洼洛日山塊の卡洼洛日Ⅰ峰(5992 m)北面　撮影＝大江隆夫

卡洼洛日山塊の卡洼洛日Ⅱ峰(5928 m)北面

ユニークな石塔のある丹巴県・中路村　撮影＝大川健三

四姑娘山山塊の神山(婆謬山、5413 m)南面。巴朗山峠付近より望む

四川省の美人谷、丹巴県の風情節（１）

丹巴県のチベット族、羌（チャン）族のお祭り、風情節（２）

中国最大の官製チベット仏教学院・四川省色達県喇栄五明寺仏教学院（1）

四川省色達県喇栄五明寺仏教学院（2）

色達県
Sêrtar
喇栄五明仏教学院
Zamtang
Barkam
Heishui
Dêgê
Cholashan
兒雀山
甘孜
Garzê
岡嘎
Luhuo (Zhaggo)
卡洼洛日
Jinchuan (Quên)
大雪山
四姑娘山
Siguniang Shan
Xilung
Baiyü
Dawu
Xinlong (Nyagrong)
Danba (Rongzhag)
Xiaojin (Zainlha)
Fengtongzhai
Baoxing
Tianquan
Kangding (Dardo)
Yajiang (Nyagquka)
Wachai
Luding (Jagsamka)
Er lang Shan
Litang
Batang
Gê'nyên
Markam
Sade
貢嘎山
Gongga Shan
Moxi
Yingjing
四川省西部高地

経由ではなく、新たに開通している成都―西昌高速道路を石棉まで行き、そこから大渡河沿いに北上する。中国の高速道路建設のペースは驚くほど速い。濾定を通らず、ミニヤ・コンカ東面の基地の町、磨石から３９４８ｍの雪門峠を越えて温泉のある老楡林に下り、甘孜蔵族自治州の州都・康定の新市街（海抜２７００ｍ）に着く。この峠の北にラモ・シェ山塊が連なる。驚いたことに、人民解放軍の大きな基地が建設中である。チベットを睨んでの軍隊の配置であり、兵士の高所順化のためとの噂を聞いた。翌日、勝手知った川蔵公路（北路）をたどって甘孜の町（３４５０ｍ）に着いた。道路工事で手間取ったのは、通例のことである。

帰路丹巴に立ち寄り、四姑娘山の写真家・大川健三さんにお会いしたとき、今年は異常気象だと聞かされ納得した。雨期明けは10月上旬にずれ込んでいるという話であった。事実、我々の２週間の行程のうち好天はわずか１日半で、それも完全な「ブルースカイ」ではなかった。それでも運が良かったのだろう、甘孜滞在中の３日間に、岡嘎山群と卡洼洛日山塊の山座同定に最小限必要な写真を撮ることはできた。

私がこの２つの山群を初めて望見したのは、香港駐在中の１９９２年の６月であった。　張継躍も一緒だった。その後、２０００年10月にも青海省に向かう旅で山群を目の当たりにした。６０００ｍに手が届く大きな山塊の卡洼洛日もさることながら、岡嘎山群の峨々たる岩峰群は迫力があり、その印象は脳裏から離れなかった。いずれクライマーの目に留まらずにはおかないだろうと思った。その想いが今回の調査の動機の一つだった。

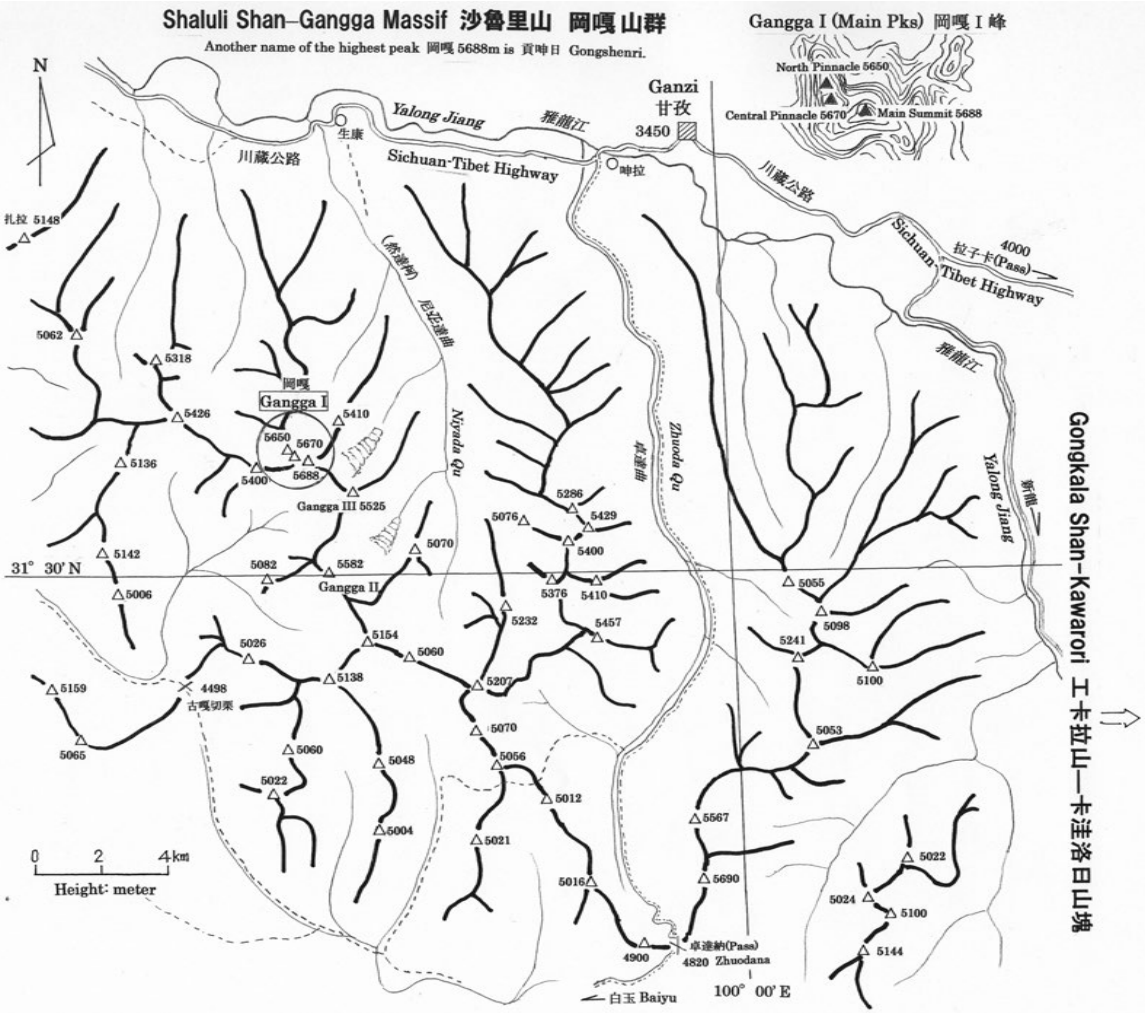
「将来のアルパイン・パラダイス」という表現に相応しい山々である。川蔵公路の拉子卡峠と甘孜の町付近から望まれる連山の山容は、クライマーの登攀意欲を掻き立てるだろう。なかでも山群中央部の２つの山塊が挑戦的である。

（１）顕著で象徴的な５４２９、５４００、５２８６ｍ峰、北東面の岩峰群

（２）山群の盟主・岡嘎Ⅰ峰（５６８８ｍ）の主峰とピナクルの北東面の岩壁

クライマーズ・パラダイスとして近い将来脚光を浴びるに値するだろうことは、写真をご覧になれば納得いただけるだろう。

９月30日、晴後曇り。岡嘎山群東面のパノラマと卡洼洛日山塊北面の写真を撮るために川蔵公路を引き返して４０



Gongkala Shan–Kawarori 工卡拉山—卡洼洛日山塊

００ｍの峠、広々とした草地の拉子卡に行く。天気は晴れ間があるもの不安定だった。翌日、早朝は快晴だったので、甘孜のホテルの屋上から岡嘎主峰に連なる挑戦的な岩峰群（５３００－５６００ｍ）を写真に収めてから、勇躍拉子卡に向ったが、峠に着く前に雲が視界を閉ざしてしまった。すぐ引き返して、甘孜から南へ、岡嘎山群中央部の谷、卓達曲に入り、顕著な岩峰群の間を縫って登り４８２０ｍの峠、卓達納まで行った。この道は白玉に通じる街道である。峠から岡嘎山群東端の山塊の岩峰群を仰ぎ見ることができた。ピークの同定は地図と写真をご覧いただきたい。

卡洼洛日山塊を初めてリポートしたのは、英国の探検家であり領事を勤めたエリック・タイクマンである。１９１８年、タクマンは抗争が続くチベットと中国の間の和解調停のため東チベットを広く旅した。そのとき拉子卡付近から卡洼洛日山塊を望み感動している。著書『東チベットへ―英国領事の旅』（*Travels of a Consular Officer in Eastern Tibet* Erich Teichman, Cambridge 1922）から引用する。

「ジョロ（現在の朱倭郷付近）から道は登りにかかる。ここで沢山のガゼルを見た。丘陵の長い登りの後少し下るとセ曲と雅龍江の標高僅か１３、０００フィートの分水嶺に着いた。そこから少し上ると、雅龍江を挟んで壮麗で膨大な雪と岩の峰を最高峰とする山嶺が姿を現した。ニャロンの聖山、雪を纏った万年雪の峰、カワロリである。東チベットの高峰の一つである。この巨大な山脈を雅龍江が貫通している。この白峰はセ曲の谷からも一瞥される。」タイクマンの観察は正確である。彼がたどった道は、現在の川蔵公路（北路）に沿っている。

工卡拉山・卡洼洛日山塊は、甘孜の町の南南東30㎞の所に位置する。Ⅰ峰（５９９２ｍ）、Ⅱ峰（５５２８ｍ）とも未踏である。この山塊を登山目的で最初に偵察に入ったのは、１９９９年秋の山梨県岳連隊である。さしたる成果はなかった。２００５年秋には英国隊が登頂を目指して北面からアクセスし、４８００ｍの地点に第２キャンプを設営した。しかし、麓のラマ寺の敵意に溢れた僧侶に阻止されて、登山を中途で断念せざるを得なかった。卡洼洛日山塊は神聖な山で、それを穢せ（登れ）ば、村に大きな災難が降りかかるという理由であった。２００７年には再び英国隊が訪れたが、このときは登山許可が下りなかった。

２０１１年秋、東北大学山岳会は登山許可取得可能との見通しの下に、卡洼洛日山塊登山を計画した。実際、四川登山協会の登山許可は事前に取れ、登山隊は成都に入った

Gongkala Shan-Kawarori Massif 工卡拉山—卡洼洛日山塊
卡瓦洛日 卡洼洛日 喀洼老熟
100° 15' E
N
拉子卡 Lazika
(pass) 4000
Sichuan-Tibet Highway
川藏公路
庶卡
3342
3671
格尼
Shaluli Shan-Gangga Massif 沙魯里山—岡噶山群
休巴塔拉埂
腹甘
31° 30' N
5014
4019
5042
5008
5142
5268
5568
Kawarori II
卡洼洛日
5928
Kawarori I
5992
5124
5182
5142
5008
5220
5147
5014
5044
5382
5458
5169
5432
5292
5388
日都喀
5242
5008
5201
扎莫
沙堆
Yalong Jiang
雅砻江
日巴
3237
新龍
日都
日歌
5030
5148
5030
5013
0 2 4 Km
Height: meter

が、驚くべき展開が待っていた。甘孜蔵族自治州体育局の幹部が東北大の登山計画を却下した。理由はこの山がチベット族の聖山だからということだった。英国隊のケースと同じである。２０１２年に入ると僧侶の焼身自殺事件が頻発し、状況は益々不安定で、センシティブになったのは前述のとおりである。

「聖山」故に地元のチベット族が登山隊を受け入れないことは多々ある。しかし、地元の村人の反対が単に「聖山」だからなのだろうか、ケースバイケースだが、疑問に思うこともある。いずれ改めて書いてみたい。

わずかな期間の踏査だった。岡嘎山群、卡洼洛日山塊を調査してから、予定では丹巴の北の大雪山系の未踏峰の偵察を目論んでいたが、中村がひどい風邪を引いたため諦めた。後は石塔で有名な丹巴の中路村に３泊し、四姑娘山の日隆、巴朗山峠を経て10月８日に成都に帰着した。峠から「神山（Pomiu or Celestial Peak, 5413m）」の圧倒的な南面のプロファイルを写真に収めた。

丹巴の８００年の歴史があるユニークな石塔はユネスコの世界文化遺産に申請されており、観光スポットとして脚光を浴び始めている。大渡河流域の丹巴は美人谷としても有名である。また、色達県の海抜３７００ｍの所に建つ、禁断の色達県喇栄五明寺仏教学院も訪れたかったが、その機会は得られなかった。１９９７年に四川省宗教管理事務局から設立に関する正式の認可を得た、中国最大の官製チベット仏教学院である。たまたま時を同じくして、友人が学院に近づき、壮大は学院の価値ある写真を撮ってきた。石塔と丹巴の風情節、色達の壮大な仏教学院の写真を併せて掲載する。

河口慧海を支えた財界人とその時代

藤本慶光

険しいヒマラヤ山脈の高い峠を越えて単身でネパールからチベットに入国し、当時、鎖国を実施中のチベットに初めて入った日本人として名高い**河口慧海**（1866～1945年）を、中央アジアの探検に力を注いだスウェン・ヘディンや、オーレル・スタインのごとき「探検家」の一人と考える人が多い。しかし、敬虔な仏教僧であった彼の真のチベット入国の意図は、インドに発生した仏教の教えの本来の姿はチベット語に訳された仏典にあり、それをチベットで直接学びたいというところにあった。

二度に及ぶチベット入国で多くのチベット語仏教経典を得たが、それらを単身で日本語に翻訳するのではなく、何人かの若い学徒にチベット語の特別教育を施し、彼らに翻訳をさせて早く日本人に広めたいと願い、そのための「**経典翻訳プロジェクト**」を立ち上げた。

このプロジェクトの実施を資金面で支援した何人かの財界人がいた。本稿はこれらの財界人がどのような人物であったかを、プロジェクトの内容とともに見ていくことを目的とする。

慧海のチベットへの旅

第1回の旅

チベットへの入国を志した慧海は、故郷の堺の友人などの応援を得て明治30（1897）年、単身で日本を出国、

インドに滞在してチベット語の習得に努めた。秘かにチベットに入るべくチベット僧になりすましてネパールに入国、明治33（１９００）年7月に、ネパールとチベットの国境であるヒマラヤ山脈の険しい峠を越えてチベットに潜入することに成功した。

遠く西のカイラス山を巡礼してから主都のラサに入って、チベット仏教を学んだ。しかし、間もなく日本人であることが露見しそうになり急いでチベットを離脱、ネパール、インドを経由して明治36（１９０３）年に日本に帰国した。

帰国後、慧海は各地での講演会で未知の国チベットについて語り、大好評を得た。口述筆記が新聞に連載され『西蔵旅行記』として出版され、洛陽の紙価を高めた。現在も『チベット旅行記』全5巻（講談社学術文庫）として地道に読み継がれている。

極めて詳細な旅行記であったにも関わらず、最も興味を惹くヒマラヤ山脈のどこの峠を、どうやって越えたのかの記述についてははっきりしなかった。当時、彼を助けて越境した人たちへの心配りがあったのかもしれない。彼のたどった道について、多くの人が推測を重ねてきた。

ところが平成16（２００４）年、ヒマラヤを越えた部分を詳細に記載した彼の直筆の日記が、河口慧海の姪の宮田恵美さんが保管している遺品から発見された。高度の影響と寒さに苦しみながら、ヤクとともに一歩一歩高い峠に向かう様が克明に彼自身の手で記されている。

この日記の解読を主な目的として「河口慧海研究プロジェクト」が同年12月に発足し、日本山岳会会員も何人かが参加した。その成果としてこの日記の翻刻と解説が『河口慧海日記』（奥山直司編）として講談社学術文庫から出版されたので、会員諸氏もぜひご一読いただきたい。

その後、日本山岳会関西支部・大西保氏、東海支部・和田豊司氏などの地道な実地調査によって、慧海がネパールとチベットの国境であるヒマラヤ山脈を越えたのは、クンラ峠（５４１１ｍ）であったことがほぼ確定されている。

第2回の旅

帰国後の忙しい日々を過ごしながらも、慧海の仏教原典を究めたいという堅い意思は変わらず、再度のチベット入国を望んだ。さらに仏教の原典を表現しているサンスクリット語（梵語）の習得を志し、梵（サンスクリット語）蔵（チベット語）漢（中国語）の3つの言語の比較対照による、仏典の深い理解を究めようとしたのである。

河口慧海の肖像写真。親友、肥下徳十郎に送られたもので、明治 45(1902)年 2 月 21 日、ダージリンにて撮影。西蔵法王より下賜された大学学長の制服を着用。堺市文化財課提供

第1回の旅から帰国後1年半余りの明治37（1904）年10月、すでに日露戦争が始まっている最中日本を発ち、インドのカルカッタ（現在のコルカタ）に向かった。カルカッタ、ダージリン、カトマンドゥなどに滞在し，殊にインドのベナレス（現在のワーラーナシ）には8年も滞在して、その間に高楠順次郎などの日本人と交流しながら梵語の習得、梵語経典の収集にあたった。

大正2（1913）年暮れにカルカッタを出発、シッキムを経てチベットのシガツェに入り，ラサには大正3（1914）年8月に入った。

慧海の2度目のチベット入りの目的には、チベット経典のさらなる収集もあったが、同時に彼にとって気がかりであった、前回の密入国の際に世話になったチベット人の消息を知る目的もあった。

大正4（1915）年1月、当時、ラサに滞在していた青木文教、多田等観、矢島保次郎の3人と日本人4人で新年を祝い、19日にラサを発ち、シガツェ、ダージリンを経てカルカッタから9月3日、神戸に11年ぶりに帰国した。インド、ネパール、チベットでの長い滞在期間中、梵語の習得に努め、実に多くの蔵梵双方の仏教経典の収集のみならず、博物学上の貴重な標本なども収集し、『チベットの3年』なる英文の著作も出版した。

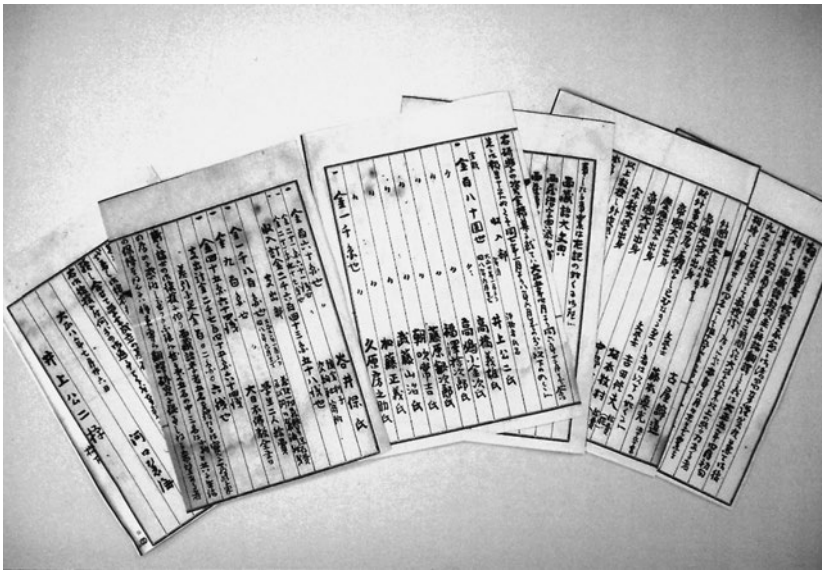
「経典翻訳プロジェクト」の開始

チベット語経典翻訳への慧海の意欲

明治30（1897）年の第1回の旅の出発時に32歳であった慧海は、大正4（1915）年に第2回の旅から帰国したときはすでに50歳になっていた。数多くの梵語、チベット語の仏典を日本に持ち帰ったものの、それらの経典を自分自身が理解するだけにとどまらず、多くの日本人にその内容を伝えたいという強い意欲を彼は持っていた。しかし、空海などによって早くから日本に紹介されていた梵語の経典に比較して、チベット語は日本人になじみの薄い言語であった。

チベットやインドで習得したチベット語の学力で、彼単独でチベット語の経典を翻訳するのには限界がある。そこで彼は、何人かの若い意欲のある若者に対して彼がチベット語を特訓して、経典の翻訳をさせることを発案した。

しかし、今までの彼の長期にわたる旅行の費用に対して公的な、または大きな組織からの資金援助はなく、すべて故郷の篤志家からの援助でなされていたごとく、このたび



「河口慧海勧請書」　チベット語経典翻訳プロジェクトへの醵金依頼文。大正8(1919)年7月発信。東洋大学図書館蔵

の翻訳プロジェクトの実施にあたっても、それを支援する何人かの篤志家を見出さざるを得なかった。

そこで彼は、チベット旅行の講演や旅行記の出版で知り合った何人かの財界人から資金援助を得ることを考えた。このプロジェクトの詳細を次に見てみたい。

「河口慧海勧請書」

東洋大学図書館に「河口慧海勧請書」なる一通の慧海の筆になる手紙が残っている。財界人の一人に資金援助の継続を依頼した内容の手紙である。私はこの手紙のコピーを「河口慧海研究プロジェクト」の主要メンバーである奥山直司・高野山大学教授から見せていただいた。一通の手紙の中に、余すところなくこのプロジェクトについての全貌が書いてある。煩をいとわず以下に全文を記すのでゆっくりと目を通していただきたい

（句読点は筆者が付けた）

拝啓　盛暑之候、貴家愈々御清昌奉謹賀候。兼て御後援被下候西蔵語教授並に経論翻訳之義は大正五年四月初旬其業を始め爾来毎週十二時間宛大学卒業以上の学力ある者九名に東洋大学にて教授致し居り候処、本年六月々末まで業を相続して卒業せし者四名にして準卒業の者一名に候。其

外二名は死去、二名は事故或は病気の為に廃学致し候。兎に角五名の西蔵学者を初めて我国に得候ことは全く貴下等の御援護の致す処と厚く御礼申上候。其人名は以下の如くに候。

帝国大学出身　文学士　池田澄達　給費
同　前　阿部文雄　給費
同　前　鈴木重信
外国語学校出身　古屋諦道

以上卒業

帝国大学出身　文学士　藤本真光　準卒業

此外事故の為に廃学之已むなきに至りし者は以下の如くに候。

帝国大学出身　文学士　吉田修夫（死）給費
慶應大学出身　坂本牧村（死）給費
帝国大学出身　中野義照（事故）
宗教大学出身　藤井諦忍（病）

以上教授之外夜学にて数名に西蔵語を教授致し候処是れ又本年六月まで継続して稍や学業の見るべき者は左記の二名に候。

東洋大学在学　澤田新太郎
宗教大学在学　宗川宗満

前記教授事業の余暇を以て小衲自ら翻訳並に研究に従事したる事業は左記の如くに御坐候。

西蔵語大文典　文字篇終了、言語篇動詞まで
西蔵語字典添加補修
西蔵伝印度仏教歴史　下巻　迦葉尊者より世観菩薩に至る
入菩薩行　十品の内　六品訳了
西蔵真言密乗の研究　古派綱領訳了
漢蔵両訳大毘盧遮那経の比較　密教研究第一号七十頁公刊
印度密教時代区画の研究　密教研究第二号八十三頁公刊

大正七年五月より十二月まで小衲病魔に犯されしを以て自己の業に十分の成績を挙ぐる能はざりしは遺憾之至りに候へ共幸に病中も殆んど教授することを得しを以て教授の成績に就ては十分の功を挙げ得しことを窃に歓び居る次第に候。

右研学の資金精算に就ては大正五年四月より同六年十二月までの分は先に御報告申上候如くにて同七年一月より八

年六月までの分は以下の如くに候。

収　入　部

金　額	年　月	浄施者氏名
一　金百八十円也	大正七年一月より	井上公二氏
	同八年六月まで	
〃	〃	高橋義雄氏
〃	〃	高嶋小金次氏
〃	〃	福澤捨次郎氏
〃	〃	藤原銀次郎氏
〃	〃	朝吹常吉氏
〃	〃	武藤山治氏
〃	〃	加藤正義氏
一　金一千円也	〃	久原房之助氏
一　金百六十円也	〃	谷井　保氏
一　金二十一円六十一銭也	〃	預金利子
一　金二十一円九十七銭也		交絢(マヽ)社寄附

収　入　計　金二千六百四十三円五十八銭也

支　出　部

一　金一千八百円也	大正七年一月より	蔵訳一切蔵経等保存費及び河口慧海附箋
	同八年六月まで	
一　金九百円也	〃	学生二人給費
一　金四十五円六十四銭		大日本仏教全書

支　出　計　金二千七百四十五円六十四銭

差引不足金百〇二円〇六銭也

斯く諸士の御後援に依り西蔵語学者五名を得たるは実に教学界の為めに感謝之至りに不堪候。然る処五名の中三名は小衲と共に生活の保障を得んには将来専ら翻訳研究に従事し得る希望ある者にして此際他の学業に奔らしむるは大に斯学の為めに惜むべきことと存じ候。尚ほ別冊蔵梵一切蔵経和訳趣意書にもある如く多くの蔵梵原典より翻訳する必要有之候へば後継学者養成と是れが翻訳研究等を成就する為に日蔵学会或は梵蔵学会を起さん希望有之候へ共其学会を成ずるまで今后約一ヶ年間従前の通り御後援被下まじく候哉。若し御後援継続を得んには斯学の研究と翻訳事業とを継続し合せて学会成立の基礎を強固にすることを得べしと存じ候。

右御後援に付何分の御返事被下度奉懇願候也　敬具

大正八年七月廿六日　　河口慧海

井上公二様　　梧下

緻密な「企画書」と筆まめな慧海

「経典翻訳プロジェクト」の全貌について理解を得るためにあえて慧海の手紙の全文を右に掲げたが、これを「企画書」として見るときに、実に内容の充実した緻密なものかがよく分かる。

目的は何か、誰がどう関わり、いかなる成果を上げたか、いつからどこでどのように実行したか、これに対して誰からどれだけの援助を受け、どのように費消したか、今後どのような方向に進もうとしているか、などを簡潔な文章で過不足なく記している。

さらに現在の我々から考えると驚くべきことであるが、こうした緻密な内容の長文の手紙を後援者のそれぞれに慧海自身の直筆で書き、会社宛ではなく個人宛に投函していると思われることである。パソコンもコピーもない時代に、複写紙も使わずに労をいとわず筆を運んでいるところに彼の並々ならぬ意欲が感じられる。

資金を提供した財界人たち

「勧請書」に名前が出ている財界人

このプロジェクトに資金を提供している財界人が、どのような人たちであったかを見ていこう。手紙の宛名になっている井上公二ほか9名の名前が出ている。なかには今でもよく知られた著名な財界人もいれば、その当時こそ知られていても、今はすっかり忘れ去られた人も入っている。以下に一人ずつの経歴を見てみよう。

（順番は勧請書に記載の順とし、敬称を略す）

井上公二（1863〜1925年）

文久3（1863）年、備前高梁藩の生まれ。慶応義塾（慶応義塾は明治23〈1890〉年に大学部を発足させ、大正9〈1920〉年に慶応義塾大学となったが、以下、慶応義塾とのみ表記する）を卒業後、明治21（1888）年に古河鉱業に入社し、主力鉱山であった足尾銅山の所長を長く務めた。鉱山経営に力を注ぎ、従業員の教育に積極的に尽くした。大正2（1913）年から古河合名会社の理事を務め、のちに朝日生命保険の社長を務めた。

古河鉱業（現在は古河機械金属）は明治8（1875）年、古河市兵衛が創業し、足尾銅山などの鉱山開発で大を成した、現在の古河グループの源流会社である。富士電気、富士通などの「富士」の名前は、古河鉱業の「ふ」と合弁の相手であるドイツ・ジーメンス社の「じ」からきている。

高橋義雄（1861～1937年）

極めて異色の「財界人」である。なぜ括弧をつけたかというと、銀行員としての仕事の延長線から風流の世界の権威者となって、大正元（1912）年に実業界を去って筆硯に親しんだ人だからである。水戸藩の出身で慶応義塾を卒業し、6年間の時事新報社社員の経験の後、明治24（1891）年、三井銀行に入行した。貸金の担保として預かったさまざまな古道具や資産の換金、三井グループへの配布などの仕事を通じて鑑賞眼を高め、風流の道に踏み込んだ。のちに三井銀行の大阪支店長を務め、三井グループ内で力を発揮した。趣味人としての活躍の幅は広く、号を「箒庵（そうあん）」と称して『近世道具移動史』（昭和4〈1929〉年刊）や『箒のあと』上下（昭和8〈1933〉年刊）などの著作もある。朝吹英二と親しく、歌、書画、茶道具、築庭、能楽などに造詣が深かった。

高島小金治（1861～1922年）

大倉財閥の創設者・大倉喜八郎の三女鶴子と結婚し、喜八郎の女婿となり、彼の片腕として活躍した。

川越藩の出身。慶応義塾を卒業後、母校の講師を3年務めた。政界で活躍中に大倉喜八郎に認められヨーロッパに3年間留学、明治21（1888）年に帰朝後大倉組に入社し、主に貿易業務を担当した。岳父を助けて多くの会社を創設し、発展せしめた。

大倉喜八郎と慧海との関係は古く、大倉の仏像コレクションの相談に慧海がのったり、慧海の希望した「蔵梵仏典購求会」の設立の提言を大倉がしたりしていた。

（慧海の書には彼の名前を「小金次」と書いているが、慧海の思い違いと思われる）

福澤捨次郎（1865～1926年）

福澤諭吉の次男として江戸に生まれ、慶応義塾を卒業後、アメリカのボストンで鉄道工事に関する土木工学を学び、帰国後山陽電鉄に勤務したが、明治34（1901）年に父諭吉が亡くなったのち、父の創刊した「時事新報」の社長となり、社業の発展に尽くした。

慧海の第1回の旅の帰朝報告に関して東京地区での独占的記事掲載権を獲得し、のちに博文館からの『西蔵旅行記』上下2巻の発刊につなげた。このときに彼とともに出版について話を進めたのが、朝吹英二（三井管理部理事）と早川千吉郎（三井銀行専務理事）で、この3人は英文の『チベットの3年』の出版費用をも負担した。この本は最終的

に１９０９年にインドで出版され、欧米に大きな反響を与えた。

藤原銀次郎（１８６９～１９６０年）

三井財閥の中心的人物であり、日本最大の製紙会社であった「王子製紙」を築き上げ、「製紙王」と呼ばれた。

慶應義塾を卒業後松江日報に勤務したが、三井財閥の大物の中上川彦次郎に見出され、三井銀行、富岡製糸所、三井物産を経て明治44（１９０１）年、王子製紙に専務として入社し、当時、赤字経営であった同社の建て直しにあたった。

慧海を援助したのは、大正８（１９１９）年の社長就任の直前で、会社経営に最も力をふるっていたころと思われる。

第１次世界大戦の好況で王子製紙は拡大を続け、彼は昭和13（１９３８）年に会長になると同時に私財を投じて藤原工業大学を設立し、のちに慶応義塾大学にこれを寄付した。

朝吹常吉（１８７７～１９５５年）

三井財閥の四天王の一人と言われた朝吹英二の長男として生まれた。慶応義塾を卒業後２年間イギリスに留学したが、帰国後、正統な英国紳士としてのライフスタイルを貫き通した。電動機の専門商社としての千代田組を若くして創業し軌道に乗せたほか、日本銀行に勤務後、三井物産、鐘淵紡績、王子製紙、三井呉服店などの役員を務め、帝国生命保険会社の社長を務めるなど一流の財界人としての実績を残したが、彼を「異色の財界人」と言わしめるもう一面がある。

極めて優れた文化的名門家族のトップとしてである。何人かの子女のうち、三男の三吉は慶応義塾大学の法学部のフランス語の教授をしながらジャン・ジュネの『泥棒日記』など多くのフランスの名著を翻訳し、また、長女の登水子もフランス文化を日本に積極的に紹介しつつ、フランソワーズ・サガンの『悲しみよ、こんにちは』など多くのフランス文学の翻訳で活躍した。

三吉の次男の亮二は詩人として著名であり、彼の長女の真理子は２０１０年の芥川賞を受賞した小説家である。

おそらく慧海への資金援助は父英二からの依頼によるものだろうが、自分が貫き通した完全な英国風生活態度や考え方とは一見相容れない、チベット仏典を翻訳するという文化的な企画に対する彼の理解は、ひょっとすると、この

財界人のメンバーの中では随一ではなかったかと私は考えている。

武藤山治（１８６７～１９３４年）

第１次世界大戦を経て拡大発展を続けた日本経済において花形産業と言われたのは海運業と紡績業であり、その紡績業の中でぬきんでて優良な会社が鐘紡（鐘淵紡績株式会社）であった。

この鐘紡の経営を37年の長きにわたって担当し、鐘紡の「中興の祖」と言われたのが武藤山治である。日本風経営と言われる「経営家族主義」「温情主義」を提唱した。

慶應３（１８６７）年、岐阜県に生まれる。慶應義塾を卒業し、将来のよき友でありライバルともなる和田豊治とともにサンフランシスコに行き、辛酸をなめた生活を送り、帰国後三井銀行を経て鐘紡に入社、当時の専務取締役の朝吹英二を助けて手腕を発揮した。

慧海に資金援助をしていた五十歳代の初めは、多くの紡績会社を合併統合し、また、染色加工一貫の大規模工場を大阪に建設するなど鐘紡の社運拡大に活躍していた。

社長を退いた後は政治家としても活躍したが昭和９（１９３４）年、北鎌倉で彼の関係していた時事新報に恨みを持つ者の凶弾に倒れた。

加藤正義（１８５４～１９２３年）

先に述べたごとく当時の海運業は隆盛を極めていたが、日本海運業の雄たる日本商船の経営の第一線に立って同社を世界に雄飛せしめたのが、長く副社長を務めた加藤正義であった。

嘉永７（１８５４）年、鳥取県の日野に生まれる。鳥取県庁、山形県庁、兵庫県庁と役人としての道を歩んだが、農商務書記官のときに経営に参画した共同汽船と、急激に勃興してきた三菱汽船との合併工作に奔走し、日本郵船の創立に関わった。

41歳で副社長に就任して、日本郵船の経営をリードしながら東京市議会議員としても東京の発展に寄与した。

大正４（１９１５）年、日本郵船創立30周年を機に退職し、大正10（１９２１）年の近藤社長逝去の際に後任社長就任への強い要望があったが、これを固辞して悠々自適の生活を送った。

したがって、慧海への支援をした時期はすでに第一線を退いた後のことで、朝吹英二や前述の高橋義雄と、古道具の購入など趣味の世界を中心にして深い交わりをしていた

ころのことである。

久原房之助（1869～1965年）

明治2（1869）年、山口県萩に生まれた彼は、慶応義塾を卒業後、親類の藤田組に勤務したが、鉱山経営を目的に独立した。

大正元（1912）年の「久原鉱業」の創設を契機とし、日立鉱山を中心にして各地の鉱山を積極的に開発し、「鉱山王」の名をほしいままにした。大正5（1916）年の日立鉱山の銅の産出額は3万7000tで、第1次世界大戦による銅価格の高騰で大富豪となった。

現在の日立製作所グループ、日産自動車グループ、ジャパンエナジーグループ、日立金属グループなどの基礎を作った大物財界人であった。

当時から大変な財力を有していた彼は、浄土真宗の敬虔な信徒としてさまざまな援助を宗教施設に実施していた母文子への敬愛、報恩の心情に篤かった。その母を大正5年7月に亡くし、彼自らも6年8月に重篤な腸チフスに罹って、考えるところがあり、多額の寄付をしたのかもしれない。この病の後、彼は事業運営へ情熱を注ぐ道から政治家として歩む道を選んだ。

慧海への寄付がこのとき限りだったのか、ほかの機会にも実施されたのかは、今となっては窺い知れない。

谷井保（1852～?年）

日本郵船の神戸支店長を明治30（1897）年から44（1911）年まで務め、同44年、ボンベイ航路しか保有していなかった日本郵船がカルカッタ航路開設を目論んだときに、三井物産に協力を依頼するとともに谷井がカルカッタに派遣された。その結果、神戸までの航路が認められ、1年後、横浜まで運航された。

明治44年11月の役員人事で取締役に抜擢され、大正7（1918）年5月に辞任した。当時、日本郵船の取締役は8名であった。

慧海との縁は、慧海がインドから日本に持ち帰る経典をはじめとした多くの荷物の送付などで力を貸している。なぜ彼が2ヶ月遅れて寄付を始めたのかは分からないが、取締役辞任を前に、元上司で今は自由人となっている加藤正義に「お前も付き合え」と言われたのかもしれない。

なお、彼は後年、南方熊楠とも交友関係にあった。

（『日本郵船社史』では、彼の名は「や」の項目にあるので「やつい」と発音するのかもしれないが、確認していない）

交詢社と朝吹英二の存在

慧海の「経典翻訳プロジェクト」の推進を資金面で支えてきた10人の財界人の略歴を見てきたが、彼らを束ねる共通項はなんであったのだろうか。

日本郵船の加藤と谷井を除く8名は、慶応義塾を卒業している。また、多くの者が三井グループで働いている。しかし、これらの要因のみで10名をくくることはできないだろう。

私は彼らをくくる共通のグループとして「交詢社」の存在と、そのグループ内で、彼ら10人を選んだオルガナイザーとしての「朝吹英二」の存在を考えている。

交詢社は明治13（1880）年に実業家のお互いの友好を深めることを目的にして、福澤諭吉の提言で創設された社交クラブである。主に慶應義塾の卒業生がメンバーとなったが、個人の資格での加入を受け入れたのでさまざまな人が構成員となっていて、発足当時から活発に活動していた。

慧海への支援当時の交詢社の状況を伝える資料が残っていないかと考え、日本山岳会の会員で交詢社の社員でもある大森弘一郎さんのご紹介で同社の総務課長にお目にかかったが、戦災で焼けて何も残っていない、とのお話であった。その後同社の百年史の資料をあたり、大正3（1928）年当時の主な社員氏名一覧を見たところ、福澤捨次郎を除く9名の名前を見つけた。福澤が社員であることは、父が創設したクラブであるから当然だろうから、全員が同社の社員であったことが確認できた。

慧海は第2回の外国への旅の帰国後、早い時期に同社で社員に対して講演会を実施し、状況報告をしている。

先に福澤のところで述べたごとく、慧海の第1回の旅の帰国後、旅行記の出版などに福澤、早川、朝吹の3名が支援しており、11年に及ぶ旅の後でも、同社の主要社員であった3名との深いつながりは維持していたようである。

朝吹英二（1849～1918年）は「三井グループの四天王」と言われ、大いに経営の手腕をふるったが、大正元（1912）年に第一線からすべて退いて悠々自適の生活を送っており、日ごろは交詢社のサロンにて時を過ごしていたので、あるいは講演会の折、慧海が彼にプロジェクトの構想を話し、資金提供者の氏名の選択を依頼したのではないかと私は推測している。

彼は福澤諭吉と同郷の大分県中津に生まれ、三井財閥の重鎮であった中上川彦次郎の妹「すみ」と結婚した。先に記した朝吹常吉の父であり、彼の弟の範治の母方の孫が

ノーベル賞を受賞した野依良治である。

交詢社には設立時から深く関わっており、24人の初代常議員の一人である。

慧海の依頼を受けて、資金の拠出を依頼した前記の9人との関係を見ると、藤原、武藤はかつての部下であるし、福澤とは慧海の出版への援助ですでに近い関係にある。加藤や高橋とは古美術品の収集で親しく、彼自身も「芝庵」の号を持って、骨董店の平山堂などに親しく出入りしていた。朝吹常吉は彼の長男であり、彼が直接名前を出すのを嫌い、息子に依頼したのかもしれない。井上と高島は慧海自身の依頼か、英二経由の依頼かは分からない。久原は慧海からの依頼と私は考えている。

依頼された人々は、もちろんこのプロジェクトの意義に賛同していたと思われるが、朝吹英二からの依頼への義理、または恩義の気持ちから参画したのかもしれない。

第1次世界大戦による活況に沸く日本の経済界において、隠居の身ながら隠然たる力を発揮していた英二は、大正7（1918）年1月31日に急逝した。奇しくも、慧海のこのプロジェクトの2回目の資金援助の開始の月であった。彼の急逝にもかかわらずメンバーが醵金したことは、慧海の「勧請書」の記載でも明らかだが、彼の死後、慧海が発信した3回目のこの依頼に対して、どれだけの人が引き続いて応じたのかはつまびらかではない。英二を頼りにしていた慧海にとっても、有力な支援者の死は痛手であっただろう。

「経典翻訳プロジェクト」の推進された時代

いかに良い企画でも、また、それをどんなに支える人たちが大いに応援しようとしていても、それを実施しようとしている時代がどんな雰囲気を持っているか、どんな背景を抱えているかを知ることは大切だと考える。どんなタイミングであったかということである。慧海が企画したこの「経典翻訳プロジェクト」が実施された約4年間が、日本の歴史の中でどんな時代であったかを以下に見てみよう。

このプロジェクトを、慧海の勧請書の記述によって3つの時期に分けて見てみたい。

第1期　大正5（1916）年4月～大正6（1917）年12月、21ヶ月

勧請書に「先に御報告申上げ候」と書かれている時期である。5年の4月から授業を始めたとあるので、財界人へ

の働きかけはそれ以前からと思われる。

当時の日本は大正３（１９１４）年７月に始まった第１次世界大戦に８月から参戦していた。それまで日露戦争以降の慢性的な不況から脱出できず、さらなる参戦で不安もあったが、やがて貿易の異常ともいえる拡大と多額な輸出超過の時代となった。

欧米からいろいろな物資を調達していた国からの発注増が大きかった。その結果、万年赤字であった貿易収支が４年間で14億円の出超となっている

また、運輸物資の増加やそのための船腹の増加、運賃の高騰、海上保険料の増加などによる貿易外収入の増加によって正貨が大量に流入し、大戦前の債務国から一挙に債権国になった。

欧米から輸入していた多くの物資の供給が途絶えたことによる、それらの品物の日本での国産化が進み、製造業が活発になって、それらの輸出も増大した。造船業、海運業の活性化によって多額の収益を挙げた人が続出して、「船成金」と言われた。工業生産額が農業のそれを上回り、産業構造が高度化した。

景気は大戦参加時の衰退期から勃興期へと移り、さらに最盛期に入っていた。

このプロジェクトに参画している財界人のほとんどが属している業界がフルにそれらの恩恵に浴したので、彼らもおそらく気持ち良く資金援助の依頼に応じたと思われる。

第２期　大正７（１９１８）年１月～大正８（１９１９）年６月、18ヶ月

この勧請書に詳細が報告された期間で、第１期と第２期とを合わせて、とりあえずの初期の目標を達成したと慧海が考えていることが、受講した若者などの学習結果の報告などで窺える。計39ヶ月、約３年強で５人のチベット語学者を日本で得られたことを、誇らしげに報告している。

この間、慧海自身はしばらく病気に罹っていたようだが、プロジェクトの進行には差し支えなかった、と語っている。

第１次世界大戦は、ドイツ側の敗北とロシアにおける革命の勃発とで大正７（１９１８）年11月に終了していた。

戦争の終結によって、直接戦争に関わりを持っていた業界は、一時的に停滞した。しかし、この停滞も短期間に克服され、戦後好況と言われる、戦時中以上の好況を迎えた。

戦争が終わったとはいえ、戦争によって疲弊したヨーロッパ諸国は、経済復興に力を注がなくてはならなかったし、新たに力をつけたアメリカもそれを積極的に支えた。

その間隙を衝いて日本経済は今まで以上に大きく発展し、規模を拡大していた。大正８（１９１９）年４、５月を底にして大戦による物資の欠乏、生産設備の不足を補うための設備投資の意欲も上がり、信用は一挙に膨張し、投機が白熱化して株式は高騰した。発展する日本経済の推進者であった財界人個人の資産も、保有する株式の評価の巨大化などで大きく増加し、このプロジェクトで見られるような、財界人が個人としての援助を可能にした情勢を生み出したと思われる。

第３期　大正８（１９１９）年７月からの１年間

この勧請書が書かれて発送されてからの１年間である。大正８（１９１９）年11月にヴェルサイユで平和条約が調印され、大戦の戦後処理が始まった。一時の停滞はあったものの戦後景気が続いていたが、流通する貨幣量が少なく、諸物価の高騰も始まっていた。前年８月には富山で米騒動も起こり、大正９（１９２０）年３月に始まる経済恐慌の予兆が窺えた。

その後日本は慢性的な恐慌に悩むことになり、そのまま昭和の時代に突入する。

慧海を支援する人々にも変化があり、支援者の中心だったと思われる朝吹英二の急死もあり、久原房之助の事業欲にも陰りが見えていた。

第３期にあたる慧海のこの書の要請に対して、どれだけの財界人が従前と同じ支援を約束したかはつまびらかではない。

このプロジェクトを取り巻く環境

この企画が推進された約４年間を総括的に振り返ると、「極めてタイミングの良い時代」であったと言える。第１次世界大戦への参加で、いわば「濡れ手に粟」の景気の良さを享受して、財政的に債権国に転じ、産業構造も工業が農業を上回って高度化した。

慧海を支援した財界人が属していた業界のそれぞれがそれらの活況を享受し、さらに当時、所有と経営がまだ十分に分離していなかったときに、創業者ではなくとも主たる経営者として個人的に財を蓄積できる状態にあった。

主たる財界人が醵金した「月額10円」（１年半で１８０円という醵金額から推定）が、当時の貨幣価値でどのくらいにあたるのかを推測してみる。

米が10kg１円から２円、豆腐１丁が２銭から３銭、風呂屋の入浴料が３銭から５銭、先生の給料が１ヶ月20円と

いった一般大衆の暮らしぶりに対して、朝吹や高橋義雄、加藤正義らが集まって小道具の売買をしていたときの、たった1つの香炉に3万円の値が簡単に付けられていたりするのと比較すると、実感としての1ヶ月10円の負担感を推測するのはかなり難しいが、醵金した人たちの個人的なゆとり感を考えると、10万円か15万円くらいを毎月寄付していた感覚ではなかろうか。

今のように銀行振り込みという制度とてなく、おそらく慧海に言われて、教えを受けている学生が手分けして毎月それぞれの財界人の家を訪ねて、ご芳志をいただいていたのではないかと私は想像している。

今で言う「バブルの絶頂期」にあたったのではなかろうか。

チベット語を学び、翻訳に携わった人々

慧海が日本に持ち帰った多くの経典を早く翻訳して、日本人に広めたいと強く願って始めたこのプロジェクトに参加した、意欲的な日本の若者がどういう人だったかを見ていきたい。

慧海の勧請書によると、開始当初は9名の若者を集めたようである。大学卒業以上の学力ある者として出身大学を記しているが、帝国大学（現在の東京大学）から6名と多いのは、ベナレス（現在のワーラーナシ）で親しくなった帝国大学教授の高楠順次郎の推薦に依るものかもしれない。「文学士」とあるのは大学卒業者を意味する。池田澄達が明治41（1908）年7月、藤本真光が大正7（1918）年7月に東京帝国大学文学部哲学科（印度哲学専修）を卒業している。

「廃学之已むなきに至りし者」

わずか3年余の期間で、死亡と病気で3名が脱落しているのは痛ましい。

「事故」となっている中野義照は、プロジェクト開始早々の徴兵検査での検眼時にトラブルがあり、徴兵忌避というあらぬ疑いをかけられ休学し、のちに大正10（1921）年、無実が認められて復学した。長く高野山大学に勤務し、学長まで務めた。

私も幼いころからお世話になっており、後年、彼がヴィンテルニッツの『ヴェーダの文学』なる印度哲学の大部の著作を翻訳して出版したとき、「なんといっても印度哲学はヒマラヤじゃから」と言って、私が昭和38（1963）

年にバルトロ氷河から撮影したK2の写真を巻頭に飾ってくれた。

「初めて我国に得た五名の西蔵学者」

池田澄達

明治41（1904）年、すでに東京大学のインド哲学を卒業して高楠順次郎の弟子であった彼が、慧海の所でチベット語を学び始めたときには40歳を超えていて、グループのリーダー格であったと思われる。彼は信濃善光寺の塔頭の出身で、大正2（1913）年にドイツに留学して、エルンスト・ロイマンの下で梵語などを学習していた。その後、東京大学、東洋大学、大正大学などで長く教鞭を執り、多くの蔵梵経典の翻訳もした。昭和20（1945）年の慧海の死のときも、弟子として葬儀に参列している。

阿部文雄と鈴木重信

勧請書には「帝国大学出身」と記してあるが，文学士ではないので、在学中に参加したものと思われる。しかし、東京帝国大学の印度哲学科の卒業者名簿にその名前が見つからない。あるいはプロジェクトの最中に中退したか、ほかの学部を卒業したのかもしれない。いずれも東洋大学でその後教鞭を執っており、いくつかの翻訳もしている。阿部文雄はサンスクリット語も教えていた。

この二人は曹洞宗の出身である。

古屋諦道

このプロジェクトの終了後、いかなる人生をたどったかをトレースしきれなかった。別の資料で出身が「浄土」とある。当時、慧海と浄土真宗との間ではひと悶着があったので、あるいはグループ内に居づらかったのではないかとも推測される。

藤本真光（準卒業者）

5名の西蔵語学者が誕生した、と慧海に言わしめているなかで、一人だけが準卒業者と記されているのはなぜか？

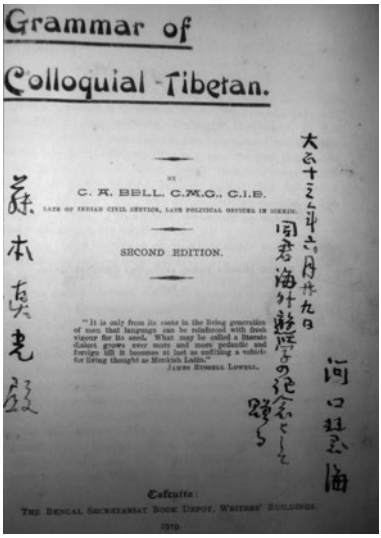
ここからの記述は、誠に恐縮ではあるが、私事にわたることになるので、そのことをご了承いただきたい。

実はこの藤本真光は私の亡父のことである。かつて日本山岳会会報「山」の平成13（2001）年11月号（N0・678）の「東西南北」に、「河口慧海と私の父」と題して拙文を掲載していただいた。彼がなぜ「準卒業者」と言われたかをご理解いただくためにも、また、掲載後かなり日数も経過したので、この拙文の要約を記したい。

苦学して高野山から東京大学印度哲学に学んだ父は、これからの宗教界には法律を学んだ者が必要であると痛感し

て、さらに法学部の英法に入学し直した。そして法学部を卒業後、高野山に戻る前に欧米留学の許可を得て、アメリカに向けて大正13（１９２４）年に出発したが、その際、慧海から餞別として慧海の署名入りのチャールズ・ベル著作の『チベット語口語文法』が父宛に贈られている。

慧海が始めた翻訳プロジェクトには、おそらく印度哲学科の恩師であった高楠順次郎の勧めで大正５（１９１６）年４月から加わったと思われるが、７月には印度哲学の卒業が決まっていた。慧海からチベット語の特訓を受けながら、法学部への転部を考えていた父の真意を今となっては推測できないが、２年後、法学部に進み、大正10（１９２１）年４月に法学部英法科を卒業している。おそらく法学部への転部の準備と、チベット語学習との双方に努力したのではなかろうか。



表紙裏に慧海の署名が入ったチャールズ・ベル著『チベット語口語文法』。藤本真光の留学に際して慧海が贈ったもの

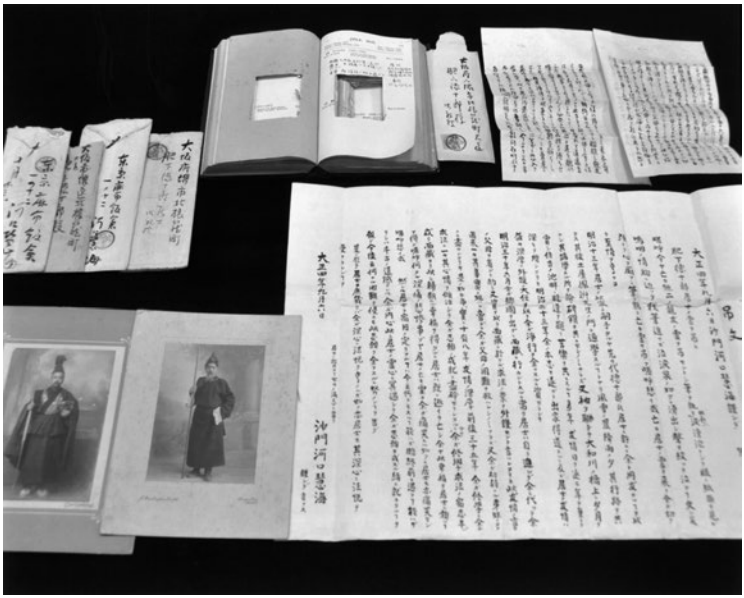
慧海としては今後の翻訳作業に従事させることは期待できないが、チベット語の理解についてはほかの４名と同等の水準に達したので、「準卒業」としたものと思われる。

慧海との親交はその後も続いたようで、慧海の署名の入った彼の著作や、慧海宅に寄寓していたチベット人からの、高野山に住んでいた父宛のチベット語で書かれたハガキなども私の手元に残っている。

母から私が聞いていたのは、父が慧海の最初の４人のチベット語の弟子の一人であったということだけであったので、会報「山」にこの文章を書いたのちに、慧海直筆の「勧請書」のコピーを見て、その中に父の名前を見つけて嬉しかったことを覚えている。

父は留学の帰途、インドのダージリンのタイガーズ・ヒルに早朝に登り、カンチェンジュンガの鋭峰を望見して感激している。

せっかく慧海からチベット語の特訓を受けながら、私の父が多くの経典の翻訳にそれを十分活かせなかったのは、日本の仏教界に対して申し訳ないことだったと私は思って



肥下徳十郎宅で発見された慧海からの手紙や日記、肖像写真など。堺市文化財課提供

いる。

まとめ

この拙文の執筆を準備しているとき、平成25（２０１３）年1月に堺市の文化財課が、河口慧海の新しい資料が発見されたことを報じた。慧海と同年生まれで、慧海を終世支援してきた堺市の紙問屋・肥下（ひげ）徳十郎（１８６６～１９１５年）の孫娘が保管していた、慧海からの手紙や日記などであった。日記の内部にはくりぬかれた空間があり、慧海の遺書を収めた箱の鍵を秘かに収納するようになっていた。

慧海の遺物については、平成16（２００４）年のヒマラヤ越えの日記の発見があるなど、ときどき彼に関心を寄せる人々を楽しませてくれる。

堺市で見つかった彼の肖像写真を今回掲載させていただいた。肥下徳十郎は、慧海の第1回の旅への出発時から一貫して彼を資金的に応援している、地元の親友である。

慧海はこうした友に支えられて活動してきたが、本稿に見てきたような、それほど関係の深くなさそうな多くの財界人からも、長い間資金の援助を受けた。これらの財界人

はなんらかの彼との縁（えにし）をもとに彼を支えてきたのであろうけれども、それを可能にしたいろいろな要因があったことを、この拙文でご理解いただければありがたいと思っている。

なんといっても、この「企画」がフレッシュで意欲的であったことである。日本人の心の奥底に潜む仏教への宗教心を、チベット語という、当時日本人に未知なる言語をもとに明らかにしようとした。それを個人の限られた時間と能力で実施するのではなく、学問を志す意欲的な若者に委ねようとした。

奥山直司編『河口慧海日記―ヒマラヤ・チベットの旅―』（講談社学術文庫）。平成16（2004）年に新たに発見された、慧海がヒマラヤ山脈を越えてチベットに入国したときの日記

長く時間と費用のかかる企てを、支えるに必要な資金を提供でき得る人々を周辺に得ることができた。それらの人々は、資金の提供を個人として継続してなし得る時代の良いタイミングを享受した。すべての要素をまとめて可能にしていく、河口慧海の緻密で熱情溢れる意欲があった。

翻って今日の情勢を見ると、果たしてこうしたプロジェクトの再現が可能であろうかと、寒心に堪えない。

何年かの年月をかけ、何人かの意欲的な若者に挑戦の機会を与え、多くの人々の心に迫る企てを、いたずらに公（おおやけ）の力に頼らず、私事（わたくしごと）として遂行するべく、独力で資金を集めて実行する人物を見出せるか。

多くの大企業の経営に携わるトップの人々に、個人としてこのような企てに資金を拠出する意欲と能力があるか。

新しい業を起こし、莫大な資産を手にしたいわゆる「起業家」に、こうしたいわば金にならない、しかし、意義の深い企てに積極的に力を貸そうという人が出てくるであろうか。

振り返れば、私たちは河口慧海という極めて個性的な、意欲に満ち溢れた人物を持ち、勃興する日本の産業界をリードしつつ彼を個人的に長く資金援助してきた、何人かの財界人を持つという、明治、大正のある時期、幸せな時

代を過ごしたのであったという感慨に耽ることができる。

付記

この拙文を記すにあたり、多くの人々のお世話になり、多くの書物を参照した。ここに詳細を記すのは控えるが、東洋大学教授・渡邉章悟氏、高野山大学教授・奥山直司氏には特にお世話になったことを記して、感謝の念を表わしたい。

俳句と登山

広渡敬雄

「角川俳句賞」受賞

俳句人口百万人超ともいわれるなかで、〝俳句界の芥川賞〟といわれ、最も伝統のある「角川俳句賞」を、今年の1月に受賞した。

角川俳句賞は昭和30（1955）年、俳壇に清新な風を吹き込む新人の登龍門として角川書店により設立され、今回で58回目を迎えた。

この受賞者の中からは、これまで現俳壇を代表する多くの俳人を輩出しており、毎年最も注目される賞である。

未発表50句の応募作品752編の中から、予選選考で残った37編の一編一編を、4人の選考委員が1ヶ月かけて吟味の上各々優秀5編を推薦し、8月29日に一堂に会して、各選考委員の推薦句を喧々諤々と議論、選評して受賞作を決める。

今年は史上最高の応募作の中から、私の応募作品「間取図」50句がその頂点に立ったが、選考委員の評として、次のように指摘、称賛された。

一、今年で58回目を迎える角川俳句賞に、永年の研鑽の積み重ねによる「香気」と「格調の高さ」が認められ、また自然との距離が近い作品も多く、人間の目には見えない「自然のエッセンス」も内蔵している。

二、**〈横顔は子規に如くなしラフランス〉**の取り合わせの見事さ。**〈寒鰤の胴に朱書きの値札投ぐ〉**の視覚的描写の巧みさ。加えて**〈間取図に手書きの出窓夏の山〉〈口**

2013年1月18日、東京・千代田区の東京會舘にて「第58回　角川俳句賞」を受賞する

大きく開けて日本の燕の子〉などの向日性が際立つ。

特に〈燕の子〉の句は、日本という言葉を嫌味なく収め、燕の口を描き出し素晴らしい出来栄え。また〈ラフランス〉の句は、もしあの健啖家の正岡子規（近代俳句の改革者）が、このラフランスを知っていたら幾度も食べたことだろう。子規の横顔や業績も思わせ、取り合わせの妙と諧謔を併せ持つ句である。

俳句との出会い

私は昭和26（1951）年、父母双方の故郷・福岡県遠賀郡岡垣町に生まれた。当時、日本最大の筑豊炭田を流域に持つ遠賀川河口ののどかな田園地帯であった。五木寛之の『青春の門』で名高い、川筋気質が色濃い地域でもある。

電力会社に勤務する父に従い、福岡、佐賀、長崎、北九州と転々としたが、中学以降大学までは主として福岡市で過ごした。

中学時代から、担任の教師の影響で詩歌に関心を持ち、200～300の短歌、俳句を諳んじただろうか。

だが、大学を卒業して都市銀行に就職し、文字どおり企業戦士として〝セブンイレブン〟の生活。虚しさを覚えつつも当面の仕事に忙殺される毎日だったが、その後「ゆと

りある社会」との後押しで土曜休日が増え、そして完全週休2日となった。

ちょうど40歳手前くらいだったか。

そのころから、元来からある程度馴染みのあった俳句と登山を本格的に始めた。

俳句は、俳壇の最高峰「蛇笏賞」の受賞俳人・能村登四郎に師事した。所属した俳句結社「沖」は、錚々たる俳人が綺羅星のように多数活躍しており、数年間は鳴かず飛ばずであったが、師登四郎が「あれは伸びる人」と自分のことを評していると仄聞し、それを心の糧として忠実に基本を学んだ。

いっぽう登山の方は、国内のアルプス等を順繰りに踏破していたが、平成元年8月、勤務先の上司（明治大学山岳部OB）にスイス・マッターホルン登攀を勧められた。

その企画に参加して、一緒に登攀したマッターホルン山頂からの雄大なゴルナー氷河を見て、俳句でもこのような悠久の世界が描けるのでは、との思いが芽生えた。

未明に登山口・ヘルンリ小屋を出発してすぐに岩壁に取り付き、先行するガイドの指示で必死に登攀していると、いつしか白み始めそのうち真紅の朝日がマッターホルンの屹立する岩壁を染め、次第に眼下に移り、ツェルマットの町も色付いていく。

さらに高度を上げ、中間点近くのソルベイ小屋手前からは広大なゴルナー氷河が俯瞰された。

現実の巨大な景でありながら、青々とした空から、渓谷を舐め尽くすように現れた巨大な白蛇を思わせるゴルナー氷河。その雄姿は、息を呑むような光景である。

彼の世からの使いとも言えようか。

俳句を通じて、その向こうの悠久の時空が、短小な言葉で描き出せるのではないかとも思えたものだ。

といっても、そのときは滑落すれば死に直結する地点でもあるため、必死に岩壁に取り付いていたにすぎないが。

山岳界の先鋭的クライマーが攀じるヒマラヤの高峰は、希薄な空気と相俟って、さらに悠久無限の時空なのではなかろうか。

青き薔薇活けし瓶あり銀河系

その後何年かして出来た句。この地球上には存在しない「青き薔薇」だが、十数年ほど前、某飲料メーカーが創出して話題となった。但し、純粋な意味での青い薔薇ではない。

ひょっとすると純粋の青い薔薇は、宏大無辺の銀河系のとある星に存在するのではないか。ゴルナー氷河を俯瞰した折に感じ取った別の時空が、脳裡にあったのかも知れな

い。

今でも気に入っている虚実皮膜の作である。

俳句の良さは、植物、動物、天文・地理に加え、各地の風土、風俗など、要は森羅万象に関心を持つことだろう。殊に季節の先取りによる、心のときめきが自然と自分の一体化をも実感させる。梅のさきがけ、春筍、燕の到来、初蝶、片栗の花、若葉、鮎解禁、山開き、青田、初蝉、雪渓、入道雲（雲の峰）、虫の声、鰯雲、台風、初冠雪、初紅葉、猪垣、初霜、雪嶺、猟解禁、霧氷、河豚鍋などは自分の好みの素材だが、これらは俳句の中で重要な「季語」ともなっており、きらきらとして、春夏秋冬の到来を五感で実感させてくれる。

ほかのなんでも俳句の材料となるし、自然に加え、日常の生活、家族、仕事も俳句を通して描くことができ、その感慨を詩に高めることができる。

つまり俳句を通して自然や人や文化、さらには自分自身や家族と深く接することが出来るのである。

山岳俳句の系譜

古来、和歌の世界では山は詠われていたが、俳句の世界で自然を対象にしたのは、松尾芭蕉からだろうか。

ご存じのように『奥の細道』では羽黒山や月山に登り、有名な句を残している。

涼しさやほの三日月の羽黒山
雲の峯幾つ崩れて月の山

明治になって子規の高弟・河東碧梧桐が全国を行脚し、立山、針ノ木岳～槍ヶ岳を縦走し、幾つかの山岳俳句を作ってはいるが、本格的に山を素材にしたのは前田普羅を嚆矢とする。

それ以降、さまざまな俳人が山に関する俳句を作っており、桑原武夫によると、山岳俳句は大まかにいって次の三つの傾向が見られるが、それらは、自然詠俳句の一つの分野を形成している。

一、遠望俳句

文字どおり遥か遠くより山を眺め、名峰を詠む。

駒ヶ嶽凍て、巌を落としけり　**前田普羅**
ふるさとに似たる山あり遠霞む　**深田久山**（久弥俳号）
芋の露連山影をただしうす　**飯田蛇笏**
雪山に春の夕焼滝をなす　**飯田龍太**

久弥の詠う「山」は故郷・大聖寺（現加賀市）から毎日

2011年7月、八ヶ岳連峰・赤岳山頂にて

仰いだ、福井県との県境付近の富士写ヶ岳（942m）といわれ、12歳の折に初めて登り、その後登山に関心を持ったとされる。

二、高原俳句（逍遥俳句）

高原などを逍遥しながら自然界と山を詠む。

冬山路俄かにぬくきところあり　高浜虚子
啄木鳥や落葉をいそぐ牧の木々　水原秋櫻子
雪渓に石投げて音かへり来ず　堀口星眠

虚子の句は、戦時中疎開した信州・小諸、秋櫻子の句は赤城山・大沼での作である。

三、登攀俳句

本格的登山、山岳に肉薄して詠む。

朝明の雲海尾根を溢れ落つ　石橋辰之助
岳は秋黒部本流なほ澄まず　福田蓼汀
雪渓の水汲みに出る星の中　岡田日郎
脈絡のいのちのザイル手に凍る　菅原達也

特に蓼汀は、次男が奥黒部ヒュッテ付近の東沢の山崩れで遭難しており、捜索するも叶わず、その折の作品「秋草

挽歌」で俳壇の最高峰「蛇笏賞」を受賞した。その俳誌「山火」（現主宰・岡田日郎）は、山岳俳句を詠む多くの俳人を輩出している。

私の山岳俳句

山登りの途中では、ほぼ山に集中しており、休憩時や小屋・テントで作るものの傑作は出来ず、後日回想しながらの句が多い。臨場感ある対象は現場に如かずではあるが、どうしても表面的な大景に目が奪われ、視点が拡散し、集中力が第一である俳句で、措辞や表現が十分にこなれないからであろう。

自分自身の作句スタイルは、登攀俳句だけでなく、麓の里人の暮らし、山との関わり（猟、祠＝山の神、猪垣）、樹木（ブナ、水楢、白樺）、高山植物、動物（羚羊、熊、鹿、狐）、三角点、中央分水嶺、山座同定にも関心を持ち、句材としている。

ブログ「haiku&me」にマッターホルン登攀記、ぶな美林、日本中央分水嶺、三角点、富士山、森林浴、山の花々、スノーシューなど掲載しているので、一覧いただければありがたい。

平成９（１９９７）年、伝統ある日本山岳会に入会してから、会報「山」に二度ほど山岳俳句を掲載し、また句集「遠賀川」「ライカ」も山岳会図書室に寄贈させていただき、大変光栄に思っている。

会報「山」では、山岳会の先鋭的なクライマーの登攀記事を楽しむとともに、多くの俳人の佳吟も拝見し、俳句を愛する岳人がいることを知った。

ここで、自分の山に関連する俳句を披露してみたい。

登高やなほ高き峰子に示し

登高とは、中国から伝わった９月９日の重陽（菊の日）に小高い丘や山に登って祝する行事だが、現在では秋麗の日に小高い所に登り、爽快感を詠むようになった。二人の娘が小学生のころ、東京の近郊の高尾山に登ると、もっと高い山梨県の山のさらに上に、初冠雪の富士山が見えた。今は三ツ星観光地となったが。

裏山のしづかな日なり雛飾る

甲府盆地と芦川村（現笛吹市）の境の里山・春日山に登った帰り、その麓の、二代にわたり俳壇で名をなした飯田蛇笏、龍太の屋敷（山廬）に立ち寄ると、３月の下旬なのにまだ雛段があった。

聞くとこの地（境川村・現笛吹市）では月遅れの雛祭とのこと。桃源郷といわれる桃の盛りに、幾多の名句を生ん

だ裏山からは、南アルプス、茅ヶ岳、八ヶ岳、奥秩父、小金沢連嶺等と、桃の花でピンクに染まった甲府盆地の絶景が見渡せた。

雷鳥の砂浴びの窪あたたかし

山に登ったときは、特に小動物に憐憫の情が深まる。国の天然記念物の雷鳥は、這松帯のみならず、稜線の登山道で子連れで散歩しているのにもよく出くわす。南アルプスの塩見岳頂上近くで、砂礫を吹き飛ばして砂浴びをしていたが、早朝の肌つく寒さのなかでも、その窪地は暖かそうだった。

梟に腕あれば腕組むならむ

梟は〝森の哲学者〟ともいわれる。不思議なもので、その風貌を見ていると、ふと腕を組んでいるようにも思えた。鹿島槍ヶ岳の中腹での冬山訓練の帰途、大町の長野県山岳総合センターの梟を見ての作。

悴みて登頂時刻のみ記せり

10月の連休、北海道の山岳は、登山口は秋麗ら、中腹は紅葉の盛り、頂上付近は風雪であることが多い。知床半島の真ん中あたりの知床・硫黄山がそうだった。ガレて足場の悪い、1～2㎝の積雪の急斜面を登りきると一等三角点の山頂で、身体が飛ばされるほどの風雪だった。悴(かじか)む手で登頂時刻のみを記すとすぐ下山したが、登山口から少々入ったカムイワッカの湯の滝の湯壺は誰もおらず、湯加減も最高だった。現在は、この登山道は利用不可と聞いている。

国後島に傾ぐ這松霧氷かな

羅臼岳も、天国のような紅葉の盛りの極楽平、銀冷水を過ぎて、一転、羅臼平から頂上は猛烈な吹雪だった。一瞬の晴れたときに見えた国後島は、思いのほか大きく広がって見えた。強い風雪の通り道なのだろう。痛々しいほどに傾いた這松は、今はロシアに支配されている旧島民の哀しみのようにも思えた。

靄を生み靄を走れり雪解川

千曲川（信濃川）の源流の、レタスなど高原野菜の産地・川上村では、甲武信ヶ岳直下からの流れが次第に川幅を広げ始める。

靄を生みながら怒濤のように流れゆく雪解川！

先人につながる思いでは、最上川を詠んだ芭蕉の「五月雨を集めてはやし最上川」、齋藤茂吉の「最上川逆白波のたつまでにふぶくゆふべとなりにけるかも」と風雅をともにしているという、いささかの自負もあり、最近、この雪解川は最上川でもあると思い直している。

幼くて耳の垂れたる狩の犬

晩秋の鳳凰三山を縦走して泊まった芦安村（現南アルプス市）の民宿の主人は猟師も兼ねていて、何匹かの猟犬も飼われていた。玄関脇の犬小屋から幼い犬が出てきてじゃれついてきた。もう2～3年で立派な猟犬になる姿を思った。

霧走る疾さを頬がとらへけり

平成19年9月16日、信越国境付近の新潟県の焼山で日本三百名山を完登した。16歳の折、高校の鍛練登山で久住山に登って以来、ちょうど40年目だった。永年、有毒ガスで登山禁止になっていたのが解禁された年だった。頬を流れる霧は心地良かったが、気のせいか硫黄の臭いがしていたのを今でも鮮明に覚えている。

山小屋に一礼をして山下る

テント泊もあるが、大概は小屋泊まりだ。北アルプス・赤牛岳～黒岳～野口五郎岳と縦走して泊まった烏帽子小屋。翌日の都合で未明に小屋を出て、高瀬ダムに向かう。寝鎮まった小屋に深々と礼をして、三大急登といわれるブナ立尾根の坂を下った。

深田久弥の雨飾山と私の俳号

名著『日本百名山』の著者・深田久弥は、登山と同様に俳句を嗜み、「九山句集」として出版している。但し句集には、高浜虚子主催の句会で鎌倉文士とともに詠んだ、艶な句も多い。

38歳の折15年ぶりに再会した、後の志げ子夫人（評論家・中村光夫の姉）を詠んだ句が有名である。

おもかげに似たるホームのセルの人

たまゆらの恋なりき君はセルを着て

私がときどき使う俳号は、「雨飾」。

相当の山好きな人でない限り「あめかざり」と呼ばれるが、「あまかざりです」と笑って釈明しつつ、その謂れを明らかにしている。

昭和16年、再会後間もない久弥と志げ子が、大町から歩いて登った雨飾山は日本百名山の名峰として有名だが、その帰りに何度も振り返りつつ、「左の耳は僕の耳、右ははしけやし君の耳」と詠った双耳峰でもある。

＊

俳句と登山とは、離れているようで本人と自然が同化するという意味では、相似ている感がする。自分自身としては、この二つの相乗効果がそれぞれの魅力を倍増し、今回

の幸運をもたらしたとも確信している。

俳句を始めると、山行の思い出が写真とともに鮮やかに脳裡に蘇る。山行を楽しまれる一般の方のみならず、先鋭的なクライマーの方も俳句を始めると、山行の世界がぐーんと拡がり、通常の登山者が体験できない天空の高峰の世界（時空）を描けるのではないかと思う。

静観的登山者生涯の山岳詩

――松永敏郎・三十余年の年頭短歌集――

倉知敬

登山の歴史を考えると、20世紀はスポーツとしての登山活動が頂点を極めた時代であり、人類は未踏の山岳地域を探検し、主な高山を初めて登り、さらに困難な登攀を極限的な領域まで追求した。そこに貫かれた精神は、未知なるものを解明しようとする知的好奇心であり、不可能なるものに挑む闘争心であって、それが登山というスポーツなり文化活動の、本質を成す価値感だった。その発展段階が大方究極に達成してしまった今、純粋に登山たるものは大勢としては終焉し、一般に受け入れられる登山の意味や価値感は顕著に変質したが、それは当然でもあり、ただそう認識すればいいことでもある。それに準じて、やはりそういう歴史展開を経た『山岳』という機関誌も、日本人が参画した登山記録の発表を主題とした時期は去り、今なお延長線上の主題追及余地は残されているとはいえ、一体これから、変貌した時代に即したどんな価値観を追求していくのだろうか。

もちろん、いつの時代も登山に対する人々の思いには多様な彩りがあったわけで、自然美を愛しむ心が本能的に導く行為であったり、また、宗教的修業の鍛錬の場だったり、動機や目標はさまざまである。登山とは、闘争するスポーツという面と同時に、人間の精神向上を願う文化活動だという面もある、と括ったらいいかとも言える。当初、日本岳界では、日本古来の山岳民族の登山術を尊ぶ立場と、近代登山技術導入を図る推進派との論争がたけなわだった

が、以降一般には、「近代アルピニズム派」といわゆる「静観派」との登山路線対立が論じられてきた。

ここで「静観的登山」という言葉の定義について、伊藤秀五郎の『北の山』から、それを的確に示す表現を引用したい。その「静観的とは―若き山友達に送る手紙―」の章で、危険のない尾根などを冥想に耽りながら歩く楽な登山を意味するのではないとしたあと、伊藤秀五郎はこう表現する。

> 静観的登山というのは、山登りにおける激しい身体的な行動と、危険を含んだ肉体的緊張感のみを享楽するに止まらずして、そのような行為をも含めて、より豊かな心を以て自然を観照しようとする態度である。（中略）言葉を換えていうならば、自己を大自然の中に投げ入れて、渾然とその威力と包和融合し、その威力と共に動き共に楽しむというような、いわゆる真正なる崇高の創造者的の山登りを指していうのである。

つまり「静観的」とは、登攀至上主義と自然愛好主義の両方を含む包括的な概念を意味するのだ、という欲張った表現であるわけだが、人がその両方を具備するという場合、往々にしてそのような鵺（ぬえ）のごとき存在は、結局のところ似非（せ）者であることが多い。後段で換言していう表現では、創造する登山だと結語しているので、未踏山域の踏破とか未踏ピークの初登を意味するようにも思われるが、それを志す心構えには闘争心だけでなく、環境を認識する心の余裕が大切だ、というのが真意だろう。

また、人は学習や経験を経て変化するものであるので、人生の中でさまざまな機会を得て両方を愛しむのであればよい、と解釈すれば、無理な概念ではなくなる。生涯を貫いて登山を続ければ、歳をとるとともに自然に、激しい登攀から自然を楽しむ山歩きに嗜好が変わっていくものである。つまるところ、命懸けの真剣さを持ってこそ、豊かな心というものは涵養されるものであり、そうでなくて、始めから楽な道を歩くだけで道端の花ばかり楽しむのでは、本当に大自然に包和融合できませんよ、ということである。

松永敏郎さんは、間違いなく静観的登山者として生涯を過ごした人であった。國学院大学山岳部を経て、幾つかの第一級積雪期登攀を果たす一方、東京中野に個人経営の登山道具店「アポロスポーツ」を長く開業、一般の画一的商品ではなく、自己の体験に基づいた実用的登山用具を提供するのに力を入れたことがユニークだった。また、登山技

術指導の面で活躍、文部省登山研修所や日本山岳会で指導的業績を残された。その登山活動の記録は、國学院大学山岳部部報『足引き』や、著書『空にただよう峰』などに発表されている。『山岳』には、「空にただよう峰―ヘイズ南峰登攀の個人的記録」（第70年、１９７５年）、「富士山に於ける強風―登山者の問題点にも触れて」（第１０４年、２００９年）を寄稿されている。

松永さんは、闘争的登攀者たることを身上とする一方で、鋭敏な詩的感覚を持つロマンチストでもあった。『空にただよう峰』（１９９１年刊、自家出版）には、屏風岩第１ルンゼ厳冬期登攀などの記録発表の傍ら、「蒼天飛雲　わが山を歌う」と題した短歌集も収録されている。また、彼を知る山仲間は誰しも、毎年、年賀状の束の中に、ひと際個性的な青字印刷の堂々たる彼の短歌賀状を見出し、心引き締まる思いに耽ったことと思う（その内10作品ほどは前記短歌集からの引用だが、そのほか特に近年のものは、都度詠んだものである）。

詩人とはいえ、花鳥風月を愛でるありふれた感性の発露にとどまることなく、自然に対峙する人間の精神高揚や哀感を表現することに、心を向けるのを常としている。おそらく、こういう言わば行動詩人は、世にこの人しかいないかのように際立っている。何しろ、その根源にある熱烈冷静な登攀行為そのものが、生半可な余人をもってしては、到底真似できないものであったのだ。

そもそも、一般に山岳詩歌とは如何なるものであるべきか。田部重治の論ずるところを借りて言えば、山岳文学として有り得べきは抒情詩と紀行文のみであり、いずれも登山の写実、空間的描写のみでなく、作者の印象や創造が働いてこそ成立し得る、だから山を歌うこととは人間と無言の山との交渉である、と表現できると思われる。以下に、その根幹を成す見解を『山岳』（第28年第1号、昭和８・１９３３年）の巻頭記事、田部重治「山岳文學に就いて」から引用したい。

> 自然美を現はす文学を実際の例について見るに、静的な描写をする人と動的な叙述をする人とはあるが、前者を選ぶ場合でも多くの優れたる作品に於ける実例は、暗示的であり比喩的である。そして動的な描写を取る場合には、最も中心的な現象によって狙ふ自然の偉大さを高めるやうな手段を取る。例へば富士山を歌ふとすれば、吾々は先づ富士の姿を考へ、其の色彩を思ひ、どこまでが雪に蔽はれてゐるかを云はなくては

気が済まないやうに思ふ。ところが山部赤人は次のやうに動的に歌ふことにより此の山の描写に一新境を開いてゐる。

わたる日のかげもかくろひ
照る月の光も見えず
白雲もいゆきはばかり
時じくぞ雪は降りける。

（中略）山に対する詩作的方面は最も新しい自然界の法則であり、最も有望な方面であり、それを歌ふ詩は、最も暗示的な力強いものであり、時には静的な描写をとるが、その時には最も印象的な一面を取って他を暗示するか、時には赤人の場合の如く、動的な描写をとるかで、それは文学固有の描写法に叶ふべきで、決して絵画的な空間的芸術の精神を直訳してはならないと思ふ。

さて、松永短歌とは正に動的な描写をとった山岳詩歌であると言えよう。それは、自らが躍動する反映として目に映った無言の山との交渉を、人生のときどきに応じて直截的な言葉で表現したものだ。これを長年、営々と発表し続けたのだが、その基調はダイナミックなものから次第に淡々としたものに変化していく。毎年拝領した松永さんの年賀状には（註参照）、いつも真ん中にデンと掲げられた年頭短歌が、大概はその前にそう詠うに至った背景表現を詞書として添えて、紙面いっぱいに躍っている。以下にそれらをそのまま、暦年順に列記して、じっくり熟読玩味いただくことにしたい。

〈注〉掲載するものは１９７５（昭和50）年から２０１２（平成24）年にわたる期間のものである。それ以前の昭和40年代のころ、東京地区の行事などの世話をする日本山岳会東京支部という組織があって、当初、筆者はそこで松永さんと知り合い、また、富士山や谷川岳山行にご一緒した。だから、この期間より前10年ほども年賀状のやりとりはあったはずだが、手元に残っておらず抜けている。しかし、詞書を置いて短歌が続くという定型が固まり、変わらず継続され出すのは昭和50年代後半のころからのことである。

なお、掲載分には昭和64（平成1）年および平成19年のものが抜けているが、それは筆者の親族喪中のために受領辞退したという私的事情のせいであり、松永さんの年頭短歌が発表されなかったわけではない。実

は関係者にもこれらの年の年賀状保存の有無を問い合わせたりはしたが、一般的に季節の挨拶状を長く保管する習慣は稀なようである。本稿は継続的詩作活動について言及するものなので、この欠落はなんとも残念だとはいえ、総体としては長期に渉る連続性の本質を充分表現していると思われ、やむなく不備ならざるを得なかった事情を許容願うしかない。

昭和50年　〈注＝この年はまだ歌のみの表記であり、詞書はない〉

秀（ほ）の影は青木の樹海（うみ）を　移ろひて
はざかふ野面に陽炎（かげろふ）はもゆ

昭和51年　機上からふり返ると、白雪のヘイズ山群は既に遠く、山稜もそれと確かめることはできなかった。来年いま一度来よう。風防ガラスに顔を押し付けたまま、僕はひそかに心に決める。

みはるかす未踏の原に雲流れ
機影を囲む虹の輪あざやか

〈注＝この作は「蒼天飛雲　わが山を歌う」に収録されたものである〈以下＊で表す〉。昭和50年8月作〉

昭和52年　〈注＝この年だけは短歌ではなく、はがき一面いっぱいに紀行文からの抜粋が並ぶ〉

ピッケルを投げ出し、霜柱の並んだ火山礫のふくらみに、ザックを負ったままの体をもたせかけて私は待った。

背丈を越すすすきの群れの上、おおいかぶさるような富士の山体は、明からむ空を背に徐々に立体感を増し、やがて、光が、たおやかに伸びひろがる西の山稜の一点に充満するかと見る間に、奔騰しこぼれる光芒は大赤沢の谷を越えて走り、雪の大傾斜面を顕わにしていた。

生新な朝の日であった。すすきの穂は光彩の中に遙れ、私は、その変わる陽の温もりを頬に山を眺めていた。

〈富士山上井出口紀行より〉

昭和53年　〈注＝「献寿」とだけあり、詞書はない〉

目路はるか
あかときの色ひろがりぬ
ふぶきはさらに
乱れとぶ空

昭和54年　夜半すぎ、茂倉岳東面を這い上がる凄じい風はツェルトを吹き飛ばすかとも思わせた。僕らは風雪の闇の中で交替でアイゼンをはき、ザックを抱いたまま夜の明けるのを待ち望んでいた。

あらし止みぬ　吾が歩む頬に陽は温み
細き雪稜に風花は舞ふ

（＊昭和53年1月作）

昭和55年　ガンゴトリ氷河はヒンズーの聖域、その傍らに聳えて、太古の神王の名を戴くという未登のバギラティI峰に、インド政府より登山許可を得たり。山容は鋭く、登攀は困難とききつつ。

ガンジスのうましき源流を天に継ぎ
尖り穂は日に輝きわたる

昭和56年　富士の傾斜の影はようやく暗さの去った空の半ばをきり、私はまだその闇の中にいた。雲海は下界を覆い、はるかに広がり、その遠い際に北アルプスの連なりがあった。東の空が赫く燃え始めた。

距離ひょうびょう　雲ゐよぎりて
あかつきの
日はあざやかに　峰を染めたる

（＊昭和55年2月作）

昭和57年　（注＝「献寿」とだけあり、詞書はない）

渓にみつ
陽のさやけさよ
春をふふむ
樵生の森は静かなりけり

（＊昭和56年3月作）

昭和58年　峰に登り谷へ降る。その道程でふと立ち止まって、振り返ることが多くなった。もしあるとすれば、自分の心に蔵し得たものは何であったのだろうか。五十歳になった。

幹うてば　かつかつと音す
山毛欅はいま
樹液熟むらし　雪積む谷に

（＊昭和57年5月作）

昭和59年　強い風雪に翻弄されながら頂上にたった夜、テントは北股の谷を越えてどよめく風に揺すられ続けた。しかしその朝、風はまったく止み、冷え切った静穏が還ってきた。

ダイヤモンド・ダストは
深き蒼さの空に満ち
鹿島嶺はいま朝の日に映ゆ

（＊昭和58年1月作）

昭和60年

青森岳連に招かれて八甲田を訪れし折、奥入瀬の渓谷を経て残雪の牧場に至る。そのなかに大いなる湧水池あり。透明清麗の水豊かに、陽の光を映して川をなすを観て

田代平の地に凝る水は
あふれいでて
茫洋春の野面を流る

（「田代平の地に」は「池」と思われるが、原文のままとする）

昭和61年

秋田岳連を訪れし折、会長や地元会員の援けを得て、深雪と霧に難渋しつつ秋田駒ヶ岳に登る。帰途、宿の主人の好意で山峡の古湯「鶴ノ湯」に泊す。夜半、豊穣に湧く露天湯に浸りて

頤（おとがい）をあげ　白き湯に浮きてみつ
冬深みくる　星の傾（かたぶ）き

（＊昭和60年11月作）

昭和62年

本栖よりの帰るさ、鳴沢の辺りで道端に立って富士山を見る。時は昼。風も止んだ。畑の残雪には一杯の陽が照って黒い畝がのぞき、落葉松の芽生えが始まろうとしていた。

唐辛子赤き　軒端の雪はかぎろひて
春野に高く　皓（ひか）る富士あり

（＊昭和59年3月作）

昭和63年

陽光を水底まで通しながら、溢れるように流れる本谷の対岸には、楢、とち、沢ぐるみなど、うっそうとした新緑の森があった。私は流れの途中で立ち止まり、これから遡る谷の奥を眺めた。

啼きかはし
鳥低く翔ぶ四万川の
水際（みぎは）の緑透きて陽は照る

（＊昭和61年8月作）

平成2年

天照教社からの「富士の古道」は既に遠い時の流れの下に埋もれていた。原生林をよぎる林道のへりで夜を明かし、濡れた熊笹を分けて再び深い森を登りながら、私は幾度も足を止めた

りょうりょうと
鼓を打つ如き音聞きて
日射したゆたふ森にたたずむ
（＊ただし、詠歌の日付記載なし）

平成3年　天人峡からクワウンナイ川に入った。渡渉を繰り返して二股下に露営した朝、濃い緑の両岸から滑岩の川幅一杯に広がる「滝の瀬十三丁」を遡った。快晴の夏。北海道の山旅であった。

たぎりつつ　岸辺にあふれゆく水や
日はさんらんと　蒼穹に照る
（＊平成2年8月作）

平成4年　原生林から落葉松やしらびの森を抜ける道は展望もなく、予想よりも短時間で山頂に出たが、濡れた体に吹く風が冷たかった。昆布と一緒に透明な地酒の二合瓶が供えてあった。

霧雨の峰の社（やしろ）のまれ人に
御酒（みき）賜われや恵那山の神

平成5年　山仲間とともにチベットに出かけ、十月初旬たおやかに輝く桑頂抗沙峰（サンディンカンシャ）六五九〇米に初登頂できた。胸に満ちあふれる喜びであった。六十歳になった。

山よ眠れ
わが足跡に雪を積み
冬日はるけき空のかなたに

平成6年　秋の霞沢岳に登り、徳本峠から島々へ下った。学生の頃重荷に喘ぎながら歩いた谷の両側は黄や紅葉に染められ、道の端に乾いた落葉を敷いて寝たその夜の空には、梢を越えて星の輝きが見えた。

夜を深み
赫き燠火に寄り添えば
ふと口いずる古き山歌

平成7年　五月中旬、立山の樵坂から山麓にかけて彩り豊かな新緑が一斉に盛り上がる季節。剱岳でのトレーニングを終えた学生たちの顔が黒くたくましく見えるのもいい。

鳥はいま風とらへたれ
みどり耀（かがや）ふ
山のなだれを翔（ま）ひのぼりゆく

平成8年　日光太郎山に登り山王帽子を経て光徳に下る。観光客のざわめきを背に水楢林を抜け、

御沢のへりでテントを張った。楓や漆、野ぶどうの葉の彩りが秋の深まりを告げる頃であった。

夜をされば
銀河は高く尾根を越え
呼ばあふ鹿の声聞こえ来る

平成9年　夏、北海道の山歩きは天候に恵まれず暑寒別岳に登っただけ。わずかな晴れ間に雨竜沼湿原の花々と眺望を楽しめたが、強風下の露営と、翌朝山頂直下の凄まじい吹き降りには大いに悩まされた。

いかづちの神叫(おら)ぶ間を地に這ひて
あられ岩間に跳ね飛ぶを見き

平成10年　二月半ば、新潟県高体連登山部の顧問教師冬山研修会に招かれて雪の五頭山に登った。下山後まだ蕾堅い小枝数本を貰い、東京に持ち帰ってわが家の玄関の花びんに投げ入れてあった。

たむしばは
すがしき香もて位置を占め
舞ふがごとくに花ひらきたり

平成11年　十月、雨の止んだ朝、青森県岩崎の登山口へ送られ独りで白神岳に登った。期待のブナ原生林は雲の下で彩りもなかったが、下りぎわ、紅葉の尾根を境にした日本海側が豁然晴れ上がるのが見えた。

秋日てる
藍(あお)き潮目をあざやかに
水尾(みお)曳き船は艫作崎(へなしざき)出づ

平成12年　山仲間に誘われて鹿沼へ山菜とりに出かけた。楽しみにしたタラノメは芽生えたばかりで固く、収穫のないまま下山の折、尾根に広がって陽の光をあびる雑木林に入った。景色が一変した。

うち寄する春来たるらし
みどり立つ
古峰(こぶ)の山辺に赤やしお咲く

平成13年　石佛を尋ねて、桜の奥多摩湖畔から新緑萌える丹波渓谷を経て柳沢峠を越えた。霞に浮く富士山を眺めて裂石へ下るが、周囲は斜面総てが桃や季の畠で、華やかな彩りにあふれていた。

庚申塚埋(うず)み残して
桃の花は
甲斐路の春を咲き登りゆく

平成14年　初めて冬の山頂に立ってから五十数年が過ぎた。いまは、力まかせに山に挑むよりは、四季折々の自然の変化を愉しみ、裾野を歩き森林に寝て山と語り合いたい思いに駆られている。

願はくば
わが生くる時空(とき)を充たしめよ
秋日豊かにゆるぎなき富士

平成15年　東チベットから帰った知人に数葉の写真を貰った。旅の途中で撮った子供らは鼻汁で顔や袖を汚しながら、目は輝いて愛しさに満ちていた。私は十年前に出会った子供達を遙かに思った。

犛牛(ヤク)を追ふ
子等は早瀬を渡るらし
掛けあふ歌の空に響ける

平成16年　本州南端の紀州勝浦に旅した。古代から中世の長い間、朝廷から庶民まで多くの信仰を集めた三山に詣で、念願の那智の滝を拝した後、熊野古道を歩いた。懐かしい古稀の記念になった。

吾が立てば空のまほらに秋日満ち
たたなはる見ゆ紀伊の群山

平成17年　紅葉たけなわの朝、山麓の露店で指先ほどの緑の粒を並べたパックを見つけた。老婆の話で初めて口にしたその葉には土の匂いもあって、蕗の薹こそが新芽だとのわが誤解は正されたのである。

冬至前は香を愛づべしと蕗の芽の
にがきを噛みつ山道に入る

平成18年　草津の湯を浴び、たけなわの紅葉を賞でながらの山歩きを楽しもうと、山岳部OB五人で出かけた。宿は自炊。炊事係は年少六十数歳の二人。飯も酒も山も、この上ない旅であった。

生き死にの煩ひ思ふべきやなし
秋雲高く流れゆく空

平成20年　丘陵を伝い継ぐ巡礼道を辿った。踏み跡を覆う森、岩峰に危く立つあずまやの回廊、朱塗

りの懸外舞台の観音堂が、修行に走り通う白衣の人達の姿を想像させた。麓の寺に着く。三年三つき延命の効ありという湧き水を祈り込めて水筒に汲んだ。

（「懸外舞台」は「懸崖」と思われるが、原文のままとする）

修験らの称名のごと風わたり
どんぐりが降る　秩父路は秋

平成21年　初冬のある朝、静岡にあった生家の窓からは賤機（しずはた）・安倍の山々を超えた遥かな高みに、赤石・聖岳の峰が浮き、山登りを始めた少年の心を誘った。あれから六十年が経った。

古き時の吹雪は耳に甦（よみがへ）り
ピッケルの錆を愛おしむ日よ

平成22年　昭和廿五年八月、身延から新倉、伝付峠を越え初めて赤石・荒川岳周辺に登った。食糧不足の時代で十日間すいとんや雑炊の空腹に耐え、大井川を下り、夜中大日峠を越えて静岡に戻った。十六歳であった。六十年が過ぎた。昨秋、新倉を訪ねた。紅葉の中で峠への登り口は分からなかった。

雪積みて逆しま富士も静かなる
本栖（もとす）のうみの澄める水のへ

平成23年　旧年喜寿になってからの話、夫婦続いて心臓の手術でしごかれました。今年はリハビリに励みます。機会は少なく、懐かしの山も眺めるだけですが、登山の可能性は大きくなりました。

ゆるぎゐるひかりのはるか
ゆきよそふ
不二たしかなりむらやまのうへ

平成24年　体の不調もあって山には行けなかった。秋、見兼ねた山仲間に誘われ八ヶ岳山麓を訪ねた。列車からは日に映える山々を懐しみ、紅葉する木立に触れ、地面に寝て、自然が授けてくれた平安を享受することができた。次の予定地へ歩きながら、新しい吾が山旅の多からんを心から願った。

祈りゆく道よいちいは赫く熟み
峙（そばだ）つ富士に遥かなる空

〈追記〉
國学院大学山岳部ＯＢの原勝興氏より、本文中に欠落して

いたものをご教示いただいたので、以下に追加記載したい。

昭和64（平成元）年　燧ヶ岳に登ろうと尾瀬ヶ原を渡った。周辺の落葉松の木立は昼の陽を受けて金色に輝き、点在する池塘の、透徹した水の面には空を流れる白雲が映っていた。深まる秋がそこにあった。

（「点在する池塘」は「池塘」と思われるが、原文のままとする）

蒼天飛雲

草もみじ照る野に立ちて

肩柔らかき燧岳見つ

（＊昭和63年10月作）

大正2年夏、上高地

――ウェストンらと日本山岳会第二世代の邂逅――

関塚貞亨

はじめに

このタイトルで山の話を書こうと思ったのは、昨２０１２年の12月に、横浜山下町の骨董市で茨木猪之吉の肉筆絵葉書を購入し、そのなかでも上高地を描いた一枚の文面に興味を惹かれてのことであった。この絵葉書が投函された大正２（１９１３）年夏に、上高地温泉に泊まった人たちのことが思い出され、その人たちの交流と、できごとが次から次へと思い浮かんできたので、それを纏めてみようと考えたのである。

その予告編ともいえる話は、会報「山」８１３号に簡単に書いたが、大正2年夏の上高地温泉には、木暮理太郎、田部重治、ウェストン夫妻、茨木猪之吉ら草創期会員と大木操、鹿子木員信、辻荘一など、日本山岳会第二世代に属する会員および学生、高村光太郎や窪田空穂といった文化人が偶然に泊まり合わせ、人々の交流があり、興味深い数々のエピソードが生まれたのである。

『山岳』の年号表記は西暦が慣例であるが、あえて大正としたのは、登山の探検時代は大正の前半に終わり、冒険の時代に入ったのも大正年代である。そして、山岳会発刊の『山岳』、小島烏水の大著『日本アルプス』などに触発されて中学生から大学生までの学生に登山が普及し、学校山岳部の多くが生まれ、槇有恒、松方三郎ら山岳会第二世代に属する人たちが育ったのも大正年代である。それ故に、あえてタイトルは大正にこだわった。

大正２年８月６日、上高地から送られた茨木猪之吉の肉筆絵葉書

木暮・田部の槍ヶ岳から日本海へ

木暮理太郎と田部重治が知り合ったのは１９０６（明治39）年のことである。田部は木暮の人柄、深い教養に惹かれて、本郷・紅葉館の木暮の下宿を度々訪ねるようになる。交際が始まって2年目になって、木暮が登山の達人であることを知り、１９０８（明治41）年に一緒に高尾山に登る。それから二人は、秩父の山や北アルプスで数々の山や渓を探勝するようになる。

田部の著書を読むと、木暮が秩父でも北アルプスでも、細やかな心遣い、ルート・ファインディングの確かさ、強靭な体力と山への理解の深さという、パートナーとしてこの上なく頼もしい人であったことがよく分かる。そして、二人が登山を始めて5年目になる１９１３（大正２）年の夏、案内人なしで北アルプスの核心部「槍ヶ岳より日本海まで」の大縦走を実行したのである。

この縦走は登山史に燦然と輝く快挙で、大正2年の登山のハイライトである。槍ヶ岳より黒部源流の山々、薬師岳から立山、剱岳への縦走を計画したのは田部であるが、案内人なしで決行しようと提案したのは木暮である。案内人がいないと縦走に必要な荷物は、すべて二人で担いでいかなければならない。この縦走計画に対して協力者も現れ

た。画家の中村清太郎が、五色ヶ原で写生をしながら待っているという。

縦走の詳細は田部の著書（注1）によるとして、当時の登山の携行品がどのようなものであったかを抜粋すると、田部は縦走に必要な荷物を一人3貫目（11・25kg）以内にしようと考える。そこで「片桐」と相談し、テントの支柱を杖代わりにすると本体は700匁（2・62kg）にできる、というので注文する。米は5日と予備3日分で3升（5・4ℓ）、1日当たり4合（1食に茶碗3～4杯ほどか）、副食は味噌、わかめ、削った鰹節、奈良漬け、それに氷砂糖にウィスキー。この時代はコンロやコッフェルなどは普及していなかったから飯盒、草鞋6足、毛布などで、水筒は持っていない。著書を読み進むと、この縦走で荷物はとても3貫目では済まなかったように思える。

7月31日に東京を出発した。当時の中央線は飯田町始発で、木暮は始発駅から、新宿から乗る田部は、リュックに入りきれない草鞋や飯盒を腰の周りにくっつけた珍妙な姿で列車を待つ。11時半に列車が到着、窓から乗り出す木暮のリュックは蝦蟇（がま）のように膨らんでいた――と田部は書いている。列車は八ヶ岳山麓を走るころに夜が明け、松本に着いたのは10時過ぎであったというから、実に10～11時間

木暮理太郎（右）と田部重治　茨木猪之吉画　田部重治著『日本アルプスと秩父順禮』より

も乗っていたことになる。

松本から5里の島々へは馬車。8月1日は島々の清水屋に泊まり、翌2日夕刻に徳本峠を越えて上高地に入った。河童橋を渡ったところで茨木猪之吉に会い、道連れとなって大荷物を担いだ姿をスケッチされる。田部の著書では松本で着茣蓙を求めたとあるので、実際はこの姿の上から茣蓙を着ていたと思われるが、それでは絵にならない。この姿だからこそ、明治～大正初期の登山姿の代表として、この絵が山の本や雑誌でたびたび使われるようになったのであろう。

このとき木暮は数えで40歳、田部は29歳、3年前に田部きよと結婚、年譜では田部家の養子となったとされている。この絵には田部の詰襟、木暮の肌脱ぎの着物が描かれている。その着物は、『山の憶ひ出』の特装本に使われた小千谷縮の上布ではないか――。また、茨木のスケッチの添え書きでは「小暮 南日両君の登山振り」とあり、田部は3年前に山岳会入会時の旧姓（南日・会員番号２４３番）で呼ばれているが、木暮はこのときまだ山岳会に入っていない（注2）。名前を聞いただけの茨木が間違えたのであろう。

翌3日早朝に木暮、田部は槍ヶ岳に向かって出発する。槍ヶ岳への道は、牧場と牛小屋のあった明神～徳沢の中間までは細い道はあったであろうが、その先はかすかな踏み跡をたどりながら渡渉を繰り返すことになる。槍ヶ岳へは田部が1年前、大正になったばかりの8月に作太郎の案内で登っただけである。荷物が重いので、後から出発した案内人を連れた茨木一行に横尾で追い抜かれる。そして、二ノ俣の出合で釣竿を担いだ嘉門次のご隠居に会う（注3）。

その晩は坊主の岩小屋泊まり。4人が定員の小屋に8人、人夫2人は外で寝たので、6人がぎゅうぎゅう詰めで寝た。そして翌日、茨木一行は上高地へ、木暮・田部は中村清太郎が待つ五色ヶ原に向けて出発する。槍の肩で荷物を整理していると早朝、赤沢の岩小屋を発ってきた（大木操ら）一高の学生が登ってきた――と田部は「槍ヶ岳より日本海まで」で書いている。

田部は荷物が重いので徳本峠の登りで膝を痛め、西鎌尾根の下りで苦労して、4日は双六池泊まりとなった。翌5日、双六の頂上で近藤茂吉の「鷲羽乗越で待つ、中村からの伝言もある」との書置きを見つけるが、日程が詰まっているため、お互いに呼び交しただけで別れる。近藤は7日に槍からの下山途中、ウェストン夫妻一行と会った。そして、坊主の岩小屋に雪が残っていることを伝えられ、夫妻は赤沢岩小屋に泊まった、と「ウェストン年譜」（注4）は

述べている。近藤の7日以降の日程は文献が見つからず、分からない。5日に鷲羽乗越にいた近藤が、7日に槍ヶ岳から下山してくるというのは日程的には合っているが、4日前に木暮、田部、茨木ら6人が坊主の岩小屋に泊まっているのと関係が合わない。その後、風で残雪が吹き込んだのであろうか。

双六岳を出発した木暮、田部は、黒部源流の山々を頼もしい木暮の活躍で乗り切り、薬師を越えて、五色ヶ原で無事に案内人の佐伯春蔵と一緒に待っていた中村清太郎と合流する。さらに立山温泉を経て、宇治長次郎の活躍で別山尾根から剱岳に登り（別山尾根からの初登頂）、大雨の早月川を下って日本海までの縦走に成功した。

（注1）＝田部重治著『日本アルプスと秩父順禮』および『山と溪谷』の「槍ヶ岳より日本海まで」を参照。

木暮理太郎　茨木猪之吉画　『ケルン』第53号より

田部重治　茨木猪之吉画　『ケルン』第56号より

（注２）＝木暮理太郎はこの旅の後、９月に山岳会に入会（会員番号３１９番）、２年後の１９１５（大正４）年に小島烏水が正金銀行からアメリカ勤務を命ぜられて山岳会を離れた後、それまでの山岳会における烏水の存在を引き継ぐように、山岳会の重鎮となっていく。山岳会は最良の後継者に恵まれたのである。

（注３）＝田部が嘉門次を「ご隠居」と呼んだわけは、ほとんど案内人稼業を引退していたからである。当時の案内人の給金は１日１円前後だが、嘉門次は岩魚を獲って１日２円50銭を稼いでいたといわれ、経済的にも恵まれていた。

（注４）＝『山岳』第82年（１９８７年）～第85年（１９９０年）の「ウェストン年譜」（川村宏・三井嘉雄・安江安宣共著）による。

ウェストン夫妻の槍ヶ岳、奥穂高岳登頂

年譜によれば、ウェストン夫妻は妙義山の猟師・根本清蔵を伴って８月４日に横浜を出発、６日に徳本峠を越えて上高地温泉に宿泊、翌７日に槍沢（赤沢岩小屋）泊まりで槍ヶ岳に登った。ウェストンは、初期の日本アルプス登山では木の折り畳みベッドを持参していたが、この登山ではベッドはやめて、岩小屋には布団２枚を敷いて寝たという。翌８日に坊主の岩小屋―殺生―東鎌尾根―天上沢源流―槍ヶ岳登頂（夫人は女性の初登頂、第２登は内藤千代）、さらに夫妻は焼岳、奥穂高岳（女性の初登頂）、霞沢岳などに登り、上高地には８月31日まで滞在して、９月１日に明科経由で四ッ谷（現・白馬村）に泊まり、２日に白馬岳に登頂、４日に四ッ谷経由で明科に泊まり、５日に軽井沢に到着、夏季休暇を楽しんだ。

夫妻が上高地に着いた６日は、あいにく温泉には50人以上が泊まっていて満員であったが、宿は夫妻のために２階の上等の部屋を空けてもてなした。そして、たまたま同宿していた神戸一中の辻荘一、神田禎次郎、山崎武二の３人が７日の早朝、前日の前穂高岳登頂の興奮もあって、早朝５時前から起きてはしゃいでいたところ、奥の部屋からウェストンに「朝早くから騒いでくれるな、夫人が寝られないで困る」と苦情を言われた（会報37号）。

さらに、８月９日からウェストン夫妻の隣室に泊まっていた窪田空穂（くぼたうつぼ）、谷江風の部屋に、旧知の茨木猪之吉、高村光太郎、真山孝治が毎夕のように訪れ歓談していた。11日に「夫人が寝ているから静かにしてくれ」と注意され、「まだ宵の口ではないか、毛唐というのは」と息巻く者もいたが、ウェストンと交際のあった茨木と高村が、彼の日本の

山への功績を説き、一同が納得する一幕もあった。窪田は著書『日本アルプス縦走記』で「夫人は明神の嘉門次小屋を尋ねたとき、梓川（当時は明神橋はなかった）を徒渉して風邪をひいたのだ」と述べている。槍ヶ岳登山では行き帰りに十数回も徒渉を繰り返し、11日の嘉門次小屋訪問が決定打となって風邪をひいたのであろう。

「ウェストン年譜」によると、夫妻は小屋から帰る途中で激しい雨に遭った、とされており、その影響もあったのであろうか……。清水屋に帰ってしばらくすると、東京高等師範附属中学の生徒30人が槍ヶ岳から到着して、同行の先生がウェストンに「日本アルプスについて話をして欲しい」と頼みに来た。ウェストンは翌12日に田代池への散歩の後、午後から附属中学の生徒に話をしている。

そして、茨木は注意された翌日の12日朝にウェストンを訪ねて絵を見せ、後に水彩画2枚を贈呈している。また、同じ日に信州山岳研究会の河野齢蔵らも訪問している。

ウェストンとアンデレ教会

いま山岳会では、ウェストンへの批判はタブーに近い。しかし、大正8年に発行された『山岳』第13号3巻に発起人の梅沢親光が「ウェストンの地蔵岳オベリスクの登攀は、およそ地元で尊崇している地蔵尊を土足で踏み、初登頂と自慢するのは神社で尿（いばり）するような信じがたいことだ」と厳しい言葉で批判している。第2次マナスル登山隊に対するサマの人たちの妨害とは違う話である。梅沢は霊峰富士、木曽の御嶽、白山の外国人の登頂は非難していない。

ウェストンは東北の飢饉に際して率先して募金活動を行ない、日本人への布教のために横浜寿町に設立されていたセント・アンドリュウス教会にも通って、布教活動をしている。松方三郎によれば、イギリスに帰国後も１９３２（昭和７）年の満州事変では、一生懸命に日本の弁護をしてくれた。日中戦争のときには、国分勘兵衛宛に「中国人は外交活動が上手だから気をつけろ」と手紙を寄せている（会報３６９号）。１９４０（昭和15）年に亡くなるまで、日本の行く末を心配していたのである。

寿町の教会は第2次大戦の空襲で焼失し、戦後、三ツ沢の地に再建された。三ツ沢の地元ではアンデレ教会と呼ばれているが、１９８８（昭和63）年にウェストン来日１００周年を記念する行事を山岳会と教会の共催で開くことになり、アンデレ教会が私の住む三ツ沢に建てられていた縁で、開催の準備を命ぜられた。その準備のために英国国教

会牧師の荻野師と会った折、山岳会の高い評価と違って、当時の教会ではウェストンの評価は低かった、という話を聞いた。そして「ウェストンが寿町の教会でお説教をしているとき、表で豆腐屋のラッパの音が聞こえた。ウェストンは説教を中断して教会から飛び出し、〝うるさい〟と怒鳴った。信者は呆れて皆出て行ってしまった」というエピソードも聞いた。そのような話はともかく、3月21日にアンデレ教会で開かれた「来日１００周年記念祭」は、山岳会会員はもちろん、教会側からも信者が多数出席して盛会であった（会報５１８号）。

河童橋のウェストン夫妻と嘉門次、清蔵の写真

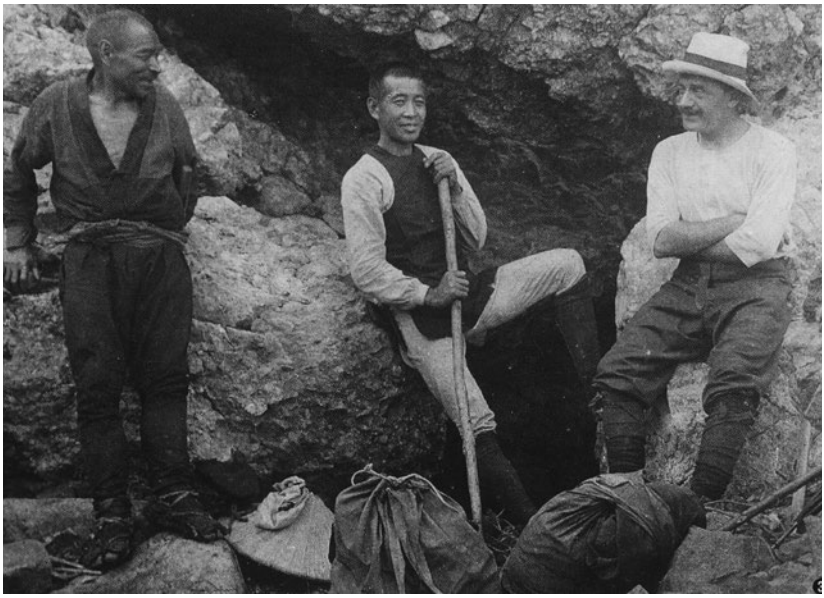
上高地の話に戻る。4日に槍ヶ岳から下りてきた一高生7人と丸山先生の一行は温泉に滞在して、6日には大木、木内、松本、山口の4人が前穂高岳に登り、その夜に解散式を兼ねてコンパを開いていたところ、ウェストンに注意された、と書いた本もある。大木操は「覚えがない」と著者の佐藤貢に根拠を尋ねたところ、はっきりした答えは得られなかった。それでも大木は「ユーモラスな事件として頂いておく」（『一高旅行部のあしあと』、会報３９８号）と述べているが、私は、この話はなかったと思っている。

大木操は7日朝、散歩していて河童橋で槍ヶ岳に向かうウェストン夫妻、嘉門次、根本清蔵に会い、のちに有名になった写真を撮る。この写真は、大木操が多くの「貴重な写真（ガラス乾板）」を土産に山岳会会員に復帰したときの1枚で、ウェストンは鋲靴の上に草鞋を履き、ピッケルを立てて穂高を眺めている。エミリー夫人は麻底布製の靴、スカートの下にズボンを履いている。清蔵はピクニック用のバスケットを背負って橋桁に腰掛け、嘉門次が大きな荷物を背負って後ろに立っている。

ウェストンが著書で、山に同行した多くの案内人のなかで名前を書いているのは、嘉門次と清蔵の二人だけである。それだけ二人を高く評価していたのは間違いないとしても、ウェストンと彼らの関係は、木暮や田部と宇治長次郎、あるいは槇有恒とブラバンドの関係とは微妙なところで違うように思える。イギリス人と日本人の山案内人への付き合い方の差とでもいおうか、日本人でも、近藤茂吉の剱岳登頂時における長次郎、平蔵との関係は、木暮、田部よりウェストンに近いようにも思われる。外国に滞在した経験によるものであろうか。

批判というほどではないが、小島烏水、岡野金次郎、木暮理太郎生誕１００年を記念して、昭和48年12月に日本

大正２年８月７日、河童橋上のウェストン一行。左からエミリー夫人、ウェストン、上條嘉門次、根本清蔵　撮影＝大木　操



槍ヶ岳登山の記念写真。左から上條嘉門次、根本清蔵、ウェストン　上條輝夫氏藏

橋・丸善で開かれた「近代登山の先駆者たち」展覧会の目録で、色川大吉が「日本文化と山の歴史」と題して書き、「日本の登山史は、ガウランドやウェストンら西洋人によって開かれたのではない。木暮理太郎は幼少のころから御岳講の人たちの活発な登山を見聞して知っていたはずである。ウェストンは立派な人であったらしいが、外国人だけを顕彰し、信仰登山や生業としての山登り、伝統的登山をすべて価値低いものとする登山家は好かない」と述べているが、私もウェストンの顕彰は上高地だけでよいと思っている。

上条嘉門次と根本清蔵

明治、大正時代の北アルプスにおける案内人の双璧は嘉門次と長次郎で、2人に続くのが平蔵、喜作であろう。長次郎は木暮、田部、冠松次郎に愛され、平蔵は近藤茂吉に、喜作は孤高の画家・吉田博に重用された（注5）。

嘉門次はウェストンに重用されたほか、早期の山岳会員から敬意をもって遇されていたように思われる。山岳会員ではないが、小島烏水の文筆仲間の窪田空穂の著書『日本アルプス縦走記』の中に、「明神の小屋は山岳会の会員が建てた」という記述がある。その事実はなかったであろうが、当時そのような噂があったとすれば、それも嘉門次と山岳会員の親密さを示すものであろう。

なんで読んだか記憶は定かではないが、田部の『山と溪谷』のペーパーバック版の中にあったように思うが、空襲で焼けて手元にない。嘉門次の健脚ぶりを示す例として「有峰に用ができて、明神の小屋を出て有峰で用を済まし、その日のうちに明神の小屋に帰ってきた」という。24時間で往復したとしても、信じられないような話である。また、山の中で霧にまかれたら岩に腰を降ろし、煙管をくわえたまま霧が晴れるまで何時間でも動かない、という記述もある。ともかく、案内人として客から信頼される風格を持っていた。

大正2年夏の嘉門次が関係する記述では、8月3日に槍ヶ岳に向かう木暮、田部と二ノ俣の落合で出会い、5日に神戸一中の辻荘一ら3人は岩魚留の小屋で、笑顔の嘉門次に会って穂高の話を聞いて、「明神の小屋にある釣竿を使って良い」と言われ「上高地に来る人でお前さんたちが一等若い」とおだてられた。そして、嘉門次は島々へ、辻らは徳本峠に向かった。嘉門次は、5日に島々に来るウェストン夫妻を息子の嘉代吉と迎えるために、島々に下りてきたのであろう。

余談だが、高野鷹蔵が会報11号に嘉門次老の思い出として「上高地の白樺が切られたことがあって、嘉門次に大変だ、と訴えたら、六十年もすれば元通りになる、と平然としていた」と、また「岩魚を分けてもらおうとしたら、秤がないから駄目だ、という。目分量でいいからと言っても駄目だと分けてもらえなかった」と書いている。

また「東京って広い所だと聞くが、上高地で会う衆は、どうしてみんな知り人なんだろう?」と語ったという。彼の独特な思考を示す話である。

根本清蔵をウェストンは「妙義山で彼の岩登りの技量に感心した」と書いているが、ウェストンが清蔵を気に入っている理由を窺わせるエピソードを、松方三郎が書いている。築地書館が発刊したエッセー集の『アルプスと人』の「登山家の横顔　二―ウェストン翁について」の中の根本正三（原文のまま）の逸話。

「何か猟場のことで過ちがあって田舎にいられなくなったから、と横浜の家を訪ねてきて、そのまま居ついた。そして夏の暑い日、ウェストンは講演をやることになった。すると根本は黙ってついてきて会場の入口のわきで、小さくかしこまっていた。冷房などない時代だからウェストンはハンカチで額の汗を拭いた。すると隅にかしこまっていた根本は四つん這いになって中央の通路を演台のほうに向かってくる。聴衆はウェストンを見ているから彼は見えない。演台の下まで来た根本はウェストンの足下に座って懐から扇子をだし、煽いだのである」と。ウェストンは帰国するとき、「軽井沢の別荘を差し上げる」と申し出たが、清蔵は「別荘など持つ人間ではない」と何度も断った、という話もある（小林二三雄著『登山家Wウェストンと清蔵』による）。

（注5）＝高野鷹蔵は会報11号で、上高地の嘉門次、黒部に品右衛門、有明の類蔵の三長老のみが日本アルプスで他の追従を許さず、と言っている。

大木操と辻荘一の前穂高岳

大木操ら一高生7人と丸山先生の一行は、大正2年の夏に燕から槍―上高地へ、案内人・類蔵ほか人夫とともに縦走している。喜作新道はなかったから、大天井（おてんしょう）から赤沢山の裾を回って槍沢の末端にある赤沢岩小屋に泊まって、8月3日に雪渓を登り、槍ヶ岳に登頂した。雪渓を登る途中で槍から下りてくる茨木猪之吉の一行4人に会い、「頂上に着いたら北のほうを眺めなさい。実に神秘的です」と言われる。

上高地温泉に泊まった一行は5日に焼岳に登り、さらに6日は大木操、木内政蔵、松本唯一、山口成一の4人が作太郎の案内で岳沢から前穂高岳に登っている。当時は重太郎新道がなかったから、いまの新道より西側を登った、と大木は書いている。この前穂高岳登山には、一緒に神戸一中の辻荘一ら3人、茨木猪之吉らも登り、総勢13人の集団登山であった。

大木は燕～槍、前穂高岳の登山で当時の高級写真機、木製の蛇腹付き組立暗箱、同じ木製の三脚、木枠付きのガラスの乾板を持って登っている。乾板は20～30枚を持っていったと思われるので、写真機と機材だけで人夫1人が必要であったであろう。

この写真機は現代でいえば、リンホフ・テヒニカを持つほどの高価なものであったと考えている。おかげで8月6日の前穂高岳頂上での登頂者の群像、7日の河童橋でのウェストン夫妻らの肖像など、のちに数多くの貴重な写真が登山史の史料として残った（注6）。

2年後の大正4年に、大木らが中心となって一高旅行部が発足した。大木はその後、政界に入って衆議院書記官長、東京都副知事を経て貴族員議員になるが、忙しくなって山岳会を退会する。しかし、１９７６（昭和51）年2月にガラス乾板をお土産に会員（番号３１５番）に復活する。そして、前穂高岳頂上における12人の群像写真を見た辻荘一は、64年ぶりに大木操と劇的な再会を果たすことになるのである（会報３９４号「六十四年目の名のりあい」辻荘一）。

そして大木は、前穂高岳の写真の一高生4人、神戸一中の3人以外は誰かを調べ始める。最初に注目したのが、辻荘一が会報37号に書いた「ウェストンと嘉門次老との思い出」であった。その中に「神河内の温泉に着いたのが谷のひともし頃であった。あしたは穂高へというわけで早寝をして翌朝五時ごろに支度して勢揃いする。一行は一高二部の学生三人（原文ママ）と連中が『海軍』と名づけたやせぎすの、鋲靴をはき太短いストックを突き、リュックを背負って麻服を来た仁も一緒であった。その『海軍』が高い処へ来ると奇妙な声をあげるのに呆れたりして、前穂高に登り、宿に帰ったのが五時頃であった」という記事であった。その辻ら3人は翌7日、田代池、明神池で遊んだ帰りに、徳本下の牛小屋付近で、西洋人が嘉門次を連れてやってくるのに出会う。嘉門次に挨拶すると、自然に西洋人夫妻と旅行の計画を片言の英語で話すことになった。そして「私はウェストンです。東京へ来たら山岳会に入りなさい」と言われる。

大正２年８月６日、前穂高岳山頂での記念写真。後列左から鹿子木員信、茨木猪之吉、木内政蔵、案内人・作太郎、高村光太郎？、辻荘一。前列左から新田義雄？、眞山孝冶？、山口成一、松本唯一、山崎武二、神田禎次郎　撮影＝大木　操

大正２年夏の上高地温泉清水屋の全景　撮影＝大木　操

辻は、人を覚えるのが苦手であてにならないと言いながら「海軍」は田部重治ではと書いて、田部から「私は山で奇声は上げない」と言われる。田部は6日には木暮と双六を越えて黒部源流の山辺りを歩いていたので、もちろん違う（注7）。

（注6）＝大木が山岳会に寄贈した多くのガラス乾板を保管することがきっかけとなって、西堀会長の時代に中村純二理事（当時）が担当して資料委員会が発足した。

（注7）＝奇声の主は当時、海軍機関学校教官だった鹿子木員信（かのこぎかずのぶ）である。

穂高に鹿子木員信のヨーデルが響く

一高生に「海軍」と呼ばれていた鹿子木員信は、明治44年8月から9月にかけてのスイス・アルプス高原探訪から帰国している（著書『アルペン行』）。高原で牧童たちが、裏声でヨーデルを唄うのをしばしば耳にしたであろう。辻荘一が奇声と思ったのは、ヨーデルの裏声であろう。穂高の岳沢に大正2年8月6日、初めてヨーデルが響き渡ったのである。

鹿子木が前穂高岳に登ったことを知ったのは、『登高行』第15号に載った彼の遺稿を読んでいたからである。「前穂高登頂の前後の行動」を要約する。「大正二年春、足掛け七年の米独の留学から帰朝して、その夏に横須賀海軍機関学校から日露戦争を通じて親友だった新田義雄を誘って日本アルプスを目指した。松本駅に着くと馬車は出た後で、島々まで歩き、一休みしてその日のうちに徳本峠を越えて清水屋に泊まる。翌日に穂高に登り、次の日は焼岳、次の日に安房峠を越えて飛騨の平湯、その翌日は乗鞍に登って、高山を経由し帰京。その翌年の春に慶応義塾大学の哲学教授に就任した」

そして「目黒・三田の茅屋に二人の学生、槇有恒、内田節二両君が訪ねてきて山談義をした。それからもほかの山好きの学生を巻き込んで大正四年五月に慶応義塾山岳会が発足することになった」と述べている。

いままでのところ、前穂高岳の頂上に立った13人のうち10人まで分かっていたが、この物語を書くために、鹿子木の遺稿を読み返して、見逃がしていた新田義雄も一緒に登っていたことが分かった。これで11人となった。おそらく前列の左端の人物が新田義雄であろう。

茨木猪之吉と高村光太郎

茨木猪之吉が大正2年8月6日付けで上高地温泉清水屋

から横浜の山手に住む亀谷得太郎（山岳会会員番号１３９番）宛に出した自筆絵葉書には、その日に前穂高岳に登った記述がないから、その前に投函されたものであろう。

文面の中に「高村光太郎氏も居ます」とある。高村も茨木と一緒に前穂高岳に登った可能性が出てきたのである。それまで大木は「高村は白骨から8日に上高地に入ったのだから、彼の前穂高岳登頂はない」という見解を示していた。しかし、以前から高村も前穂高岳に登っていて、群像写真の後列左から2人目が高村だ、と言う人はいたのである。これで高村と茨木も一緒に登っていた可能性が出て、不明者は1人だけになった。さらに茨木、高村と同宿していた画家・真山孝治も前穂高岳に登っているとすれば、13人の名前がすべて判明し解決となるのだが、もう当事者はすべていなくなった。いまとなっては永遠の謎である。

茨木は8月20日ごろに帰京しているが、高村は上高地がよほど気に入ったようで、さらに9月も清水屋に居続ける。そして東京から恋人、青踏社の長沼智恵子が待ちきれなくて、上高地まで会いに来るというので、岩魚留まで迎えに行き、二人で徳本峠を越えて上高地で画を描きながら過ごし、翌年に結婚する。

窪田空穂の槍ヶ岳登山

万葉集の研究者・窪田空穂は山岳会員ではないが、小島烏水とは文筆仲間であった。生家は松本郊外の和田村だったので、１９０２（明治35）年の小島、岡野の槍ヶ岳登山を前に、上高地への道を尋ねられる。窪田の著書『日本アルプス縦走記』の序文に「島々までの行き方を教えた」と書いている。

しかし、窪田も島々から先の道は知らなかったのであろう。小島、岡野が島々で村人に聞いても、上高地への道は分からない。白骨温泉でも分からず、ようやく霞沢岳を越えて上高地に入った。ウェストンの初めての槍ヶ岳登山は、ガウランドらが作成したガイドブックがあったから、小島と岡野より恵まれていた。

窪田の著書『日本アルプス縦走記』の槍ヶ岳登山の記述は、ユニークである。大正2年8月、窪田は詩人・谷江風と上高地～槍ヶ岳へ登るため和田村の生家で待ったが、谷は都合で遅れるというので、隣村に住む岳父の、酒造業を営む亀井泰一郎と二人で出かける。8日午後に出発、島々泊まりである。

翌9日に岩魚留小屋で「一ヶ月以上も山にこもっていて十六の山を登った」という若者に会って「支那はどうなっ

ています」と聞かれる。孫文の辛亥革命が起きてから2年目に入ったが、まだ革命のゴタゴタが続いていた時代だった。そして、若者から茨木猪之吉が描いた絵葉書5～6枚を見せられ「ご存じですか、あの髭達磨――」「ええ、ちょっと」というやり取りを交わす。茨木が窪田ら二人に共通の知人であったとすると、若者は近藤茂吉では、となると話はでき過ぎであろうか。若者の話は続く「一ヶ月もこもっていると、しまいに都が恋しくて、東京へ帰ったら、先ず天ぷらを食べて、帝劇を見て――」と他愛のない会話の後「人夫に会ったら、ここで待っていると伝えて下さい」と頼まれて、窪田らは徳本峠を越えて温泉へ向かった。

窪田が、峠を下って明神が近い所で岳父の亀井に「嘉門次が上高地の中心でない明神に小屋を建てたのは、なぜだろう」と聞くと「岩魚が一番獲れる所に建てたのだろう」と即答しているのが、ちょっと面白い。

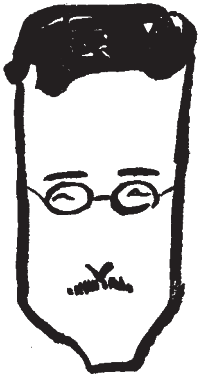
温泉は、郷土の名士である窪田をウェストン夫妻の隣、2階の上等の部屋に案内する。翌日は茨木、高村らと上高地を散歩、谷江風も合流して、いよいよ槍ヶ岳に登ることになる。

朝、見知らぬ二人が「ご一緒願います」と言う。当時の案内には普通に行なわれていたことなのであろう。案内人は作太郎。徒渉を数回繰り返したところで、詰襟を着た人が「七回徒渉すると聞いている。六回渡ったから、もう直ぐか」と作太郎に聞くと「踝までの浅瀬は数に入らない。まだ半分とちょっとだ」と答える一幕もあった。結局、槍沢の雪渓までに大小12回も徒渉を繰り返すことになる。

坊主の岩小屋に泊まる。小屋の周りは空き缶、紙屑などで大変に汚かった、と窪田は述べている。作太郎は小屋の後ろの隠し場所から鍋と味噌を持ってきながら、鍋を1つと味噌も盗まれている、とぼやきながら鍋の中へ高野豆腐を小さく砕いて入れ、味噌汁を作る。窪田が持参した鰹節をナイフで厚く削り、汁の中に投げ入れる。各自でき上がった味噌汁を飯にかけて「うまいうまい」と言いながらかっ込む。翌日、槍の肩で盗まれた鍋をぶら下げた数人の中学生に会う。作太郎は「小屋に返しておけ」と注意するだけで済ましたようだ。念のために付け加えると、辻ら神戸一中の生徒は案内人を雇っており、彼らは違う中学生である。

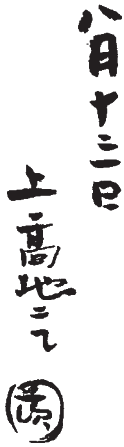
大正2年の夏の上高地には、木暮、田部、茨木という山岳会第一世代の人々とウェストン夫妻のほか、慶応義塾山岳会創設に関わった鹿子木員信、一高旅行部を創設した大木操、立教大学山岳部の創設に関わった辻荘一らが偶然の

茨木猪之吉



窪田空穂

谷紀三郎（江風）



眞山孝次

高村光太郎

窪田空穂と同室で、ウェストンに注意された５人。茨木猪之吉画　窪田空穂著『日本アルプス縦走記』より

ように居合わせ、大正に数多く誕生した大学山岳部設立の発芽を表徴する出会いがあった。また、多くの中学生が徳本峠を越えて上高地に入り、槍ヶ岳や前穂高岳に登山するということもあり、大正2年は、北アルプスの「探検時代が終わり、冒険時代に入った年」として記憶されよう。

おわりに

会報に「茨木猪之吉の肉筆絵葉書発見」を載せてもらったところ、中村純二兄から『山岳』掲載への期待と、大木操は東大山の会とは無関係との指摘があり、『一高旅行部のあしあと』から「槍ヶ岳、前穂高岳登山関係」のコピーを贈られた。そして、前穂高岳頂上の木内政蔵は光学の大家で、東京帝大物理の主任教授、そして松本唯一は松本蓯夫のお父上、と教えられた。また、静岡の長田義則兄からは窪田空穂、茨木猪之吉に関する膨大な資料と、１９６７（昭和42）年の山岳会の向井ビル移転記念、茨木の「鳥海山の絵葉書」をお送りいただいた。また、横山厚夫、古市進、南川金一、松本恒廣、児玉茂、早川瑠璃子の諸兄姉から示唆に富むご教示と『山岳』投稿への期待と激励をいただき、お陰でちょうど満88歳の誕生日に、本稿を書き上げることができた。誌面を借りてお礼を申し上げる。

武田久吉の書簡をめぐって

――吉澤庄作との交流――

湯口康雄

理学博士で、日本山岳会創立発起人の一人でもある武田久吉（明治16・1883～昭和47・1972年）の名をご存じの会員は少なくはなかろう。『尾瀬と鬼怒沼』（昭和5・1930年、梓書房）や『登山と高山植物』（昭和45・1970年、日本文芸社）等々の著者として、さらには、第6回秩父宮記念学術賞（「多年にわたる高山植物の生態に関する研究」に対する授賞、昭和45・1970年）の受賞者としてもつとに知名である。

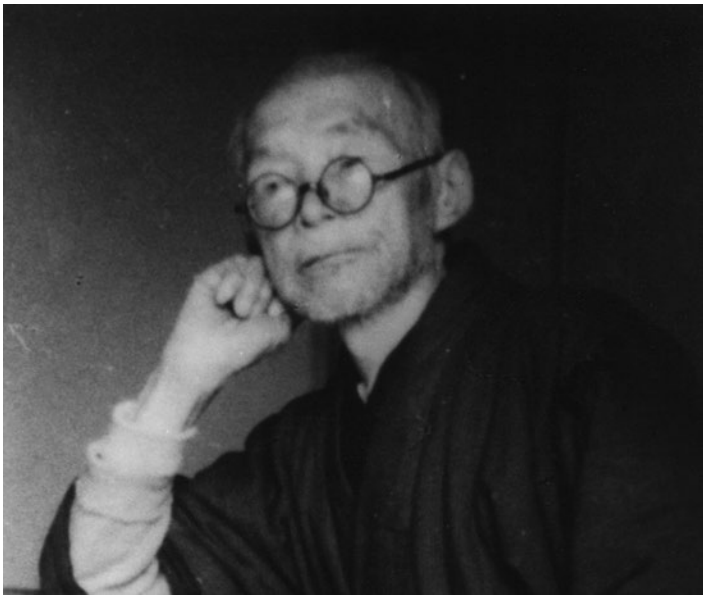
ついでながら、『山岳』第67年（昭和47・1972年）には、追悼文とともに氏の略年譜および著作目録が掲載されている。また、萩原延壽の『遠い崖――アーネスト・サトウ日記抄』1（昭和55・1980年、朝日新聞社）は、生い立ちについてのまたとない資料である。

私の手許には、氏の書簡が2通ある。いずれも吉澤庄作（明治5・1872～昭和31・1956年）宛。

吉澤は、富山県下新川郡大布施（おおふせ）村（現・黒部市）の人。初期の日本山岳会会員で、明治40（1907）年8月、祖母谷から白馬岳、大正2（1913）年8月、小黒部谷から劔岳、大正3（1914）年8月、祖母谷支流・硫黄沢から白馬鑓ヶ岳など、黎明期の黒部の山と谷に多くの足跡を残した。

『山岳』には「僧ヶ岳登攀記」（第7年第1號　明治45年）、「黒部方面より劍岳を經て立山に至る記」（第9年第1號　大正3年）、「鑓ヶ岳大黒縦走記」（第9年第3號　大正4

年）、「黒部川上流地方奥山廻り舊記録」（第24年第1號　昭和4年）などの寄稿がある。著書に『立山』（大正10・1925年、北陸出版社）などがある。



晩年の吉澤庄作。昭和30（1955）年撮影

拝復　小生二月以来胃腸を害し、吐血さへ致し、永らく病臥致居り候も、昨年は八―九分通り快方に向ひ目下静養中にて、山行もその他の仕事も皆断念摂養に努め居り候。御送附の植物はシナノナデシコ、一名ミヤマナデシコと異らず、小苞は信州や甲州産のものでは大體短く候も、御送品にても短きものあり、又、花数など一向一定するものでなく、別種とは断じて認め難く候。

小園栽培のミヤマナデシコ（信州鹿教温泉附近原産）は本年は不出来にて、且つ、最早末となり候も、花序の一小節を同封御目にかけ候。

近来矢鱈に新種製造流行にて、苦々しきこと多く候。センニンナデシコの如き、変種とする價値も無き候。

先は取急ぎ用件のみ　　不一

六月十九日　　武田久吉

吉澤君

梧右

○　ミヤマナデシコは筑摩山脈の一部、白馬山東麓、甲斐小武川沿岸、東駒東麓、湯島温泉あたりが分布区域に候。大體低地産のものに候。センニンヤ

マあたりは最高地にて、発育も悪し事と存じ候。
（原文のまま。ただし、句読点の一部は筆者）

「近来矢鱈に新種製造流行にて、苦々しきこと多く」うんぬんとある中の一種「センニンナデシコ」のことだが、新種として出てくるのが『黒部立山天然紀念物調査報告』（昭和9・1934年、文部省）。昭和5（1930）年8月に行なった実地踏査をまとめたものである。

この内「黒部立山地方の植生」の章は竹中要の署名記事で、その「新植物並に分布上注意すべき植物」なる項に、8種の植物を挙げている。訳ありの代物「センニンナデシコ（Dianthus Takenakae, Honda）」はその最初に出ている。解説に曰く、

「シナノナデシコ（一名ミヤマナデシコ）に似たる新種にて、花は莖頭に僅か二、三個の聚繖花序をなして着き、小苞は毛縁をなさずして蕚筒と同長なるか、又はこれよりも長し。越中國仙人山附近にて余の採集せるものにつき本田正次氏命名」

図版には標本の写真も掲載してある。ちなみに竹中、本田両氏は理学博士。

ところで「麹町・一〇・六・二〇」というのが、この書簡の消印。上から順に、局名と受付年月日を表す。しかしこれだけでは、この「一〇」の年号が大正なのか昭和なのか判然としない。書簡の末尾にある執筆月日からも割り出せない。だが、先に引いた『黒部立山天然紀念物調査報告』の記事から、たぶん昭和、との推察は可能だと思うが……。

わずかに手懸かりになりそうなのが、書中の「二月以来胃腸を害し、吐血さへ致し」うんぬんの一節。『高山植物圖彙』増訂第2版（武田久吉、昭和12・1937年8月5日、養賢堂）の巻頭に、「不幸重患に斃れ、為に荏苒今日に及んだ」という、改版が遅延した理由を述べた箇所があるからである。「荏苒」は「じんぜん」と読み、長引くというくらいの意だが、もしこれが先に引いた一節を指すのであれば、昭和と断じることができるのである。ここではしかし、これ以上の詮索はしない。

申し遅れたが、かつて吉澤は、旧制富山県立魚津中学校で博物学を教授していた。『いろは川――黒部四十八ヶ瀬五十年のあゆみ――』（昭和62・1987年、北陸建設弘済会）によれば「教え子たちから『ブツ』とあだ名されたことからもわかるように、植物、動物、鉱物など、『物（ブツ）』のつくものに通じていた」という。それかあらぬか、私の手許にすら氏宛の黒田長禮（鳥類学者）や岡田武松（気象

学者）の書簡がある。

吉澤が同定を依頼した植物は、文面からして、劔岳北方の仙人山（２２０２ｍ）周辺で採集したものであろう。吉澤は、この界隈へは幾度となく出かけていた。既述の昭和5年8月の調査にも少なからず関わっていた。のみならず、坊主小屋――小黒部峠から池ノ平に至る、いわゆる坊主尾根にあった。昭和６（１９３１）年完成――の建築にも奔走している。

それはともかく、当時流行の「新種製造」を、武田がいかに憂慮し、慨嘆していたかが如実に分かる書簡ではある。忿懣やる方ない思いが吐露されている。門外漢の私にはとんと分からぬが、「矢鱈」とあるから、かなり安直な同定も行なわれていたのであろう。

それで思い出したのだが、戸沢英一執筆の追悼文（『山岳』第67年）に、「武田さんの同定は慎重であったらしい……学者として当然ではあるが。」という叙述がある。以下はこの続きの要約だが、あるときさる御仁が、矮小のスミレを持参して「これはなんですか」と伺いを立てたところ、「花の咲くまで預かろう」と言われたという。武田を知る好個の逸話の一つであろう。

吉澤の私信の内容は知る由もないが、武田の慎重さからして、ナデシコの同定をめぐって、何か逆鱗に触れるような箇所があったのかもしれぬ。それにしても、である。「センニンナデシコの如き、変種とする價値も無き候」などとする咎め立ては辛辣。しかも、語調は舌端が火を吐いたかのように激しい。他人ごとだから、あまりの正直さに、失礼ながら思わず破顔しそうになるが、難じられた当人はあわてたであろう。

これはしかし、どちらかといえば皮相的な見方であって、実のところは、歯に衣など着せずに物が言い合える親昵の間柄だったのではないか、と推察する方が、あるいは当たっているかもしれぬ。

武田久吉の書簡に同封してあったミヤマナデシコの花序

いずれにしろ武田は、書くだけ書いて恬然としてはいない。○印以降、追伸にあたるところで、痛言を緩和している。「大軆低地産のものに候。センニンヤマあたりは最高地にて、発育も悪し事と存じ候」と縷説するくだりなど、細やかな気配

りが紙背に感じられる。吉澤にしても、充分得心のいく返信であったと愚考する。

その上、親切にもミヤマナデシコの花序の一小節（5cm×8cm、写真参照）を添えている。届いたときはまだ生々しかったと思われるが、吉澤はその形を整え、押し花として後生大事に保存していた。70年近くを経た今日でも、なお標本としての価値が残存しているのを見ても、吉澤の武田に対する気持ちが分かろうというものである。

拝啓

残暑酷しく候折柄、高堂益々御清適の段大賀此事に存じ候。扨、客月中黒部、白馬の旅行の件並びにミヤマミミナグサに関し、再々御尊書を頂き有難く存じ候。小生、七月は初旬に吾妻山磐梯山に、中旬には八ヶ岳に登り、本月初旬よりは苗場山の調査に十日を費し、四五日前帰宅致し、今復旅装を整へて近日中に白馬に向ふ予定致し居り候。白馬山頂に数日自己の研究を済せ候上、清水経由祖母谷に下りて京大生の一行と落合ひ、再び清水に登り、予て差上げあり候日程により白馬山中を跋渉の上、更に足を伸して八ヶ岳に一行を引連れ、九月五日松原湖にて解散致す次第に候。若し、白馬山上にて久々の拝芝を得ば幸と存じ候。

扨、去月十一日附を以て御親切にも御送り被下候ミミナグサの標品は皆同一種のものにて、ミヤマミミナグサの変種クモヰミミナグサ Cerastium schizopetalum Maxim var bifidum Takeda（高山植物圖彙、第二版二八二圖）と考定致し候。これは右出第一版にタカネミミナグサとなせしものにて、それは友人より写眞を借用せし為の錯誤に有之。眞正のタカネミミナグサは第二版二八三圖に掲載致し候ものにて、花形は両方共相似て各花瓣は二裂のもの、葉形と姿態が全く異り候。タカネミミナグサの方は、白馬でも主に信州側に多く、越中側には少き様存じ申し候。クモヰの方は、清水や大日の方に多く候。

先は延引乍ら御礼旁々右迫　　不備

八月十七日　　武田久吉

吉澤君

梧右

（原文のまま。ただし、句読点は筆者）

この書簡の日付印は「麹町・一二・八・一七」。しかし、先に引いた書簡同様、どこにも年号の記載がない。記載が

ないからこれも年号が特定できないかというと、そうではない。書中に『高山植物圖彙』増訂第2版のことが出てくる。すでに記したが、本書の発刊は昭和12年。したがって、大正はあり得ない。いうまでもなく、昭和である。

文面を一読して驚愕するのは、その行動力である。このとき氏は54歳。吉澤は11年も年長の65歳。二人の山と植物に寄せる情熱には、頭が下がるばかりである。

武田久吉から吉澤庄作に届いた封書の表書など

それはさておき、この書簡によると、吉澤は7月11日にミミナグサの標品を送っている。ミヤマミミナグサに関する書簡も、一度ならず送っている。つまり言えば、ミミナグサに並々ならぬ関心を寄せていたのである。『高山植物圖彙』増訂第2版は前述したとおり8月5日の刊行であるから、そのおよそ1ヶ月前のことである。すなわち吉澤は、この時点ではまだ、タカネミミナグサがクモヰミミナグサと訂正されていることを知らなかったのである。

書簡にあるように、白馬岳で二人が久闊を叙し合えたとすれば、ミミナグサの生育地まで足を延ばし、それを眼前にしながらあれこれ話が弾んだと思われる。文面からして、その可能性が高い。だが、もしそうだったとしても、その月日まで特定できる資料を、残念ながら私は持ち合わせてはいない。

話は逸れるが、書中にある「京大生の一行と落合ひ」うんぬんを多少補足しておく。略年譜によると、氏はこのころ、すなわち昭和2（1927）年4月から14（1939）年3月まで、京都帝大農学部講師だったのである。

ところで、瑣末事だが、ここで「友人より写眞を借用せし為の錯誤」がどのように著作に表れており、それがどのように訂正されているか、について言及しておく。

『高山植物圖彙』第1版は、昭和8（1933）年6月1日に梓書房から出た。「携帯檢索用」、「菊半截判、寫眞三二一頁、圖解和名索引八〇頁」などとするのが、当時、山岳関係書に載った広告の文言の一部。

余談ながら、その中扉には「雲表花彙」とある。いわば、書名と異なるわけだが、その経緯は、次に引く巻頭言に明らかである。

「本書もと『雲表花彙』と題して、高山帯特有の種類のみを掲げんとしたが、登山の途上に見る主要なものをも挿入するの可なるを感じ、内容に變更を行ふと共に、書名を改めたが、その名を捨て去るに忍びず、副名として中扉に題することとした」。

その第1版254図には、岩間に咲く可憐な花の写真（横長）があり、確かに書簡にあるとおり、「Cerastium ciliatum Turcz たかねみみなぐさ」としてある。ちなみにミミナグサは、この版にはミヤマミミナグサを加えた2種類を掲載。第2版では、クモヰミミナグサを追加して3種類になっている。キクザキタカネミミナグサは、タカネミミナグサの項に「附記」として解説があるだけで、まだ写真を伴っては登場していない。

それはそれとして、第2版には、第1版の254図と同じ写真――かつて「たかねみみなぐさ」としたものが、282図にある。武田をして誤らせた写真である。ただし、今度は「C. schizopetalum, var. bifidum, Takeda. くもゐみみなぐさ」としてある。すなわち、訂正されているのである。

同じ写真といっても、左下へ90度回転させて、つまり、縦長にして収めてある。粋な計らいのようだが、本葉のみをこのようにしたのではない。似た例がほかにも多く見られる。その理由を第2版の巻頭言から引く。

「改版に際して、繙読の便にする為、圖版は可及的竪位置のものを用ひ」うんぬん。

真正の「C. Takedae, Hara. たかねみみなぐさ」の写真は、283図にある。これが「なでしこ科・ミミナグサ」では、新入りの写真で武田の撮影。のちに――昭和も30年代に入ってから、この写真は『原色日本高山植物図鑑』（保育社）にも用いられる。今度は、書名が示すように原色になっている。

それにしても、『高山植物圖彙』第1版における錯誤は、慎重な武田にとっては、千載の恨事であったろう。

図書紹介

大阪市立大学山岳会 編

『雪線』—創立九十年抄史

大阪市立大学山岳会
2012年3月刊
B5判　424ページ　非売品

本書は大阪市立大山岳会が、創立90周年を迎えたのを機に、その足跡を抄史としてまとめたものである。抄史とはいえ400ページを超える大冊となっている。

大阪市立大山岳会は、旧大阪高商・商大山岳部を前身とし、昭和初頭に結成された「関西学生山岳連盟」にも当初からの加盟校で、学校山岳部としての古い歴史と伝統を有する。巻頭を飾る手作りの部誌、『雪線』創刊号の表紙や目次からも、そのことが伝わってくるようである。

大学山岳会が一定の節目ごとにその歩みを回顧し、活動記録を整備し、補充していくことは極めて重要なことであり、欠かすことのできないものである。

本書の内容を見ると、基本的には部誌『雪線』の記録の抄録・再録を主体にしており、その記録内容を大きく（一）『雪線』からの抄録、（二）海外登山の記録、そして（三）逝きし人々を偲んで（追悼）に三分類し、それに（四）登山と人生と（随想）を加えた四部構成から成っている。

（一）『雪線』からの抄録

既刊の第12号（昭和10年9月）から第22号（昭和40年3月）まで、各号の目次とともにその主要記事が抄録されている。それらは、戦前の積雪期を含む剱、穂高、黒部山域への登攀、台湾、鴨緑江源流への踏査、さらに戦後の海外遠征など、いわゆる山岳部の黄金期と言われる時代のものが多数含まれている。それらの記録を見ると、当時の山岳部の活動内容や雰囲気を読み取ることができる。

ただ残念なことには、山岳部の揺籃期とそれに続く昭和初頭の記録（第12号までの各号）がすべて省略されていることであり、また第22号（昭和40年）から後の『雪線』の記録は終り、その後の記録が一部散逸、空白となっていることは惜しまれるところである。とりわけ山岳部の初期の沿革やその動向は、この機会に、ほかの記録に優先して整備しておくべきではなかっ

たかと思う。

多くの記録の中で注目すべきは、「戦後十年の歩み」という会員・池永薫爾氏の記録である。これは部誌『雪線』からの再録ではなく、当時加盟していた「関西学生山岳連盟」の『報告』（復活第1号）からの転載である。戦後の混乱期に、再興に向けて動く部の動向がよく報告されており、この期の記録の空白を埋める貴重な資料といってよい。

（二）海外登山の記録

山岳部（会）では戦後の再興が進むなか、1950年代になると、ヒマラヤ研究会を作り、海外遠征へと目を向けるようになっていた。そして、1960年代からは次のように5回の海外登山を行なっている。

中部ネパールのランタン・リルン（7245m）へは、第1次隊が1961年、第2次隊が1964年、そして第3次隊が1978年と、3回の遠征が行なわれている。カンジロバ・ヒマール主峰（6882m）へは1970年に、またチベットの四光峰（スークワン・リ、7308m）へは1989年にそれぞれ遠征している。これ以外に、合同参加の登山報告が一部収録されている。

ランタン・リルンは第3次隊によって初登頂を達成するが、第1次遠征から18年後のことである。あの第1次隊を襲ったブロック雪崩により、森本隊長、シェルパ・サーダーのギャルツェン・ノルブを含む3名の隊員を、一瞬にして失うという悲惨な事故は忘れられない。この遭難事故は、ギャルツェン・ノルブが日本山岳会マナスル登山隊の名シェルパとして知られていたこともあり、大阪市立大山岳会にとってはもちろん、日本の登山界に大きな衝撃を与えた。

『山岳』（第57年）にも、当時副隊長であった廣谷光一郎氏がその報告を書き、また3隊員への追悼記が寄せられている。その中で槇有恒、松田雄一の両氏が、ギャルツェン・ノルブの死を悼んでいる

この半世紀、大阪市立大山岳会にとって、ランタン・リルンは栄光の山であるとともに、鎮魂の山でもあった。一昨年（2011年）、新たにランタン・プロジェクトを組織し、この地域への長期の探査に入ることになったという。その成果を祈りたい。

（三）逝きし人々を偲んで（追悼）

既刊の『雪線』その他からの追悼記の転載が主であるが、一部新たに書き加えられたものも含まれている。二十余名の故人への追悼記が収録されている。『雪線』第19号（昭和17～30年）の目次を見ると、戦地に散った会員を追悼する記事が多いのが目につく。

（四）登山と人生と（随想）

会員・OBたちから寄せられた登山や山についての感想、あ

るいは山を通しての交友の数々が綴られている。

本書は、大阪市立大山岳会90年の歩みの中から、主として戦前の日本アルプスの開拓期、および戦後のヒマラヤ時代の黄金期に焦点を当てて編集されている。したがって、この期の膨大な記録の中から抄録・再録という方法によっているため、全体の七十数％以上が、これらの資料によって占められるという結果になっている。

なお、巻頭の顧問、会長の寄稿が簡潔なものではあるが、本山岳会90年の歩みに適確に触れられており、その概略を知るには大変参考になる部分ではなかろうかと思う。

大阪市立大山岳会は、間もなく創立百周年という大きな節目を目前にすることになる。本書がさらに拡充され、百年通史へと発展、整備されていくことを願ってやまない。

（昨年夏、本書紹介の原稿を会報「山」に送ってすぐ、廣谷光一郎氏のご逝去を知った。廣谷氏は大阪市立大山岳会の会長であるとともに、本書の刊行に当初からご尽力された方である。心からご冥福をお祈りしたい）

（松家　晋）

スティーヴ・ハウス 著
海津正彦 訳

『垂壁のかなたへ』

白水社　２０１２年４月刊
四六判　３８９ページ
２９００円＋税

「アルピニズム」は媚薬のような言葉である。若いころから登山に親しんできた者にとって、この言葉には麻薬のような魅力がある。肉体や精神を鍛えて、より高い山をより困難な方法で目指す登山。それはこの上なく格好良く、夢見がちで冒険好きな若者の心を揺さぶる。

しかし、アルピニズムを志していても、多くの者は経済的理由や就職、結婚、子どもの出生といった人生の転機を迎えると、その言葉を心の片隅に仕舞い込まざるを得ない。結局、アルピニズムの世界に入ることが許されるのは、媚薬に取りつかれて、常人が人生にとって大事だと思っているものを捨て、より高く、より困難な登山にすべてをつぎ込んだ者だけである。

いまや「アルピニズム」という言葉は、より先鋭化した登り方を指すようになっている。すなわち、軽量かつ迅速を追及するアルパイン・スタイルで高峰や極度に困難なルートを登ることこそが「アルピニズム」であると、考えられるようになってきたのだ。たとえヒマラヤの８０００m峰に登ったとしても、ガイド登山はもちろん、その方法が物量と人数をかけたクラシカルな登攀による場合も、「アルピニズム」とは評価され辛くなっているようである。

昔もある程度はそうだったかもしれないが、いま「アルピニズム」は、人間の限界近くまで肉体と精神と技術を鍛え上げたクライマーにのみ許される行為になってしまった、と思わざるを得ない。

本書にはそんなクライマーの一人である著者、スティーヴ・ハウスが困難なクライミングにすべてを懸け、究極のアルピニズムを追求してきた過程が語られている。

彼は精神や肉体の超克や、パイオニア・ワーク、お互いに命を預けるパートナー・シップ、さらにはクライミングに対する確固とした哲学を懐に、我々には及びもつかない高いレベルで困難に立ち向かい、困難を克服する。

まず著者は、クライミングをするにあたって人工物を残置することを嫌う。そのため余計な装備は携行せず、使える物は何度でも使うことになる。

また、天候の変化や高山病のリスクを減らすために、眠る時間を削ってでも、早く登って早く下ってくる。ライト&ファストという最先端の登攀メソッドある。

その結果がスティーヴン・ヴェナブルズによる評価、「小さなチーム、極限の軽量装備で挑む美しく優雅なライン。調和のとれた共同作業」なのだ。著者は自身が語るように「次から次へ物を削ぎ落とし、自分なりに要不要の概念を見直す」ことによってそれを実現する。その結果、食料や装備は信じられないくらい少なくなる。ひもじくて寒く、眠いのは当たり前で、しばしばアクシデントにぶつかっても引き返すことができず、登り続けるしかないという場面も出てくる。

そうすると、すべての行動が研ぎ澄まされたものにならざるを得ない。髪の毛一本ほどのほんの些細な不注意。それら一つ一つが生還の可能性を削り取ってしまうようなギリギリの世界。気を張り詰めて周りのすべてに気を配り、それでも自然に翻弄されて命を失うこともある生と死の境目。そのなかでの一手、一歩がもたらす結果はとてつもなく大きい。だから、すべての行動や行為が大きな意味を持つ。

本書のエピローグにある「行動はメッセージ。＝action is message」というキーワードはそこから生まれてくる。極限のクライミングのなかでは言葉や理屈は何もいらない。山を登って降りてくるという行動、それだけで人の心を大きく揺さぶる

ことができるというのである。確かにデナリでもナンガ・パルバットでも、著者とそのパートナーの一挙手一投足はそのままで強烈なメッセージである。

著者のスティーヴ・ハウスは、極限のアルパイン・スタイルで不可能と思われるような数々の登攀を行なってきた世界のトップクライマーの一人である。

彼はアメリカ・オレゴン州の出身で、幼いころに両親からクライミングの手ほどきを受け、19歳のときに南欧のスロヴェニアに渡って本格的なクライミング人生に入り込んでいく。その翌年には、スロヴェニア隊の一員としてナンガ・パルバットに赴くが、そこで固定ロープや人数に任せた登攀に疑問を持ってしまう。「固定ロープなど不要になるくらい、うまくなる必要がある。固定ロープと固定キャンプなんて最悪だ。」

そこから著者のクライミング・スタイルであるライト&ファストによる登攀の追求が始まる。北米の最高峰、デナリのバリエーション・ルート、ファーザー&サンズ壁の初登攀、同じくウォッシュバーン・ウォールの新ルートを単独登攀で新開拓するなど、主に北米を主戦場に次々と目覚ましいクライミングを繰り広げていく。その間にアレックス・ロウ、バリー・ブランチャードなど北米を代表するクライマーたちの知己を得、教えを受けるようになるが、一方でクライミング仲間を山で失ったり、クレバスに落ちて危うく九死に一生を得るなどの体験を通じて大きく成長していく。

カナディアン・ロッキーのハウズ・ピークで難ルート、M16を開拓した翌年、彼はデナリ南壁のスロヴァク・ダイレクトを63時間で登攀する。このときに同行のスコット・バックス、マーク・トワイトと「個々の自我が溶けてなくなり、一つの生命体のように感じてしまうような結びつき」を持ってしまう。いみじくも、そのときのパートナーの一人であるバックスが投げかけた言葉のように「パートナーシップの何たるかを若くして味わってしまった」のだ。

その後はヒマラヤを舞台にして、ヌプツェ南壁の試登、ハッジ・ブラック、K7南壁の新ルートを単独初登頂。その間にカナディアン・ロッキーのノースツインタワー北壁で外靴を落としながら、「ビニール袋三枚にジップロックをかぶせてその上から内靴をはき、テーピングテープでぐるぐる巻きにした。」状態で完登し、生還するという超人的な技も見せている。

そして、いよいよ因縁のナンガ・パルバット、ルパール壁である。２００４年にブルース・ミラーと挑戦するが７５６０ｍ地点で敗退する。一度味わってしまった理想のパートナー・シップ。長らくそれを築ける相手が見つからず悩んでいたが、このときも、最後の最後にミラーとのパートナー・シップで不満を抱えることになるのだ。

しかし、著者はその翌年、ヴィンス・アンダーソンという素

晴らしいパートナーを得る。そして、標高差４５００ｍという富士山の標高よりも高い、気の遠くなるような巨大な壁の直登ルートを二人で登り切ってしまうのである。

登頂の後に彼は感じる。「これまでに体験したことがないほどの巨峰の頂上に立ったとき、成功は霧消した。これまでと同じように目標に到達したと思った瞬間、それは逃げていくと知った。成功は虚しい。自分の運も判断力も、これまで学び守ってきた教訓も、登り降りの標高差も、体調も、技能もすべていったんゼロになる。」

大きな挑戦が終わった後の虚脱感。挑戦の内容が濃ければ濃いほどそれは大きくなる。そこで彼は「有頂天な言葉や、勝利の言葉はない。深い喪失感について語る」しかない。

さらに著者は、これらのクライミングを通じて、なぜ自分はここまでして極限のクライミングを続けるのかを考える。そして、そのなかで三島由紀夫のある言葉に行き当たる。

「リンゴの芯は存在してもそれを外から見ることはできない。芯の存在を証明する唯一の方法はリンゴを切ることである。リンゴにしろ、人体にしろ、血を流して死んだときに初めて芯の存在を確認することになる。」

そして「数知れぬ回数の登攀を通じてこの比喩としてのリンゴを切ってきたのだ。歓喜とともに美しいものを見たり涙を流してきたりした。驚きにしろ、恐れにしろ、それは心の芯まで届く。実際に動機となっているのは、やむにやまれぬ衝動なのだ。」と気づくのだ。

以前はワルテル・ボナッティなど、読み物としても文学としても素晴らしい登攀記を書いたクライマーたちがいた。彼らの書いたものは、山書の古典的名著として未だに読む者の心を揺さぶり続けている。それに比べて最近は、なかなかクライマーによる心に働きかけるような著作が現れないと思っていたところである。本書は久しぶりにそんな不満を解消させてくれた。

表現力もさることながら、ひときわ目立つのが臨場感である。それは一つ一つのシーンを切り取る手際が鮮やかだからであろう。そのため、センテンスや字間から、登攀の過程で著者やそのパートナーが行ない、考えたことが目の前で見ているかのように生々しく伝わってくる。

また、クライミングを題材にしたノンフィクションは、えてしてただ事実を時系列に並べただけの「記録」に堕してしまうきらいがあるが、本書では一つ一つのシーンが時系列ではなく、別のシーンと重なり合ったり入れ替わったりしながら、有機的にストーリーが進んでいく。それが本書に文学的、映像的な味付けを与え、さらに臨場感を際立たせる効果をも生み出しているように思える。

いずれにしても、読んでいると知らず知らずのうちに感情移

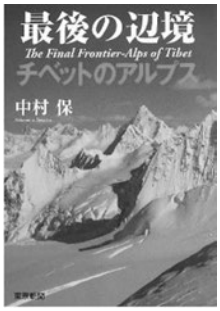
入し、それぞれのシーンに絶望感を感じ、冷や汗をかき、勇気を奮い立たせ、安堵してしまう。ひもとくことによって「アルピニズム」のエッセンスが体感できるのである。原書が書かれたのは4年前のことだが、訳書を待ち焦がれていた日本のクライマーの期待は、きっと裏切られなかったに違いない。

また、海津正彦氏の訳も臨場感を伝えるのに大きく寄与している。氏自身もクライマーであり、数多くの山書の名訳をものしてきただけあって、とても読みやすい訳である。

（近藤　雅幸）

中村　保　著

『最後の辺境　チベットのアルプス』



東京新聞　2012年4月刊
A5判　479ページ
2857円＋税

「雲南からはじまり、目線がつぎつぎに広がって欲がでて、ひとつの旅が終わると次の目標に駆りたてられて中国通いが続いた」

処女作『ヒマラヤの東』（1996年）の「あとがき」にいみじくも記しているように、中村さんの中国南西辺境の旅は、1990年の玉龍雪山と四姑娘山以来、今日まで休むことなく続いてきた。その膨大な体験は、前掲書に続いて『深い浸食の国』（2000年）、『チベットのアルプス』（2005年）の三部作となってまとめられ、高い評価を得た。

これらの貴重な情報は、日本語ばかりでなく、著者が毎年編集してきた、日本山岳会の英文ジャーナル『Japanese Alpine News』を通じて広く世界に発信された。同時に『アルパイン・ジャーナル』や『アメリカン・アルパイン・ジャーナル』その他海外の年報や雑誌にも投稿を絶やさず、欧米登山家にも多大な影響を与えてきた。

それは、たとえばミック・ファウラー（英）の四姑娘山北西壁初登攀（1992年）やカジャチョ（2005年）およびモナムチョ（2007年）初登頂、アレクサンドル・ルチキン（ロシア）の無名峰6134m初登頂（2009年）、さらにはブルース・ノーマンド（英）のマウント・エドガー南東壁初登攀（2010年）、ジョン・オットー（米）のヤンモーロン初登頂（2011年）などとなって結実した。

惜しむらくは、これらの情報に接しながら日本隊の活動が、もっぱらアプローチの容易な邛崍山系の岩峰に偏っていて、い

わゆる大物に成功したのが、神戸大学隊のカンリ・ガルポⅡ峰（２００９年）やギリギリ・ボーイズのダッドメイン東壁（２０１１年）ぐらいしか見当たらないことであろうか。

しかしながら、新たな旅は常に新たな発見を呼ぶ。そういった意味で、前掲した三部作は、著者にとって過去の里程標とならざるを得ない。とりわけ、『チベットのアルプス』から7年の歳月は、従来にも増して実り多い旅の繰り返しだっただけに、書くべきことが山積していた。本書は、そんな機運の高まりに応じて編まれた、いわば集大成ともいうべき一書であり、文章のヴォリュームも、図版の多彩さも決定版にふさわしい。

本書で語られる旅は以下の7編である。すなわち、「念青唐古拉山東部・禁断の易貢蔵布」（２００５年）に始まって「易貢蔵布から崗日嘎布、波堆蔵布へ」（２００６年）、「深い浸食の国キングドン－ウォードの世界」（２００７年）、「ゴルジュの国・幻の山塊と四川踏査行」（２００８年）、「東チベット長駆５０００キロ」（２００９年）、「雲南キリスト教会探訪と理塘高原ピーク同定」（２０１０年）、「執念の易貢蔵布　空白の12日」（２０１１年）。地理的には、三部作に描かれたエリアと重複するところもあるが、前の旅で解決できなかった疑問やその後に生じた新たなテーマを課題として出かけたものだけに、読者としては倦むところがない。

地図を案じて、この谷に入ってあの山をカメラに収めたいという欲求ひとつでも、そこへ出かけていく十分な動機となり得るのだ。本書に収録された多数の画像の中には、そのようにして新しく撮影に成功したショットや、交流のできた海外登山家から提供された貴重な写真が少なからず含まれている。

さらに、これらの旅の合間を縫って行なわれた海外での精力的な講演活動と、その反響が3つの章に分けて述べられており、有名無名を問わず、海外の熱心な登山家たちとの交流が描かれている。

ただ招かれて講演するだけではない。本書の前に出た三部作を土台とした『Die Alpen Tibets』がドイツ語で出版され、三分冊に編集し直した英語版も刊行される。いずれもドイツの出版社 Detjen Verlag によるもので、この出版社を主宰するペドロ・デーティエンとの幸運な出会いが、その道を拓いてくれた。まさに Life is Meeting で、国内・海外を問わず精力的に続けてきた情報発信のもたらした果実といえるだろう。

「登山の世界は意外に狭い」とは、著者がよく口にする感想ではあるが、彼我の距離を縮める努力があって初めて言えることだ。ひょっとすると、昨今不調を極める日本外交のあり方にも通ずる金言なのかもしれない。

ところで、中村さんが本書で採り上げる地域には、チベット族をはじめとする少数民族問題が横たわり、中国政府にとって極めて繊細な対応を要するエリアとなっている。そのため、登

山許可取得も簡単にいかず、地方政府や地元民によって入域が拒否される事例に事欠かない。かつては地理的な理由で入域が難しかった地域が、今は人為的理由の故に入域困難となっている。

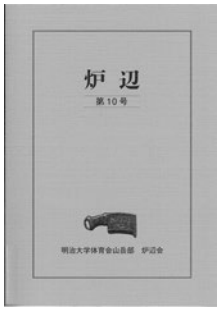
未踏峰の宝庫であるチベット南東部なども、当面はそこへ入る術と責任を心得た、幸運なチームにのみ許される「最後の辺境」として存続していくのであろう。ネパールのように、人気ピークに商業公募隊が殺到するような、歪んだ登山ブームに席巻されるよりは、むしろ、はるかに好ましいことなのかもしれない。

なお、著者はこれら一連の踏査活動とその著作によって、2004年に秩父宮記念山岳賞、2008年に英国王立地理学協会のバスク・メダルを受賞し、2013年には梅棹忠夫・山と探検文学賞を受賞した。この6月もメコン川源流域を目指して、1ヶ月の旅に出発したばかりだ。

（池田　常道）

明治大学体育会山岳部　炉辺会　発行

『炉辺』第10号



明治大学体育会山岳部　炉辺会
2012年6月刊
A5判　848ページ
頒価3000円

明治大学体育会山岳部（MAC）、炉辺会（OB会）の部報『炉辺』第10号（1994～2011年）は、同会のドリーム・プロジェクトを特集している。これは、MACと炉辺会会員で世界の8000m峰をすべて登ろうという計画で、5峰を残したところで、プロジェクトのファイナル・ステージとした。本書は第1部「海外登山活動」の中心にこのプロジェクトを置いて、14座完登の成功を報告している。

世界の8000m峰14座の登頂は、いまさら珍しいことではないが、発案者によると、このドリーム・プロジェクトは「先輩から後輩へと引き継がれてきた伝統の、世代を問わず我々みんなが持っている〝明大山岳部の山登り〟の集大成」という。いずれにしても、MAC・炉辺会のドリーム・プロジェクトは、

組織を大切にする日本らしい山登り。最初が１９７０年、日本山岳会隊でエベレスト（８８４８ｍ）に登った植村直己になる。

そのファイナル・ステージ最初の山は、10座目にあたるマナスル（８１６３ｍ）だ。オール明治での８０００ｍ峰の登頂は、これが初めてになる。好天にも恵まれ登山は順調で、１９９７年10月８、９日に隊員８人とシェルパ３人が登頂した。

三谷統一郎隊長は「１００％まではいきませんが、でき過ぎだと思っています。しかし、10月８日、９日の好天がなければ、後日の降雪を考えると、失敗していたかも知れません」と本書に記している。

11座目と12座目はグレードを上げて連続登頂。しかも、22歳から27歳までの若いメンバーだったが、６人全員が目的を果たした。最初のガッシャブルムⅡ峰（８０３５ｍ）は２００１年７月10日に登頂。一度、悪天のため７７００ｍで引き返したが、粘りを見せて８月13日にガッシャブルムⅠ峰（８０６８ｍ）にも登頂した。高橋和弘隊長は「周囲から『全員連続登頂は難しい』という声が聞こえるほど燃えてきたし、困難な目標に向かう過程で得るものも多かった」と記している。

13座目のローツェ（８５１６ｍ）も全員登頂だった。第１次アタック隊は２００２年10月３日、第２次隊は８日に各３人と各シェルパ１人の計８人が登頂した。うち１人は無酸素登頂だった。三谷隊長は「今回の隊長としての私の役目は、事故があったときや登山の中止を決定するぐらいであった。そして、実際に果たした役割は、第２次アタック隊のリーダーとしてアタックを実行したくらいである」と、余裕さえ感じられる。

14座目、明大隊にとって最後の８０００ｍ峰は、２００３年のアンナプルナⅠ峰（８０９１ｍ）。それもノーマル・ルートではなく、難関の南壁だ。１９９７年、マナスルの後の挑戦では６０００ｍのＣ２で断念している。そのときの経験から、北面のルートは雪崩が起こりやすいという判断をし、南壁にルートをとった。「実際の山は、今春のネパール・ヒマラヤ全般に言えることだったようですが、慢性的な悪天候のため非常に苦戦を強いられました。ほぼ毎日午後には降雪があり、それに伴い雪崩（多くはスノー・シャワー）、ラッセル、ルートやテントが埋没し、体力面だけでなく、精神的にも非常に消耗しました」（アンナプルナ登山を振り返って」隊長・山本篤）と条件は悪くなるばかりだ。それを克服したのは「本登山隊は各個人が役割を十分に認識した上で、それを確実にこなすことができ、チームとして本当に機能したと思います」という。

行動概要によると５月16日は「早朝３時過ぎから４時までの間に森、天野、高橋、早川、加藤、山本の順にＣ４発、午後２時40分アンナプルナⅠ峰（８０９１ｍ）に隊員６名が無酸素で登頂。のちＣ４を撤収しＣ３まで下降。シェルパ２人はＣ３を２時ごろ、酸素ボンベを使って出発し登頂、Ｃ２まで下降する」

山本隊長は成功の要因を「我々が頑張れたのは、あの気の遠くなるような現役時代の合宿のお陰であったと、今心からそう思っています」と記している。

「海外登山活動」はドリーム・プロジェクトだけではない。1995年にはインド・ヒマラヤのガングスタン（6162m）に学生の隊で向かい、登頂に成功している。1999年には「日本リャンカン・カンリ登山隊」に炉辺会から3人が加わり、いずれも未踏の7534mの頂を踏んでいる。

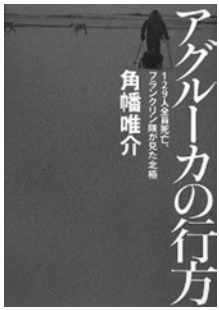
「海外登山活動」の中で注目すべき登山を挙げるなら、加藤慶信、天野和明の2006年のチョー・オユー、シシャパンマ連続登頂。チョー・オユーは条件が悪くノーマル・ルートに変更したが、シシャパンマはアルパイン・スタイルで雪壁の北壁中央クーロワールを完登している。また、天野は別の隊で2008年、インド・ヒマラヤのカランカ（6931m）を氷壁の北壁から登っている。

『炉辺』第10号は詳細に記録をつけたものと感想文に近いものとがあって、できもまちまちだが、内容は豊富。第1部「海外登山活動」に続いて、第2部「MACの歩み」、第3部「炉辺会日誌」、第4部「紀行・随想・記録」、第5部「歴史研究」、第6部「追悼」に分かれ、頁数は848ページに及ぶ大部である。

（迫田　泰敏）

角幡唯介　著

『アグルーカの行方』



集英社　2012年9月刊
四六判　401ページ
1890円（税込）

『探検家、36歳の憂鬱』

文藝春秋　2012年7月刊
四六判　237ページ
1313円（税込）

角幡唯介。早稲田大学探検部OB。2009年、チベットのツァンポー峡谷の探検で生死の狭間に追い詰められたが、幸運にも生還。24日に及ぶその体験を書いた『空白の5マイル　チ

ベット世界最大のツァンポー峡谷に挑む』（集英社刊）で２０１０年第８回開高健ノンフィクション大賞、２０１１年大宅壮一ノンフィクション賞、２０１１年第１回梅棹忠夫・山と探検文学賞の３つを総なめにした。さらに次作『雪男は向こうからやって来た』で２０１２年第31回新田次郎賞を受賞。その気鋭の「探検作家」の新たな挑戦を記録したのが『アグルーカの行方』（以下、『アグルーカ』）である。

内緒話だが、『アグルーカ』も講談社ノンフィクション賞にノミネートされており、７月末の最終選考を待っているという状態だ。大した書き手が現れたものである。

北極探検史では有名なフランクリン隊のことを、角幡は以前から知っていたわけではない。すべては、北極冒険家・荻田泰永との会話から始まった。雑誌の企画で荻田にインタビューしたとき、フランクリン隊のことが出た。北極探検史を調べるうち、19世紀半ば、ヨーロッパとアジアを結ぶ「北西航路」の探索中に遭難、全滅したジョン・フランクリン隊の足跡をたどる旅を思いつくのである。北極点徒歩単独無補給到達を目指す荻田もこの計画に加わることになり、36歳、35歳の元気な男たちの破天荒な歩き旅が始まる。

ところで、アグルーカとは何か。本書の冒頭に以下の説明がある。

《アグルーカとは、イヌイットの言葉で「大股で歩く男」を意味する。背が高く、果断な性格の人物に付けられることが多かった。かつて北極にやって来た探検家の何人かが、この名前で呼ばれた。》

行方を絶ったフランクリン隊の生き残りは、一部でイヌイットたちに目撃されていたらしい。その中に「アグルーカ」と呼ばれていた男がいたのである。

１８４５年５月19日、フランクリン探検隊の「エレバス号（３７０ｔ）」と「テラー号（３４０ｔ）」は北西航路を探るため、ロンドンの近郊を出港した。「北西航路」とは、北アメリカ大陸の北側にあるカナダ北極諸島の間を抜けて太平洋と大西洋を結ぶ航路のこと。ヨーロッパから北西へ延びる航路であることからそう命名された。

氷から船体を守るため船首には６ｍの鋼板が張り付けられ、蒸気エンジンやスクリュー・プロペラが搭載された。図書室には１２００冊もの本が用意された。北西航路を求めて、イギリス海軍の威信を懸けた国家事業だった。

船はスコットランドからグリーンランド沖へ向かい、７月４日、ホエールフィッシュ島で輸送船から物資補給を受けたのちバフィン湾を北上、その際３隻の捕鯨船から目撃されている。７月末、氷山に舫（もや）い付けした船隊を見たのが、ヨーロッパ人が一行を目撃した最後だった。

英海軍は１８４７年から捜索隊を派遣した。何隊もの捜索

チームが出かけたが、ついに生存者は見つからなかった。何がこの隊に起きたのか。その後幾つもの捜索チームが繰り出し、いろいろな記録を残した。

角幡の『アグルーカ』が優れたドキュメントとなっているのは、事前の資料読みをしっかりやっているからだ。入手困難では、と思うような北極探検の古典を短時間に読み込み（多くは英文。最近ではインターネットでずっと楽に購入できるのと、大学などで復刻本が結構出ているらしい）、その資料の記述を念頭に現地に身を置く。そこから紡ぎ出される文章は独特の角幡節を創り上げている。角幡は肉体派ではあるが、資料の読み込みについては意外にも〝書斎派〟だ。

角幡唯介と荻田泰永は２０１１年3月16日、北極探検の基地、北緯74度40分のレゾリュート・ベイを出発した。

60日分の食料と燃料を積み込んだ１００kgのソリを曳き、スキーか徒歩で毎日10時間、2時間半に1回休憩を取る以外ひたすら歩き続けた。皇居周辺を50ℓのザックに水を満タンにして何周も歩いたトレーニングの賜物だった。北極の氷海を歩き続けるコツは、北極点無補給単独到達を目指し、すでに10度以上ここ氷の世界に通い続けている「北極バカ」の荻田泰永がよく知っていた。結果的にふたりは、目的地のジョアヘブンまで60日かけて到達している。1日平均17kmのスピードだった。

当初、緊張したのはホッキョクグマとの遭遇だった。それは本当に恐ろしいものだ。クマが来たらしい、と気づくが金縛りに遭って声が出ない、という夢まで見た。クマを目撃したら、できるだけ大きな音の出るショットガンで威嚇するしかなかった。

「食」についての記述は、この本の迫力を強めている要素だ。1日５０００ｃａｌの食料を用意したが、足りない。極地での行動は消耗が激しく、ふたりはすさまじいまでの空腹感に悩まされ、次第に痩せてゆく。食欲との闘いは、極地探検家の永遠の課題であろう。「夕食を食べ終えると腹が減る」など飢えの描写が独特だ。

特に肉が食べたくなる。だから、麝香牛の群れに遭遇したときは、肉が食えるという喜びに包まれる。1頭を射殺。気がついたら、仔を産んだばかりの母牛だった。殺した母牛のかたわらで、乳を求めて鳴く生まれたばかりの仔牛。母牛を解体作業中、母を殺された赤ちゃん牛が「ビェーッ、ビェーッ」と絶叫しながら角幡たちに迫って来る場面は、人間という生き物の業とはいえ、読んでいて心臓がずきずき痛む描写だ。身体を張っての冒険を、安全な場所でぬくぬくと楽しませてもらう立場として受けるしかない代償であろうか。角幡は結局、この仔牛も殺してやるしかなかった。

目の前に広がる乱氷帯。絶望なまでに遠い水平線。それでも

前に進めたのは、荒川での重いタイヤ曳き、皇居何周ものボッカ訓練、氷壁クライミングで鍛えた氷雪技術など、出発前の鍛錬の成果であろう。極地で鍛え上げた荻田泰永も、タフなことでは負けない。ふたりの抜きん出た体力が北極行を支えたであろう。あまり細かなことに頓着しない、ふたりの性格も良かったと推測する。

評者は1979年8月以来、大学探検部、山岳部のOB、OG仲間と立ち上げた「地平線会議」という活動を続けていて、その活動を通して角幡も荻田も知っている。

角幡に絞って言うと、彼の生き方のダイナミックな方向性が面白い、と感じている。地平線会議に早大探検部の元気な、少々やんちゃな学生だった角幡が初めて顔を出してからもう十数年になる。当時から本気の探検を志していて、チベットのヤル・ツァンポー単独探検は、出色であった。2003年3月、「我武者羅西遊記　ヤル・ツァンポーに挑むの巻」のタイトルで報告者となってもらった。

その後、朝日新聞記者となり、富山、熊谷に勤務。2008年1月の「地平線通信・338号」に「春、新聞記者をやめようと思う」という文章を書いて皆を驚かせた。

《気づけば、4月で入社してまる5年だ。地平線でヤル・ツアンポー峡谷探検を報告してからまる5年ということでもある。内輪話だが、朝日新聞では入社6年目で本社への異動の時期を迎える。しかし、僕には特に希望の部署はなかった。社会部は面白そうだが、いまさら警察回りから始めるのもなあ。経済部や政治部はよく分からん。文化面や家庭欄に至ってはほとんど読んだことすらない……。「角幡って希望部署はどこなんだ」と聞かれると、「探検部」と冗談で答えてきたが、実際に異動希望を出す段階になると困ってしまった。うーん、なぜ新聞社に探検部はないのだ。社会面の裏あたりに探検面があれば読まれると思うのだが……。》

その結果が幾多の賞をもらった『空白の五マイル』として結実した。

さて、もう一冊の本について触れたい。角幡たちの北極探検には『アグルーカ』では書かれていない大事な背景があった。ふたりは2011年3月12日、出発地点のレゾリュート・ベイに到着したのだが、それは日本では、まさに「3・11」のすさまじい災禍が起きたときだったのである。

結果的に予定どおり行動を開始するが、そのときの懊悩について、角幡は『アグルーカ』の中では触れていない。かわりに『アグルーカ』の少し前に文藝春秋から出した『探検家、36歳の憂鬱』（以下『憂鬱』）の中で語られている。彼の北極行の目的が明快に書かれている文章でもあるので、以下に引用する。

《私が北極に来たのは百二十九人の隊員全員が遭難し、死亡

した、十九世紀のイギリスの探検隊の末路について書くためだった。その探検隊のたどった道筋を自分たちの足で歩き、同じ季節に同じ場所に立ち、同じ風景を見ることによって、そこで生き延びようとした人間の姿を自分の行動の中に蘇らせることができるのではないかと思っていたのだ。

旅に出る前に関係者に配った計画書に、私は次のように書いた。

彼らはどのような旅路の果てに、いかなる舞台で生き延びようと模索し、どこに迷い込み、そして死んだのか。人間の生と死をめぐる力強い物語を浮かび上がらせることが、この旅を通じての私の最終的な目標である。》

百二十九人「も」の隊員が全員生還できなかった北極の悲劇は、確かに大いに関心を惹き付ける。平時なら。しかし、故郷日本の東北で起きた地震、津波、原発事故の三重苦は、数年前まで新聞記者だった角幡唯介の心を揺り動かした。「たった」百二十九人という表現に彼の苦悩が窺える。

《何千人、何万人という自分と同じ国に住む人々が今、目の前でリアルな死を突きつけられているというのに、なぜ私は北極くんだりまで来て、百五十年前に死んだ、たった百二十九人のイギリス人の話を書かなくてはならないのか。》

悩んだ末、角幡たちは旅をスタートさせた。2冊の本を「同時書評」(そんな言い方があるのなら)させてもらうが、以下のくだりは『憂鬱』の文章である。

《私は日本に帰ろうかどうか迷った。しかし結果的には帰らなかった。その理由をうまく説明することは、今でもまだできない。ここまで来たのだ。たくさんお金がかかったのだ。私には別に書きたいことがあったはずで、それをやらなければならないのだ。そういうふうに心の隙間に何重にも蓋をして、自分を強引に納得させた。そして三月十六日、猛烈な後ろめたさを引きずりながらも、予定通りレゾリュートベイという村を、あくまで粛々といった感じで出発したのだ。》

猛烈な後ろめたさ。そんな冒険行だったのだ、と一瞬気の毒な気もしてくる。それにしても、『アグルーカ』本ではいっさい「3・11」のことに触れていない。

苛酷な状況の中に自分を追い込んでいって書く、角幡唯介のやり方を地平線通信などで知ったシニアの中には、最後はどうなるか、と心配する向きもある。死と隣合わせの取材方法ではいずれ本物のカタストロフィに直面するのでは、という心配だ。

しかし、そんなことは角幡本人はとうに気がついている。前述したように、『アグルーカ』のドキュメント性を高めている背景として、角幡が短時間にフランクリン隊に関する多くの資料を読み込んでいることがある。

「スキーでとぼとぼ氷の上を歩いているところを文章にしたところで、面白いことなんて何もないのだ。雪の上を歩いた。寒

かった。飯を食った。寝た。悲しいことにこのたった合計二十二文字しかない文章で、北極を冒険することのかなりの部分は説明されてしまっている。（中略）

だから事前に作品化することを前提に冒険をする場合、通常のノンフィクションを書く場合と同様、事前に下調べをして旅の筋書きを求めることが重要になってくるわけだ」（『憂鬱』）

しかし、冒険をしてその体験を書こう、という角幡の狙いは簡単ではない。彼は、ジョー・シンプソンの『死のクレバス』、チェリー・ガラードの『世界最悪の旅』、沢木耕太郎の『凍』、ジョン・クラカワーの『空へ』などを例に、冒険ノンフィクションの名作の多くで「遭難物」が多い、と指摘、「しかし、遭難は狙ってできるものではないし、狙ってしてはいけないものでもある」とため息をつく。そして、言うのである。

「私は自分で探検や冒険旅行をして、それでノンフィクションを書こうと思って新聞記者を辞めたのだが、実は冒険はノンフィクションに適さない分野だったのだ。しかも切実なレベルでそのことを知ったのは、新聞記者を辞めて手遅れになった後のことだった」（いずれも『憂鬱』）

自らを遭難に追い込まずして、いかに優れたノンフィクションを書くか。彼がひそかに身に付けつつある〝ユーモア精神〟がある限り、角幡に大いなる未来あり、と評者は感じている。

（江本　嘉伸）

山本紀夫 著
『梅棹忠夫―「知の探検家」の思想と生涯』

中公新書　２０１２年11月刊
新書判　２３４ページ
８６１円（税込）

本書は２０１０年7月に亡くなった、日本山岳会名誉会員・梅棹忠夫の思想と生涯を書いたものである。梅棹は『文明の生態史観』や『知的生産の技術』などでよく知られた知の巨人であり、また登山、探検の世界でもよく知られている。彼の没後多くの評伝が出版されたが、本書はその中でも出色の内容である。

著者山本紀夫（日本山岳会会員）は、１９６４年、京都大学農学部入学と同時に探検部に入部、その関係で梅棹を知り、梅棹が館長を務める国立民族学博物館（民博）の教官として４０年以上梅棹に師事した。最後の弟子とも言われるように直接多くの影響を受けただけに、全編に流れる梅棹の未知への飽くなき探究心、それに向かって進む実行力、旺盛な好奇心など、こ

の著者でないと書けないような内容は迫力があり、読む人を惹き付ける。

梅棹が本会名誉会員になったとき、いままでいろいろな賞を受けてきたが、本会のこの賞が一番嬉しい、と挨拶されたが、梅棹は自身基本的に登山家であると自負していた。確かに京都一中、三高、京大と過ごした学生時代における彼の山歴、研究者となってからの探検・登山計画などを見ても、登山家として恥ずかしくない実績を残している。彼の多くのフィールドにおける活動の原点には、登山があることは明らかであり、山への熱い思いは終生持ち続けていた。梅棹は語る、山を知らなければ今日のわたしはなかった。山はわたしの人生のルーツであり、すべての出発点なのである、と。

本書は梅棹の登山、探検、そして文化活動と思想を6章にわたって述べている。各章に梅棹の言葉を引用しながら説明しているのが、読者を惹き付ける。

第1章から第3章までは、梅棹が昆虫少年から探検家へと成長していく過程が述べられている。すなわち、京都一中から三高、京大と進むにつれて、京都北山から日本アルプス、白頭山、樺太、そしてボナペ島、大興安嶺へ、さらに1944年にできた西北研究所（張家口）を拠点に蒙古草原の牧畜民の調査へと、戦時下でありながら、次々に息もつけないほど未知の世界へとのめり込んでいく。そこには今西錦司をはじめとする三高山岳部、京大旅行部の仲間とともに、軍を乗り越え、利用し、自由の天地を求めていった気風が窺える。敗戦を張家口で迎え、帰国後、京大で進めていたマナスル計画に積極的に関わったが、肺を患い断念。しかし、55年の京都大学カラコルム・ヒンズークシュ学術探検隊に参加、そして文明の生態史観の発想へと、その後の文化活動に大きなステップを作る過程が分かる。

第4章では、当時勤務していた大阪市立大学を舞台に東南アジア探検を行ない、さらにビルマ（現ミャンマー）の最高峰カカ・ボラジ峰の初登頂を狙う学術調査隊を組織したが、許可が得られず、第2次東南アジア探検の後、アフリカの牧畜社会と狩猟の調査を行なう話が書かれる。

続いて第5章「アジテーター」、第6章「研究経営者」と続くが、梅棹の探検家以外の大きな側面が書かれていて、本書の大きな魅力のひとつでもある。

梅棹の偉いところは、自身アジテーターと言っているように、若い人の意欲を伸ばし、育てることであった。第5章はその話である。京大探検部が誕生したときも全面的に応援し、さらに大学の近くにあった自宅を開放し、梅棹サロンと称し、若い人を集めて議論をする場を作った。探検、人類学、民族学の面白さを若い人に話しておだてた。京都の土地柄、終電を気にすることなく、深夜まで談論できることは大きな魅力であった。探検部や山岳部の若者で、梅棹の影響で人生を変えた者も少なく

ない。事実、このサロンから幾多の研究者が育っている。

梅棹は時代の先を見通す力を持っていた。情報産業論、留学生問題、妻不要論などの論議は、今では当たり前のことであるが、当時は新鮮な衝撃を与えたのである。冷戦終結後の世界の情勢も予見していた。そして、時代の先を見通す力の習得についても説く。

第6章では、19年間にわたり館長として勤めた、国立民族学博物館の創設から運営までの苦心を書く。当時大学並みの研究組織、学位審査権を持つ博物館構想は画期的なことであり、いかに博物館を世界有数の知的レベルの研究機関としたかの理念と実践を書いている。不幸にして86年、ウイルス性疾患で失明したが、そのショックを克服し、多くの著作を残し、さらにあくまでも新しいことに挑戦していく過程は感動的ですらある。

約100冊の全著書のうち、約70冊は失明後に出版している。また、文化勲章など栄誉ある賞を6回も受章したが、そのすべては失明してからである。まさに「知の巨人」に相応しい立ち直りで、余人にその真似はできない。

終章では梅棹の未知の世界への飽くなき好奇心、持続力をもって挑んだ経過が総括されている。京都北山の登山から始まり、二番煎じはくそくらえだ、の精神を貫き、未知のものを掴んだときの痺れるような喜びを求めて、多くの分野で未知への探求に挑んだ。そして、この「未知への探求」こそが梅棹のすべてで、彼自身こんな面白いことはない、と回顧している。

本書は梅棹忠夫の、知の探検家として活躍した生涯を書いているが、そこから学ぶべきものは非常に多く、世代を超えて広く読んでいただきたい好著である。

（平井　一正）

一橋山岳会　発行

『針葉樹』—創部90周年記念号—第15号

一橋山岳会　2012年12月刊
A5判　395ページ　非売品

一橋山岳部は大正11（1922）年6月、神田一橋で3名の発起人と5名の入会者によって創立された、本邦屈指の伝統を誇る山岳部である。その活動の記録『針葉樹』第15号が26年ぶりに発刊された。本来『針葉樹』は現役の学生たちの活動を内外に公表することにあるのだが、戦前から活躍した伝統校とはいえ、遭難事故、慢性的な部員の減少、山岳部長の不在と、部の活動は長く休眠状態にあったために、編集はシニアのOBが

中心となってなされたという。

構成は「一橋山岳部活動記録（１９８５年～２０１２年６月）」「海外での登山活動」と「一橋山岳部90周年記念」から成っている。

第１部は26年間の記録の集成、１９８５年４月から２０１２年６月までの「活動記録」である。活動概要、主要山行記録および山行表から成る。山の報告は高揚した気力に満ち溢れているものだから、各代の記録を読むことは興味深い。日高や黒部の渓谷から剱や穂高の岩場へといった記録は、若者に固有の意気込みに溢れたものだし、背伸びした気負いに満ちているから、一読して年老いた岳人を懐かしがらせる。若者らしい軽やかなユーモアや怒りや嘆きもある。しかし、正直に言うと26年間の記録には瞠目すべきものは少ない。また、各年度の記録の参考となる山の概念図はほぼ白水社の『登山大系』からの転載であり、ここはやはり学生自身の手になるものであって欲しかった。「大学山岳部の歴史的役割は終わった」と言われ、大学山岳部の危機・混迷はもう30年以上も続いている。一橋大学もその例外ではない。低迷のなかから脱出しようと苦悶する学生たちの記録は、痛々しいほどだ。１９８９年10月には大学の体育会運動部からその籍を離脱し、年度中に山岳部長が退任するという痛恨の時を迎える。90年代後半からは、合宿に他大学の学生が加わったり、逆に他大学の合宿に参加するといったものになる。

現代では、山岳を駆け巡るという野性が若者から失われ、山は青春を懸けて自らを鍛錬する場でも、自由で闊達な修練の場としても最早あり得ないのだろうか。しかし、希望がないわけではなかった。若い彼らは再生の努力を続けて、１９９９年には、山岳部長不在のままだが体育会運動部に復帰する。「他大学と自由に登った経験は、山に対する見方をずいぶんと広げてくれた」「おもしろいことをやっているところに人は集まる。（やっている人間がつまらなそうにしていれば、人も集まらない）」。自然と山を愛し、自然と山によって育てられる、溌剌とした若者はいる。消え入りそうな灯は、90周年を迎えた２０１２年に部員も６名に増えて明るさを取り戻し、彼らは果敢に新しい歴史を築いていこうとしている。

第２部は「海外での登山活動」として４編。88年のヨセミテ・ビッグウォール「Yosemite Dairy1988」、89年の「ネパール・クスムカングル峰（６３６７ｍ）北稜」と98年の「ブータン・ヒマラヤ５７２７ｍ峰」の２つの記録は、日本山岳会学生部登山隊に参加したものである。そしてもう一つは〝一橋の岳人にとって、60年来の恋人〟であったミャンマーの「秘峰カカボラジ偵察　半世紀の思いを繋げて」の記録である。吉沢一郎、望月達夫さんといった重鎮が焦がれていた山である。だが、初登頂の栄冠は一橋の手には渡らなかった。

「一橋山岳部創部90周年記念」と銘打った第３部は、「中村保チ

ベット写真館と特別寄稿」、「一橋山岳部&針葉樹会年表・文献集」、そして「一橋山岳部在籍名簿（90年分）」である。

中村保さんの特別寄稿「チベット神秘の河――深い浸食の国・陸の孤島・幻の山塊」は短いが、キングドン－ウォードの世界のエッセンスである。中村保さんはグレポンの初登攀から今も変わらず、〝ボヘミアン的な行動の人〟として、その活躍は目覚ましい。キングドン－ウォードとフレデリック・ベイリーの世界が中村保さんによって、驚異的な写真とともに紹介されたのは1996年（『ヒマラヤの東』山と溪谷社刊）であった。そのときの鮮烈な驚きを、私たちは忘れることができない。それは未知の国に憧れ続け、たゆまぬ研究と実践の成果であった。今それがどれほど世界的に評価されているか、ここで言うまでもない。もちろん、中村さんの執念の山――いまだアプローチも登るルートも全く分からない秘峰――木孔雪山の写真もある。〝全て未踏峰で試登すらされていない山々に向かって、我を忘れてシャッターを押す。氷のように冷たい風が指の感覚を奪う〟。一橋の老クライマーはいまだ枯れず、である。

また、90年間の年表と文献集といった基礎資料の整理と一覧の作成は地味なものだが、山岳部にこのような労を惜しまない人はいるものだと頭が下がる。

本文中に随所に挿入されている、古い『針葉樹』や会報からとられたカットが香り高い。このような小さなものにこそ、伝統が窺えるのである。そして、キャンパスの緑の中に独立した新部室が再建されたのは、山岳部が体育会運動部に復帰した1999年3月であった。実にうらやましいほどの部室だ。

本書は活動報告であるとともに、大学山岳部の存亡を懸けた26年間の苦闘の記録であるとも言えよう。石教授の語る大学山岳部の衰退の歴史は、どこの大学にも当てはまる問題だ。大学という教育機関は、死という危険を常に内包する山岳部の存在を歓迎しているとはいえない時代なのである。本会会員にも多い大学山岳部OB諸氏に読んで欲しい。

最後に、一橋の古き良き伝統である「自由な空気で自由に山に向かう」「読むこと、登ること、書くことが揃って一人前」の一橋岳人よ蘇れ、と励ましておきたい。

（絹川　祥夫）

山岡光治 著

『地図をつくった男たち』
――明治の地図の物語――

原書房　２０１２年12月刊
四六判　２６３ページ
２４００円＋税

最近は、地図に関する書物が随分と増えたことに気づく。地図というものが、さまざまな形で広く一般に認識されてきた結果かもしれない。本書は分野としての地図のうち、地図作成のための測量について書かれたもので、「ひとりでも多くの人が、地図測量の先人たちの労苦を身近に感じていただければ、私の心は満たされるだろう。」と「はじめに」にある。

著者は、国土地理院で永年にわたって写真測量による地図作成の現場で技師として勤め、退職後は『地図に訊け！』『地図の科学』などを著している、現役の地図研究家である。江戸時代末期の「伊能図」から、明治期、大正期ごろまでの測量に携わった技師たちの諸活動とその内容を、ときに人間関係にまで細かく書き及び、合わせて地図測量についての基本知識や用語を文中各所に織り込みながら、一般向きに分かりやすくまとめたものである。著者の立場は、写真測量によって作成された現行の地形図を、「かきたてるもの」が失われているとし、これに対し平板測量による地形図や、それ以前の各時代の地図により愛着を持つ。過去の地図への関心が、地図作成の歴史を知ろうという動機になる。

私の知る限りでは、国土地理院の前身にあたる陸地測量部の活動を発祥からたどったものは幾つかあったが、明治の早い時期に別組織である内務省や農商務省、北海道開拓使や北海道庁がそれぞれに行なった、同様の測量事業に触れたものはほとんどなかった。それは行政組織が改組されて現存せず、したがって、資料となるものが乏しいということもあろうが、これでは日本の地図測量の歴史としては、片落ちということになる。

本書では第１部を「維新前夜から維新直後の地図作り」として、陸地測量部として統一されるまでの流れをまとめている。第１章の〝明治維新前夜の地図測量技術〟から、測量技術を教える学校、そして、卒業生が明治日本の建設を担う技術者として各役所に入り、分担して同じ事業に従事する様が描かれる。当初は各機関同士の垣根はまだ低く、異動は頻繁に行なわれたが、後には部署がより明確に決まって次第に統合され、ついには地図測量、地図製作を行なう部署は一本になる。すなわち、

陸軍の参謀本部陸地測量部が地図に関する一切を統括することとなる。以上の経過から、初期の地図には各段階の地図が多様性を持って作られていたが、一本化された後は、一つの形式に統一された地図しか作られないこととなる。本書では、残念ながら各機関が製作した地図そのものについての言及はほとんどなく、書名の示すごとくに測量技術者自身のことに焦点が当てられている。

第2部は「陸地測量部の地図作り」。その最初の章（11章）は〝「美しさ」から「正確さ」へ犠牲となった「かきたてるもの」〟というタイトルである。まだ陸軍参謀局時代に作成された地図、「五千分の一東京図」と「二万分の一迅速測図」に「美しさ」を見ることができるという。「二万分の一迅速測図」には図郭の外側に地図化された地域の風景図（視図）が、彩色絵画として描かれているという珍しいもの。しかし、このフランス式の地図作成は、やがてドイツ軍の地図作成形式に取って替わられる。一連の交代劇には陰謀があり、フランス式を推進してきた技術者たちも一掃されたということだ。この事件をきっかけにして明治14年に「地図課服務規則」が見直され、地図を国家機密として取り扱うことが始まった。さらに陸軍が統括する三角測量網の整備が、全国規模で行なわれることとなった。

三角測量に関するエピソードとしてよく知られているのは、困難な高い山での測量であろう。日本アルプスを目指す近代登山が始まった時期と、陸地測量部の三角測量網が各地の高山に及んだ時期とがほぼ重なっていた。したがって、この期の登山に使えた地形図は存在せず、登山者は自分たちが山に登って得た情報を既成の地図に載せ、アレンジしたものを使っていた。12章から14章は、明治26年の穂高岳における館潔彦とウェストン、明治40年の剱岳の測量を巡る柴崎芳太郎と登山者たちとの関係が描かれるが、特に目新しい話はないようである。

日本アルプスの五万分の一地形図が発行された大正の初めには、日本アルプスはすでに登り尽くされ、次なる対象へ登山者は目を向けていた。地図を使う側の登山者にとって地形図の恩恵として代表的なものは、木暮理太郎による詳細な研究「秩父の奥山」や「利根川水源地の山々」や、東京の各所から見える山々を正確に同定できたことで、これは疑いなく「陸測五万分の一」が利用できたためである。一方で北海道の山はまだ原始のにおいが漂っていた。大島亮吉がヒグマの足跡をたどってトムラウシ山に登ったのは大正9（1920）年7月。西側の最高点には完全な形で三角櫓が立っており、測量隊が3年前の9月に登ったことが杭に記されていた、とある。このとき大島が持参した地図は、二十万分の一「北海道実測切図」を小泉秀雄が集成して載せた『山岳』12年―2・3号の付図である。北海道の正式地形測量は遅く、明治40年代に始まり、陸側五万分の一の発行は大正10年代からである。

16章は、三角測量に従事した技術者たちが内部雑誌『三五会々報』に書き残したエピソードなどを集めた「技術者たちの日常」。地図は万人が利用するが、その製作過程や苦労は外部のものには分からない。著者としては、同業の先輩たちの苦労話をここに載せておきたかったのだろうか。とはいえ、日本本土での地図作りは未知の解明などではなく、地図化のための作業であり、ルーティンワークに近いものである。地図製作上に限っても、より興味深い話はほかにいくらでもありそうだ。例えば、インド測量局によるヒマラヤや中央アジアの地図作り、探検と一体になった欧米人の極地地方の地図作りなどは、さぞ興味深かったろうと思う。陸地測量部の行なった地図作りのなかでは、戦地での迅速地図や作戦地図作りが興味を惹くであろうと思う。

最終の19章では、戦後の大変化について触れている。明治10年代からおよそ70年近く地形図を管轄した陸軍参謀本部が敗戦によって解体され、新たにアメリカの指導を受けて、地形図製作機関は内務省地理調査所へと衣替えをする。アメリカ軍は日本本土の空中写真撮影をB29にカメラを積んで戦争期間中から始めており、それを元に新たな2万5000分の一地形図作りが始まることとなる。地理調査所は建設省所管となり、国土地理院と名を変える。もはや職人技の技巧も、規定に縛られた堅苦しい作業も行なわれなくなり、地図製作そのものも民間地図会社に委託することとなる。さらに現在、国土地理院が進めているのは「電子国土基本図」であり、今後はこの地図を主体にして、紙に印刷された地図の維持管理は二の次になるらしい。そうなれば〝地図をつくる男〟たちは登場せず、「かきたてるもの」がさらに喪失してゆくであろう、という。（児玉　茂）

京都外国語大学附属図書館／
京都外国語短期大学附属図書館　編

『知られざる世界への挑戦』
―航海、探検、漂流を記した書物百選

京都外国語大学附属図書館／
京都外国語短期大学附属図書館
2012年10月刊、A4判、
231ページ、2000円

京都外国語大学は平成25年に創立65周年を迎えるにあたり、同大学所蔵の稀覯書の展示会を企画した。展示会に出品された稀覯本の目録が標記の書物百選である。その目録の巻末に記された「所蔵目録　本学図書館の主な航海記、探検記、漂流記」

によれば、この分野は一部の例外を除き、１５００年から１９２０年までの書物２２９点が同大学の図書館に所蔵されている。その内の１００点が選ばれて展示され、本書が編集発行されたのである。

そして、選ばれた書物の紹介がそれぞれ見開き2ページに収められている。そこには著者や書物の主人公の略歴および本の概略が、和文と英文を並列して簡潔に述べられている。見事な版画や写真、スケッチ、当時の人々にとっては珍しい地図、背表紙を入れて撮られた書影などが入っている。実に浩瀚な目録である。図録といってもいい。

頁を繰っていくと、書物の中から浮かび上がってくる航海者や探検家、漂流者たちの息遣いが聞こえてくるような思いに駆られる。邦訳書で読んだものもあるが、堂々とした原本や祖本（流布本の元になっている本）の古びてはいるが、それ故に生々しい装丁、過ぎた歳月にセピア色に変色した各ページから、邦訳書にはない当時の凄まじかった航海や探検、漂流の有様が沸々と湧き立っている。本書の中に手を突っ込んで各書のページを繰りたいと思うが、それは叶わぬことである。今回の目録を見ても、非常に高価であっただろう、それも同じ分野の稀覯本を多数揃えるには大変な努力を要しただろう、と容易に想像される。実は筆者は２０１２年の秋にこの稀覯本展示会を東京で見たので、本物の持つ迫力に圧倒された。

本書は航海、探検、漂流の項目に分かれている。

「航海」の部には50点が入っている。主なものをあげると、フェルナンド・コロンブス『コロンブス伝』、ガマ『バスコ・ダ・ガマのインド航海日誌』、ピガフェッタ『マゼラン最初の世界周航』例えばこの本は「帰国直後フランス語やイタリア語で刊行し――１８００年になり草稿がミラノの図書館で発見され、再びフランス語で翻訳され」たのである。掲載本はこのときの翻訳本である。トルセリーニ『聖ザビエルの生涯』、ノルデンショルド『ヴェガ号航海記』全2巻、ナンセン『フラム号航海記』全2巻などがある。

「探検」の部には42点が入っている。マルコ・ポーロ『東方見聞録』この本については「祖本は早くから失われており、写本、石版本はヨーロッパ各地に１４０余種あり、50余の文書館などに所蔵されているとのことである」本書は１５５６年、パリで発刊されたものである。リヴィングストン『伝道旅行記』本会も所蔵しているウインパー『アンデス登攀記』全2巻とウェストン『極東の遊歩場』とスタイン『古代中央アジア踏査記』。アムンゼン『南極点』全2巻、ルイスとクラーク『探検記』、ベル『サンクトペテルブルグからアジア各地への旅行』全2巻などがある。

「漂流」の部には8点が入っている。すべて日本人の体験談である。大黒屋光太夫ほか口述　桂川甫周注誌『漂民御覧記』、

津太夫ほか口述　大槻玄沢撰『環海異聞』全5冊、中濱（ジョン）萬次郎口述　河田維鶴（小竜）撰『漂巽紀畧』全4冊などである。

それぞれのできごとを年代順に見ると、次のようになる。

13世紀より16世紀の間は、1270年のマルコ・ポーロの『東方見聞録』から1585年のグァルティエーリ『天正遣欧使節記』までの14点。

17世紀より18世紀の間は35点。『ウイリャム・アダムス（三浦按針）からの二つの手紙』から1798年のナポレオン『エジプト誌』全20巻まで。

19世紀は44点で、1803年のクルゼンシュテルン『世界周航記』から1988年のハリマン『アラスカ』までである。

20世紀は7点で、スタイン、アムンゼン、スコットなどの本である。合計100点が掲載されている。

19世紀の本が最も多く、この時代は多くの航海、探検が行なわれ、記録の出版も容易になり、またこれらの書籍も比較的入手しやすくなったからであろう。20世紀の書物が少ないのは、この時期の本はまだ稀覯本には入らなかったからであろう。

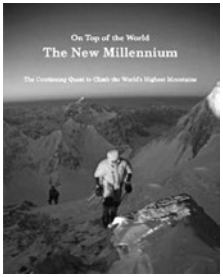
本書を通読するにはエネルギーがいる。各本について記された概略を読むことになるのだが、100点ともなればかなりの分量である。だが、ページを繰っているとますます魅了され、何日かをかけて読了することになる。座右に置いて、絵やスケッチ、写真、地図に見惚れながら読みたい図録である。

なお、本書の発売元は「新異国叢書」などを出版している雄松堂書店である。

＊文中、同一書名で複数巻あるものも1点としている。

（田村俊介）

Richard Sale, Eberhard Jurgalski, George Rodway
On Top of the World The New Millennium
The Continuing Quest to Climb the World's Highest Mountains



Snowfinch Publishing　2012
248 pp.　22×28cm　£30

19世紀から始まるヒマラヤ高峰14座の発見、偵察、本格的遠征、初登頂、その後のたくさんのバリエーション・ルートの初登攀など、100年以上の登山史の凝縮したエッセンスだ。峰ごとの初登頂・初登攀リストや、2011年末までの登頂者の人数も記している。写真が豊富であり、なかでも各峰の北面や

南面からの写真に、初登頂とたくさんのバリエーション初登攀ルートがカラーで描いてあり、見比べながら眺めているだけでも楽しい。

本書は「序説」に続いて「アンナプルナ」、「エヴェレスト」から最後に初登頂された「シシャ・パンマ」まで14座が続き、「２０１１年とその後の10年」「８０００ｍ峰の各種データ」で構成されている。

著者Richard Saleは２０００年に"A history of the 14 8000m, the world highest mountains"を刊行しており、登山史などは他書でも見ることができる。ここでは紙数の関係で初登頂とその関連情報に留め、「新世紀最初の10年」を紹介する。

アンナプルナ（８０９１ｍ）

ネパール政府からダウラギリとアンナプルナの２つの峰の登山許可を取り付けたフランス隊は最初、ダウラギリに登頂ルートを探ったが見つからず、アンナプルナに目標を定めた。北面から登頂ルートを延ばし、１９５０年６月３日、エルゾーグ隊長とラシュナルが人類初の８０００ｍ峰初登頂に成功した。

日本で登山家を魅了し、世界でもベスト・セラーになったエルゾーグ隊長の初登頂記『処女峰アンナプルナ』に関し異論を述べている。一緒に登頂したラシュナルの日記、テレーやレビュファの伝記など遠征そのものに焦点を当てた報告は、戦時中にドイツ戦線で戦っていた将校のエルゾーグに、アルプスで実績を積んだガイドたちを束ねさせたことに問題があった、と指摘する。ダウラギリかアンナプルナか、偵察に時間を掛け過ぎたためアタック態勢に入るのが遅れたことなども、山のベテランたちとの間に違和感を生み、エルゾーグの報告書は綺麗ごとばかりで、ポーターが墜落死したことなど無視している、と非難している。

〈２０１１年末までの登頂者〉主峰（８０９１ｍ）＝１９１名、中央峰（８０５１ｍ）＝15名、東峰（８０１３ｍ）＝19名

〈新世紀最初の10年〉

本峰は前世紀に初登頂、初登攀合わせて11ルートが登られているが、今世紀に入って02年５月の東稜～北壁トラバース、08年５月の東稜～東峰～北壁トラバースと、東稜～北壁トラバースなどがある。中央峰では04年５月の北壁・バリエーションがあり、東峰では07年10月、08年５月の新登攀がある。

エヴェレスト（８８４８ｍ）

英国は戦前の１９３８年に第７次遠征隊を送り出し、戦争で中断後の１９５１年に偵察隊が入った。翌52年、スイス隊が許可を取って春に８６００ｍ、秋に８１００ｍまで迫ったが強風、寒さ、酸素マスクの不調などで敗退した。このスイス隊の失敗を反省材料として克服し、軍人ジョン・ハント隊長の下、ネパール側からサウス・コル、南東稜経由で53年５月29日、ヒラリーとテンジンが初登頂に成功した。同じルートをたどり田部井淳

子が１９７５年５月16日、女性の初登頂者となった。

〈２０１１年末までの登頂者〉　５６４３名、その内女性登頂者＝３２１名

〈新世紀最初の10年〉

前世紀に18ルートの新登攀がなされているが、今世紀に入って04年５月、中央～北面～北東稜、09年５月、南西面などの初登攀があるが、いまだたくさんのバリエーション・ルートが残されている。

世界最高峰として公募登山では人気が最も高いが、90年代から倫理観の欠如が目立ち始め、持ち主が頂上アタック中やＢＣに休養下山中の空きテントに忍び込んだり、食糧や酸素ボンベにも被害が及んでいる、と具体例を挙げている。また、スキーやパラパントでの下降もあり、特大ドーム・テントの中にテーブルが６台、その上にパソコンや電子機器が置かれた最前線基地本部の様子を写真で見ることができる。

ナンガ・パルバット（８１２５ｍ）

１９３９年、英独戦争の開始で、折からナンガ・パルバットに遠征中のハインリッヒ・ハラーとピーター・アウフシュナイターはチベットに脱出した。チベットに匿われた生活体験がハラー著の『チベットの七年』である。

終戦後の１９５３年、ヘルリッヒコッファーが率いるドイツ・オーストリア隊が入った。登山経験に欠ける隊長に同調できず隊員が隊を離脱するなどの混乱のなか、Ｈ・ブールは単独で酸素マスクを使用せずに北東稜から７月３日、初登頂に成功した。１９６２年、再びヘルリッヒコッファー隊が入り、ディアミール壁から登攀に成功。１９７０年にもヘルリッヒコッファー隊のメスナー兄弟がルパール壁から初登攀に成功しながらも、下山途中に弟が力尽きるなど、多くの犠牲者を出した。〝魔の山〟と呼ばれるほど恐ろしさを秘めている。

〈２０１１年末までの登頂者〉　３３５名

〈新世紀最初の10年〉

前世紀には14ルートの初登頂、初登攀があるが、今世紀の05年、ルパール壁中央岩峰や09年、北西バットレスの初登攀などを含め多くの登攀活動が続いている。急峻な氷壁や氷と岩のミックス・ルートを、アンザイレンもせずに登るクライマーの姿に肝を冷やす。

Ｋ２（８６１１ｍ）

戦前は英国、イタリア、アメリカ隊などが入った。１９５３年、米国のハウストン隊はＣ８を設営しながらも、悪天候と高山病隊員の救助のため登頂を中止。翌54年、Ａ・デジオ隊長率いる18人のイタリア隊は隊員１名を肺炎のため失いながらも再起し、７月31日、コンパニョーニとラチェデリが南東稜から初登頂に成功した。

しかし、この成功の陰に最後の荷上げをした仲間への裏切り

があることが、最若年のW・ボナッティの証言によって発覚した。登頂隊の2人は、登頂前日にボナッティに約束した位置にアッタック・テントを設営せず、下から見えない少し上の方にテントを設営した。そして、この2人は荷上げのために登ってきたボナッティとハイ・ポーターのマハディーを寄せ付けず、指定した場所に酸素ボンベなど荷上げした物資をデポして下山するように命じた。荷上げした2人は、ツエルトもなしのビバークを強いられた。翌朝、ビバーク地点から2人が下山するのを確認してから、登頂隊員はボナッティたちのビバーク地点に下り、酸素ボンベなどデポされた物資を持ってアッタクに出発した。

登頂報告では、８４００ｍで酸素が切れたのはボナッティたちがビバーク中に酸素を使用したから、と述べているが、酸素マスクは登頂隊が持って上がっており、ボナッティたちは酸素を使う術がなかった。長い係争ののち、登頂者たちは酸素マスクを着けて登頂したことも認めた。

〈２０１１年末までの登頂者〉　３０６名

〈新世紀最初の10年〉

前世紀に13の初登頂、初登攀ルートが開拓された。世界で最も困難といわれる高峰だけに、クライマーたちにとって魅力があるのだろう。07年には西面からの初登攀に成功しているが、新世紀の10年間、世界各国から精鋭登山隊が初登攀に挑戦している。

チョー・オユー（８１８８ｍ）

１９５２年、英国は翌年のエヴェレスト遠征隊の登山用具や酸素ボンベなどの実用試験のため、この山に登山隊を送り出した。隊員たちはナンパ・ラを越えチョー・オユーの初登頂に熱意を燃やしたが、50年に中国がチベットに侵攻後、チョー・オユー周辺の国境線が確定していなかった。国境問題でトラブルを起こすと翌年のエヴェレスト登山許可に支障をきたす懸念があり、登頂行動は諦めた。

本格的には54年秋、当時としては例外的な少人数の隊員３人のオーストリア隊が入り、遅れてスイス隊がＢＣに到着。オーストリア隊は中国兵の出現に驚き、また、登頂ルート開拓中に強風でテントが飛ばされそうになり、ティッヒーが雪穴に手を入れて支えたために凍傷になった。凍傷の手当てを受けたスイス隊から合同登山隊結成の申し出があったが、オーストリア隊はスイス隊が高所順応不十分として申し出を受け付けず、直ちに登頂活動に入った。

物資調達のためナムチェ・バザールに下っていたオーストリア隊のサーダー、パサン・ダワ・ラマは急遽呼び戻され、ノン・ストップでＣ４（６９００ｍ）まで駆け上がってくるなどの活躍もあり、10月19日、ヨヒラー、ティッヒー、パサンの３人が初登頂した。８０００ｍ峰としては初めてのポスト・モンスー

ンの登頂である。

〈2011年末までの登頂者〉　3053名

〈新世紀最初の10年〉

前世紀に15ルートの初登頂、初登攀がなされたが、今世紀に入っても06年10月、南西面（左）と09年5月、南面の初登攀がある。

頂上からスキーやスノーボードによる滑降、パラパントでの下降を楽しんでいる人たちもいる。高所医学の研究としてBCでの肺水腫、脳浮腫の原因と機序を解明し、05年から06年にかけて頂上にテントを設営し、登頂した協力者から採血するなど、意欲的な医師たちに活動の場を提供している。

いっぽう06年秋、登山隊で賑わうBCから一望できるナンパ・ラをチベットからネパールに向かう隊商に向かって中国兵が銃撃し、最後尾のチベット女性を殺害、同時に2人に致命的な重傷を負わせた。ちょうどBCに居合わせた100人以上の外国隊登山者が見ている前での事件であり、隊商に加わりながらBC近くに引き戻された、あどけない子どもたちや、射殺された女性が雪上に放置されている写真は、あまりにも痛ましい。

マカルー（8485m）

1954年春にはアメリカ隊やニュージーランド隊も入ったが、登頂ならず。秋には、55年のネパール側からの許可を取ったフランス隊が偵察に入り、翌年5月15日、北面から初登頂に成功し、その後2回にわたって隊員全員が登頂に成功した。

当初の初登頂報告書の登頂写真には、酸素マスクを着けた隊員の顔写真が載った。全員で初登頂を勝ち取ったことを強調するため誰の顔か分からないよう配慮したが、この著書では、頂上に足を掛ける登頂隊員の笑顔を見ることができる。

〈2011年末までの登頂者〉　361名

〈新世紀最初の10年〉

前世紀に16ルートの初登頂、初登攀がなされた。新世紀に入って、各国からのマカルーⅡ峰や本峰の冬季登攀などで賑わった。09年2月、フランス隊は極寒と強風のなか冬季初登頂に成功し、10年5月、ウクライナ隊が南面に新たな登攀ルートを開いた。

カンチェンジュンガ（8586m）

19世紀末から英国、スイス、ドイツ、ニュージーランド隊などが挑戦したが、登頂に至らなかった。1954年の英国の偵察隊に続いて55年、C・エバンス率いる本隊は、モンスーンが5日後に迫り来る予報を得て、南西面からG・バンドとJ・ブラウンが5月25日、初登頂した。ネパール政府との約束どおり頂点には立たず、雪の少し盛り上がった数m手前で立ち止まり、翌日登頂した仲間も同様に約束を守った。

西峰ヤルンカンは1973年5月14日、南西稜経由で京都大学学士山岳会の上田豊（あげたゆたか）、松田隆雄が初登頂した。下降時にビ

バークを余儀なくされ、松田は落石で落命し、上田は仲間に救助された。

〈2011年末までの登頂者〉 本峰（8586m）＝283名、西峰（8505m ヤルンカン）＝53名、中央峰（8473m）＝27名、南峰（8476m）＝26名、最西峰（7903m カンバチェン）＝15名

〈新世紀最初の10年〉

前世紀に本峰は12ルート、また西峰は6ルート、中央峰は4ルート、南峰は5ルート、最西峰は1ルートの初登頂、初登攀で大いに賑わった。しかし、今世紀に入ってからは世界第3位の高峰にもかかわらず、03年5月にヨーロッパの合同隊が入山したのみ。彼らは南西壁中央部の初登攀に成功している。

マナスル（8163m）

1952年、日本隊があらゆる角度から登頂の可能性を偵察した。53年、日本隊は東面から入り第9キャンプまで設営して7750mに迫ったが、暗闇での下山を懸念し、残す登頂ルートを確認して下山した。54年に再挙したが、サマの村人たちが「前年の遠征隊が帰途についた後、悪天候が続き大きな雪崩が僧院を破壊し、天然痘などが発生したので」神の精霊が宿るマナスルへの登山に抵抗した。55年は現地での揉めごとを解消するお墨付きを入手したが、登山許可証が船便で日本に送付されたため、遠征隊を結成するのに間に合わなかった。

サマ村では多少の抵抗もあったが、日本隊（日本山岳会会長・槇有恒隊長）は53年のルートを使って最終第6キャンプ（7800m）から56年5月9日、今西寿雄とギャルツェン・ノルブが初登頂し、2日後に加藤喜一郎、日下田実が登頂した。互いの登頂姿を16㎜カメラに収めたが、頂上で体の脇に置いたカメラが南面を転がり落ちるのを見て、2人は恐怖を感じた。

〈2011年末までの登頂者〉 521名

〈新世紀最初の10年〉

前世紀に10ルートの初登頂、初登攀があった。新世紀に入って00年春、フランス人による北東面ダイレクト・ラインのソロ登攀は失敗に終わったが、01年5月22日、ウクライナ人による南東稜経由の初登攀、06年5月、カザフスタン隊が北東面中央部の初登攀に成功している。

ローツェ（8516m）

1955年秋、N・ディレンファース率いる合同隊は西面から失敗、56年5月18日、スイス隊が西面から初登頂に成功した。また、この隊はローツェ初登頂後エヴェレストに向かい、エヴェレストの第2、第3登を果たした。

主峰が登られた後、ローツェ・シャール（8382m）が注目を集め、1970年にオーストリア隊が初登頂した。

〈2011年末までの登頂者〉 本峰（8516m）＝461名、ローツェ・シャール（8382m）＝24名、中央峰（8410m）

＝9名

〈新世紀最初の10年〉

前世紀に主峰で4ルート、ローツェ・シャールで4ルートの初登頂、初登攀を数えるが、新世紀に入って、中央峰は未踏の最高峰ということで登山者の注目を集めた。01年、韓国、ロシア、スペインの3隊が入山し、ロシア隊が5月23日に初登頂した。また、ローツェ・シャールは07年5月に、南面から韓国隊が初登攀、主峰は10年5月、カザフスタン隊がサウス・コル～西面経由の初登攀に成功している。

ガッシャブルムⅡ峰（8034m）

1956年、オーストリア隊は悪天候や大雪でC1が雪崩に流され、C3（7150m）では高所ポーターに荷上げを拒否された。その結果、自分たちだけでは重荷の酸素ボンベを担ぎ上げることができなかった。不安定な雪に危険を察知し、また、1人がスリップした場合に全員が巻き込まれることを避けるため3人はアンザイレンをせずに登高を続け、7500mでビバーク後、南東面経由で東稜から7月7日、F・モラヴェック隊長を含む3人が初登頂した。ビバーク後に8000m峰の初登頂に成功した初めての登頂隊となった。東峰は1983年6月に初登頂された。

〈2011年末までの登頂者〉　本峰（8034m）＝930名、東峰（7758m）＝5名

〈新世紀最初の10年〉

前世紀に主峰で5ルートの初登頂、初登攀があった。今世紀は、00年にスペイン人が8000m峰12座目を登頂後、下山時に古い固定ロープが切れた悲劇から始まった。05年、ノルウェーとスウェーデン人がスキーで下降に成功し、07年、イタリア・スペイン合同隊は北東面から取り付き、北稜経由で7月に初登攀した。10年末から11年にかけてカラコルム全域が強風と極寒に襲われたが、イタリア人3人は150m雪崩に流されながらも雪面に残された1人が2人を助け出すなど苦戦の末、2月2日に登頂している。これはカラコルムにおける初冬季登頂となった。

また東峰では06年7月、ドイツ・スイス隊9人の内3人が、アルパイン・スタイルで北東稜の初登攀を果たした。

ブロード・ピーク（8051m）

1957年、オーストリア隊は遠征隊の結成や登山中の隊員間のトラブルを克服して、西岩稜から北稜経由で6月9日、隊員4人全員（シュムック隊長、ウインターシュテラに続き、ディームベルガー、H・ブール）が初登頂に成功した。前進キャンプの写真で、たくさんの「雪輪の大きいトンキン（竹）ストック」、木製シャフトのピッケルやポール支柱のテントなどを見ることができる。

中央峰（8011m）には1975年7月、ポーランド隊が

初登頂した。

〈2011年末までの登頂者〉　主峰（8051m）＝404人、中央峰（8011m）＝17人

〈新世紀最初の10年〉

前世紀には主峰の初登頂、初登攀が3ルートあり、中央峰も同じく3ルートであった。新世紀になって03年、スペイン隊や韓国隊が入り、05年7月にカザフ人がアルパイン・スタイルで南西面を初登攀した。05～06年、07～08年の冬季にイタリア隊が入山するなど毎年、登山隊を迎えている。08年6月、スロバキア人が単独で西岩稜から西面経由で、7月にロシア人が北西面から北稜経由で初登攀している。その後、08年暮れや10年暮れからも登山隊を迎えている。

ガッシャブルムⅠ峰（8080m）

別名ヒドン・ピークと呼ばれる。20年間、登山隊が入山しなかったが、1958年、アメリカ隊が7月5日に南東稜経由で初登頂した。1975年、P・ハーベラーとR・メスナーの2人は200kgに軽量化した荷物でコンコルディアまで入り、8月、アルパイン・スタイルで北西面から初登攀した。

〈2011年末までの登頂者〉　332人

〈新世紀最初の10年〉

前世紀には12ルートの初登頂、初登攀が記録されており、多方面から登頂された。今世紀に入って08年にロシア隊が8月、アルパイン・スタイルで南西面（左寄り）から初登攀をしているが、その他の登山隊は取り付いていない。

ダウラギリ（8167m）

1950年、フランス隊が偵察したが登頂は困難と判断し、アンナプルナに転じ同峰の初登頂を成した。53年、スイス隊が本格的に取り組み、その後55年ドイツ・スイス隊、56年アルゼンチン隊、58年スイス隊、59年オーストリア隊が挑戦したが登頂はできなかった。60年春、前年のオーストリア隊が悪天候によって7800mで撃退された北東稜をたどり、スイス隊（ドイツ人、オーストリア人各1人を含む）が頂上に向かった。注目されるのは、スイス隊が荷上げのためにヒマラヤ初の空輸作戦を実施したこと。パイロットは無傷ながら遂に着陸に失敗したが、小型飛行機を主峰の北東鞍部に何度も着陸させ、隊荷を運んだ。

5月13日、シェルパ2人を含む6人が初登頂し、10日後にも2人が続いた。登頂成功でK・ディームベルガーはH・ブールに続いて8000m峰の2峰に初登頂したことになり、シェルパのギャルツェン・ノルブもマナスルに次いで8000m峰2つの初登頂者となった。なお、ギャルツェン・ノルブはマカルーが初登頂された翌日にマカルーに登頂しており、3つ目の8000m峰頂上に立った。著者は1982年12月13日、小泉章夫とニマ・ワンチュが冬季初登頂したとしているが、ネパールで

は秋冬期との解釈もある、と注意書きしている。

〈2011年末までの登頂者〉　448名

〈新世紀最初の10年〉

前世紀に初登頂、日本4隊を含む9ルートの初登攀があった。困難で危険なためか、新世紀を含めて17年間新登攀なし。01年、経験豊かな日本人が東面で行方不明になり、8000m峰14座を目指すスペイン人も滑落死した。また、日本隊の2人とシェルパ3人は頂上手前のコブを頂上と思い込み、真の頂上に立たずに下山したことを、同じころに同じ場所に登り着いたドイツ人女性から指摘された。

シシャ・パンマ（8027m）

外国隊に登山許可を出さない中国では1960年より自ら偵察を開始し、最後に残された8000m峰は64年、大人数で編成した中国隊の内10名が5月2日、北面から初登頂した。1980年、チベットの山は外国人にも解放され、81年、田部井淳子が女性として初登頂した。中央峰は82年10月10日、原真、駒宮博男、小西浩文の3人が初登頂している。

〈2011年末までの登頂者〉　本峰（8027m）＝301名、中央峰（8008m）＝828名、西峰（7966m）＝5名

〈新世紀最初の10年〉

前世紀には初登頂、初登攀が10ルートを数える。1992年、中国は冬期登山を解禁した。新世紀に入り02年、韓国隊が南西面経由西中央バットレスから初登攀、同年、ロシア隊は下部のトラバース後東稜経由で初登攀をしている。03年暮れからの厳冬期を狙うイギリス隊、04年1月、零下50度Cといった極寒に耐え7700mに達しながら後退したイタリア隊、そして同年12月11日のフランス人単独の登頂、06年スペイン隊の下部トラバースの新バリエーションなど賑わっている。また、西峰には00年11月、スペイン隊が南西面直登ルートから初登攀している。

2011年とその後の10年

2011年初め、モロ、リチャーズたちによるガッシャブルムⅡ峰冬期登攀は、今後のバルトロ山域の冬季登山につながるだろうが、11年末からのモロのブロード・ピーク冬期登攀計画を断念させた、パキスタンのヘリコプター代金の高騰が気になる。11年、3人のアメリカ人が21時間で一気にエヴェレストとローツェの2峰に登頂し、同年暮れ、スロベニアの大学隊がナンガ・パルバット入りするなど、まだまだ違った登山形態がありそうだ。今後はギャチュンカン、アンナプルナⅡ峰、GⅢ、GⅣなど7000mの高峰で多様な登攀が展開されるだろうと見ている。

〈8000m峰の各種データ〉　2011年末までに14座に登頂したメスナー以下28名の詳細、10～13峰登頂者、4峰以上に登った女子、女子初登頂と無酸素登頂者、14座の登頂者・遭難者・死亡率など多数の一覧表がある。

（南井　英弘）

追悼

吉村　公一さん

よしむら　こういち
（1933～2011）
会員番号 9800

私の最も親しい山仲間の一人であった吉村さんは、平成23年3月28日、黄泉の国へと旅立ってしまった。肝臓癌の手術にも成功し、前年秋の同志社大学山岳会の総会に出席され、お元気なご様子であった。その後、通院しながらも社業に復帰されていると聞いていた矢先のできごとであっただけに、誠に残念であり、寂しい限りである。

私とは、学年では1年先輩であったが、山岳部に入部されたのは、私が入部して間もなくの夏のころであった。

初めての夏山分散合宿で、吉村さんと一緒になった。私を入れて4名で、リーダーは3年生の乾先輩であった。鹿島槍から針ノ木、北葛岳を縦走し、七倉岳からいったん高瀬渓谷に下り、再び餓鬼岳に登り、唐沢岳の岩場を拓く合宿となった。

出発前に、エベレストが英国隊により初登頂されたニュースを知り、一抹の寂しさを感じていたときであったから、この合宿のかったるい山歩きには、私はいささかうんざりしていたが、吉村さんは静かに黙々と歩き続けていた。その姿が未だ記憶に残っている。先輩が私に重い荷を担がせたり、小言を言うと小声で「何言うとるんやろなぁー」などと言い、「高校時代のことは、もう言わん方がいいでー」と、忠告してくれたりしたものであった。高校時代、厳冬期に登った天狗尾根は、今登っている赤倉尾根からよく見えるので、その話をしたまでのことであったが、先輩にはお気に召さなかったようだった。

同志社大山岳部のリーダー格の3名と関大OB一人を含む4名が、鹿島槍・大冷沢の止め岩を越える大雪崩で遭難する大事故（1950年12月末）があった。乾先輩は雪解けの翌年、新人として雪崩から遭難者たちを掘り出す、実に苦い経験をされていた。今思えば、そのことがトラウマとなっていたのだろう。だから私に辛く当たったのかもしれない。吉村さんも、そのこ

とをよく理解していたようだった。

吉村さんは、美しい鹿島槍の双耳峰の姿を見ながら「いい山やなぁ」と、視線はいつも遠くを見ていた。この山行が縁で以降60年、友人としてのお付き合いが始まったのである。初めての印象が、その後のすべてを凌駕（りょうが）することが人生にはあるものだ、と思う昨今である。

この山行の後、吉村さんと行動をともにする機会は少なかった。彼の学生時代の山歴は地味で、夏山合宿には参加していたが、冬山合宿には一度だけ参加した。１９５５年3月、私と同僚の杉本和哉君が後立山全山縦走に向かうとき、白馬サポート隊として栂池から乗鞍岳に来て、出発を見届けていた。

吉村さんがどんな思いで山登りをしていたか、大学に入る前の中学校や鴨沂高校時代のことは知る由もないが、80年誌の編纂の折、彼が綴った一文によると、小学校のときに訪れた上高地の印象が登山の始まりであったこと、そのとき受けた自然からの印象があまりにも強く、中学校時代には、高名な登山家である森本次男先生の薫陶を受けたことが山岳部に入った動機であったと語り、子どものころの指導者の影響力の大きさについて論考している。

2年生の終わりごろから、私は遭難で打ちひしがれた部の建て直しに躍起になっていた。そのころ彼は「やり過ぎたらあかんでー」と言いながら部室にはよく顔を出し、部活動を静かに見つめていた。

私がどこのゼミに入るか考えあぐねていると「競争は10倍以上になるが、僕と同じゼミに入らんか」と勧めてくれたので、中小企業経営論の竹林庄太郎ゼミに入り、吉村さんと同じ道を進んだ。このころ私はヒマラヤ遠征に夢中になり、学校の教授室を歩き回っていた。吉村さんは「アホなことは、やめとき」と大反対であった。実現の見込みのない、不確実なことに手を染めることは、彼の信条に合わなかったものと思う。在学中に、学術調査を含めヒマラヤ登山について2度にわたり渡航審議会に申請したが、外貨割り当てを得ることはできなかった。「早く就職を考えたらどうや」というのが親友吉村さんの助言であったが、このころは聞く耳を持たない私に大変不満そうであった。

卒業してすぐ父親の経営する吉村石材工業㈱に入社し、将来を見据えた企業の変革に努め、父親を助けながら石材専門会社から土木・建築の分野への改革を進めておられた。この苦労は大変なもので、以降25年間、山岳会や山登りの活動には姿を見せず、社業に専念され、大改革に取り組んでおられた。

このころ、学生時代からヒマラヤ遠征計画で苦楽をともにしていた仲間たちと、多くのヒマラヤ遠征が実現していった。アピ（１９６０年）、サイパル（１９６３年）の初登頂をはじめ、アンデス・アマゾン計画（１９６５年）や１９７０年のダウラ

ギリ主峰の登頂など、さまざまな遠征が行なわれたが、吉村さんは自社の経営に傾注していたためか、顔を出すことはなかった。このように、集中してことに当たる、一貫した行動は経営の面で特に際立ち、志を貫いていく頑固ともいえる強さがあった。

その結果、見事に体質転換と業容の拡大に成功され、京都屈指の建設業者としての今日の地位を確立された。１９７２年から亡くなるその日まで38年間、代表取締役として社業に専念され、京都府内には優れた作品が数多く残されている。

１９８１年の四姑娘山（スークーニャンシャン）の初登頂を契機に中国との関係が本格化し、引き続き私が計画中であったナムナニ峰登山を実施する過程で吉村さんは復帰され、そのときの思いを次のような一文に残している。

１９８５年のナムナニは、私が山岳会に貢献できた最初の遠征だった。それだけにとりわけ大きな思い出となっている。この山は平林君がアピの頂上から遠望して以来25年間、思い描いていた執念の山域であったから１９８０年初頭から中国にアプローチしていた宿願の一座だった。ところがナショナルチームの規模でやりたいという中国側の要望もあったので、同志社と京大、中国登山協会との合同で実施することになったのである。同志社はこの合同登山の組織化について常に指導的な役割を担ってきた。その際、実行委員会や後援会が組織され、この計画を支える役割を同志社および京大それぞれのＯＢ会が担う形を整えていったのである。

登山では、山頂に立つことが最終目的なのは当然の事なのだがまずは麓にいかないことには何も始まらない。特に外国人の入域困難なエリアになると登山許可の取得といったことから始まり、いかに麓にたどり着くかという側面が大切になる。同志社は伝統的にそうした方面の戦略は得意としてきたこととはいえ、大きな派遣組織としての後援会を立ち上げて取り組む方法は中国側との関係も含めナムナニ計画で確立していったものでもあった。

このナムナニの計画途上の、１９８３年から同志社大学山岳会会長を務められ、ナムナニ以降も派遣される数回の海外登山に、積極的な支援に努められた。特に１９８８年、中印国境のマクマホン・ライン上に位置するカント峰の登山には自ら総隊長を務め、初登頂を成し遂げられた。またその後、カムチャツカ半島に戦後初めてという日ソ合同登山隊を派遣するなど、数々の支援を行なっている。この間の１９８６年2月、日本山岳会に入会され、京都支部参与を務めたほか、京都府山岳連盟の顧問として活躍されていた。

１９９９年5月、私が欧州駐在から戻ると同時に吉村さんから山岳会長を引き継いだ。引継いですぐ創部70周年の記念式典を持ち、吉村さんをはじめ歴代会長の労を犒（ねぎら）い、制作中であったビデオ『遠き山　旅する心』を完成させ、その内容を『山岳』第95年（２０００年）に掲載した。その後10年の歳月を経て、1人の部員だった部員数も大幅に増加し、80周年記念事業では『山　その大いなる旅』の記念誌を発行するなど、吉村さんが最も恐縮し、危惧していた部の建て直しも完結した。

１９９７年11月には、黄綬褒章受章、国土建設事業の功労によるものであった。

２００６年4月には、旭日双光賞を受章される。

２００９年11月には、三十有余年にわたる優良申告法人として、また同法人会の副会長を務め、大阪国税局長表彰を受けられた。

１９９７年以降、スイスやチベット、カナダはもとよりアドリア海3国をはじめ、珍しい僻遠の地への旅や船旅など、吉村さんを含む親しい私たち5～6人の仲間の旅は、十数年間続いた。その旅の思い出も含め、寂寥新たである。

多くの仲間とともに、在りし日の吉村さんを偲びたい。

合掌

（平林　克敏）

宮下　啓三さん

みやした　けいぞう
（1936～2012）
会員番号 5546

太平洋戦争が終わって4年目の春、慶応義塾幼稚舎（附属小学校）第57回の卒業記念アルバムには、私と彼がクラス仲間とともに写っている。このときから30年後、再会したのは日本山岳会のルームであった。

彼が入会したのは１９６３（昭和38）年。会では私より10年先輩であった。この前年、彼は穂高岳を徳本峠から見てみたいと単独で島々谷に入ったとき、坂倉登喜子、折井健一、中保（なかたもつ）氏らのちの三水会の創立メンバーと出会い、彼らに誘われて入会したとのことだった。紹介者は折井健一、鈴木郭之。

79年より海外連絡委員会のほか図書、書評、『山岳』編集などの委員会活動に積極的に関わった。とりわけ得意な語学力を駆使して内外の山岳文献の書評を精力的にこなしている。当時、同じ委員会仲間の一人であった山本良三さんは、昨年の会報「山」８１０号誌上で、宮下君の母校で行なわれた偲ぶ会の報告記事を寄稿、その中で彼の語学の天才ぶりを示すエピソードを紹介している。

72年の「山」３２９号における図書紹介欄掲載の近藤等著『アルプスの空の下で』を皮切りに２０１２年２月・８０１号の『BERG2012』まで、また『山岳』における図書紹介やアルパイン・ジャーナルなどの海外文献を含めての書評は、五十余冊に及ぶ。また、これとは別にDaniel Ankerの著『EIGER』には、槇有恒の『山行』にあるアイガー東山稜の初登攀を語る文章を、宮下君がドイツ語に翻訳した文が収められている。このドイツ語での記事は、日本人のアルプスでの活躍を証言するものとして現地では高く評価されていて、版を重ねているとのことである。彼自身、この仕事を日本山岳会への最大の恩返しのつもりと位置付けていた。それだけに、会員皆にこのことを知っておいてもらいたいとの気持ちが強かったようだ。この本は、もちろん図書室で見ることができる。なお、99年から4年間は図書担当理事、同好会である三水会、土曜会、そして緑爽会のメンバーでもあった。

緑爽会は95年9月に、それまで自然保護委員会に属していた会員を中心に発足した同好会で、彼は05年5月に参加した。これまでに「アルプスについての冬の夜話」「アルプスの山の娘ハイジの話あれこれ」「大島亮吉と深田久弥の残した大きな功績と小さな罪」「冬のアルプス物語」「ラスキンについて」などの話をしてくれた。そして12年2月、病の重いことをすでに前年宣告されていた彼は、「増えた山の名、消えた山の名」と題して講演してくれた際、その最後に「遺言を語ることができて嬉しく思います」という言葉でその話を締めくくった。「座ったままで講演や講義をするのは、僕の信条に反する」という言葉どおり、立ったままで話を終えた。亡くなる2ヶ月前のことだった。直立姿勢を崩さず、よく通る大きな声でユーモアとウイットに富んだ語り口は、聞く者を惹き付けた。この講演の内容は、昨年の『山岳』第１０７年に再録されている。

彼は１９３６（昭和11）年、東京に生まれ、65年、慶応義塾大学文学部大学院博士課程を修了。母校の文学部教授を経て名誉教授、文学博士。専攻は独文学、演劇、スイス文化史。97年には10代目の体育会山岳部長に就任している。

余談になるが、１９２０（大正９）年、初代の部長であり『登高行』創刊号の編集発行人でもあった私の父・信廣（会員番号６８０）とは、お互いに母校の文学部の教職にあったので、鹿子木員信のことなど山の話題を交わすこともあったようだ。ほ

かに三田文学会理事、日本独文学会、日本演劇学会会員でもあった。多数の著作や訳書があり、『スイス・アルプス風土記』『ウィリアム・テル伝説』『近代ドイツ演劇』などだが、最も読み応えがあるのは『日本アルプス　見立ての文化史』であろうと思う。これについては『山岳』第92年で岡沢祐吉氏の図書紹介に詳しい。宮下君曰く「日本アルプスの名前の由来を遡ると過保護な父母に危険な登山を禁じられていたイギリスの美術評論家ラスキンにたどりつく」と。『山岳』第１００年には、「山とスポーツ　ラスキンとアルピニズム、そして現代の登山の位相」と題した、ラスキン研究者の団体であるラスキン文庫での講演記録が掲載されている。また、『山と溪谷』誌上でも74年７月号、山村正光氏との対談「穂高岳と北岳の魅力を語る」をはじめ、89年５月号には、ラインホルト・メスナーの「生還―〝死の地帯〟８０００米峰を超えて」が彼の訳文で紹介されている。他方、彼自身が創刊号からの愛読者だったという山の文芸雑誌『アルプ』には、尾崎喜八、串田孫一、深田久弥、近藤信行・緑夫妻らの執筆陣に彼も加わった。彼の書いた「アルプス文学史」ともいうべき「アルプスを書く」の連載、69（昭和44）年１月・１３１号を皮切りに欧州の山々や身近なエピソードなどを綴った随筆は三十余篇に及ぶ。なかでも１８５号では、奥様との結婚条件に「山へ登るのは止めないこと、自分と一緒に行くとは言わぬこと」を約束させたが、意に反して彼女が山登りの楽しみを知ってしまったこと。その上にご長男に「穂高」という名を付けるという提案に賛成するまでになったことが、活き活きとした筆致で述べられている。さらに２１２号には、二人のご子息についての「わが子らに山の名を負わせて」と題する文章も掲載されている。この『アルプ』は彼の好みに合ったのだろうか、70年から定期的に開かれた「アルプ教室」なる催しには、前述の寄稿家諸氏とともに講師としても参加している。

彼は筆まめであり、彼から手紙をもらった人は多いはずだ。また、短時間に写生をするのが得意で、ＪＡＣでも会合に出席すると話を聞いているように見えるのだが、密かに似顔絵を描いていて、後でそれをプレゼントする様をよく見かけたものだ。新宿や地元藤沢にあるデパートのギャラリーでの個展は、常に盛況であった。彼自身「私の絵の原点は演劇と登山にある。劇場で役者の表情やポーズをメモ代わりに描くうちに、動きを伴う人間を描くのが楽しくなった。山に登れば、自然を前にして手を動かして心を静め足を休めることが出来て誰からも教わらない自分の絵の世界を得られたと思う」と述べている。また、「ゲーテの詩」だけの朗読を競うコンテストの審査委員長を初回の82年以来続けていた。演劇面でも96年４月、両国の美術館で前年、母校の図書館の地下から発見された「新劇の父、小山内薫の集めたロシア、ヨーロッパ演劇絵葉書３００点展」開催にあたってのトークショーに出るなど、まさに「ドイツ演劇の

この似顔絵は、日本山岳会の談話室に掲げられた写真から宮下さんが描いたもの。日本山岳会草創期の人物像。左から木暮理太郎、槇有恒、松方三郎、別宮貞俊、日高信六郎、三田幸夫の諸氏。会報「山」（1976年3月号）より転載

泰斗」に相応しい一面を見せている。

彼は、学生時代は山岳部やワンダーフォーゲル部には属さず、気の合った仲間たちと奥秩父や白馬、南八ヶ岳などを歩いていた。57（昭和32）年8月には、南ア・白峰三山縦走中たまたま串田孫一氏一行に出会い、水を提供したお礼にもらったタバコが自分の喫煙歴の始まりというエピソードを、彼の文に残している。このときは後年、再び『アルプ』で串田氏と再会するとは思わなかったであろう。その後、教職に就いてからは、欧州留学中にシャモニやツェルマット近辺をたびたび訪れている。帰国後は、穂高岳山荘50周年記念の集いや深田久弥七回忌追悼登山、なかでも秩父・金山平での木暮祭にはたびたび参加している。また、霧ヶ峰のヒュッテ・ジャヴェルへは、ご家族と幾度か訪れているし、ここでの「復活霧ヶ峰山の会」の会合では、講師も務めていた。ご長男の穂高さんにとっての一番の想い出は、87年8月、文字どおり「わが子にその名を付けた穂高岳」へともに登ったことだと言う。

彼とは今から六十余年前、机を並べた仲であったが、彼を思い出そうとすると当時、隣の組の担任だった父上、宮下正美先生の常に柔和なお顔を思い浮かべてしまうのだ。父上は児童文学者として数多くの、主として生地・伊那谷での少年時代に題材をとった少年向け動物小説を次々と発表されていた。宮下君とはその後、大学は同じでも学部が異なっていたこともあり、

顔を合わせることもなく、前述したごとく再び出会ったのが日本山岳会であった。

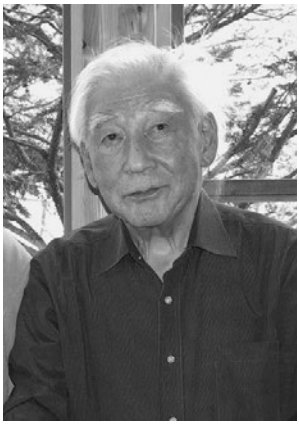
2012年5月6日、胆管癌で逝去、享年75。結局のところ、お互い「人生最初と最後だけの付き合い」みたいなものであった。山岳会としても、その卓越した語学力を駆使して欧州アルプスを中心に、常に山を文学面から捉えようとしていた先達を失った痛手は大きい。早過ぎる死が惜しまれる。今はただご冥福を祈るのみである。（本稿は『山と溪谷』12年8月号に掲載された文に補筆したものである）

〈略歴・著書〉

1936年9月20日：東京都麻布区（現港区元麻布）に生まれる
1957年春：藤沢山岳会に入会
1959年3月：慶応義塾大学文学部卒業
1963年5月：日本山岳会に入会
1968年7月：『中立をまもる―スイスの栄光と苦難』（講談社）
1977年7月：『スイス・アルプス風土記』（白水社）
同年9月：文学博士号取得
1978年4月：慶応義塾大学文学部教授に
1979年8月：『ウィリアム・テル伝説―ある英雄の虚実』（日本放送出版協会）
1991年11月：『700歳のスイス―アルプスの国の過去と現在と未来』（筑摩書房）
1997年5月：『日本アルプス―見立ての文化史』（みすず書房）
1999～2003年：日本山岳会理事
2002～2009年：日本山岳ガイド協会評議員

（松本　恒廣）

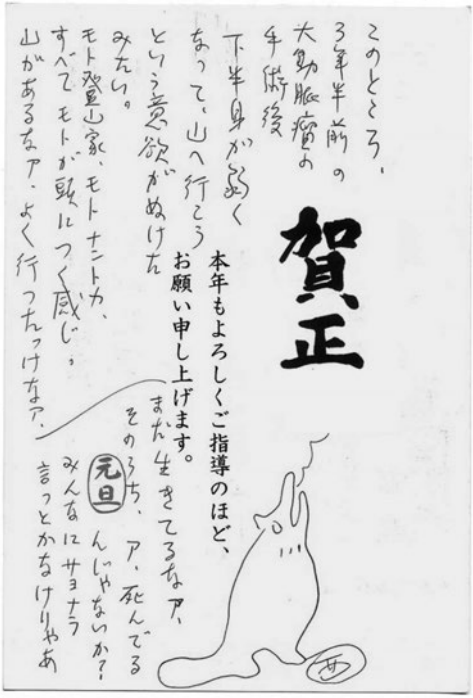
西丸　震哉さん



にしまる　しんや
（1923～2012）
会員番号 3059

ご紹介は、以前に西丸さんからいただいた賀状です。

実は、この追悼文ですが、どう書き始めても、なぜか先に行けないのです。金縛りに遭ったようなもので、さて困った。困っているうちに西丸さんの声が聞こえてきました。「おぉい。



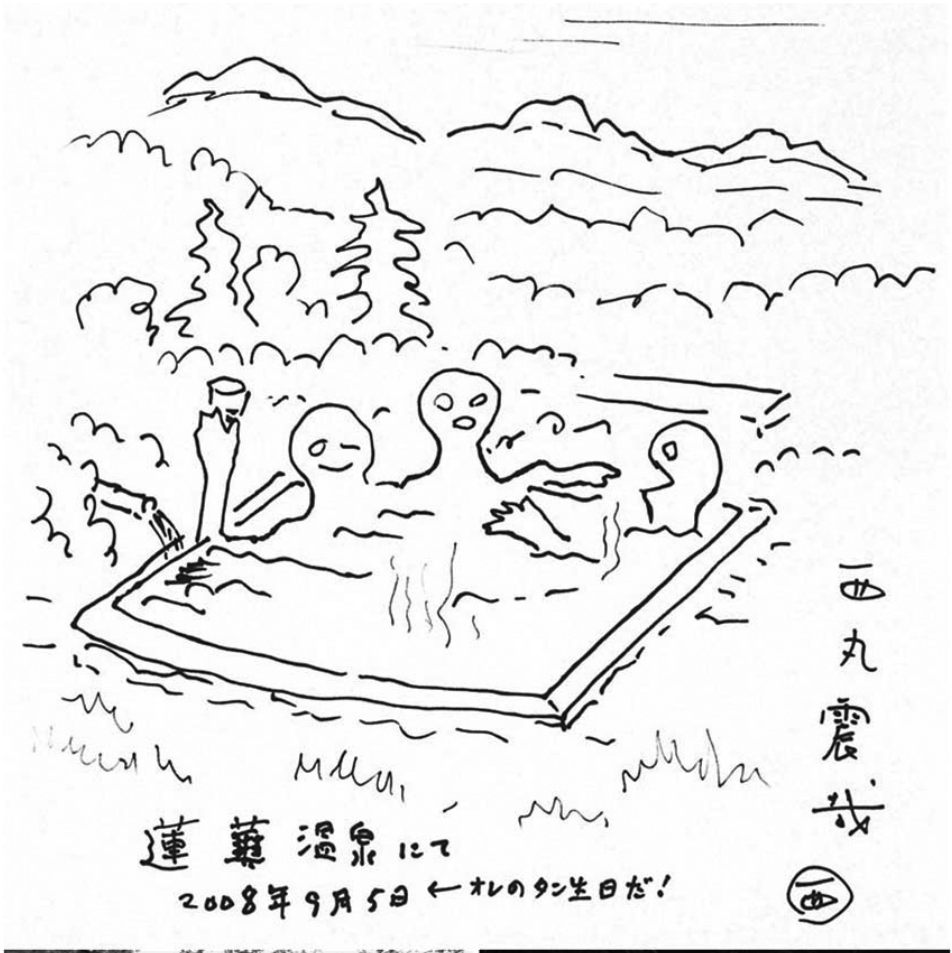
オレから、みんなにサヨナラを言わせろ」。そこで、ようやくに筆が進み始めました。

まず、西丸さんを紹介せねばなりませんが、これがまた、なんと書けばよいものか。ご本人によれば、食生態学者・登山家・探検家・画家・挿絵画家・作曲家・ファンタジックSF作家。「あれっ、エッセイスト、モノ書きはどうなさいました？」「それは好きの部類じゃないから入れない。惰性で、頼まれて、……書いたものを人びとが喜んでくれて、ホメてくれると、オッチョコチョイなものだから、ついおだてに乗って……」。なるほど。インターネット上の書店「アマゾン」で検索すると、80件余り（文庫本化などを含む）ありますが！

ほかに、「今までやりたくてやってきたこと」には、前述のほか、「湿原と池塘さがし、野生動植物と原始人とのつき合い、気分のいい人と楽しくつき合う、妙なものがありそうだったら、それがなんであろうと首をつっこむ」などなど。

西丸さんの紹介に、やや古いが、串田孫一さんによる評をお借りしますと、「西丸さんと付合いはじめる多くの人は、最初恐らくその話の面白さにぽかんとなってしまうようである。……（中略）……はじめてこれを拝聴する若い連中はビールを飲むのも忘れて、銘銘の唾液をごくりごくりと音を立てて呑み込んでいるばかりだったし、私共を十分後には追い出す構えで八の字を寄せていた従業員たちも、段々に食卓に近寄って腕組みをし、首を傾けてすっかりと聴き惚れてしまった。そして気が付いた時には、我々を追い出す閉店時間を二時間近くも知らずに過ごしていた。……」（閉店間近い店に入った話）。その独特の語り口と雰囲気は、著作でも遺憾なく発揮されて、西丸さんの世界の魅力が展開されていました。

さらに串田さんに続けて貰えば、「こうして西丸さんの周囲には人が集まり、また例の話を聞かせて貰おうとするだろうが、


西丸震哉
蓮華温泉にて
2008年9月5日 ←オレのタン生日だ!

それから先の真の魅力をさぐろうという人になるとその数は減る」。いろいろと誘われて山にもご一緒しましたが、小生が知り得ていたのはその一面で、昨11月の「西丸震哉さんを偲ぶ会」では、音楽家を偲ぶ集まりもかくやと思われるように、山仲間が肩身の狭くなるような、音楽にあふれた華々しくも賑やかで多彩な人々の集まりでした。

昔のご本人によれば、「探検や山登りはけっこうなことだが、お化けだとか人魂、幽霊のようなモノをマジメにとりあげて人にいうのは、科学者としての評判にマイナスとなるだけだから、遠慮したらどうだ」と、よく忠告を受けた由ですが、そんなことは意にも介せず、大らかな好奇心と自然や人間に対する温かなまなざしをもって、幽霊や摩訶不思議な現象でさえもごく当たり前の観察対象となされ、お話しあるいはお書きになってこられました。信州・小川村に作られた山小屋では、真面目な顔で「向こうの鹿島槍からＵＦＯがよく出る。基地があるに違いない」。小生、「黒部の棒小屋沢には、尾根からは見えない広い河原があるので、きっとそこでしょう」。

余談はそれくらいにして、次の絵（前ページ）は、『机上登山』（博品社）に「蓮華温泉だけは、さいごにもう一度だけでも行っておきたいよね」とお書きになった後、２回ご一緒したうちの後のもの。秋の、まさにつるべ落としの日暮れは早く、月のない真っ暗闇の中を温泉小屋に戻るのに大変な思いはあったものの、めでたく誕生日の乾杯と、翌日の木崎湖畔「西丸震哉記念館」での、興に応じて絵。温泉から向こうの山々がどう見えていたのか、さらさらと動くフェルトペンの先の、その記憶の正確さに改めて驚いたものでした。

食生態学者としての本職の方では、大ベストセラーとなった『41歳寿命説』もありましたが、こちら『机上登山』は、西丸さんの山歩きそのもの。机上の空論ではなく、まじめに地形図を読みつつ、その中に夢を描いた愉しみの書。北は択捉（エトロフ）島の火山と湖と温泉に始まって、南は西表（いりおもて）島のサンゴ礁の奥とマングローブの中まで。そのいずれもが道のないコースが多く、これを模倣すると「よほどのカンと経験を積んでからにしないと、途中で失敗して下手をすると生命をなくすおそれがある」場所もありそうで、一方では、国立公園特別保護区内にコースを設定するのはけしからん、などと無粋な声が出てきそうな。

その中にある蓮華温泉を経るコースでは、この温泉宿に昔あった怖い話（宿の娘にしか見えない幽霊を背負った殺人者が泊まりに来た）をお書きですが、昔、その話をお聞きしたときには、思わず知らず鳥肌が立ったものです。

編集ご担当に無理をお願いして、３枚も入れていただいた西丸さんの絵ですが、処女出版の際には、「こんなお化けみたいな絵が使えるか、と拒否されたのを強引に半分くらい、お情けでようやくのせてもらった。ところがどちらかというと文章より

も評判がよかったので嬉しくなって……」との由でした。小生の拙い追悼文よりも、この、一目で西丸さんと判る絵だけの方がよかったのかも知れません。

〈略歴〉

1923年：関東大震災の混乱の中、その5日目に生まれる
1945年：東京水産大学卒業。在学中に山岳部を創設
1946年：岩手県水産試験場に着任するが幽霊に魅入られ、翌年帰京して、農林水産省食品総合研究所に
1950年：このころから、岩登りと藪こぎによる未踏の湿原探索を

1959年：日本山岳会の台湾脊梁山脈遠征隊長として3ヶ月間滞在。これ以降、インド、パプア・ニューギニアほか、世界各地への長期の学術調査に
1960年：処女出版『未知への足入れ』東京創元社
1965年：結婚。以後、奥様と二人三脚で探検と登山を
1973年：長野県上水内郡小川村に山小屋建設
ここで「秋葉山塾」講義活動を開始
1980年：食品総合研究所を官能検査研究室長で自主退官
賑やかに「西丸さんに励まされる会」
1990年：『41歳寿命説』情報センター出版局
2008年：最後の単行本『壊れゆく日本へ』山と溪谷社
同年5月、「西丸震哉記念館」開館
2012年5月24日：逝去。最後まで意識があった由

（長岡　正利）

廣谷　光一郎さん

ひろたに　こういちろう
（1932～2012）
会員番号 5037

２０１２年６月、日本山岳会会員、大阪市立大学山岳会前会長の廣谷光一郎さん、廣谷光一郎先輩が79歳にて永眠された。

栄養食品や化粧品、トイレタリーの製造・販売会社である㈱ホワイズを34年前に立ち上げ、以後、逝去の直前までその経営に携わり、文字どおり生涯現役のままあの世に旅立たれた。

廣谷さんの「ヒマラヤ」は、昭和35（１９６０）年１月、大阪市大山岳会・森本嘉一先輩から当時、東京在住の廣谷さんに宛てた一通の手紙から始まった、といっても過言ではない。それは、市大山岳会としてヒマラヤへ５～６人編成のライト・エクスペディションを、昭和36（１９６１）年プレに出したい、ついては廣谷さんの参加要請と候補の山としてタルン・ピーク、トゥインズ、ヌプツェ、ランタン・リルン、ティルスリなどの情報、写真を集めよ、というものであった。廣谷さんは深田久弥さんや風見武秀さん、吉沢一郎さん、金坂一郎さん、今西寿雄さんを通じて松田雄一さんなどの方々と接触して、種々の情報と写真を大阪の森本さんに送った。会での検討結果、目標はランタン・リルン（７２４５ｍ）と決まり、５月には「大阪市大ランタン・ヒマール登山計画」として日本山岳会理事会兼評議員会に提出、日本山岳会から外務省に対するスポーツ外貨割当ての推薦がなされた。

翌１９６１年、森本嘉一隊長、廣谷光一郎副隊長、大嶋健司、藤本勇、近藤哲也、伴　明の隊員６名と、ギャルツェン・ノルブをサーダーとするシェルパ５名によって４月９日、ＢＣからランタン・リルン氷河ルートの登攀が始められた。この第１次登攀期に廣谷さんは東稜６４００ｍの国境稜線まで登り、頂上までの登路確認を行なった。いったん全員がＢＣまで降りた後、第２次登攀期に入った。５月10日、明日は第４キャンプを建設し、明後日は登頂という明るい見通しを持って、11名全員が５６００ｍの第３キャンプで３つのテントに分かれて眠りについた。

翌５月11日未明４時45分、突然の爆風とともにブロック雪崩

の襲来を受け、3つのテントは吹き飛ばされた。50mほど下の雪面に叩きつけられた藤本、近藤、伴の隊員3名とシェルパ4名は肋骨や背中の打撲程度で助かり、100mほど下のクレバスに頭を下にして埋まったギャルツェンは即死、森本隊長と大嶋健司さんは行方不明、廣谷さんはクレバスの中間部に頭をわずか出して埋まった状態で発見され、15分後に救出された。何もかも吹き飛ばされ、ピッケル2本、アイゼン1足半だけで8名が第2キャンプに降りた。夜はシェルパの読経がいつまでも続いていた。

この日本隊初のヒマラヤ遭難での生死を分けた体験は、生き残った隊員4名のその後の人生にいかばかりの影響を与えたことか――。とりわけ九死に一生を得たともいうべき廣谷さんは「なぜ俺は生きているのだろうか、なぜ生かされたのか――」と自問し続けたのではないだろうか。

ランタン・リルンは1964年春に第2次隊を出したが、頻発する雪崩により氷河ルートを取りやめ、東南稜ルートの三角岩（5750m）までの試登に終わった。1977年までのネパール政府による登山禁止の後、1978年秋、後輩たちの第3次隊によって、氷河ルートによるランタン・リルン初登頂は果たされた。

昨年3月発行した大阪市立大学山岳会『雪線　創立90年抄史』に収録された、廣谷さんの遺稿ともいうべき「交友録」には、以下のように書かれている。

ランタン・リルンでの遭難以降、たまたま私が東京に在住していたこと、泉隆次郎先輩のご指示でJACの仕事をしっかりお手伝いするようにと云われ、以後、JACにどっぷりはまり込むことになりました。JACの理事を6年間にわたりつとめることになりました。ある時期は松方会長の鞄持ちとして、今日の全日本山岳協会の設立に寄与することも出来ました。最も印象深かったのは、1970年日本エベレスト登山隊の一員として参加できたことでした。また、その頃より多くの東京での仲間ができました。以来、様々の人たちとパーティを組んで、当時はまだまだ存在した辺境の地に入ったりしました。

当時、関東では、金坂一郎氏、村木潤次郎氏、山崎安治氏などなど海外登山の計画や日本の登山指導者研修会など積極的な活動をしていました。また、登山指導者研修会・文部省登山研修所が出来、研修所を基点にいろいろな研修会を全国的に開催しました。研修会のための専門調査委員会メンバーは次の人たちでした。JAC・日山協関係では上記3氏のほか小倉董子、加藤泰安、沢村幸蔵、住吉仙也、辰沼広吉、徳久球雄、中島祥和、浜野吉生、宮下秀樹、山下一夫、吉田勝、芳野赳夫の諸氏、国土地理院の五百澤智

也、東京天文台　石田五郎、航空気象台　久米庸孝、富山大教授　深井三郎氏等。

１９７０年のエベレスト遠征帰国後、韓国山岳会からＪＡＣ理事会に連絡あり、遠征の様子を韓国山岳会で発表して頂ければということで、私と大森ドクターと関口周也氏の３名で、韓国山岳会の式典に参り、ＪＡＣの公式訪韓使節として参加しました。その折、会長であった孫慶錫氏とお会いすることができ、他の理事の方々とも親交を深めました。

１９７０年秋、大阪市大山岳会はカンジロバ・ヒマール主峰（６８８２ｍ）の初登頂に成功したが、ネパール政府の登山許可取得には、廣谷さんを通じて日山協常務理事・丹部節雄氏のご尽力が大きかった。

１９８９年春、廣谷さんは大阪市大山岳会が初登のチベット・四光峰（７３０８ｍ）登山隊の総隊長を務め、ベースキャンプ（５４８０ｍ）にて指揮を執った。

１９９１年に食道癌が見つかり、その切除手術は食道の患部を切り取り、胃を吊り上げて咽喉近くに繋ぐというもので、16時間の大手術だった。術後、麻酔が切れ身動きできない状態のなかで人工的に呼吸させられているとき、その辛さ、痛さ、生きることの辛さの強制は、麻酔から戻らなかった方が良かったと思ったほどらしい。以降、カロリーの摂取は、主にビールなどのアルコール飲料に頼ることになった。

１９９８、９９年には手術した部分に異変が起きて、再手術を繰り返した。２００１年、S字状結腸切除手術、２００２年、舌癌が発見され切除手術と、このころは毎年のように病魔との闘いに明け暮れ、仕事の合間に手術か、手術の合間に仕事か、といった苛酷な状態が続いた。

にもかかわらずこの間、１９９７年８月、川上隆、長尾悌夫、浜野義三、廣谷光一郎、竹田寛次、奈良原町子、福島兆子さんのメンバーで、中国の新疆・ウイグル北方地区への草原トレッキング、１９９８年８月には、廣谷光一郎、稲垣信生、橋本信行、松村良宏、福島兆子さんのメンバーでパキスタン・イスラマバードより中国との国境にあるクンジェラブ峠（４９４３ｍ）へのトレッキング、２０００年８月は、同メンバーで中国の新疆・ウルムチよりクンジェラブ峠へのトレッキングを行なっている。

食道癌の手術からの21年間、その凄絶ともいえる生き様、それを可能にしたエネルギーは一体どこから出てきたのか――。多分ランタン・リルンでの遭難体験ではないかと思う。「俺は病気などで絶対死んでやるものか」という強い信念が、リルンの生き残りで培われたのではないか。山岳会の年次総会などで顔を合わせても、明るい元気な顔で、自分の大変な身体状況を

他人ごとのようにしゃべるのが常だった。

でも、廣谷さんは充分に生きられた。精一杯生きて天寿を全うされた。今はもうあの世で安らかにお休み下さい、と心から悼む。

〈略歴・山歴〉

昭和7（1932）年：芦屋市に生まれる
昭和26（1951）年：大阪市立大学理学部に入学、山岳部に入る
昭和30（1955）年：大阪市大卒業。黒龍堂入社、同社から久留米大学へ留学
昭和35（1960）年：同大医学部病理学科終了
昭和36（1961）年：同大より医学博士号を授与される
昭和36（1961）年4月：日本山岳会入会、会員番号5037
昭和36（1961）年：大阪市大ランタン・リルン遠征隊副隊長、雪崩にて遭難
昭和41～47（1966～72）年：日本山岳会理事
昭和45（1970）年：日本山岳会エベレスト遠征隊参加
同年、日本山岳会理事として韓国山岳会訪問
昭和53（1978）年：㈱ホワイズ設立、社長就任
昭和64（1989）年：大阪市大四光峰遠征隊総隊長
平成3（1991）年：食道癌切除手術
平成9（1997）年：中国、新疆・ウイグル北方地区トレッキング
平成10（1998）年：パキスタン・クンジェラブ峠へトレッキング
平成12（2000）年：中国、新疆・ウルムチよりクンジェラブ峠へトレッキング
平成13（2001）年：S字状結腸切除手術
平成14（2002）年：舌癌切除手術
平成23～24（2011～12）年：大阪市大山岳会会長
平成24（2012）年6月10日：逝去。享年79

（伴　明）

坂本　矩祥さん

さかもと　のりよし
（1920〜2012）
会員番号 3639

茗渓は、東京の文京区湯島と千代田区駿河台の境を流れる神田川が深い掘割（つまり渓）をつくっている辺りの雅称である。江戸時代にはこの掘割の北にあった高林寺境内の湧水が名水として知られ、お茶を点てるのによかったという。そこからお茶の水という地名が生まれた。茗は遅摘みの茶の葉。お茶の水という町名はなく、その辺り一帯を指す通称である。

坂本矩祥さんが経営していた書店・出版社は、この茗渓を社名にしている。ただし茗渓堂と、渓は正字（旧字）である。店はいまのJR御茶ノ水駅西口前、明大通りに面している一等地にあった。神田神保町界隈は本の街として知られるが、それは「白雲なびく」駿河台の下のほうのことで、30〜40年ほど前、駿河台の上には書店は新・古書あわせても片手で数えられるほどしかなかった（いまはもっと少ない）。茗渓堂はそのひとつ。地下と3階までが書店で、良質の本を並べて品のいい雰囲気を持っていた。いわゆる際物的な、ベストセラー狙いの種類の本を扱わなかったのは、小売書店としては特異だった。それは坂本さんの商売上の哲学、あるいは心意気であった。それがこの書店を好ましいものとしていたし、3階には山の本を揃えていたから、首都圏の山の本好きはもちろん、地方の人も、東京に出てきたときには足を運ぶ、一種の名物店となっていた。

それが1998年1月、私がお茶の水に所用があって出向き茗渓堂の前を通ると、店は大掃除か片づけの模様で、偶然のように坂本社長の顔が見えたので、どうしたんですか、と聞くと、あのいつものにこやかな、とはいってもちょっと陰のある顔で、「いやぁ、もうダメです。やめました」と言う。

まさに根耳に水の言葉で、なぜですか？　と尋ねると、本が売れなくなった、これではやっていてもしょうがない、と店を畳むことになった訳を説明してくれた。書店員の給料を払うのもきつい、建物は借り手があったので貸すことにした、ということだった。駿河台生まれの駿河台育ち、父親譲りの駿河台の店を閉めるというのは、坂本さんにとって清水の舞台を飛び降

りるようなことだったに違いない。

こうして、駿河台上から良質の書店が消えた。しかし、坂本さんは山の本には愛着も執着も持っていたから、売れ行きが落ちてはいても山の本だけは3階で販売を続けたい、出版も継続したいと、熱を持って語っていた。

それからしばらく後、茗溪堂で田口二郎さんの本（『山の生涯―越し方行く末』）をつくることになった。田口さんの文集をつくるという案は前からあったようだが、難航していた。私も田口さんのアルプス時代をまとめた本をつくりたいと考えていたが、いずれも実現することなく、田口さんは１９９８年に亡くなった。その後、田口さんの大学山岳部の後輩で住居も近い池戸誠二郎さんと、甲南の後輩・平井吉夫さんが原稿・資料の整理をおこない、それがまとまったところで私が編集作業の実務をする、という段取りで『山の生涯―越し方行く末』制作の作業が進んだ。その間に坂本さんからは何回か前記3人が招集を受け、内容や進行についての相談がおこなわれた。そしてその相談の後は、いつも坂本さんが酒席を設けて4人で歓談するのだった。その様子は編集稼業が長い私から見ると、むしろ坂本さんは、その相談事の後の酒の入った歓談のほうを楽しみに3人を呼び集めていたのではないか、と思われるような雰囲気を持っていた。それに80歳を超えても毎週プールに通って泳ぐ体力を持っていたし、人当たりも良かったから、座談はいつも明るかった。

その後、何冊か坂本さんから頼まれて各氏の著作の編集作業をすることになり、その都度、同じような情景があった。その席には著者を招いていることもあった。そういうことの繰り返しがあって、私はやっと、坂本さんにはタニマチ的気質があるのではと気がついた。それに坂本さんは、そばと酒が好きだったから、仕事とは関係なくても、誰かを誘って神田藪蕎麦へ行っていた。昨年秋、この藪蕎麦メンバーの数人がご子息の克彦さんを加えて、ささやかな偲ぶ会をそこでおこなった。

出版社勤めをしていた私は、１９８３年、朝比奈菊雄さんの『アルプス青春記』を編集・刊行した。当初私は知らなかったが、その一部は茗溪堂から出版することになっていたのだそうで、その経緯は同書「あとがき」にあるが、私が坂本さんとお付き合いするようになったのは、このときからである。

坂本さんは、とにかく本が好きだった。それだけに本への好みも独自のものを持っていた。茗溪堂から出ている山の本の多くがひとつの固定的な雰囲気を持っているのは、そのためであろう。田口二郎さんの本の編集・制作では、私はその雰囲気を知っていたから、作業は本文関係のみを請け負う、外回り、つまり、表紙や函などのつくり、さらに特装限定版にはタッチしないという条件で引き受けた。それは坂本さんの領分のことであって、茗溪堂出版物への新参者が口を出すことではないと

思ったからである。特に特装限定版は、凝り性だった坂本さんが好みを自由に働かせて制作を楽しんでいた。それは確実な利益を生み出して普通本の穴埋めをしていたから、坂本さんにとっては一石二鳥だった。

その後、鹿野勝彦さんの著作『シェルパ　ヒマラヤ高地民族の二〇世紀』をつくることになって、坂本さんから呼び出された。私は、本のつくりをかなりな程度まかせてもらえるのなら、と参加することにした。その結果、茗溪堂的雰囲気とは異なるような本に仕上がった。鹿野さんの原稿内容からすれば、こういう形の本のほうがいいけれど、よろしいか、と坂本さんには事前に諒解を求めていたが、一部の茗溪堂ファンには意外なことと受け取られたようだった。坂本さんからはなんの異論もなかった。むしろ、もっと早くにこうした編集・制作方式で進めることができていれば、もっとたくさん本が出せたのに、松方さんからも許可をもらっていたんですよ、と言っていた。

さて、山の本は戦前からの長い歴史を持っていて、数多くの名著が生まれている。それは数え上げれば切りがないし、その余裕もないが、そうした文化遺産的書物を生み出した母胎は、たとえば梓書房、朋文堂、白水社、あかね書房、創文社など、いずれもひとつの世界、ひとつの時代をつくっていた。茗溪堂もまた同じである。茗溪堂が山の本の出版を始めたきっかけは『山日記』だが、そうした日本山岳会との結び付き、出版目録、坂本さんの出版理念などは『山岳』第九十九年（２００４年）号に詳しいので、ぜひ目を通していただきたい（「日本山岳会と茗溪堂」「『山日記』五十三巻の足跡」）。そこでわかるように、坂本さんの日本山岳会への貢献は、当然、名誉会員に推されてしかるべきものである。なお、坂本さんの略歴は、会報「山」２０１２年９月号を参照されたい。

茗溪堂の小売りも出版物もすべて坂本さん独自の企画力であって、そこには坂本さんの世界が生き生きとしているが、その出版物の特徴は、一般の版元では企画にのりにくい作品が、きちんとした形で送り出されていることである（一部には著者側が経費の負担をする場合もあったが）。それは決して華やかな、多くの刊行部数を持つものではないが、出版には十二分の意義があり、山の世界に確実な財産となるものが含まれている。そのほか、あべみつこ・安部和夫『山のＡＢＥ』のような遊び心満載の本もあって、坂本さんの幅の広さを表している。坂本さん亡きあと、いま茗溪堂はお茶の水から場所を変えて、克彦さんの手で再出発している。

＊

本は最近もやはり売れないという。電子書籍という別種の異物も生まれている。山登りの世界もまた変質して、かつて桑原武夫が「登山とは文化的行為」と言い、松方三郎が「古い書物を読むことは懐古趣味でもなければ、復古主義でもない。今日

の山登りを、また自分自身の山登りを、しっかりした基盤の上におくために必要なことなのである」と言ったことが実を結ばず、山登りが持っていた文化の影が消えつつある。山登りはひとつの精神活動という要素は薄まり、フィジカル・エンタテインメントとしての面がまかり通っている。それは山の文化の衰退、山の本の不振となり、坂本さんの「もうダメです。やめました」という言葉へとつながるのであろう。

つい最近、日本山岳会のある会合の資料を見ていたら、講師（会員?）が「松方三郎の父は松方コレクションの松方幸次郎」と発言していて唖然とした。これも山の文化の衰えを表す現象であろう。山の世界がこうした貧困な状況に陥っているとき、梓書房ほかの文化遺産を引き継いで坂本さんが進めてきた出版理念もまた、危殆に瀕しているということになるのではないか。これでは、坂本さん、もって瞑すべし、とはとても言えない。私たちが果たすべきことは何か。坂本さんの見事な業績は、それを私たちに重く問いかける。

（大森　久雄）

岩瀬　晧祐さん

いわせ　こうすけ
（1936～2012）
会員番号 7559

岩瀬晧祐さんの本会入会は１９７３（昭和48）年3月、お歳は37歳、会員番号７５５９、紹介者は小野敏之、吉沢一郎のお二方と会報「山」３３６号（１９７３年6月）に載っている。私と岩瀬さんとはお互い山岳会にあっての交友だから、当然、それ以後のことになるが、それがいつごろだったかははっきりしない。多分、図書懇談会などで何度か顔を合わせてにこにこするうちに言葉を交わすようになったのだと思う。あるいは「山の本に詳しい人」と端から聞いて話し掛け、山の本（以下「山書」）のことを尋ねたのがきっかけだったのかもしれない。

なにしろ岩瀬さんの山書に対する知識は並大抵のものではなく、また、山書を語るときはとても楽しそうだった。岩瀬さんと親しかった大森久雄さんは「古今東西の山の本について島田巽さん、山崎安治さん、近藤信行さんと対等に、あるいはそれ以上に渡り合えたのは、図書委員会メンバーの中では岩瀬さんだけ」と言っているが、そのとおりだと思う。

例を本会の印刷物に見るならば、『山岳』第90年（１９９５年）「図書紹介」欄の田淵行男著『山は魔術師』、『松方三郎主要著作目録』（１９８９年4月）などがあり、前者は単なる図書紹介にとどまらず、著者の人間像までを要を得て描き出しているし、後者にいたっては、いかに岩瀬さんの文献渉猟が広範囲にわたるものであったかを示している。このたび読み返してみて、改めて驚嘆した。さらには日本山書の会在籍当時に手がけた『近代日本登山史年表』『日本山岳会　山岳総目録　１９０６-１９６９』も大変な労作であり、私は、今もその2冊を座右に置き重宝している。一時期、岩瀬さんは本会図書委員を務めていたが、存分にその力量を発揮して貢献するところが大きかったに違いない。日ごろ、私も多くを教えてもらった。

岩瀬さんは長年の宮仕えを終えたあと、晴山書房という山書を主にした古書店を始めた。「晴山と付けたのは、晴れた日は、まず山へ行って」の目論見だそうで、初めのうちは自宅の一部をお店にもしていたが、ほどなく「晴山書房古書目録」を顧客に送付しての通信販売、古書展示会などでの即売だけになった。「その方がお天気次第で自由に山に行けますから」とは、それはそのとおりに違いない。

表紙にマッターホルンのカットを置いた目録（11・5×21㎝、縦長）は、「1　１９９７　秋」に始まって「27　２０１１　秋霜」まで1年にほぼ2冊の割合で発行された。頁数は毎号数十頁、「25　２０１０　創業15周年謝恩号」にいたっては１００頁を超し、山書のほかに歴史随想、評伝、趣味、文学などを含めて総計３４７４冊が載る堂々たるものだった。同号収載の、英国エヴェレスト遠征隊第1回偵察隊から初登頂隊（ジョン・ハント隊長のサイン入り）までの公式報告書揃い、あるいは木暮理太郎著『山の憶ひ出』上下（限定１００部／夫婦函／げらづりぐさ、正誤表付／龍星閣版）を見て、私は「おっ」と思ったが、正直いってお安くない。それを言うと、岩瀬さんは「なに、あれは手元に置いておきたいから、売れなくともよいのです」と澄ましたものだし、また、「この目録の全揃いは山書の資料としても価値があって、今にいい値が付きますよ」と言えば、まんざらでもなさそうなお顔だった。

岩瀬さんは１９３６（昭和11）年1月25日、栃木県宇都宮市に生まれ、県立宇都宮商業高等学校を経て立教大学に進学。中学時代に始めたバスケットボールは、高校にあっては全国大会の準優勝経験もある由。学業を終えたあとは、建築資材関連の

会社に入って定年まで勤めた。

登山は義兄に手ほどきされて、大学2年生のころからという。ピッケルとアイゼン、ザイルに身を託してという登山ではなかったが、業務での出張の合間やマイカーの機動力を活かし、広範囲にわたって実に多くの山に登っていた。いわゆる通人向きの山も少なくなく、それらは『遊歩百山』1・2・3（1999年12月～、森林書房）に執筆した「東御殿・大久保山」「荒島岳」「大滝根山」でも窺い知ることができよう。海外のトレッキングは、私の知る限りでは、1999年には本会有志とパタゴニア、2000年と2004年には前記大森さんと2人で本場アルプスへ行っていて、いずれのときも大変楽しかったと、いろいろ話してくれた。

岩瀬さんは話し好きだった。そうした山のことはもちろんだが、日ごろの諸々、例えば新調のガスレンジが絶妙の仕掛けでご飯を炊く話、毎年季節になると奥武蔵の秘密の場所へウドを採りに行く話、干し柿にするカキを秩父に買いに行く話などを語りだせば尽きることがなかった。ちなみに、その干し柿を頂戴すれば、「目黒のサンマ」ならぬ「干し柿は中野区上鷺宮に限る」ほどの絶品であったことを付け加えておかなくてはならないだろう。

それは忘れもしない昨年（2012）6月27日の夜、小泉弘さんの著書『装丁山昧』の出版記念会が終わって帰ろうとするときだった。大森さんに呼びとめられ「この24日に岩瀬さんが亡くなって――」と知らされたときには、私は思わずへたへたと座り込んでしまった。

なぜ、どうして。

昨年の暮れに続けて今年の1月にも一緒に奥武蔵の山を歩き、4月末には我が家へ来て、ご機嫌で話をしていったばかりではないか。確かに数年前から病を得て治療中とは知っていたが、青天の霹靂としか言いようのない訃報だった。

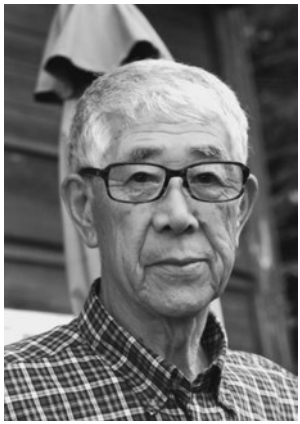
岩瀬さんは抜群の友人だった。40回余の山歩きをともにし、多くを語り、多くの文通を楽しんできた仲だった。私よりも年下で、こうした追悼文を書くようになるとは思ってもみなかった友人だった。今も「なぜ、どうして」の思いがしてならない。

大柄で存在感があって、ハンサムで、洒落た模様のセーターがよく似合い、いつも格好いいのが岩瀬さんだった。そんな姿を待合せのホームに見付ければ、今日も一緒に山を歩けて楽しいな、と嬉しくなったものである。

あの陽春の好日、新緑が美しい林を歩いた笹尾根では、「まるでモーツァルトの音楽に包まれているよう」と〝なかなか言ってくれるではないか〟の表現で感激していた岩瀬さん。ロールケーキがつぶれないようにと牛乳パックに入れてきて、「いいだけ切って下さい」と気前の良かった岩瀬さんが、忘れられない。

（横山　厚夫）

手塚　宗求さん



てづか　むねやす
（1931〜2012）
会員番号 3805

霧ヶ峰をこよなく愛した手塚宗求さんが亡くなられた――。

私が手塚さんの名前を初めて知ったのは、一冊の本との出逢いでした。二十数年前、東京でコンサートがあった際、私が学生時代から山好きなことを知っていた、ひとりのファンから『邂逅の山』をいただいたのです。コンサートが終わり、仙台へ帰る特急列車（当時はまだ東北新幹線が開通する前で、片道4時間ぐらいかかった）の中で、手塚さんの真情溢れる筆致の『邂逅の山』を引き込まれるように読んだことを覚えています。私はまだ見ぬ霧ヶ峰に想いを馳せながら、コロボックル・ヒュッテを苦労して造った話や、移ろう四季折々の草花を慈しむ手塚宗求さんに惹き付けられてしまいました。

ちょうどそのころ、山岳雑誌から山の思い出について執筆依頼があり、私は躊躇わず『邂逅の山』を読んでの感想を書きました。学生時代に登った故郷の栗駒山や船形山を想い浮かべたとき、どこか手塚さんが愛した霧ヶ峰と重なり合うものがあったのかもしれません。誌面に掲載された私の寄稿文を手塚さんはお読みになり、私を心のどこかで気に留めていただいたのでしょう。

私が初めて手塚さんにお会いしたのは、5月ごろだったか、八ヶ岳の方でコンサートがあり、私に『邂逅の山』をプレゼントしてくれたファンを介して、帰りにコロボックル・ヒュッテを訪ねました。会うまでに手塚さんのエッセーを何冊か読み、自分なりに手塚さんの人物像を頭に描いていました。実際にお会いして私が想像していたとおり誠実で、ロマンティストな手塚さんの姿が今でも目に浮かびます。1泊した日の夜、手塚さんと酒を酌み交わしながら、ふと部屋の片隅を見ると、古びたギターが置いてありました。手塚さんに聞くと俳優の山本圭さんが置いていったギターとのこと。早速、私はそのギターをお借りして、酔いに任せながら何曲か歌ったことを昨日のことのように思い出します。

翌朝、オープンテラスに出て、目の前に広がる草原を見渡す

と、手塚さんの本に出てくる蝶々深山（１８３６ｍ）、右には白樺湖に通じる細い道が続き、そこに真っ赤なレンゲツツジが群生していました。「手塚さん、レンゲツツジが綺麗ですねー！」と話すと、「今の季節はレンゲツツジが満開ですが、７月のころになると黄色いニッコウキスゲのお花畑になるんですよ。佐藤さん、今度いらっしゃるときは、７月に来てみて下さい」と言われ、私は生き生きと咲く花々に彩られる霧ヶ峰に、心を奪われてしましました。しかし、その後ニッコウキスゲが咲く季節に訪れることは叶わず、手塚さんとの約束を果たせませんでした。それが私の唯一の心残りです。

いつしか手塚さんから「冬は独りでヒュッテで原稿を書いたりしているので、雪景色の霧ヶ峰にいらっしゃい」と誘われ、厳冬期のコロボックル・ヒュッテに何度か伺いました。幸子夫人やご子息の貴峰君は実家の諏訪に戻り、手塚さん独りでヒュッテを守っていました。ふたりで車山（１９２５ｍ）に登り、北アルプスの山々を遠望できたことは懐かしい思い出です。頂から孤高のように建つヒュッテを見下ろすと、手塚さんはじめご家族で山小屋を守り続けてきた幾星霜が胸に迫り、熱いものが込み上げてきました。

こうして手塚さんと親しくなったあるとき、何か霧ヶ峰にまつわる歌を作りたいと、手塚さんに作詞を私からお願いしました。しばらくして手塚さんから送られてきたのが「キスゲの歌」です。私はこの「キスゲの歌」というタイトルを「キスゲに寄す」と改題し、手塚さんに事後快諾いただきました。実はあるとき、「私は学生時代から立原道造が好きでした」と話しかけると、手塚さんも「詩人で一番好きなのは立原道造です」と答え、奇しくも共通する一面があることを知り、嬉しく思ったことを覚えています。私は立原道造の代表的な詩集『萱草（わすれなぐさ）に寄す』を思い浮かべ、「キスゲに寄す」とさせていただいたのです。こうして手塚さんとの第１作「キスゲに寄す」は誕生しました――。

私は、この「キスゲに寄す」を最初に発表するのは、コロボックル・ヒュッテと心に決めていました。ある日、営業が終わったヒュッテの喫茶スペースで、地元の方々を招いてライブ・コンサートを開かせていただきました。手塚さんには本番で聴いていただこうと、リハーサルでも一切「キスゲに寄す」は歌いませんでした。20～30人の方々が集まり、標高１８００ｍの高地で歌うのは初めてのことでしたが、私は手塚さんが必ずや感動してくれるものと胸ふくらませていたのです。ところが、歌い終わると手塚さんは、ご自分で書いた詩が歌になったことを面映ゆく感じられたのか、照れるだけでした。今でもそのときの、恥ずかしそうにしていた手塚さんの顔が浮かんできます。私個人としては、わずかですが手塚さんへ恩返しの機会を得たと思っています。

この「キスゲに寄す」がきっかけとなり、手塚さんの作詞で霧ヶ峰の四季にまつわる歌ができ上がりました。それが組曲「霧ヶ峰の四季〜高原の花物語」です。この中には、待ち遠しい春に咲く「スズラン」、信州・霧ヶ峰に夏を告げるニッコウキスゲの「キスゲに寄す」、秋の訪れを教える「まつむしそう」、そして雪に閉ざされた冬に散らつく小雪の「風花」と、手塚さんらしい抒情歌的な作品が収録されています。

特に私の心を打ったのは、「まつむしそう」です。手塚さんに聞いたところ、手塚さんのお母さんは、学生時代に危険な山に登ることを反対したそうです。まして山小屋を建て、厳しい自然の中で暮らすことに猛反対したとのことです。しばらくして手塚さんが実家に帰ったとき、お母さんが「山に行ってみようかね」とポツリと言い、手塚さんはお母さんをヒュッテに案内しました。白樺湖から上がって湿原にさしかかり、手塚さんがお母さんを背負って登っていたとき、道端に〝まつむしそう〟が咲いていました。それをモチーフにしたのが、この「まつむしそう」です。『邂逅の山』にも、母親を背負って霧ヶ峰の山道を歩く描写がありますが、山を彩る〝まつむしそう〟に母への想いを重ね合わせた心象風景が万感胸に迫り、今でもこの歌を唄うと思わず目頭が熱くなり、若かりしころの手塚さんの想いが偲ばれます。

手塚宗求さんは、〝命ある限り、一途に生きること〟を私に教えてくれました。それは霧ヶ峰に寄り添い、自然とともに生きることの素晴らしさです。今にして思えば、手塚宗求さんの凛とした信念であったのかもしれません。見渡す限りの霧ヶ峰草原をニッコウキスゲの花が黄色一色に染めるころ、果たせなかった約束と感謝の心を胸に秘め、いつの日か訪れてみたいと思っています。

ここに手塚宗求さんが作詞した「キスゲに寄す」を捧げ、天空に咲く四季の花々に囲まれて眠る手塚宗求さんを偲びます——。

『キスゲに寄す』

1. キスゲの花が　咲けば夏だと
いつも私は　手紙を書いた
咲きいそぐ　一夜花
過ぎてゆく　束の間の夏

2. キスゲの花が　散れば秋だと
いつも私は　手紙を書いた
散りいそぐ　花たちを
抱きしめて　押しとどめたい

3. キスゲの花が　青い空から
舞い降りてきた　星の灯
霧ヶ峰　白い雲
果てしなく　金色の花

4. キスゲの花を　ひとつ見つけた
あの夏の日の　胸のときめき
花の名を　ささやいた
あの人は　もういない秋

（さとう　宗幸＝歌手）

村木　潤次郎さん

むらき　じゅんじろう
（1923～2012）
会員番号 3472
名誉会員

村木さんご自身が書かれている説に従えば、「その人との年齢差が15年以内でようやく理解する可能性がある」とされるが、私とは30年近い差があり、しかも、私が村木さんと直接お話ができるようになってから20年ほどしかたっていないので、誤解も多々ありそうである。村木さんはご自身のことを、先輩方との関係という形で追悼文の中などに書かれていることから、それらを骨子にして、時代背景を考慮しつつ村木さんの成されたことを追ってみたい。村木さんは早稲田大学山岳部の先輩としても、また、日本山岳会の大幹部の一人としても活躍された。

村木さんは昭和16（1941）年に早稲田大学山岳部に入部した。前年末の関根吉郎隊長の第2次の冠帽峰遠征が終了したばかりであり、山岳部はヒマラヤ主義派と多角主義派の主張がぶつかり合い、分裂状態が続いていたが、それがようやく修復されようとする時期にあたる。しかし、この年の秋ごろまでは、まだ上級生間でわだかまりを引きずっていたようだ。村木さんの山岳部での登山は、夏の剱沢定着合宿が最初だった。先輩部員に近藤等さんもいた。12月の神ノ田圃スキー合宿にも参加して、翌年春には、山崎安治リーダー率いる横尾尾根よりの奥穂高岳の極地法登山にメンバーとして加わっている。

翌年には「学徒練成山岳部」へと名称が変わってしまう時代になり、大学にも忍び寄る戦争の影が迫ってきた。翌18（1943）年春は、21名が参加する大規模な前穂高岳・北尾根合宿が組まれたが、「八峰下で雪崩に巻き込まれ、さらに屏風の頭のC1を焼失」するなどして合宿は中止になった。秋になると部員に召集令状が届き始め、一人また一人と仲間が少なくなって、

登山どころではなくなった。学生は繰り上げ卒業をさせられて、大学に人影がなくなった。村木さんが「碌な登山もしていない」と言うのは、本当らしい。

昭和21（１９４６）年2月に山岳部は活動を始める。このときに中心にいたのは昭和16年、17年入部の部員で、籍は大学になくとも、部員としての自覚で山岳部の登山を再開した。とはいえ食糧も物資も何もない時代で、一からの出発と同じであった。「戦後の混乱からやっと自分を取り戻した私達が考えた事は、学業よりも何よりも山岳部の再建と抑圧されていた山への憧れを実現しようとする事だけであった。」まずは昭和18年春の前穂高岳・北尾根極地法登山の、4年越しの再挑戦をなんとか無事に成功させ、同年の12月には稲門山岳会の全面的な支援を仰いで、日高山脈のペテガリ岳に遠征して登頂成功に導いた。この2回の登山は、村木さんの本領がここで発揮されて成功したと言えるかもしれない。

ペテガリ岳登山の成功は大きなニュースとなって日本中に伝わり、早大山岳部は一躍「時の人」となった。帰京後間もなく朝日新聞社で「ペテガリ岳座談会」が開かれ、朝日新聞の藤木九三氏が司会をされて、日本の登山界を代表する日本山岳会からは松方三郎、浦松佐美太郎両氏の出席を仰いだ。その座談が写真とともにアサヒスポーツの誌面を大きく飾った。

村木さんは早大鋳物研究所に助手として残り、上記のようにＯＢとして後輩たちの面倒を見ることになるとともに、戦後の新生した大学山岳部全体の面倒を見る立場に立つことにもなった。そのきっかけを作ったのは、先輩の関根さんである。日本山岳会は、満州から戻った松方三郎さんを先頭に昭和20年秋には早くも活動を再開した。戦前の体制を一変して、全国組織の体育協会に属する団体へと衣替えを行なっている最中であった。関根さんは22年5月に結成された関東学生山岳聯盟の立ち上げにも尽力し、その協力者として後輩の村木さんに期待をかけていた。

村木さんが松方さんと再会するのはその年の10月末、第3回国民体育大会でペテガリ岳登山の報告をするため、博多行の三等列車に乗ったときである。「4人掛けの席に、中年の紳士2人、松方三郎さんと藤島敏男さん、年若の2人は関根吉郎と私である。急行も特急もない時代、それから延々と30時間、博多までの旅が始まるのだ。」と印象深く回想された。このときの出会いが、その後の方向を決めることに繋がった。「このお二人の達人に引き合わせてくれた関根にいくら感謝しても足りない思いである。」と書いている。

村木さんの日本山岳会デビューは、『山岳』第45年への寄稿から始まっている。ペテガリ登山の報告「冬のペテガリ岳」を早大山岳部の名で書き、加えて鋳物研究所に藤島さんが持ち込んだベントのピッケルを国産ピッケルと比較した報告「アイス・

ピッケル調査について」を、日本山岳会器具調査委員会の名で書いている。調査委員会には先輩の今村正二さん、同期の越智英夫さんに、慶応の山田二郎さんが名を連ねている。また、この『山岳』には、戦中に本場アルプスで登山を行なっていた田口二郎さんと高木正孝さんのそれぞれの報告が、ペテガリを挟む形で載っており、大学山岳部とは全く異質の登山の存在を知らされることにもなった。

建ったばかりのお茶の水のルームにときどき出入りをしていたが、藤島さんに叱られて昭和24（1949）年春に入会した。当時の山岳会は「大学山岳部を傘下に収める目的があったためか、先輩方は若いOBどもに寛大であった。我々も優れた先輩に接することを好んでかなり自由に出入りしていた」と望月達夫さんへの追悼にあり、色彩の異なる多数の先輩に接して、大きな影響を受けるようになったのである。「入会と同時に委員を仰せつかって堀田、望月両先輩の下に入ったが、富士山で国体の手伝い以外何をやったかはっきりしない。」とも書いている。

富士山の国体とは昭和24年11月に行なわれた第4回大会で、主催は東京都であったが、開催地が山梨県となるため、このときに山梨支部が設立され、これに協力をした甲府の今井友之助先輩の知遇も得た。各大学からOB多数が参加し協力し合った。この富士山をきっかけに先輩、若手を含めた大学山岳部OBが日本山岳会に結集し、のちにはこの層が山岳会の中核を形作ってゆく。

昭和26（1951）年に村木さんは槇会長、松方理事長の下、学生部担当の理事になった。堀田弥一さんが担当する「特別委員会」という名の登山準備を担当する委員にも名を連ねていたが、具体的な計画がないまま、関根さんの企画したアコンカグア登山計画にも参画していた。アコンカグアは戦後初の海外登山になるはずであったが、計画は1年延期されたうえ、最終メンバーから外されてしまう。このあたりの機微を村木さんは、「その頃マナスル問題が起こり、加藤泰安事務局長のもと、今西錦司先遣隊の準備も手伝うことになった。」と書いているが、すでに装備とともにピッケルも登山靴も送ってしまった後であり、心中穏やかではなかったようだ。

この年、次の大きなうねりが始まるきっかけがあった。立教の堀田さんたちとともにナンダコットに登頂した竹節作太さんが、ニューデリーで開催されたアジア大会に毎日新聞記者として取材の折、のちに日本山岳会のマナスル登山のネパール側の窓口になるクリシュナ・バハドール・バルマ氏に接触したのである。この出会いが、翌27年の西堀栄三郎さんによる京都大学のネパール・ヒマラヤのマナスル登山の許可取得交渉に直接繋がった。

ところが、京都大学の企てたマナスル登山計画は突然、日本

山岳会にそのまま委譲されることとなり、日本山岳会は臨時役員総会を開いてこの申し出を受諾した。そして、槇会長を委員長にヒマラヤ委員会が組織され、松方理事長と西堀さんがその人選を行なった。これまで山岳会のために働いた若手ＯＢたちは、その手足となって働いた。「ほとんど後光がさしているように見えた」ネパール政府からの正式の入国許可書が届いたのは、５月中旬である。日本で最初の８０００ｍ峰登山のメンバーになり得るチャンスが、思いもかけずやってきた。

８月に出発した今西隊には、アルプスで豊かな登攀経験を持つ田口さんと高木さんが選ばれ、学術隊員の中尾佐助さんに林一彦ドクター、そして、竹節さんも記者および登攀隊員として加わった。今西隊を送り出すと同時に、本隊のための準備が開始された。「本隊はなによりもまず登頂を目指すものであるから、山の上で働く有力な実働部隊を中心に隊の構成を考えなければならない」として、村山雅美、山田二郎、加藤喜一郎、村木潤次郎、山崎英雄、石坂昭二郎の34歳から24歳までの６名の若手が選ばれた。村木さんは29歳であった。

松方さんは、「出身した学校が違い、育った環境は必ずしも同じではなくても、山岳会の仕事や、会の行事ではいつも力をあわせていた仲間であるのだから心配はいらないと思っていた」と書いており、若手を活躍させる陣容を整えた。隊長を慶応の三田幸夫さんに、登攀リーダーとして先遣隊に参加した田口さん、高木さん、先遣隊以来の台所係を現地に延長した加藤泰安さん、辰沼広吉ドクター。先遣隊に続く学術隊員として中尾さん、川喜田二郎さん。報道隊員として竹節さんと依田孝喜カメラマンである。それぞれキャリアと多彩なキャラクターを持った人たちである。

村木さんは、日本山岳会が企てるマナスル登山の始まりから現場に立ち会っていたことになる。

昭和和28（１９５３）年の第１次隊から、サマで住民の妨害に遭い転進を余儀なくされた第２次隊、そして、日本人初のヒマラヤ８０００ｍ峰の登頂を叶えた第３次隊に参加して、マナスル登山のすべてを見ることとなった。村木さんは回想の中で、アコンカグアの「隊員から外れたことは私にとって幸せであった。」と書いている。

のちに村木さんは「ヒマラヤというのは夢に思い描いたり、ただ眺めていれば美しいだけですむが、そのふところに入り込み、頂に登るということは大変なことである。しかし一度、その魅力にとりつかれると、なかなか逃げられないというのも事実であろう」と書いている。マナスル登山の後、村木さんは研究所に戻り、二度目の山岳部の監督として後輩を指導することになったが、遭難事故が起こるなど多事多難であった。私事の方でも多忙となり、金属工学研究の10年間の区切りを論文として提出する期限が来ていた。そんなときに日本山岳会に次のヒ

マラヤ登山計画が持ち上がり、その隊長候補に挙げられた。この登山隊の私的な記録『ヒマルチュリ』の冒頭部分には、35歳の村木さんの迷いに迷った心境が綴られている。日本山岳会としては、マナスルの貴重な経験を次の世代へと引き継いでゆくことを考えていた。

「頂上へ登るということでは不成功に終ったのであるが、新しい体験を通じてヒマラヤの実体が少しずつわかりかけてきたということは、払われた努力に対するせめてもの慰めともいえるであろうか。

ただ高い峰に登るというだけではなく、以前には考えても見なかったような困難な登攀を目指す新しい時代がヒマラヤにも来つつあるようである。」とは同書の「あとがき」であるが、昭和34（１９５９）年には８０００ｍ峰は11峰が登られており、高さから困難さへと対象が移っていった。この年ネパールではジャヌー、ダウラギリ、アマダブラムに登山隊が入り、また、日本からも４つの登山隊が入っていた。ヒマラヤ登山は「新しい構想を打ち出さねばならない時代」になっていたのである。

ヒマルチュリ登山の後は、村木さんは製鉄会社に就職して登山活動そのものからは離れたが、日本山岳会は若い人材を育てるために登山技術講習会および海外登山技術研究会を開き、これにも村木さんは協力した。この講習会の講師は各大学のＯＢたちが担い、この中からヒマラヤを目指す人たちが出てきた。また、日本山岳会でも新たに登山隊を送り出す計画が始まり、村木さんはこの委員会にも参画した。日本からヒマラヤを目指す登山隊に対して推薦状を発行するなど、日本山岳会は海外登山の総元締めのような役割を果たしたが、昭和40（１９６５）年のネパールの登山禁止措置を境に、各登山隊は独自の経路を開拓して、より自由な登山を展開する時代へと移ってゆく。

１９８０年代半ばから、日本山岳会を担う世代が、いわゆる「マナスル世代」へと移ってきた。１９８５年に就任された今西壽雄会長を支えたのは山田二郎さんと大塚博美両副会長、１９８７年からは大塚さんと村木さんが副会長となり、１９８９からは山田さんが会長となった。このときの副会長は村木さんと藤平正夫さん。１９９１年からは藤平さんと松田雄一さんが副会長となり、１９９３年に藤平さんが会長となり、２年で退任されたので、１９９５年から２年間、村木さんが会長に就かれた。日本山岳会に入会してから、仕事の関係で東京を遠く離れているときを除いて、村木さんは常に山岳会の中心におられたことがわかる。

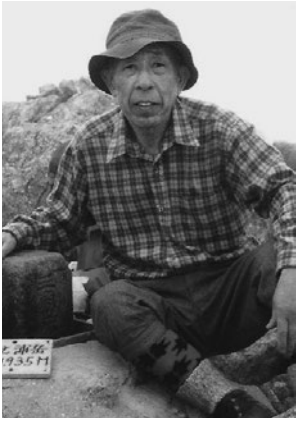
早稲田大山岳部創部70周年に際して、「私と登山」を村木さんは次のように語った。「私自身は山登りとは人間が一人で自然に相対し、その接点を求めるものだと思い定めている。そして、その意味で過去を振り返ってみると凡そ逆のことばかりやって来たのではないかという気がするのである。若い時から、中年

を経て、今に到る迄人様のお世話になるか、人様のお世話をして、何時も人と共存し人が介在する山登りを続けていたことになる。これについては悔いは無いし、十分楽しく有意義であったと考えている。今更意気がって一人で山に対するなどといっても空想に過ぎないといわれそうだが、強いていえば大勢で衆を頼むという式の山登りは、成るべく避けたいという思いが強いせいかもしれない。」

大先輩・今井友之助さんを追悼した文は、村木さんらしい尽くされた内容を持っているが、その中に「マナスルの準備をしていた頃、谷口現吉がしみじみと今井の山登りの鋭さを語っていたことがある。八ッ峰のことではなく、その前年の冬、たまたま横尾の岩小屋で一緒になった三井、谷口らの慶応パーティーは北穂に向かい、今井は一人で奥穂北東稜や北尾根を登っていた時の話である。」とし、「困難な登攀であればある程、綱を結んで助け合うことが常識であった当時、黙々として困難な単独行に励んでいた。昭和初期にこのような考え方、登り方をする人がいたということにはいささか驚きと尊敬を感じるのである。」「衆を頼むことなく、己れ個人の力と思いを尽くして自然に対する、最も根源的な山登りを志した」と、今井さんの心情に共感を示していた。

（児玉　茂）

西澤　健一さん



にしざわ　けんいち
（1928～2012）
会員番号 4427

2012年10月28日、西澤さんの奥様から、主人が亡くなりましたと連絡があった。

享年84は天寿ともいえる高齢だが、つい1月前に元気な姿に接していたので、突然のご逝去は思いがけないものだった。熊本支部にとっても、支部設立に携わった大切な会員を失うことになった。

西澤さんと私が知り合ってちょうど30年になる。親子ほどの年の差がありながら、同じ会の仲間として親しくお付き合いさせていただいたが、付き合っていて実に気持ちのいい方だった。

家が近くだったこともあって、よく遊びに行き、いろいろと面白い話を聞くのが楽しみだった。なかなかの博学で、私の知らない昔の支部のことや古い会員のことなど、いろいろな話を聞いたものだった。今にして思えば、聞いておきたいことや教えてもらいたいことが山ほどあったのに、惜しいことをしたと思う。

とにかく生真面目で几帳面な方で、何ごともきちんとしないと気の済まない性格だった。支部の会合で短めの挨拶をお願いしても、きちんとしないと気が済まないらしく、いつも長い挨拶をして、司会者をやきもきさせたりもした。初対面の人には、その風貌からなんとなくとっつきにくい印象を持たれたりもしたが、打ち解けると心底から朗らかになって接する人だった。律儀で面倒見が良く、支部で寄付のお願いをすると、いつも真っ先に応じてくれた。

西澤さんと日本山岳会の出会いは１９５６年9月、初代・熊本県山岳連盟会長だった北田正三氏の熱心な勧めにより入会したことに始まる。当時、西澤さんは熊本県庁に勤めておられた。県庁では主として総務畑を歩まれ、優れた調整能力と組織運営に手腕を発揮されたと聞いている。その一方、県庁山岳部を立ち上げて盛んに登山活動を続けておられた。

そのころ九州に山岳会員は少なく、支部も結成されていなかった。県内には3名の会員（北田正三氏、三谷孝一氏、奥野正亥氏）が在住しているだけだった。そんななか、１９６０年に熊本で第15回国体が開催されることになった。熊本県山岳連盟会長だった北田氏は、熊本支部を結成して国体開催に備えようと考えられたようだった。入会後、北田氏の指示で、西澤さんによって支部設立に伴うすべての準備が進められ、同年12月に支部設立の承認があった。翌年7月、阿蘇宮地の北田宅で第1回の支部総会が開かれ、支部長に北田氏、常務委員に西澤さんが選出され、事務所は県庁山岳部内に置くことが決まった。

ところが、１９５８年7月に北田支部長が阿蘇山・高岳で遭難死され、発足早々の支部は早くも存亡の危機に立たされた。支部運営のすべてを任されていた西澤さんの、長い奮闘が始まることになった。第2代支部長に三谷氏を選出し、自らは常務委員として20年にわたって実質的に支部運営に当たり、さらに１９７８年から第3代支部長として10年間、合わせて30年の長きにわたって支部運営の重責を担い、今日までの支部活動の基礎を作られた。西澤さんが支部結成時から傾注した支部へのさまざまな尽力は、決して忘れてはならないだろう。支部運営に携わった30年のなかから、幾つかのエピソードを紹介したい。

西澤さんは、かねてから「九州は一つ」と提唱されていた。日本山岳会は全国組織だという信念があったようだ。１９７５年、日本山岳会創立70周年のとき、祝賀会を九州3支部合同で行なうことを企画され、福岡支部、東九州支部に呼びかけられた。両支部の快諾で九州初の3支部合同集会が11月15日、大分

県九重町の新日鉄九重山荘で開催された。本部から今西錦司会長、望月達夫副会長、吉沢一郎理事を迎え、合計48名が一堂に会し、西澤さんの司会進行で初の3支部交流が実現した。のちにそのときのことを「九州の会員が一つになり、この集会が先駆けになればと願った」と語っている。これを契機にして、九州の支部間交流は現在まで続いている。

今西錦司元会長（以下、今西先生という）との一連の山行も、西澤さんにとって生涯忘れることのできない思い出になった。1978年から1985年にかけて10回にわたり、九州各地の43山に今西先生と登られた。今西先生との登山は、本来、支部の山行ではなく、先生との自由な山行であったが、今西先生の人柄に魅せられて多くの会員が参加した。西澤さんはほとんどすべての山行に同行し、今西先生との楽しい思い出をのちのちまで語っておられた。

熊本支部も、設立から30年を迎えるころになると会員も増加し、西澤さんも盛大な記念集会を行ないたいと切望され、準備を進められた。1987年11月、阿蘇高森の南阿蘇国民休暇村で、支部設立30周年記念集会が開催された。本部から今西寿雄会長はじめ、全国の支部からの参加者もあって、51名が集う盛大な集会となり、全国に熊本支部の存在を広くアピールすることができた。集会の後、西澤さんから「おかげで面目を施しました」と嬉しそうに言われたのを覚えている。

1988年、支部長を退任した後、初代の支部顧問に就任し、同時に本部評議員に選任され、2期4年にわたって大役を務められた。

西澤さんは日本聖公会のクリスチャンで、奥様の話では、若いころは熊本聖三一教会で熱心に活動されていたらしい。ところで、日本山岳会の生みの親といってよいウェストンが、来日して最初の赴任地となったのが熊本だった。ウェストンは1888年10月、熊本に着任し、翌年の夏ごろ（時期不明）大阪の聖三一神学校に転出するまで、熊本聖三一教会（当時は聖十字教会といった）の宣教師だった。つまりウェストンと西澤さんは、時期は違うが同じ教会で活動していたことになる。そんな奇縁もあって、かなり前からウェストンに関心を持たれていたようである。教会に残る資料を長年にわたって調査し、熊本におけるウェストンの足跡を追っておられた。しかし資料が少なくて、全容解明には至らなかった、と述懐されていた。

2007年には永年会員となられ、翌年1月に祝賀会が開かれた。スーツの襟に永年会員バッジを着けた西澤さんは誇らしげで、いかにも嬉しそうだった。西澤さんの登山歴には、激しい登攀記録や華々しい遠征記は見当たらない。若いときは北アルプスをはじめ全国の山へ足を延ばしたこともあったが、ホームグラウンドは九州の山だった。支部の例会を中心にした山行を、生涯にわたって続けてこられた。今思うと、支部への愛着

は人一倍強いものがあった。西澤さんにとって、人生の大半は熊本支部とともにあったといってよいだろう。10年くらい前から膝を悪くして山から遠ざかると、若いころから関心のあった山の民俗学関係の本を読んでおられた。山への情熱は終生、失われることはなかった。藤島敏男名誉会員の言葉を借りれば、Happy few の人だったといってよかろう。

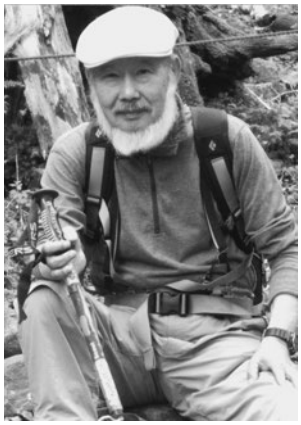
2012年10月30日、多くの支部会員が参列して葬儀が執り行なわれた。祭壇の前に眠る西澤さんと最後のお別れをした。愛用の山岳会のループタイを着けた、いつものダンディな西澤さんだった。

〈略歴〉

1928年3月20日：熊本市に生まれる
1956年9月：日本山岳会に入会。会員番号4427
1957年7月：日本山岳会熊本支部設立
1978年：日本山岳会熊本支部長
1988年：日本山岳会評議員
2007年：日本山岳会永年会員
2012年10月28日：永眠。享年84

（田上　敏行）

松永　敏郎さん



まつなが　としろう
（1933～2012）
会員番号 4934

松永敏郎さんは昨年2月、脳梗塞を発症、意識が戻らぬまま11月、79歳の生涯を閉じました。

私が昭和29（1954）年の春、國學院大学に入学直後、山岳部に入部したときのチーフ・リーダーが、3年生の松永さん。部室での初対面の印象は眼光鋭く、寡黙で、怖そうな人だ、というものでした。

松永さんとのエピソードのなかで一番強烈なものは、昭和30年3月の鹿島槍ヶ岳・東尾根の帰りのできごとです。

BCを撤収し帰路についた際、背負ったザックの重さは「ス

イトリガミ」と呼ばれた水分をたっぷり吸い、バカに重たくなった冬天、荷が重く使わずじまいのスキーなどで60kg近くにも。降りしきる雪、仲間は先に行ってしまい、遅れる私の背後には松永さんが黙ってつきます。鹿島集落の外れで休憩、さあ出発と立ち上がろうとしたとき、荷に振られ、超特大ザックを背負ったまま頭から深い雪の中に突っ込んでしまいました。いくらもがいても容易に抜け出せません。その間松永さんは一切手を出さず、黙ってタバコをくゆらせていました。そのとき突然、「なんで、助け起こしてやらないの？　あんたは非人情な人だねぇ」という声。たまたまお婆さんが通りかかり、なじったのです。

松永さんは静かな口調で、「今は合宿中です。本人のために手を貸さないのです」

お婆さんはなかなか納得せず、やりとりが続くなか、ようやくザックが外れ、背負い直して立ち上がることができました。

ご自身にも他人にも妥協を許さず、厳しくある姿は後年「鬼の松永」「鬼軍曹」と呼ばれるようになった片鱗が、ここに見られるのではないかと思います。後輩の指導や育成、安全登山の啓蒙などいろいろ尽くされました。58年もの長きにわたり、お付き合いいただいたことになります。80の声が聞こえる私が今も山歩きを続けることができるのは、こうしたことがあったからで、深く感謝しております。

松永さんとの最後の山歩きは昨年2月、塩原・高原山の剣ヶ峰や奥日光の戦場ヶ原をスノーシューで歩いたときで、久しぶりの雪山の感触を楽しみながら、荒れ模様となった風雪の中を一歩一歩雪を踏んでの一日でした。一緒に帰京した6日後、脳梗塞で倒れ、これが最後の山になりました。

中野のお店や高円寺のお宅に伺うと、いつも自らお湯を沸かし、まず湯呑にお湯を注ぎ、温め、その湯をこぼし、改めて上等なお茶を入れてくださるという、細やかな心遣いに人柄の優しさを感じました。楽しみだった「和敬（わけい）」のひとときです。

平成3（1991）年に上梓された著書『空にただよう峰』は登山記録、登山技術論、山岳遭難の分析と対処法、随筆、紀行、短歌と多岐にわたり、松永さんの山に関しての集大成といえます。

その中の歌篇「蒼天飛雲　わが山を歌う」には松永さん29歳の昭和37（1962）年から約30年間の短歌64首が採録されており、そこには厳しい岳人とは別の、歌人としての一面が見られます。また、毎年届く年賀状に山を詠んだ短歌が添えられているのを、心待ちにしている方が多いそうで、山岳会員の倉知敬さんが、賀状を昭和50（1975）年から平成24年までの三十余年にわたって、年賀の歌と詞書付きで保存されていることも伺っています。

山（大自然）に対する深い畏敬の念を持ち、豊かな感性を歌に込める姿勢は、松永さんの没後発見された、未発表の幾つか

の小品にも見られます。

『初夏の山麓にて』の冒頭文は「君は見たことがあるだろうか、五月になると、谷をわたり尾根を伝い山ぼうしの葉を翻しかっこうの鳴き声を残しながら季節が風と陽の光にのって流れるのを。（以下省略）」

松永さんの文章は、散文も韻文（短歌）にも共通な詩の世界、叙情が広がっているようです。

これからも山歩きをご一緒するのを楽しみにしていたのに、実に惜しい先輩を失いました。

〈略歴〉

１９３３年：静岡市に生まれる

１９５２年：國學院大学に入学、在学中は山岳部に所属

１９５６年：同大学を卒業

１９６２年：東京・中野に登山用品店「アポロスポーツ」を開店

２００６年：ともに店を営んできた妻の康子さんが病に倒れ、その介護のため44年続いた店を閉じた

その間、日本山岳会で永年会員（会員番号４９３４）、理事、評議員を歴任。文部省（文部科学省）登山研修所専門調査委員、運営委員、日本山岳協会の指導常任委員の任にあって指導者として多大の功績を遺し、この功を評され、平成９（１９９７）年、文部省登山研修所創立30周年記念式典で、文部大臣より感謝状を授与された。

〈主な山歴〉

１９６０年：屏風岩・第１ルンゼ厳冬期初登攀

１９６５年：富士山剣ヶ峰大沢・左岩稜積雪期登攀

１９６９年：マウント・レーニア、マウント・アダムス、マウント・スチュアート、マウント・セントヘレンズ（以上、アメリカ）マウント・ロブソン（カナダ）

１９７３年：アンナプルナⅠ峰（ネパール）

１９７５年：ヘイズ南峰（アラスカ）

１９８０年：バギラティⅠ峰（インド）

１９８５年：雪岳山（韓国）

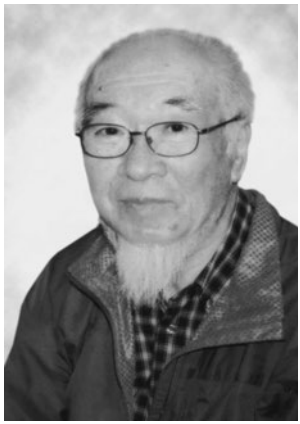
１９９２年：サンディカンシャ（チベット）

著書　『空にただよう峰』

共著　『露営生活手帳』『登山用具』『高みへのステップ』『遭難事故救助技術』『登山技術』など。

（大橋　晋）

梅木　秀徳さん



うめき　ひでのり
（1933～2012）
会員番号 5908

人みな花に酔うときも
残雪恋し山に入り
涙を流す山男
雪解（ゆきげ）の水に春を知る

昭和27（1952）年、九重山・坊ヶつるの山小屋「あせび小屋」で生まれたこの「坊ヶつる讃歌」の作詞者のおひとり、前東九州支部長・梅木秀徳さんが、平成24年12月19日、亡くなりました。

2年前の3月に亡くなった、もうひとりの作詞者、元福岡支部長・松本徳夫さんに続いて梅木秀徳さんも亡くなり、相次いで九州の山岳界の重鎮のおふたり、山の大先輩が旅立っていきました。

梅木秀徳さんは昭和45（1970）年5月、日本山岳会に入会（会員番号5908番）、平成元（1989）年、元支部長・野口秋人さんの死去に伴い、翌平成2年の総会において東九州支部長に就任されました。以降、平成23年に退任するまでの21年間という長い間、西孝子事務局長とのコンビで支部運営に携わってこられました。その功績は誠に大きく、支部はその間にさまざまな事業を成し遂げ、発展をしてきました。

梅木秀徳さんは昭和8（1933）年、大分県玖珠郡野上町（現九重町）生まれ。日田高校、九州大学を経て昭和31（1956）年、大分合同新聞社に入社。以来、新聞記者として活躍され、大分合同新聞社取締役論説委員長、その後平成11（1999）年、エフエム大分の社長、そして会長を歴任し、平成19（2007）年に退任されるまで、根っからのジャーナリストとしての生涯でした。

登山活動は昭和24（1949）年からで、生まれた地から望む九重連山からスタートしました。その活動は国内から海外の山へと向けられ、持ち前の幅広い知識と多くの方からの人望で山岳会のお世話も永年続けられてきました。

「九州山小屋の会」「筑紫山岳会」「かもしか登高会」「大分登高会」と在籍した山岳会も多く、日本山岳会の支部長とともに大分県山岳連盟の副会長も昭和55（1980）年から12年間尽力されました。

青年期の登山活動でいえば昭和27（1952）年の傾山南壁、西稜と昭和34（1959）年の北壁初登攀の記録は、今でも残っています。

昭和40（1965）年には大分ヒマラヤ委員会の大分ヒンズー・クシュ登山隊員としてアフガニスタンのコーイ・モンディ（6248m）に日本人初登頂を成し遂げました。以降、大分県山岳連盟派遣の海外登山隊にも参加、その都度、遠征隊の詳細な記事は大分合同新聞の連載記事として紙面を飾りました。

その記事も、単に遠征記録の報告という内容だけでなく、その国の〈自然〉〈風土〉〈歴史〉といったものから、さらには〈民俗〉〈宗教〉へと豊富な話題を縦横無尽に駆使したもので、細かい描写で読む人に興味をいだかせるように綴っていった文章は、洞察力のある味わい深いものでした。

昭和55（1980）年、東九州支部創立20周年の記念誌として『おおいた百山』を発表、さらに平成2（1990）年の創立30周年記念では単行本として『大分百山』を発行、今でもこの本をベースに大分の山々を登っている人たちの原点となっています。

『大分の山―大分県主要山岳丘陵一覧―』（昭和62〈1987〉年刊）は、山の原点ともいえる大分の山々の紹介の集大成で、根気よく、そしてふるさとの山々を愛するが故に成し得た著作です。

『九重山博物誌』（平成9〈1997〉年刊）では、そのあとがきにおいて「九重はまさに〝自分の宝だ〟」と表現し、「死んだら久住の山頂から灰を撒いてくれないかなぁ」と書いています。日本山岳会百周年記念として出版された『新日本山岳誌』（平成17〈2005〉年刊）の大分県の山々の紹介も、すべて支部長である梅木さんの執筆でした。

そして、最後の著作が1年半前にひと足早く亡くなられた、「坊ヶつる讃歌」の作詞者のひとり、松本徳夫・元福岡支部長との共著『九重山法華院物語』（平成22〈2010〉年刊）であったのも、何かの因縁であったのでしょうか。

梅木さんは常日頃「登山は文化だ」という言葉を力説していました。そして、晩年はその言葉どおり、山を通じた文化や歴史といった面での活動や仕事に情熱を注いでいったように見受けられました。関わってきた団体を見れば、それが顕著に表われています。

山に登りながら社会・文化・自然を観察し、幅広い視野と体験を積み上げてこられた、大分を代表する言論・文化人でありました。その著作にも、山を中心とした知識の集大成が数多く

残されています。

あれほど愛した九重を歩かれたのは、亡くなる40日前の平成24年11月8日・9日、九重山法華院温泉での「法華院の会」への参加でした。闘病生活のため体重が7kgもやせられた姿でしたが、会の冒頭の挨拶と乾杯の音頭もとられ、お元気な様子でしたが、このときが九重の山々の見納めになろうとは、思いもよらぬことでした。

人との関わりを大切にされ、決して人をけなさず、常に謙虚で、多くの人に慕われ、どんなテーマについて話をしても、その湧いてくる知識は豊富で幅広く、温かみのある話しぶりには、人間としての魅力がありました。

山を愛し、人を愛し、家族を大事にし、そしてこよなくお酒と煙草を好んだ梅木さん。

亡くなられた今、その存在がいかに大きなものであったかが思い知らされ、生前にその知識のほんの一部でも教えを受けておれば、と悔んでいます。真に残念でなりません。

この遺影は、梅木さんが支部長としての最後の仕事である、東九州支部創立50周年（平成22年11月）の記念に作ったジャケットを着た姿でした。

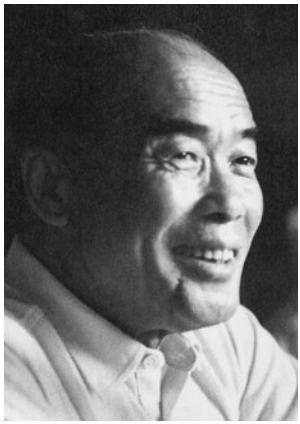
君逝きて九重は悲し雪化粧

〈略歴〉

1933年10月11日：大分県玖珠郡九重町生まれ
1956年：九州大学文学部卒業、大分合同新聞社入社
1949年：日田高校山岳部入部から登山を始め、九州山小屋の会や筑紫山岳会、かもしか登高会、大分ヒマラヤ研究会、大分登高会に在籍
1965年5月：日本山岳会入会（会員番号5908番、紹介者＝野口秋人、加藤数功）
同年：ヒンズー・クシュのコーイ・モンディ登頂。以降、アルプスやヒマラヤ、チベット、中央アジアの踏査・探検多数
1973年：大分県山岳連盟常任理事
1982年：大分県山岳連盟副会長
1990年：日本山岳会東九州支部長
1991年：大分合同新聞社取締役論説委員長
1999年：エフエム大分代表取締役社長
2011年：日本山岳会東九州支部顧問
2012年12月19日：逝去。享年79

（加藤　英彦）

史　占春さん



スー　ツァンツゥン
（1928〜2013）
名誉会員

２０１３年1月27日夕刻、「史占春さんが今日の午後4時、病院で亡くなられた」と北京より連絡があったとの知らせを受けた。10年ほど前から体調が勝れず、静養して過ごしておられることは聞いていた。訃報を聞いて、悲しみとともに多くの思い出が次々に頭に浮かんできた。

１９８０年、中国はそれまで外国登山隊の入国を認めていなかったが、まずチョモランマを日本に、シシャパンマを西独に許可した。77年に文化大革命が収束し、国内の情勢が安定してきたことが契機になったのだろう。その後、未踏の山々が続けて解放された。ＪＡＣの80年のチョモランマ北東稜、北壁直登の2ルートよりの登頂成功をはじめとし、日本の登山隊は多くの未踏峰の登頂に成功して、日中の登山交流に大きな成果をあげた。日本の登山隊をこのように快く受け入れてもらったのは、史さん以下、中国登山協会の好意があったように私には思われる。

私が史さんに初めて会ったのは、１９７９年の春だった。京都大学中国文学者訪中団に医師として参加した。当時、京都大学学士山岳会（ＡＡＣＫ）では、次の山の目標としてグルラマンダータが候補になっていた。しかし、中国の登山界の事情は、１９６０年と75年のチョモランマ登頂を報道で知った以外、日本ではほとんど不明だった。それで訪中団に参加する私に、中国で交渉の糸口を見つけてくるように指示された。北京で事情を話して、中国の登山界の方にお会いしたいと申し入れた。断られても仕方がないと思っていたが、会えると通知があり、ホテルと別な所へ案内された。そこで私を待っていたのが史さんだった。

私は、日本の登山家たちが中国での登山を期待していること、ＡＡＣＫはグルラマンダータを希望している、と話した。史さんはうなずきながら聞いていたが、最後に「まだ中国は外国隊に登山許可をしていない。しかし、近い将来解放するかもしれない。希望を持って待つように」との答えだった。私は礼を述

べ、「再見」と握手をして別れた。そのときは、9月にまた会うことになるとは思いもしなかった。

その夏、日本のスポーツ指導者の訪中団に参加された西堀栄三郎会長が、北京で思いがけず「日本が希望するなら、チョモランマ登山を許可する」との申し入れを受けられた。突然の朗報にJACは79年秋に偵察隊、80年春に本隊を派遣することを決定し、急遽、準備が大車輪で始まった。

9月から11月の偵察隊に私は要請を受け、隊長兼医師として参加することになった。北京で史さんと5ヶ月目に再会した。話し合いのとき、史さんがほとんど即決した。中国登山協会（CMA）のトップの実力を実感した。偵察隊は中国協力隊員と一緒にラサに入った。ラサから記載された地図を見たこともない中国・ネパール友好公路を、砂塵濛々のなか車で走り、ロンブク氷河末端のBC（大本営）に着いた。

隊を未踏の北壁と東ロンブク氷河より北東稜の偵察に分けた。ノース・コルへの斜面を登攀中、雪崩が発生、中国隊員の王洪宝、ニマタシ、ロランの3人と長谷川良典がクレバスに流された。長谷川は奇跡的に助かったが、中国隊員は行方不明となった。私はこの事故が、翌年の本隊に影響しないか心配だった。しかし、北京での反省と未解決の事項の話合いで、史さんは今回の事故を十分に反省し、来年は協力して実行しようと確答した。

80年のJACの総力をあげた本隊は、北東稜は加藤保男、北壁は重廣恒夫、尾崎隆が登頂に成功した。ただ、北壁で宇部明の雪崩による死亡事故があったことは残念だった。私も医師として参加し、主に北東稜隊員の健康管理を担当した。この後、私は5回も中国登山に参加して、史さんと長いお付き合いになった。

社会主義の国では、一般的にスポーツの成否に国の威信が懸けられている。中国では、登山の意義・目的を党中央（共産党中央委員会）が認め、支持することにより国家的行事になる。史さんはリーダーとして統率力、判断力、目的達成の強固な意志に併せて、勝れた政治的感覚の持ち主だったと思う。史さんの経歴を見ると、新中国の近代登山の創設より開拓・発展の歴史を語ることになる。

史さんは1928年、遼寧省の遼寧で生まれた。14歳で斉斉哈爾（チチハル）で鉄道工となる。

1947年、中国共産党入党。

1950年、天津幹部学校入学。

1955年、ソビエトへ行き、登山技術を習得。

1956年、中国・ソビエト合同登山隊の中国側隊長としてムスタグ・アタに初登頂。

1957年、ミニヤ・コンガ登山隊の隊長を務め、5人の中国人隊員とともに登頂。この中国人のみによる登頂は、高峰登

山に対する自信を深める成功だった。

１９５８年には、国家体育運動委員会は3年以内にチョモランマ挑戦を決定した。近代登山を開始して3年目のこの決定は、57年に開始された大躍進政策の、国をあげての高揚感が影響したのではないかと思う。当初はソビエトと合同で、登山装備はソビエトより提供の計画だったが、賀龍国家体育主任の提案と主張で、中国独自の隊になった。史さんは70万＄の大金を託されて密かにスイスに行き、登山装備を調達した。史さんから、モスクワ空港で乗り換えのとき、帽子を深く被って顔を隠すようにした、と聞いた。そのころ中・ソ間の厳しい意見対立が報じられていた。

膨大な準備活動を終えて60年2月、登山隊は成立した。未知の８０００ｍの高度に苦闘しながら、隊長の史さんは最終の偵察で、自ら８６９５ｍまで登っている。そして、ついに5月25日午前4時20分、王富州、屈銀華、貢布（ゴンプ）の3人が登頂に成功した。チョモランマ北側初登の成功は世界の登山界を驚かし、中国国民に大きな自信と励ましを与えた。

64年5月には、最後の８０００ｍの未踏峰・シシャパンマの中国隊登頂が報じられた。

次のチョモランマ登山は75年だった。その当時の中国は66年、毛沢東主席が発動した文化大革命の激動のときであった。73年、史さんは古参登山隊員と相談し、75年、再度のチョモランマ登山を党中央に申請し、許可された。75年の登山は順調で5月25日、8人の男性隊員と1人の女子隊員・潘多（パンドウ）が登頂した。潘多は北側からの女性最初の登頂者になった。2度目とはいえ世界最高峰の登頂成功は、中国国民の誇りを高めたと思う。

81年から解放の対象が広く、多くなっていった。多くの日本登山隊は中国に入り、成果をあげた。ＡＡＣＫは82年、カンペンチン初登頂後、ナムナニ（グルラマンダータの現地名）を目標に交渉を重ねた。同じ京都にある同志社大学山岳会（ＤＡＣ）も81年に四姑娘山初登頂後、ナムナニを目標にしていた。ＣＭＡより同志社と京大の合同、そして、入山のため通過する新蔵公路と山域のアリ地区が外国人に未解放であるため、日中合同隊が提案された。

84年に胡耀邦総書記が国賓として来日され、京都にも来られることが分かった。史さんより、胡氏にこの計画を伝えるように連絡があった。時の林田府知事に歓迎会のときに話していただくことができた。胡氏は日中交流に前向きだった。言下に賛成、協力を承認された。こうして日中友好合同登山隊は、中国の国家的イベントとなった。

総隊長・史占春、副総隊長・劉大義、斎藤惇生、登攀隊長・平林克敏で、史さんは登攀計画指揮いっさいを平林に委任した。85年5月26日と28日に、日中合計13人が初登頂した。日中両国隊員の間に全く問題はなかった。

史さんはこの合同登山の成功により、以前から考えていた中国、日本、ネパール三国合同によるチョモランマ交差縦走という夢の計画の実現に、自信を持って動き出した。日本では先に東海支部が動き、ネパール側と交渉してほぼまとめていた。86年1月、東海支部よりＪＡＣ本部に委譲の申し入れがあった。

88年、中国の要望に応じたネパール登山協会、ＪＡＣが各々総力をあげて、古今未曾有の大計画は始まった。80年のときと同じく読売新聞と日本テレビが後援だった。登頂交差縦走の予定日は、5月5日になった。その日に成功する確信は誰も持っていなかった。しかし、両側の登攀・荷上げは順調で、5月5日、好天に恵まれ奇跡的に成功した。北側から中日ネ各1人、南側から中2人、ネ1人で交差縦走した。

中村進カメラマンの日本テレビ隊も登頂し、世界最初の頂上からの衛星生中継に成功した。残念ながらネパール側の日本隊員は頂上に到達できなかった。このこともあり南北両側の日本隊員たちは、まだ余力を残していたので計画の続行を熱望した。北側のＢＣから北京の本部の今西寿雄総隊長にこのことを伝えた。今西さんは史さんに、ぜひともと強く計画の続行を求められた。しかし史さんは、一次隊の成功で計画を中止する、と頑として譲らなかった。結局、中国での登山であり、最後は今西さんも史さんに同意された。史さんは、計画を続けたためアクシデントが発生し、成功に傷がつくことを恐れたのだろう。7日に登山中止の辛い決定が伝達された。北側の隊長だった橋本清は『山岳』の報告の最後に「三国のリーダー陣をはじめ隊員各々が三国平等の原則のもとに理解し合い、苦労をともにしたことで、この計画を達成できたものと信じている」と結んでいる。

88年の年次晩餐会の席で、史さんが日本山岳会名誉会員に推薦されたことが発表された。

91年1月3日の夜間、雲南省の梅里雪山のＣ3で大雪崩が発生、中国人隊員6人、日本人隊員11人が埋没、行方不明となった。ＣＭＡとＡＡＣＫの合同登山隊だった。北京とラサ、そして京都から捜索隊が派遣された。ちょうどそのとき、公務で北京におられた大蔵大臣だった橋本龍太郎さんは、事故発生を知ると、旧知の史さんを宿泊されている釣魚台賓館に呼び、中国側の全面協力を丁重に依頼された。史さんはすぐ昆明へ飛び、指揮を執られた。しかし、最終的に手掛かりが得られず、捜索は打ち切られた。

90年からナムチャバルワ（７７８２ｍ）登山が開始された。ナムチャバルワはヒマラの東端、ヤルツァンポ河の大屈曲点にあり、モンスーンの影響が強く、気象の変化が激しい、７００ｍ級の未踏の最高峰だった。一度挑戦して登れなかったので、ＣＭＡと史さんにとって悲願の山だった。

ＣＭＡの申し入れをＪＡＣが受けて、日中合同登山隊が成立

した。中国側登攀隊員の主力は、88年で顔なじみになっているチベット族だった。90年にはまず偵察隊が派遣され、空撮と併せて南稜ルートの登路を決定した。

91年の隊は、悪天とアタック時に間断のない流雪があり、登頂を断念した。残念なことに大西宏隊員が雪崩に埋まり、死亡した。

翌92年の隊の登攀指揮は、昨年と同じく重廣恒夫だった。悪天が続き、最前線のC5が積雪に深く埋没するような悪条件を克服し、10月30日、中国人6人、日本人5人が登頂に成功した。

95年には重廣恒夫隊長の指揮でJAC隊は、中国側にある未踏の長大で困難なマカルー東稜を登り、登頂に成功した。

79年以来、JACとほかの多くの日本登山隊の中国での登山活動を振り返ってみると、史さん抜きでは語れない。史さんは、登山を通じての日中交流の一方の旗頭の役を果たした人と言える。

史さんは酒豪だった。山で、ときには水筒の中味が水ではなく白酒だった、と聞いたことがある。日本のざるそばが好きで、たれが赤くなるほど唐辛子を入れ、すすっていた。

告別式は2013年2月2日、北京の八宝山殯儀館であった。日本から日本山岳会と同志社大学を代表し平林克敏、日本山岳協会会長・神崎忠男、京都大学学士山岳会代表・岩坪五郎の3人が参列した。接した人がみな好感を持ち、敬愛された史さんのご遺体に別れを告げた。

史さんのご冥福を、心からお祈りする。

（斎藤　惇生）

会務報告

2012年（平成24年）4月～2013年（平成25年）3月
（◎総会　□理事会　◇人事　☆事業）

◇2012年度役員・評議員・支部長

会　　長　尾上　昇
副　会　長　吉永英明　西村政晃
常務理事　高原三平　森　武昭　小林義亮
理　　事　野澤誠司、中山茂樹、永田弘太郎、萩原浩司、節田重節、古野　淳、川瀬恵一
監　　事　平井拓雄、浜崎一成

委員会の担当理事
【財務】西村、小林
【総務、インターネット（デジタルメディア）】西村、高原、永田
【山岳編集、会報編集、英文ジャーナル】節田、萩原
【図書、図書管理】節田、中山
【YOUTH CLUB】野澤、古野、中山、森
【医療・科学・自然保護】森
【資料映像、海外】吉永、川瀬
【山研運営、集会】森、中山

評　議　員　＊宮崎紘一、＊橋本　清、堂本暁子、羽田栄治、箕岡三穂、塩澤　厚、渡邉玉枝、成川隆顕、神崎忠男、小川武、贄田統亜、中世古直子、今村千秋、内田　博、重廣恒夫、大谷　亮、南井英弘
＊印は常任評議員　宮崎・中世古は9月まで

支　部　長　（北海道）滝本幸夫・（青森）大久保勉・（岩手）菅原敏夫・（宮城）高橋二義・（秋田）佐々木民秀・（山形）渡辺　誠・（福島）大谷　司・（茨城）星埜由尚・（栃木）山野井武夫・（埼玉）大久保春美・（千葉）篠崎　仁・（東京多摩）竹中彰・（越後）山崎幸和・（富山）山田信明・（石川）中川博人・（福井）森田信人・（山梨）遠藤靖彦・（信濃）飯村富彦・（岐阜）早田道治・（静岡）久保田保雄・（東海）小川務・（京都・滋賀）田中昌二郎・（関西）重廣恒夫・（山陰）白根　一・（広島）杉村　功・（四国）尾野益大・（福岡）中馬董人・（北九州）伊藤久次郎・（熊本）工藤文昭・（東九州）加藤英彦・（宮崎）末永軍朗

□平成24年度　理事会みなし決議の件　4月1日

平成24年4月1日、理事会みなし決議議案（左記による）は、理事

及び監事全員の同意があったので、理事会の決議とみなされる（一般社団・財団法人法第96条及び定款第37条第2項の規定による）。

記

1. 理事及び監事の継続選任の確認（整備法第48条第1項のみなし規定による）
平成23年度末の理事及び監事とする。任期は、定款第30条第1項の規定により、平成25年度通常総会の時まで。

2. 規定類の制定
資料のとおり。規程類は、一部を除き、別添、規程類管理規程別表のとおり。

3. 支部規約の承認、（平成24年4月1日付、支部に関する規程第6条の規定による）資料のとおり。

4. 支部長の理事会承認及び会長任命（平成24年4月1日付、支部に関する規程第9条第2項の規定による）資料のとおり。

5. 評議員の会長推薦及び理事会選任（定款第33条の規定による）
平成23年度末における評議員と同じとする。任期は、定款第33条第5項の規定により、平成25年度通常総会の時まで。

6. 秩父宮記念山岳賞審査委員会委員の理事会承認及び委員、委員長の会長委嘱（平成24年4月1日付、秩父宮記念山岳賞実施規程4、(3)及び(4)の規定による）
平成23年度末における委員及び委員長と同じとする。任期は、平成25年度通常総会の時まで。

7. 海外登山助成金審査委員会委員の理事会承認及び会長委嘱（平成24年4月1日付、海外登山助成に関する規程第3条の規定による）
平成23年度末における委員及び委員長と同じとする。任期は、平成25年度通常総会の時まで。

8. 委員会委員長の確認及び会長委嘱（平成24年4月1日付、委員会規程第3条第1項の規定による）
平成23年度末における委員及び委員長と同じとする。任期は、平成25年度通常総会の時まで。

9. 事務局職員及び山研管理人の雇用継続の確認（職員就業規程第6条第1項、日本山岳会上高地山岳研究所管理規程第2条第3項の規定による）

□平成24年度第1回（4月度）理事会　4月11日　集会室

出席者　尾上会長、吉永・西村各副会長、高原・森・小林各常務理事、野澤・中山・永田・萩原・節田・古野・川瀬各理事、平井・浜崎各監事

審議に先立ち尾上会長から以下の挨拶があった。

公益社団法人として最初の理事会となる。組織は大きく変わらないが、評議員会が廃止されるなど、理事会の責任が大きくなった。また委員会組織にＹＯＵＴＨ ＣＬＵＢが加わった。将来的に当会の中心ともなるべき部署だ。期待したい。維新元年として新たな気持ちで取

り組んでもらいたい。

【審議事項】

1. ＹＯＵＴＨ ＣＬＵＢ運営について（森）
担当理事は、森、野澤、中山、古野の各氏とし、委員長は野沢理事とする。表記はアルファベット大文字で「ＹＯＵＴＨ ＣＬＵＢ」とする。（承認）
講習会、山行などＨＰで公開している。4月18日（水）19時より発足会を予定している。

2. 山岳6団体による環境大臣への尾瀬問題意見書提出について（森）
東電が尾瀬を売却する際には国有化を要望するもの。提出する旨の報告。（承認）

3. 日中韓三国登山（於中国武漢）について（高原、野澤）
今年の当番国の中国から日時などの通知があった。今までの学生部指導委員会に代わりＹＯＵＴＨ ＣＬＵＢで対応する。ただし、今後はＹＯＵＴＨ ＣＬＵＢの自主性に委ねる。またこの企画の必要性も改めて考える。2年に1回開催なども視野におく。（承認）

4. 国際山岳年プラス10について（高原）
拠出金は、他の山岳団体と歩調をあわせ10万円とする。（承認）

5. 出版編集に関わる業務委嘱について（高原）
別添に示すとおり業務委嘱を行なう。（承認）

6. 山研管理人雇用通知書について（高原）
別添に示すとおりで雇用する。（承認）

7. 「山の日」制定ＰＴリーダーの交代・委嘱について（西村）
5月9日より成川隆顕会員から萩原浩司理事に交代・委嘱する。（承認）

8. 埼玉支部の支部長交代（高原）
石橋正美会員から大久保春美会員に交代する。（承認）

9. 入会の申し込み（高原）
75名の入会申し込みがあった。（承認）

10. 国土地理院から「電子国土賞」の推薦団体依頼について（高原）
優れたＧＩＳ（地理情報システム）利用のコンテンツやソフトウエアに賞を与えるもの。（承認）

【報告事項】

1. 各ＰＴ報告
①法人運営適正化ＰＴ（吉永）
コンプライアンスとガバナンスの徹底のために活動する。
「平成24年4月1日、理事会みなし決議案」は、理事及び監事全員の同意があったので、理事会の決議とした旨の報告があった（会報5月号に掲載予定）。
②山の日制定ＰＴ（西村）
「動物編」リーフレット完成。活用をお願いしたい。
10月、山岳5団体で、「山の日」関連団体を集めた会議を開催する。
③ルーム検討ＰＴ（森）

若者が集まれる場所や資料・図書の保管などのために物件を探す。
④収益事業・会員サービス事業検討ＰＴ（節田）
出版事業、ツアー事業、登山教室、保険事業、グッズの新商品開発、山小屋との連携などを考えている。次回、メンバーや事業を発表する。
⑤支部活性化ＰＴ（高原）
当会支部主催で、会員外の参加に対する傷害保険の検討。その他、首都圏支部として神奈川支部の可能性の検討をしている。

2. 平成23年度決算状況について（小林）
資料による説明があった。収支は昨年度と比べ改善してきた。

3. 臨時・拡大常務理事会開催（3月29日）について（西村）
出版関連3委員会、図書関連委員会の担当理事を交えて話し合う。改善策を探っている。

4. 福島支部創立65周年記念日本・パキスタン合同カラコルム登山計画について（高原）
7月9日～8月3日。シムシャール地方の未踏峰（6000m級）が目標。

5. 学生部のインド・ザンスカール未踏峰ＰＴ6165m遠征計画について（古野）
8月15日～9月28日、学生5名による登山の実施。

6. 入会申込書について（永田）
Ａ4サイズにし、パソコンから出力できるようにした。

7. 支部所属届、所属支部変更届について（高原）
届出書の周知があった。

8. ＪＡＮ（ジャパニーズアルパインニュース）13号発行（節田）
4月上旬発行。東ヒマラヤの世界最高の未踏峰の情報等。

9. 大町山岳博物館友の会より、『山岳』記事転載許可（高原）

10. 松本市波田郵便局からの切手使用ウエストンレリーフ写真利用許可（高原）

11. 谷川岳危険地区の登山禁止について（群馬県知事）（高原）

12. 会報編集の報告（神長、柏）
4月号は総会の議案中心。会報「目録」を4月号に同梱。

13. 国立登山研修所の研修計画を紹介（高原）

14. 日本山岳ガイド協会「安全のための知識と技術」講演会案内（高原）

15. 信州大学学士山岳会オーガ登山隊の登山中止（萩原）
海外登山助成金の対象であった同隊が登山中止になり助成を辞退してきた（前期の対象グループはなし）。

16. 会報「山」の新編集長の柏澄子会員の紹介があった（高原）

17. 臨時職員の藤川志津子さん（6月1日採用予定）の紹介があった（高原）

【今後の予定】

1. 文科省へ平成24年度事業計画予算及び移行登記完了届出書提出（4月17日）

2. 内閣府へ移行登記完了届出書提出（4月17日）
3. 常務理事会（4月26日）、理事会（5月9日）、監事監査（5月7日）、総会・支部長会議（6月16日）
4. 支部事務局担当者会議（7月28日㈯11時～16時）
5. 第1回四国支部総会（4月29日）会長出席予定

□平成24年度第2回（5月度）理事会　5月9日　集会室

出席者　尾上会長、吉永・西村各副会長、高原・森・小林各常務理事、野澤・中山・永田・萩原・節田・古野・川瀬各理事、平井・浜崎各監事、オブザーバー：柏編集人

【審議事項】

1. 平成23年度事業報告（案）について（高原）
平成23年度実施事業の説明。
なお、前年度までプロジェクト実施項目は、共益事業に記載していたが、実態に合わせ、公益事業と共益事業に区分けして記載した。平成24年度通常総会の事業報告議案としたい。（承認）

2. 平成23年度決算報告（案）について（小林）
特例民法法人としての決算を展望して、公益法人会計基準（平成20年基準）にそった決算を行なった。
今期の決算は、入会者が増えたこと、また修繕費など22年3期の特殊支出案件がなくなったことや人件費の減等もあり、収支が大幅に改善された。
平成24年度通常総会の決算報告議案としたい（一部字句訂正、並び替えあり）。（承認）

3. 会費の滞納除籍予定者（高原）
5月9日現在の2年間の会費未納者リストとして98名（団体含む）が示され、今年度中に会費納入がない場合は除籍になる旨、報告された。平成24年度通常総会の議案としたい。（承認）

4. 今年度日中韓三国学生交流登山について（森）
本登山（中国主催で、武漢で8月7日より14日まで実施）は、団長に中山理事をあてる。次回以降の実施については、その協議を中山理事に一任する。（承認）

5. 学生部インド・ザンスカール遠征計画について（古野）
8月15日～9月28日、当会学生部5名が、インド・ザンスカール山脈の未踏峰（6165m）を目指す（計画書資料あり）。（承認）

6. 支部長交代について（高原）
岩手支部：内山達雄（11612）会員から菅原敏夫（1176５）会員に。
福井支部：宮本数男（10622）会員から森田信人（1457５）会員に。（承認）

7. 規程類「基金及び積立金等に関する規程」の改正について（小林）
平成22年度理事会において「基金及び積立金等に関する規程」を設け、翌年、同細則を定めたが、公益認定にかかる内閣府か

らの指導を折り込み、両者を統合改正し、新たに別添の「基金及び積立金等に関する規程」を設けた。字句の訂正等は、公益法人運営適正化ＰＴに一任する。（承認）

なお、本規程は重要と判断し、平成24年度通常総会で報告する。

8．エベレスト登頂60周年（２０１３年５月29日）記念イベントについて（尾上）

ネパール大使から、ネパール大使館主催の記念イベント「大ネパール展」への協力要請。当会としては実行委員として、井本海外委員会委員長を推薦したい。（承認）

第１回の会合が５月30日予定（他山岳団体、旅行社参加）

9．入会の申し込み（高原）

17名の入会申し込みがあった。（承認）

【報告事項】

1．各ＰＴ報告

①法人運営適正化ＰＴ「ＪＡＣへの寄付にかかわる税金について」（小林）

公益社団法人への寄付税制のメリット等をまとめた「寄付に関する規程（仮称）」を制定し、正確に支部などに伝える必要がある。税額控除制度適用の対象法人となるには、２年間の実績を踏まえ、行政庁の証明が必要。

②「山の日」制定ＰＴ（西村、萩原）

「山の日」制定協議会は、「『山の日』サミット《みんなで山を考えよう》全国大会」を10月３日に開催することで決定した。場所はオリンピック記念総合青少年センター。地方自治体をはじめ関係団体に呼びかける。

山の日は、支部のアンケート結果などから、第１候補として６月第１日曜日とし、制定後祝日（月曜休日）をめざす。

今秋11月、第２回「岳都松本〈山岳フォーラム〉」の開催が予定されている。

2．猿投の森隣接地の土地贈与契約（高原）

当会は、猿投の森（東海支部）の隣接地の寄付を受け、４月18日贈与契約を行ない、登記を終了した。

3．監事監査実施について（平井）

５月７日、平井、浜崎両監事は、当会23年度の監査を実施し、別添の通りの報告があった。

4．国土地理院「電子国土賞」の推薦について（森）

当会が推薦する案件を、森常務理事が窓口となりＨＰ等で公募した。現在、ＰＣ部門に「カシミール３Ｄ」モバイル部門に「地図ロイド」等があった。検討時間の不足もあり一部不明点もあるため、推薦案件の決定は森常務理事に一任する。

5．「国際山岳年プラス10シンポジウム」（６月23日～24日、日大文理学部で開催）（高原）

４月27日、第４回実行委員会が開催された。

6．第12回高尾の森づくり植樹祭の開催（吉永）

4月15日、植樹祭が行なわれ参加者は５００名を超えた。

7. 日本山岳遺産基金の活動助成団体決定（高原）
「早池峰にはゴミは似合わない実行委員会」「泉・五家荘登山道整備プロジェクト」の2団体。

8. ＹＯＵＴＨ ＣＬＵＢの報告（野沢）
事故遭難がないように、歩留まりを考え、ボトムアップしていきたい。また、ハイキング、基礎講習の参加者を取り込み、辞めないような魅力あるクラブにしていきたい。

9. 会報編集の報告（柏）
5月号は、巻頭にＹＯＵＴＨ ＣＬＵＢの発足。その他、学生部ザンスカール登山隊、カリマンタン島未踏大岩壁登攀チームの記事を掲載する。

10. 源泉徴収の扱い方を統一するために指針をつくる必要がある。（平井）

11. 志賀尚子理事の辞任（4月10日付）の登記手続きが完了。（高原）

【今後の予定】

1. 平成24年度通常総会、支部長会議（6月16日）（高原）
総会出席者数が2分の1以上必要なので、会報記事や返信ハガキ、封筒に工夫。各理事は総会参加の返信を呼びかけてほしい。

2. 委員会（総務、財務、山研）会議（5月30日18時30分～）
当該担当理事の会議を行なう。委員長との個別および全体会議は事後行なう。

3. 公益社団法人日本山岳ガイド協会通常総会に伴う懇親会（5月15日18時より）
尾上会長が出席する。

4. 日本山岳協会主催でチベット登山協会歓迎会（5月16日）を開催
吉永副会長、古野理事が出席する。

5. 日本山岳協会が第31回海外登山遭難対策研究会（6月23日、24日）を開催

6. 中信森林管理署が平成24年度山小屋等関係者打合せ会議（5月11日）を開催

□平成24年度第3回（6月度）理事会　6月13日　集会室

出席者　尾上会長、吉永・西村各副会長、高原・森・小林各常務理事、野澤・中山・永田・萩原・節田・古野・川瀬各理事、平井監事、オブザーバー：柏編集長

欠席者　浜崎監事

【審議事項】

1. 平成24年度支部への運営交付金、事業補助金支給方針について（小林）
支部への運営交付金および事業補助金を仮払いとして支給。5月末現在の支部員数で算定し、6月の総会終了後支払う。未使用金は返却する。（承認）

2. 四国支部よりの小島烏水のレリーフ寄託願いについて（高原）

四国支部主催で「小島烏水祭」の発足を予定（来年4月14日）。顕彰碑作成のためレリーフの寄託願いがあった。（承認）

3. 京都支部よりの支部名称変更申請について（高原）
「京都支部」を「京都・滋賀支部」（略称　京滋支部）に変更したい。（承認）

4. 広島支部ルーム購入について（高原）
広島支部のルームとして広島市南区大須賀町の物件を購入する。（承認）

5. 福岡支部長交代について（高原）
副島勝人会員（８１２５）より中馬董人会員（６２２２）に交代する。（承認）

6. マナスル登山隊使用酸素補給器一式の寄贈について（高原）
大町山岳博物館への寄贈願いが資料映像委員会より出された。（継続審議）

7. 入会の申し込みについて（高原）
24人の申し込みがあった。（承認）

【報告事項】

1. 平成24年度通常総会について（高原）
出席者数及び総会議事確認の報告があった。

2. 平成24年度第1回支部長会議について（高原）
運営交付金・事業補助金支給、寄付についてなど会務報告を行なう。

3. ＪＡＣへの寄付にかかわる税金について（法人運営適正化ＰＴ小林）
企業からの寄付は損金算入ができ、個人からの寄付は所得控除の対象になる。金銭以外の寄付については個別対応する。

4. ＹＯＵＴＨ ＣＬＵＢ口座開設について（森）
ネット利用できる、ゆうちょ銀行口座を設立。運営には永田理事が責任を持つ。

5. 日中韓三国学生交流登山日程について（中山）
中国側から登山計画書が提出された。孔雀谷での沢登り、朝天峰登山などを予定。副団長に高橋玲司会員（東海支部）を予定している。

6. 基金及び積立金等規程について（小林）
5月の理事会で承認された同規程の文案を整えた。

7. 国土地理院電子国土賞推薦について（森）
杉本智彦氏の「カシミール３Ｄ」を推薦した。

8. ひろしま「山の日」県民の集い（西村・萩原）
6月2日、3日に行なわれ、萩原理事、成川会員（「山の日」制定協議会代表幹事）が出席。山の日ネットワーク尾道会議の席上において「山の日」サミットへの協力を依頼した。

9. 委員会（総務・インターネット、財務、山研）会議　5月30日について（西村）
ＪＡＣ組織・委員会の改善を中心に行なっている。今回は3回

目。会長、西村副会長、高原常務理事と担当役員との打合せを行なっており、改善案の実施は今期中を予定。

10. エベレスト登頂60周年記念大ネパール展（仮称）実行委員会について（会長）
ネパール政府（バッタライ在日大使）が来年日本国内で主催するもので、5月30日に実行委員会を行ない、黒川惠会員が委員長となり井本重喜会員（当会の窓口）、その他旅行社、山岳団体代表と協力して進めることが決定した。

11. 国際山岳年プラス10開催について（高原）
リーフレットが完成し、参加依頼があった。

12. 都岳連スポーツ指導者研修会等（高原）
「スポーツ指導者研修会・総会兼公認リーダー研修会」「公認リーダー登録・継続手続き及び研修会のお知らせ」「公認スポーツ指導者養成講習会」の案内があった。

13. 日本ヒマラヤ協会役員通知について（高原）

14. 山の博覧会の案内〈山梨支部〉（高原）

15. 第14回・15回尾瀬賞授与式開催の案内（高原）

16. 会報「山」6月号について（柏）
海外登山助成金を受けた登山隊2隊の報告、宮下啓三会員の追悼記事など掲載。

17. 事務局職員採用について（高原）
6月1日より藤川志津子さんを正式採用した。

【今後の予定】
1. 支部事務局担当者会議　7月28日（土）
2. 委員会（科学、自然保護、医療）会議　6月27日（水）
3. 同好会・同期会連絡会　7月2日（月）

◎平成24年度第1回通常総会
6月16日（土）午後2時～
東京都千代田区六番町 主婦会館「プラザエフ」
出席者　110名、委任状出席3797名（会員数5177名）
議　案　1. 平成23年度事業報告案
2. 平成23年度収支決算、財産目録案
3. 平成24年度除籍予定者について

冒頭、尾上会長から今回は日本山岳会が4月1日から公益社団法人に移行した直後の記念すべき総会である、との挨拶があった。また、ここまで2年半にわたり（移行準備に）献身的な努力を続け、成果をあげたプロジェクトチームに賛辞を送った。議案は、いずれも原案どおり可決承認された。議事は淡々と進行し、事業報告・収支決算案についても質疑はなく1時間半で終了、昨年の長さに比べてスピードある審議であった。

□平成24年度第4回（7月度）理事会　7月11日　集会室
出席者　尾上会長、吉永・西村各副会長、高原・森・小林各常務理

事、野澤・中山・永田・萩原・節田・川瀬各理事、平井・浜崎各監事

欠席者　古野理事

【審議事項】

1. 海外登山助成金審査委員会答申について（萩原）

平成24年度標記委員会（前期募集分）を7月5日開催し、以下の7隊に各10万円を助成する決定をした。

・Shispare Expedition2012（平出和也、三戸呂拓也）シスパーレ（7611m／パキスタン・フンザ周辺）未踏ルートへの挑戦

・Japan Langshisa Ri Expedition 2012（谷口けい、鈴木啓紀）ランシサ・リ（6427m／ランタン・ヒマール）未踏の北東壁登攀

・Giri Giri Boys Patagnia Expedition 2012（横山勝丘、増本亮）フィッツロイ山群南下縦走（南米パタゴニア）

・キャシャール登山隊 2012（花谷泰広、馬目弘仁、青木達哉）キャシャール（6767m／ネパールヒマラヤ・クーンブ山群）南リッジからの初登攀

・京都学生登山交流会バトゥダヤ遠征隊（川村友裕ほか4名）大岩壁バトゥダヤ（標高差800m／インドネシア・カリマンタン島）の登攀

＊なお本隊はその後、都合により助成金受け取り辞退の申し出があった。

・日本山岳会学生部インド・ザンスカール遠征隊（大堀泰祐ほか学生4名）　ザンスカール（インド・カシミール州）未踏峰（6165mと6045m）の登頂

・広島県山岳連盟創立70周年登山隊（京オ昭ほか7名）：アンプー1峰（6840m／ネパール・サガルマータ国立公園）未踏峰の初登頂および周辺無名峰の初登頂（承認）

2. 「名誉会員推薦規程」制定について（高原）

以下の事項を変更。

・理事及び評議員が推薦し、理事会で決議する。（承認）

3. カシオ腕時計販売について（高原）

カシオ Combination LinePRW-5100-1JF（アナログ式）に当会マークと会員番号等を刻印し、定価の約30％引きで販売する。（承認）

4. マナスル登山隊使用酸素補給器一式の大町山岳博物館への寄託について（高原）（承認）

5. 入会申し込みについて（高原）　13名の申込みがあった。（承認）

【報告事項】

1. 各PT報告

①「山の日」制定PT（萩原）

・10月3日に行なう全国大会は「～みんなで山を考えよう～「山の日」ネットワーク東京会議」の名称に。また、船村徹氏による基調講演などを決定し、今月末には関係団体に案内状を送る。

・「やまなし山の日」に萩原理事および成川代表幹事が出席。「山の日」制定協議会の活動を報告した。
②支部活性化ＰＴ（高原）
・「公益活動として山行の注意事項」について議論を進めている。
・来年度全国支部懇談会開催地は静岡支部に決定。
③法人運営適正化ＰＴ（吉永）
同ＰＴは常設組織（委員会）として改める方向でいる。

2. 平成24年度通常総会について（高原）
出席者は、３９０７名（内委任状出席者３７９７名）で、議決会員の75・９パーセントだった。議案はすべて議決された。

3. 平成24年度第１回支部長会議について（高原）
運営交付金・事業補助金の支給、寄付の税金などについて報告をした。また、新しい５名の支部長を紹介した。

4. 文科省への平成23年度活動、決算報告について（高原）
７月３日、社団法人として最後となる文科省への報告をすませた。

5. ＹＯＵＴＨ ＣＬＵＢ報告（森、野澤）
・各支部の若手会員の企画事業への資金等のサポートの用意がある。
・６～７月活動報告及び７～８月活動予定について。

6. 委員会会議（自然保護、医療、科学）６月27日について（西村）
委員会の新設や改善を検討している。

7. 同好会・同期会連絡会の実施（高原）
７月２日に行ない、ルームの利用方法などを説明。

8. 日中韓三国学生交流登山計画について（中山）
東海支部学生５名、東京から専修大学生１名が参加の予定。団長・副団長以外にスタッフとして村越会員が同行予定。

9. 高尾の森づくりの会の気仙沼大島プロジェクトについて（高原）
高尾の森づくりの会は、震災で被害を受けた大島の亀山（気仙沼市）の森林再生を行なうため、ＰＴを作り支援活動を実施した（三陸新報に掲載された）。

10. 国際山岳年プラス10シンポジウムについて（高原）
６月23日～24日に日大文理学部で開催。充実した内容だった。７月13日に行なわれた実行委員会では、報告書を出すことを決定した。

11. 国土地理院電子国土賞受賞について（高原）
当会で推薦した杉本智彦氏作成「カシミール３Ｄ」が受賞した。

12. 募集山行企画の法的問題について（高原）
旅行業法などについて勉強会を行なう。

13. 文書保存期間について（高原）
定款、経理規程で定める以外の文書、当会発刊物等に別添資料による保存期間を設ける。

14. 『山岳』２０１２年１０７号仮目次について（節田）
故・宮下啓三会員の最後の原稿、中村保会員の報告、「新生公益

社団法人日本山岳会の誕生」などを掲載する。英文梗概を省略する。

15. 伊那市よりの「西駒山荘及び登山道整備のための寄付のお願い」について（高原）
会報、ＨＰ等で広報し、個人での寄付を呼びかける。信濃支部長宛に連絡する。

16. 「山はみんなの宝」憲章制定賛同呼びかけ人のお願いについて（高原）
関係他団体とも協議し、情報を収集する。

17. 山と溪谷社よりの故・宮下啓三会員のイラスト転載許諾について（高原）
承認した。

18. 日本山岳遺産基金・山と溪谷社主催「マナー&クリーンアップ・チャレンジ 2012 in 尾瀬」への名義後援について（高原）
承認した。

19. ヒマラヤ観光開発㈱よりの「ヒマラヤの集い」名義後援のお願いについて（高原）　保留。

20. 賠償責任保険の更新について（高原）
当会行事への賠償責任保険を更新。傷害保険は解約した。

21. 会報「山」7月号について（高原）
通常総会の記事を中心に山のトピックスや事業報告を掲載。

【今後の予定】

1. 支部事務局担当者会議　7月28日（土）11時～16時　１０４号室

2. 委員会会議（資料映像、海外）7月23日（月）17時30分より

3. 山岳4団体役員懇談会　7月25日（水）尾上会長、西村副会長、高原常務理事、成川山の日制定協議会代表幹事出席予定

4. 全国支部懇談会（千葉支部）10月20～21日　尾上会長、高原常務理事出席予定

□平成24年度第5回（9月度）理事会　9月12日　集会室

出席者　尾上会長、西村副会長、高原・森・小林各常務理事、野澤・中山・永田・萩原・節田・古野・川瀬各理事、平井監事

欠席者　吉永副会長、浜崎監事

オブザーバー：柏会報編集人

【審議事項】

1. 日中韓三国学生交流登山の今後について（中山）
武漢で中国・韓国側と会談。両国の当該行事に対する高い評価をふまえ、議定書通り、２０１５年まで継続する。ＹＯＵＴＨ　ＣＬＵＢの所管で行ない、経費についてはＹＯＵＴＨ　ＣＬＵＢの予算とは別に扱う。（承認）
なお、本年は、中国主催で8月7日から14日武漢で行なわれ、学生は、日本隊5名、韓国隊10名、中国隊14名が参加。登山より交流に重点を置いた催しで、学生には評価が高く、いまだ学

生の交流は続いている。

2. 東海支部「猿投の森」隣接地受贈にかかわる協定書について（高原）

先般受贈した「猿投の森」隣接地について、本部と東海支部間で、その使用に関する協定を結ぶ。（承認）

3. 広島支部ルーム取得及び使用にかかわる協定書について（高原）

先般購入した「支部ルーム」について、本部と広島支部間で、その取得及び使用に関する協定を結ぶ。（承認）

4. 委員会の新設について（西村、高原）

常務理事会で検討してきた組織改善の一環で、以下の委員会を24年10月1日に新設する。

①当初の目的を遂げた「法人運営適正化ＰＴ」を、今後の諸問題に対応するため、「公益法人運営委員会」と改称し常設の委員会にする。ＰＴ同様、担当理事には吉永副会長、委員長には佐野リーダーがあたる。

②広報的な活動が増えている「インターネット小委員会」を総務委員会から独立した委員会とし、「デジタルメディア委員会」と改称する。担当理事には永田理事、委員長には多田委員長があたる。（承認）

5. 委員会規程の一部改正について（高原）

組織改善の一環として、委員会規程を24年10月1日に一部改正をする。

①4条に委員資格として入会後2年間のインターバルがあったが、これを廃止する。

②5条の委員定数「20名程度」を現実的な「原則として20名程度まで」にする。

③6条及び第7条の予算や決算報告などの提出・報告期限を明確にする。

改正案の第7条で、事業報告の提出日を、4月末日から4月15日に訂正する。（承認）

6. 「山はみんなの宝」憲章制定賛同呼びかけ人について（尾上）

継続審議であった当該依頼について、「山はみんなの宝」憲章制定委員会の上氏に説明を求めた。運動の主旨は理解でき、賛同に応じても問題がないことが判明したため、当該依頼に応じる。（承認）

7. 会長特別表彰候補について（高原）

チョモランマ登頂最高齢記録を塗り替えた渡邉玉枝会員を会長特別表彰候補として推薦する。（承認）

8. 収益事業・会員サービス事業検討ＰＴメンバーについて（節田）

以下の会員をメンバーとする。

大蔵喜福（１０５３９）、中村達（１４２３９）、山口章（１５０７２）。（承認）

9. ルーム検討ＰＴメンバー追加について（森）

以下の会員をメンバーに追加する。　神﨑忠男（６００２）。

（承認）

10. 入会希望者について（高原）
24名の申し込みがあった。（承認）

【報告事項】

1. ＰＴ報告
①ルーム検討ＰＴ（森）　会長から、資料および図書の保管・管理場所を検討し、空いたスペースを会議室として検討するよう依頼を受けた。当ＰＴでは同意する旨を会長に報告した。具体案は、担当理事を中心に理事会で検討することとした。
②「山の日」制定ＰＴ（萩原）　「山の日」ネットワーク東京会議（10月3日国立オリンピック記念青少年総合センター）を開催するにあたって、「山の日」制定協議会として正式なプログラムを決定した。総合司会を尾形日山協専務理事、基調講演を船村徹会員が行なう。予算１００万円は山岳5団体で負担。

2. 24年4月～8月の会計実績状況について（小林）
資料により報告があった。支出は前年度と同じだが入会者が増え、入会金会費収入は下げ止まったとみている。

3. 寄付の受入れ報告（広島、福島支部）について（小林）
支部ルームの什器備品購入のため、会員および支部友会員１１７名から広島支部に３４７万５０００円の寄付があった。また、パキスタン未踏峰登山の資金として福島支部に45名から45万４０００円の寄付があった。

4. 高尾の森親子森林体験スクール覚書について（高原）
以前より京王電鉄㈱と当会高尾の森づくりの会で共催していた当該体験スクールについて、改めて両者で覚書を交わした。

5. カシオ腕時計頒布覚書について（高原）
24年9月より受付を開始するカシオ腕時計頒布について、カシオマーケティングアドバンス㈱と当会が覚書を交わした。

6. 大町山岳博物館より寄託資料掲載許可申請について（高原）
「スイス山岳観光の黄金期と日本人」の使用写真掲載承認。

7. ㈱ＮＨＫエンタープライズより「ＮＨＫオンデマンド」配信許可願いについて（高原）
承認した。

8. 舟橋栄子会員より、マナスル資料撮影及びビデオ作品への掲載許可ついて（高原）　承認した。

9. 池田常道会員より「槙さん一行のアイガー写真」の転載許可願いについて（高原）　承認した。

10. 集会委員会より、晩餐会記念山行での配付タオルにロゴマーク使用願いについて（高原）　承認した。

11. 学生部インド・ザンスカール登山隊について（高原）
8月23日付けの朝日新聞に掲載された。

12. 支部の並び順序について（高原）
曖昧だった支部の並びを、全国地方公共団体コードに準じることに総務委員会で決定した。

13. 年次晩餐会について（高原）
今年度の年次晩餐会では図書委員会が図書交換会を行なう。また来年度の晩餐会について、開催場所、その他方法についての意見をいただきたい。

14. 会員資格復活による永年会員について（高原）
宇田川会員から永年会員の申請があった。旧会員在籍年数を検討の上、永年会員と判断した。

15. 日本山岳遺産基金よりの報告について（高原）
7月21日、22日に「マナー&クリーンアップ・チャレンジin尾瀬」を行なった。

16. 「山」9月号について（柏）
日中韓三国学生交流登山報告、寄付についての記事などを掲載の予定。

17. 名誉会員の推薦について（高原）
当該理事は、9月末までに所定書類で行なうよう依頼があった。

【今後の予定】

1. 評議員懇談会（9月28日15時より）初開催となる。
2. 当会主催行事の弁護士による法的問題勉強会（11月15日予定）
3. 第2回委員長・PTリーダー会議（平成25年1月予定）
4. 第44回新入会員オリエンテーション（10月27日）
5. ウインターミーティングの開催（於：山研　2月）
6. 2012岳都・松本「山岳フォーラム」（11月25日）参加について尾上会長出席。また成川「山の日」制定協議会代表幹事が「山の日」の報告のため出席する。
7. 播隆上人企画展（9月28日より）
8. 都岳連講習会（気象、基礎技術他）3件
9. ライチョウ会議岐阜大会（10月13日～15日）
10. 国立登山研修所主催の「安全登山普及指導者中央研修会」（11月2日～4日）
YOUTH CLUBより3名出席予定。

□平成24年度第6回（10月度）理事会　10月10日　集会室

出席者　尾上会長、西村副会長、高原・森・小林各常務理事、野澤・中山・永田・萩原・節田・古野・川瀬各理事、浜崎監事

欠席者　吉永副会長、平井監事

【審議事項】

1. 「寄付受入及び管理取扱規程」制定について（小林）
規程の要点は、以下の3点。
①寄付の申し出を受けた者は財務担当理事に報告（第3条）。
②1件100万円以上の寄付受入可否は理事会で決定（第3条）。
③寄付を募る場合や外部団体等からの助成金に応募する場合は、理事会の承認を得る（第4条）。
なお、本規程は平成24年10月10日から施行する。（承認）

2. 入会希望者について（高原）

9名の入会希望者があった。（承認）

【報告事項】

1. 「山の日」制定ＰＴの報告（西村、萩原）
「山の日」制定協議会主催で、10月3日、「山の日」ネットワ施。長野県知事や国会議員をはじめ、約１００名の関係者が出席。また懇親会を行なった。次のステップのための重要な会議となった。

2. ＹＯＵＴＨ ＣＬＵＢの報告（野澤）
ＹＯＵＴＨ ＣＬＵＢでは、若い会員が年間を通して活発に活動している。順調に参加者および入会者が増えており、さらに間口を広げて人を集めていく所存。3年目になり、スタッフやリーダーとなる者も現われている。

3. 支部活性化ＰＴの報告（高原）
支部主催山行（非会員も参加）の問題点解決の検討。また、首都圏の支部化に伴う問題を検討している。全国支部懇談会は、平成26年度以降の候補支部を策定中。

4. 秩父宮記念山岳賞推薦状況の報告（西村）
文化的活動で個人1名が推薦された。10月29日に審査委員会を開く。

5. 評議員2名の辞任について（高原）
宮崎紘一、中世古直子両評議員より辞任届（平成24年9月30日付）があり受理した。その結果、定款に定めた定員数の15名となった。

6. 永年会員について（高原）
24年度は別添の29名が新永年会員となった。

7. 平成24年度評議員懇談会について（高原）
9月28日にルームで開催。評議員11名が参加し常務理事会メンバー5名と意見交換を行なった。また名誉会員推薦依頼をした。

8. 委員会改善の取り組みの進捗状況と今後の進め方について（西村）
委員会改善メンバーを、8月30日以降、常務理事会メンバーおよび担当理事とした。年内に成案をまとめ、1月の理事会に付議を予定。

9. ２０１２年度自然保護全国集会（尾瀬戸倉）について（森）
6月29日・30日に開催され、１３２名が参加。その中には、これからの尾瀬を担う尾瀬高校自然環境科の生徒13名の参加もあった。

10. 寄付受け入れ報告（岐阜支部）について（小林）
岐阜支部40周年にあたり、竹中佳美会員より10万円の寄付があった。

11. 小島烏水祭について（四国支部）（高原）
四国支部より、25年4月13日～14日香川県高松市で小島烏水祭を計画（別添に計画案あり）。峰山公園（高松市石清尾山）に顕彰碑を建設する予定。建設費については募金を視野に検討中。

12. ＪＡＣロゴマーク使用願い（東京多摩支部）について承認した。

（高原）

13. 植村記念財団より当財団設立20周年記念事業の協力依頼（名義使用）について承認した。（高原）

14. 日本ネパール協会からの「ヒマラヤの自然と環境と夢を語る」名義後援依頼について承認した。（高原）

15. 「皆川完一先生の思い出を語る会」（石上英一代表）より『山日記』転載許可願いについて承認した。（高原）

16. 日本ネパール協会よりの総会報告があった（役員：会長　小島光昭、副会長　井本重喜等）（高原）

17. 会報「山」10月号について（萩原）
「立山連峰の積雪と氷河」飯田肇（立山カルデラ砂防博物館）、福島支部カラコルム未踏峰登頂報告、図書交換会の目録などを掲載。

18. NHK「グレートサミッツ」の企画について（古野）
続編制作に伴い情報を求めている。当会としても協力したい。

19. 山研の建て替えのための準備金について（中山）
耐用年数（30年）で考えると、13年後には山研の建て替えが必要になる。長期的に予算を組んで考えたい。

20. ウィキペディアにある当会の記述について（永田）
誤解を招くおそれの内容がある。手立てを講じたい。

【今後の予定】

1. 旅行業法に関する勉強会（11月15日）
専門家に講師を依頼。支部、関係委員会などに案内をした。

2. 支部長会議（12月1日10時30分から行なう）

3. 12月1日18時から年次晩餐会（図書交換会、講演会などを予定）

4. 第44回新入会員オリエンテーション（10月27日）

5. 広島支部創立15周年記念式典（尾上会長出席）（11月3日）

6. 福島支部創立65周年記念式典（西村副会長出席）（12月8日）

7. 越後支部年次晩餐会（尾上会長出席）（12月8日）

8. 山梨支部第53回木暮祭（10月21日）

9. JAC中期行事予定表について

□平成24年度第7回（11月度）理事会　11月14日　集会室

出席者　尾上会長、西村・吉永副会長、高原・森・小林各常務理事、野澤・中山・永田・萩原・節田・古野・川瀬各理事、平井・浜崎監事

オブザーバー：柏会報編集人

【審議事項】

1. 平成24年度（第14回）秩父宮記念山岳賞の授賞について（西村）
10月29日に行なわれた秩父宮記念山岳賞審査委員会で以下が推薦された。
・受賞候補者：小泉弘（当会会員）
・業績：『裝丁山眛』とこれまで出版した山岳書籍デザインの業績

（承認）

2. 名誉会員の推薦について（高原）
候補者推薦が1名あったが見送りとする。（承認）

3. 四国支部よりの小島烏水顕彰碑制作寄付金公募について（高原）
峰山公園（香川県高松市）に小島烏水顕彰碑を設置するにあたり、寄付を募りたい旨の申請があった。（承認）

4. 独立行政法人国立青少年教育振興機構「子どもゆめ基金」について（永田）
ホームページで児童・青少年への育成事業を展開するにあたり、「子どもゆめ基金」の助成金に応募申請があった。（デジタルメディア委員会）。（承認）

5. 寄付受入について（小林）
以下の申請があった。
・「ラオスの森づくり」に対して、国土緑化推進機構から３００万円
・「高尾の森づくり」に対して、京王電鉄から１００万円（承認）

6. 広島支部への重複図書の寄贈について（高原）
広島支部より新ルームに山岳図書を備えるため、寄贈依頼があったが、寄託とする。図書は図書管理委員会で選別する。（承認）

7. 入会希望者について（高原）
10名の入会希望者があった。（承認）

【報告事項】

1. 平成24年度財務状況について（小林）
24年4月～9月は、前年と比べ、収入が増え、支出は前年並みとなった。
入会者30㌫増、山研の利用者76㌫増。（ここ）数年で最高）

2. 寄付受入れの報告（小林）
3件の寄付および4件の助成金があった。（別紙による）

3. 「山の日」制定ＰＴ（西村、萩原）
10月に行なわれた「山の日」ネットワーク東京会議の報告書を制作中。今後、「山の日」制定協議会の事務局を日本山岳ガイド協会に置く。
また、11月25日に行なわれる、岳都・松本「山岳フォーラム」において「山の日」について講演などをする。

4. 平成24年度山研利用状況について（森）
7月、8月は天気がよく、団体利用や非会員の利用が多かった。
（別紙による）

5. カシオ時計販売結果について（高原）
10月末で締め切り、２２０台を販売した。

6. 会員データ管理システムについて（永田）
12月に最終確認の予定。その際、一時現行稼動を中止することもあるので協力願いたい。

7. 年次晩餐会について（高原）

申し込み状況が例年より下回っているので、協力願いたい。

8. 全国支部懇談会開催（千葉支部）について（高原）
10月20～21日、九十九里浜町で行なわれ、190名が参加。盛会だった。

9. 第44回新入会員オリエンテーションについて（高原）
10月27日、30名が参加。ただ、委員会からの出席がなかったのは残念だった。

10. 会報「山」11月号について（柏）
「上高地山岳研究所の現状と課題」、「山の日」制定協議会、青年部の夏合宿などの記事を掲載。

11. 中日新聞東京本社より当会所蔵写真（河童橋のウェストン一行）の『岳人』への転載許可願いがあり、承認した。（高原）

12. 富山県より既掲載の当会所蔵写真を「なるほど富山県年表ホームページ」への転載許可願いがあり、承認した。（高原）

13. 学生部の第49回マラソン大会および第1回クライミング大会について（古野）
11月11日、皇居周辺でマラソン大会を開催、65人参加。
11月12日、神奈川大学の協力で、初の学生クライミング大会を開催した。

14. 「山はみんなの宝」賛同呼びかけ人会議（11月2日）に参加した。（森）

15. 第7回ピオレドールアジアに審査員として参加（萩原）
ヒムジュン峰（Himjung 7140m）に南西壁から初登頂した韓国隊、ジャジー峰（嘉子峰 6540m）に新ルートを開拓した中国隊が受賞した。

【今後の予定】

1. 支部長会議（12月1日）
会計処理、支部からの問題点などを討議の予定。場所をホテルに移す。

2. 旅行業法に関する勉強会（11月15日）
報告書を作り、各支部などにも問題の共有化をはかる。

3. 中間期監事監査を開催（11月19日）

4. 文科省「生涯スポーツ・体力づくり全国会議2013」宮崎で開催（平成25年1月25日）

5. 植村冒険館開館20周年記念講演会（12月8日）

6. 日本勤労者山岳連盟望年会（12月7日）

7. 日本ヒマラヤ協会2012華甲望年会（12月8日）

☆平成24年度年次晩餐会

12月1日（土）
東京・品川プリンスホテル＝アネックスタワー
出席者　427名
尾上会長は開会の挨拶で、「今年は新会員が200名増え、かつ平均年齢上昇に歯止めがかかった。反転攻勢の時がきました」と、喜びと

期待を表明した。会は、第14回秩父宮記念山岳賞受賞の小泉弘会員の表彰式、渡邉玉枝会員の会長特別表賞授与式、永年会員の会員賞授与、新入会員の紹介、記念講演、海外登山報告など、盛りだくさんの内容で、盛況のうちにお開きとなった。

□平成24年度第8回（12月度）理事会　12月12日　集会室

出席者　尾上会長、西村・吉永副会長、高原・森・小林各常務理事、野澤・中山・永田・萩原・節田・古野・川瀬各理事、平井・浜崎監事

【審議事項】

1. 日中韓三国学生交流登山２０１３年度計画について（森）
　主な実施内容は、神奈川大学のクライミングボードを利用しての大会及び富士山の日帰り登山とし、実施時期は２０１３年８月下旬とする。その他、予算等を含めた具体案を平成25年1月に提出する。（承認）
2. 新版『日本三百名山登山ガイド』上・中・下（全3巻）の刊行について（収益事業・会員サービス事業検討ＰＴ）（節田）
　２０００～２００１年に山と溪谷社から出版された同名のガイドブックをリメイクした「日本山岳会版」として２０１４年春に3巻をまとめて発売する。２０１４年5月に刊行を予定。各支部の協力を付帯事項とする。（承認）
3. 松本市・松本市美術館との展覧会共催提案について（尾上）
　坪田松本市副市長、井上保会員（松本商工会議所会頭）、林新一郎会員（前岡谷市長）から当会所蔵の絵画・資料を展示する展覧会を松本市美術館で共催したい旨の提案があった。「日本山岳会所蔵　山の絵画・資料展」（仮称）として、平成25年春に開催を予定。資料映像委員会に協力要請しながら進める。（承認）
4. 入会希望者について（高原）
　10名の入会希望者があった。（承認）

【報告事項】

1. 寄付受入報告について（小林）
　11月14日以降、7件、計75万４５００円の寄付があった（別添資料による）。
2. 監事監査（中間）を11月19日に行なった。特に指摘はなかった。（小林）
3. 「資料の貸出に関する規程（C-16）」の誤記を修整した。（高原）
　〈第10条1項4号〉（誤）２０、０００万円→（正）２０、０００円
4. 平成24年度第2回支部長会議について（高原）
　平成24年12月1日㈯10時30分より12時15分まで、品川プリンスホテルで開催した。会長挨拶、会務報告、会計処理の手引解説に続き、支部からの問題点や提案につき討議した。最後に、静岡支部より、来年度の全国支部懇談会は10月20日（日）～21日（月）に行なう旨の報告があった。

5. 旅行業法勉強会（高原、古野）
11月15日、専門弁護士による、旅行業法に関する勉強会を行なった。支部担当者会議等で報告したい。今後、具体的な展開のため、関係者で再度ミーティングを予定したい。

6. 国有林野貸付地（上高地山研）の継続更新（3年）を行なった。（森）

7. 平成24年度年次晩餐会について（高原）
出席者427名（昨年並み）、うち招待者は19名。28名の新永年会員発表、秩父宮記念山岳賞表彰、会長特別表彰、新入会員48名の紹介等があった。催事としては、図書交換会、また4組の講演会を行なった。どれも盛況で、グッズの売上げも好調だった。翌日の記念山行（愛鷹山系越前岳）には134名が参加した。

8. 晩餐会招待者の同伴者参加について運用を定めた。（高原）
概要は、招待者（新名誉会員、新永年会員、秩父宮記念山岳賞受賞者、会長特別表彰受賞者）の同伴者の出席を、配偶者に限り認めるが会費は必要とする。ただし、秩父宮記念山岳賞受賞者の同伴者に限り招待とする。

9. 広島支部への寄託図書リストについて（高原）
別添の通り、96冊の予定リストが図書管理委員会より広島支部へ提出された。

10. 朝日新聞12月11日付けで、学生部のインドヒマラヤ未踏峰初登頂が掲載された。（高原）

11. 2013年はアメリカ人によるエベレスト登頂50周年にあたり、2月22日～23日、American Alpine Clubが記念祝賀会を行なう。案内状が届いた。（川瀬）

12. John Harlin Ⅲ氏（元AAJ編集長）からの提案について（高原）
AAJはデジタル化して販売を開始、JANの電子出版事業への提案があった。多田デジタルメディア委員長が窓口に。

13. NPO法人ヒマラヤン・グリーン・クラブより20周年記念事業への後援名義申請があり、承認した。（高原）

14. 山と溪谷社より『山と溪谷』1月号記載のための資料撮影許可願いがあり、承認した。（高原）

15. 原書房から『地図を作った男たち：明治の地図のものがたり』記載のための転載許可願いがあり、承認した。（高原）

16. 日本共産党スポーツ委員会より「スポーツ奨励重点プラン」提案し発表した旨の案内があった。（高原）

17. 小山山岳会より、東海支部パーティが行なった遭難救助（北鎌尾根）に対して、礼状が届いた。（高原）

18. 会報「山」12月号について（萩原）
晩餐会の報告、秩父宮記念山岳賞受賞の小泉弘会員の業績について、学生部のインドヒマラヤ未踏峰初登頂の報告などを掲載。

19. 本年度下期に海外登山助成を受けた登山隊の現況報告（萩原）

キャシャール登山隊２０１２（花谷泰広、馬目弘仁、青木達哉）南リッジからの初登攀に成功した。Shispare Expedition2012（平出和也、三戸呂拓也）悪天で断念。Japan Langshisa Ri Expedition 2012（谷口けい、鈴木啓紀）中止。広島県山岳連盟アンプー1峰（６８４０ｍ）５９００ｍ付近で退却。Giri Giri Boys Patagonia Expedition2012（横山勝丘、増本亮）は今週出発。

【今後の予定】

1. 支部事務局担当者会議を1月26日㈯～27日㈰に行なう。（高原）
2. 環境省が行なう東北海岸トレイル（仮称）についての意見交換会を12月20日に行なう。（高原）
   節田理事ほか1名が出席予定。
3. 海外登山助成金の申込みは12月31日が締切。（高原）
4. 四国支部の小島烏水顕彰碑制作の寄付締切は5月末。協力をお願いしたい。（高原）
5. 来年6月までの日程予定表の提示。来年度事業計画、予算提出の日程について協力要請。（高原、小林）
6. 冬山天気予報を例年通り12月21日～1月20日に行なう。（古野）
7. 次期役員等（委員長含む）について、候補者の選定を。（高原）
8. 日本山岳協会の新春懇談会の案内（平成25年1月19日）。尾上会長出席予定。（高原）
9. 東京都山岳連盟から、気象データ収集の協力依頼、スポーツ指導者養成講習会の案内があった。（高原）

□平成24年度第9回（1月度）理事会　1月16日　集会室

出席者　尾上会長、西村副会長、高原・森・小林各常務理事、野澤・永田・萩原・節田・川瀬各理事、平井・浜崎各監事

欠席者　吉永副会長、古野・中山各理事

【審議事項】

1. 「寄付受入及び管理取扱規程」の改正について（小林）
   運営上の手続きを実情に合わせて簡略化した（条文は別添）。また表題「寄付受入及び管理取扱規程」を「寄付受入及び管理規程」と利用しやすくした。（承認）
2. 委員会改善の問題点と改善策について（西村）
   以下の改善案を提案したい（すでに理事会承認のもと一部実施している事項もある）。各委員会は別添による。
   ・組織対策：理事会と委員会の一体化を一層推進する。具体策として、担当理事は理事会の意向を委員会に伝える、理事は必要に応じて委員長を兼任することもある。次期編制では理事の委員会担当分野をさらに吟味する。
   ・人的強化：委員会の人的強化を図るため、委員資格の「入会2年経過」を撤廃した。また各委員会はリクルーティング強化に努める。
   ・委員会の新設・統廃合：昨年4月にＹＯＵＴＨ ＣＬＵＢ、10

月に公益法人運営委員会、デジタルメディア委員会を新設し、25年度には図書管理委員会と図書委員会を統合する。

・委員会活動の広報：25年度より『山岳』に委員会の活動を掲載する。また、「日本山岳会のしおり」で委員会の紹介をする。（承認）

3. 日中韓三国学生交流登山２０１３について（森）
8月24～29日に実施。富士登山、フリークライミングなどを行ない、施設等で神奈川大学の全面協力を得た。経費は３００万円を予定するも、寄付や参加者会費負担などで50～１００万円を減額すべく努力。（承認）

4. 高尾の森づくりの会より国有林野使用許可申請（継続）があった（高原）（承認）

5. 会組織図について（高原）
昨年の新委員会設立などに伴って、現状にあわせて会組織図を改めた。（別添資料）（承認）

6. 入会希望者について（高原）
5名の入会希望者があった。（承認）

【報告事項】

1. 日本三百名山ガイドブック出版について（収益事業・会員サービス事業検討ＰＴ）（節田）
各支部から、事業に対する問題はなかった。短い期間なので総力をあげて取り組みたい。各支部の取り組み案を今月中に送る予定である。

2. 各支部問題点、提案等について（支部活性化ＰＴ）（高原）
24年12月の支部長会議資料をまとめ、問題点や要望に対して回答をすると同時に、今月開催の支部事務局担当者会議等の中で活かしたい。

3. 東北海岸トレイル（仮称）意見交換会について（節田）
設置にあたり、環境省が関係団体よりヒアリング。当会としては、公益的な事業として協力したい。また利用者目線で設置してほしい、などの意見を述べた。

4. 松本市・松本市美術館より展覧会への当会所蔵絵画資料の貸出し依頼について、資料映像委員会が対応して進める。（高原）

5. 「子どもゆめ基金」第2次審査申請について（永田）
第1次審査に採択され、第2次審査の申請を行なった。

6. 寄付受入報告について（小林）
24年12月13日以降、3件計１３４万６０００円の寄付があった。（別添資料による）

7. 『JAN（Vol.14）2013』について（節田）
目次紹介及び4月初旬に発刊を予定。

8. ＮＰＯ法人アースワークスソサエティのカナダ・アラスカ震災漂着物撤去支援活動への賛同、募金について依頼があった。（高原）

9. ＮＰＯ法人ヒマラヤ保全協会よりの冬募金について、依頼及び

23年度の活動報告があった。（高原）

10. 静岡森林管理署よりの富士山国有林における「ニホンジカの誘引捕獲」の実施について、協力依頼があった。（高原）

11. 「山」1月号について（萩原）

猪熊隆之会員による気象予報の話などを掲載した。

12. 平成24年度秩父宮記念山岳賞（小泉弘氏受賞）の記事が『昭和』（第251号平成25年1月10日公益財団法人昭和聖徳記念財団発行）に掲載された。（西村）

【今後の予定】

1. 支部事務局担当者会議（1月26日（土）～27日（日）では、25年度の予算作成・事業計画、三百名山ガイドブック出版などが議題。（高原）

2. 小島烏水祭が高松市で4月13日（土）～14日（日）に行なわれる。尾上会長、高原出席。（高原）

3. 森づくり連絡協議会が3月30日（土）～31日（日）に大阪府高槻市で行なわれる。（高原）

4. 日山協第51回海外登山技術研究会が2月23日（土）～24日（日）実施される。（高原）

5. 富士山測候所を活用する会の第6回成果報告会が、1月27日（日）行なわれる。（高原）

6. ヒマラヤン・グリーン・クラブの20周年記念祝賀講演会（渡邊玉枝氏）が2月2日（土）大津市で開催される。尾上会長出席。（高原）

7. 青森支部創立20周年記念式典が10月12日㈯、青森県むつ市で行なわれる。（高原）

□平成24年度第10回（2月度）理事会　2月13日　集会室

出席者　尾上会長、吉永・西村副会長、高原・森・小林各常務理事、野澤・中山・永田・萩原・節田・古野・川瀬各理事、平井監事

欠席者　浜崎監事

オブザーバー：柏会報編集人

【審議事項】

1. 平成24年度（後期）海外登山助成金審査委員会答申について（萩原）

2月8日に委員会を開催し、「クスムカングル南東壁登山隊」（東海支部東海学生連盟）に30万円の助成をする決定をした。（承認）

2. 国際交流富士登山プロジェクト企画（海外委員会）（川瀬）

環太平洋地域の国々に呼びかけて5月に富士登山を行ない、海外委員会がアテンドする。10名を募集する予定（資料あり）。（承認）

3. 6名の入会申込みがあった。（承認）

【協議事項】

1. 平成25年度事業計画書案について（高原）

別添資料の通り、体裁は内閣府に提出するフォーマットとした。本計画書案に記されている概要に加え、従来と同様の具体例を掲載する。

2. 平成25年度予算書骨子案について（小林）
別添資料により協議し、修正することなく認められた。

【報告事項】

1. 米国出版社よりのJANの電子出版事業について（高原）
John Harlin氏（元AAJ編集長）よりあったJANの電子出版の話は、執筆者の了解を条件に無償配付を許諾することとした。

2. 日本三百名山ガイドブック出版について（収益事業・会員サービス事業検討PT）（節田）
支部事務局担当者会議で各支部に説明し、現在、担当する山の支部間調整をやっている。

3. 松本市・松本市美術館よりの共催提案について（吉永）
松本市美術館の開館15周年記念行事として、実施は、4年後であることを確認した。

4. 東京都写真美術館より、自主企画展「黒部と槍～冠松次郎と穂苅三寿雄」の後援、協力依頼があり、承認した。（高原）

5. 1月26～27日に支部事務局担当者会議を開催し、30支部が参加。（高原）
支部の平成25年度事業計画発表のほか、会計処理（寄付含）、日本三百名山ガイドブック発刊の説明などを行なった。また神崎日山協会長の講演があった。

6. 当会への寄付金は個人都民税の税額控除対象であるため、そのような事務処理をするよう、東京都主税局より要請があった。（高原）

7. 山研を利用して、トップクライマー33名によるウィンタークライマーズ・ミーティングが2月9日～11日の3日間開催された。（吉野）

8. 内閣府より「立入検査の考え方」を記した書類が届いた。（高原）

9. 会報「山」2月号について（柏）
海外登山基金を受けた3チームの登山報告、ジオサイエンスの記事などを掲載。

【今後の予定】

1. 2月18日（月）に「国際山岳年プラス10」の報告書および会計報告の進捗状況について説明がある。（高原）

2. 3月17日（日）、第33回高所順応研究会（都岳連）が行なわれる。（高原）

3. 「植村直己冒険賞」受賞者の発表を2月25日に行なう（2月12日の予定だった）。（高原）

4. 深田久弥山の文化館「日本百名山」写真コンテスト審査結果と写真展が、3月23日～4月7日、加賀市美術館で開催される。

□平成24年度第11回（3月度）理事会　3月13日　集会室

出席者　尾上会長　吉永・西村副会長、高原・森・小林各常務理事、野澤・中山・永田・節田・川瀬各理事、平井・浜崎各監事

欠席者　萩原・古野各理事

【審議事項】

1. 平成25年度事業計画書・収支予算書（案）について（高橋・小林）
別添資料により担当常務理事が説明し、詳細に検討された。（承認）

2. ＹＯＵＴＨ ＣＬＵＢの組織見直しについて（森）
ＹＯＵＴＨ ＣＬＵＢおよびその下部組織である青年部委員会、学生部指導委員会、指導委員会を以下のように変更する。
ＹＯＵＴＨ ＣＬＵＢの下部組織を青年部、学生部、ワンダーフォーゲル部（新設）とし、指導委員会を遭難対策委員会と名称を改め、ＹＯＵＴＨ ＣＬＵＢから独立した委員会とする。
担当は川瀬理事とする。

3. マッキンリー気象観測について（森）
電源開発（Ｊパワー）からの寄付（今年度１２５万円）を、いままでの当会との関係を考慮して受け入れたい。ただし、ＪＡＣ側の受け入れ体制が整うまでは、「預り金態勢」として計上する。なるべく早く体制を整えるように努めたい。（承認）

4. 59名の入会希望申し込みがあった。（承認）

【報告事項】

1. 助成金受け入れ報告について（小林）
2月14日以降、高尾の森づくりの会で3件２２４万2千円の寄付があった。

2. 群馬支部設立について（高原）
群馬県在住者に支部活性化ＰＴの呼びかけにより4月14日、設立準備会を行う。

3. 日山協からの4月入会打診について（尾上）
前向きの意見が多数あったが、過去の経緯もあるので、会員の意見を聞くことも必要で、いま少し時間が必要と回答した。

4. 平成25年度（第15回）秩父宮記念山岳賞推薦募集について（西村）
昨年より早く、4月からホームページで予告を行う。また、審査委員会の強化を予定している。

5. 「山の日」制定協議会を開き、今後の具体的なステップを検討する。

6. 同好会が行なった海外公募ツアー（ホームページ）について（高原）
旅行業協会より旅行業法違反という指摘があった。再発防止のため、関係者に向けたマニュアルを作り周知を図る。また、デジタルメディア委員会でホームページ掲載の際、チェック機能を設ける。

7. ２０１３年度新永年会員候補者は47名が対象となる。（高原）

8. 会費未納による除籍（平成25年3月31日予定）対象者は60名。（高

原）

9. 『JAN vol.14 2013』のコンテンツは別紙のとおりである。4月に発刊の予定。（高原）

10. 新会員管理システムの対応について（高原）

本システムを稼働に向けて継続することとした。高原常務理事を責任者とし、システム管理者、そして事務局責任者を決めた。

支部の活動報告

■北海道支部

2012年度の活動は、完遂を目指して「オホーツク分水嶺踏査」のほか、13回を数える自然児学校、高山植物の盗掘パトロール、道民カレッジ講座、四季を通じての登山教室等の公益事業を実施。また、支部会員の登山技術の向上や会員・会友同士の交流を深めるため雪崩講習会、定例山行、山スキー・沢登り・岩登りなど同好会活動の充実、年7回の支部通信、会報「ヌプリ」の発行、親睦のための集会開催など多彩な事業・行事を企画し実施した。

《会議》

＊4月7日（土）　総会　2011年度の事業報告と会計報告、2012年度事業計画と予算案、公益社団法人移行に伴う支部長再任確認、支部規約改正などを審議し、議案すべてを承認。117名出席（当日出席56名、委任状61名）。

＊定例常任委員会　毎月1回　10～15名の常任委員出席　前月活動報告と翌月以降の事業計画の協議。

《山行・野外活動》

＊雪崩講習　〈札幌地区〉12月14日（金）　ビーコン操作講習　札幌市内中島公園スポーツセンター　17名（内5名講師）、2月2日（土）～3日（日）　札幌市内りんゆうホール＆札幌藻岩山スキー場　20名（内6名講師）、〈帯広・北網地区〉2月16日（土）～17日（日）　机上講習・実地講習会　新嵐山山荘＆新嵐山スキー場　9名（内3名講師）、〈函館地区〉1月25日（土）・26日（日）机上講習・実地講習会　道立少年自然の家「ネイパル森」　7名（内2名講師）。

＊岩登り研修会　5月16日（水）　札幌市内　机上研修＆クライミングトレーニング　23名、6月13日（水）　小樽赤岩　13名　10月17日（水）　小樽赤岩　10名。

＊沢登り研修会　7月7日（土）・8日（日）国立大滝セミナーハウスでの座学・ホロホロ山～徳舜瞥山コノエオサレベツ川での実技　10名、2月14日（水）岩登り沢登り研修反省会・小樽　20名。

＊定例山行　6月23日（土）茅室岳　9名、8月4日（土）・5日（日）雄鉾山　12名、9月1日（土）・2日（日）支湧別岳　14名、10月27日（土）・28日（日）お月見山行　駒ケ岳・海向

山　28名。

＊同好会活動　4月28日（土）・29日（日）山スキー　暑寒別18名、1月18日（金）　チセヌプリ　13名、2月9日（土）タケノコ山・社満射岳　20名、2月20日（水）　熊見山　17名。

＊ＮＨＫ登山教室　5～10月「日曜登山」「水曜トレッキング」（北海道内・札幌近郊の登山）　スタッフ参加会員6～7名（各6回）、1～3月「スノーシュー教室」（札幌近郊の雪原・低山）　会員スタッフ参加6～7名（各6回）。

《プロジェクト・地域振興活動》

＊オホーツク分水嶺踏査　①4月10日（火）～13日（金）　海別岳→遠音別岳　22・6㎞　2名（補佐1名）、②4月12日（木）～15日（日）　遠音別岳→西知別岳　5・9㎞　2名、③4月17日（火）・18日（水）　清里峠→788m　5・8㎞　3名、④4月29日（日）　830m→1440m　3・1㎞　2名（補2名）、⑤8月12日（日）　1440m→斜里岳肩　0・5㎞　5名、⑤2013年3月6日（水）～3月12日　トッカリムイ岳→ウィーヌプリ手前コル　19・9㎞　2名、⑥3月26日（火）～31日（日）　津別峠→釧北峠　27・4㎞　6名（補4名）。

＊第13回自然児学校　7月27日（金）～29日（日）　国立日高青少年自然の家　参加児童数21名・支部サポートメンバー23名・地元自治体関係者等11名〈活動内容〉星座観察、空缶炊飯、パン焼き等、安全対応のためスタッフ同行による坊主山登山（790m）、ツリークライミングでのザイルワークと木の大切さ（「木育」）、キャンプファイヤーを通じてのアウトドア生活を体験。

＊高山植物盗掘防止パトロール・監視活動　6月1日（金）～10月10日（水）　大雪山系、十勝連峰周辺　延べ154回　実人員30名、5月25日（金）　研修会　講師1名・支部会員22名参加。

＊日高幌尻岳清掃登山・山荘排泄物搬出（地元団体に協力）　9月15日（土）～17日（月）　総勢21名（内、支部会員5名）

＊支笏湖復興森づくり（ＮＰＯ法人に協力）　7月22日（日）5名　下草刈。

《広報・出版活動》

＊支部通信　年7回発行　会員会友および日本山岳会と各支部など（300部）、1月3日カバーのメール発信と郵送。

＊北海道支部会報「ヌプリ」4月1日発行・山に関する紀行文、エッセー、山の歴史、評論など掲載。

《その他の行事・懇親会》

＊道民カレッジ（北海道主催・「ほっかいどう学」に連携）・「語ろう会」、道民カレッジ＝年間11回開催（毎回20～30名程度支部会員及びカレッジ生出席）、語ろう会＝海外登山の講演11月と12月に20名程度。

＊各種集会 年次晩餐会　12月15日（土）　講演「山の日制定に

ついて」渡辺悌二会員　65名、夏季交流会＝7月21日（土）講演会「ヒマラヤ初登頂物語」平井一正会員・高村奉樹会員44名、新年交流会＝1月16日（水）　30名、北海道山岳団体交流会＝11月7日（水）　講演「山の日制定の意義」渡辺悌二会員　7団体11名（団体総勢60名参加）。

（西山　泰正）

■青森支部

平成24年度の青森支部は、新入会員3名を迎え、支部会員の山行が充実するとともに、地域社会に貢献できる活動として、白神山地ブナ林再生事業を始め、八甲田山スキーコースポール立て等にも参加した。大きな事故もなく無事終了できたことを関係各位に感謝したい。

《会議》

＊5月12日（土）　通常総会（平成23年度事業報告・決算報告・会計監査報告、平成24年度事業計画・予算案）　青森市アラスカ会館　出席42名（当日出席6名、委任状数36名）。

＊2月13日（水）　県境踏査山行打ち合わせ会議　青森市ホテルチトセ　出席4名。

＊3月8日（金）　県境踏査山行打ち合わせ会議　青森市ホテルチトセ　出席5名。

《山行・野外活動》

＊4月28日（土）～4月30日（月）支部春山山行　南八甲田連峰（酸ヶ湯駐車場上テント設営）　参加6名。

＊7月8日（日）八甲田山の日山行　北八甲田・大岳　参加5名。

＊7月27日（金）～29日　支部夏山山行　早池峰山　参加6名。

＊10月20日(土)・21日　支部初秋山行　下北大尽山　参加8名。

＊11月24日（土）・25日　支部晩秋山行　北八甲田（仙人岱小屋）参加3名。

＊12月29日（土）～1月2日　支部冬山山行　北八甲田（仙人岱小屋）　参加3名。

＊1月15日（土）・16日　山岳スキー研修　竹越会員山荘　参加15名。

＊2月26日（火）・27日　八甲田山スキーコースポール立て　参加8名。

＊3月20日（水）～22日　県境踏査山行　須郷岬～二ッ森　参加2名。

＊3月27日（木）～28日　八甲田山スキーコースポール立て参加5名。

＊3月27日（木）～29日　県境踏査山行　相馬村藍内～三森～大鰐町高野新田　参加2名。

《プロジェクト・地域振興活動》

＊6月22日(金)～24日　白神山地ブナ林再生事業　参加12名。
＊7月8日（日）高山植物盗掘防止パトロール　八甲田連峰　参加2名。
＊9月29日（土）・30日　白神山地ブナ林再生事業　参加5名。
《その他の行事、懇親会》
＊11月17日（土）　支部年次晩餐会　青森市ワシントンホテル　参加11名。

（須々田　秀美）

■岩手支部

JACの公益法人化に伴い、4月の支部総会で支部規約を改正、支部会費の徴収、役員の大幅な入れ替えを行った。

支部会費は活動が滞らないよう支部助成金の減額相当額とした。討議の過程で支部会員の心情、退会者の発生等が懸念された。しかし、大きな混乱もなく月例山行を軸に例年通りの活動ができた。新入会員の勧誘特にも若手の加入で更なる弾みが付くことが望まれた年でもあった。

全国のJAC会員から寄せられた東日本大震災復興見舞金のうち、岩手支部配分金は早期の復興と若い岳人の育成を願って全額沿岸部高校山岳部に贈った。そして該当山岳部から感謝の言葉が述べられた。

《会議》
＊4月8日（日）岩手支部総会　19名。
《山行・野外活動》
＊4月21日（土）「氷上山」4月例会山行　3名。
＊5月26日（土）「種山」5月例会山行　14名。
＊6月9日（土）「早池峰山パトロール第1回」・公益　4名。
＊6月16日（土）「焼石岳清掃登山」6月例会山行・公益　10名。
＊6月17日（土）「残雪裏岩手連峰開山祭」後援　3名。
＊7月7日（土）「早池峰山パトロール第2回」・公益　3名。
＊8月11日（土）「早池峰山パトロール3回」・公益　2名。
＊8月17日（土）「岩手山八合目避難小屋管理」・公益　3名。
＊9月7日（金）～8日（土）「裏岩手縦走自然観察会」・公益　5名。
＊9月21日（金）～23日（日）「早池峰山～姫神山」富山支部との交流登山　3名、富山支部10名。
＊9月22日（土）「早池峰山パトロール第4回」・公益　4名。
＊9月30日（日）岩手支部通信 第36号発行。
＊10月6日（土）「鷲合森」10月月例山行　2名。
＊11月10日（土）「大野山」11月月例山行　11名。
＊12月2日（日）「砥森山」忘年山行　7名。
＊1月12日（土）「鞍掛山」1月月例山行　6名。
＊2月9日（土）「安比スキー」2月月例山行　3名。

＊3月9日（土）「七滝」3月月例山行　3名。

《その他の行事・親睦会》

＊12月1日（土）・2日（日）支部晩餐会（東和温泉）　参加12名。

《広報・出版》

＊3月31日（日）岩手支部通信　第37号発行。

（菅原　敏夫）

■宮城支部

当支部は、平成24年4月1日現在、個人会員51名、団体会員は2団体で活動。本年度は平成23年度に引き続き高橋二義支部長、佐藤昭次郎副支部長等の執行部の下、季節ごとの山行、沢登り、元旦登山、スキー山行等並びに一般公募登山の各種登山を積極的に実施するとともに、機関紙（支部報）「宮城山岳」を発行した。また、ビールパーティ、年次晩餐会（ここで行われるオークションは支部の貴重な財源となっている）も行い、会員相互の親睦を深めた。

特に一般公募登山は、約2年前から推進している事業で、会員の高齢化等に伴う会員数の減少傾向を打開する方法として、県内の登山愛好家に地元新聞社を通じて参加を呼びかけ、会員と一般愛好家の交流を深める意図で実施した。当年度は7月に第5回目、10月に第6回目、翌年1月に第7回目の公募登山を行ったところ、それぞれ9～17名の一般参加があり、会員の参加も含めて概ね好評であった。

《会議》

＊4月21日（土）に支部通常総会を実施した。会場はＫＫＲホテル仙台、参加者13名であった。今年度は役員改選もなく、議案は事務局案どおり承認された。

＊定例役員会は6月、9月、11月、12月、翌年1月、2月に計6回開催した。会場はＪＲ仙台駅に近い仙台市シルバーセンター会議室で、それぞれ10～15名の役員が出席した。

《山行・野外活動》

前述のとおり、季節ごとの山行、沢登り、元旦登山、スキー山行等と一般公募登山を積極的に実施した。公募登山を除く支部独自の山行は以下のとおりである。

＊4月7・8日　早春山行（関山峠～北面白山、参加8名）。

＊5月20日　春山山行（荒雄岳、参加4名）。

＊6月24日　地筍山行（大鳥谷山、参加5名）。

＊8月12日　沢登り（小阿寺沢、参加3名）。

＊11月11日　晩秋山行（南面白山、参加7名）。

＊1月1日　元旦登山（泉ヶ岳、参加11名）。

＊3月10日　スキー山行（刈田岳、参加4名、登山のみ参加4名）。

＊3月31日　早春山行。

次に公募登山であるが、その都度事前に研修会を開催し、安全に登山を行うための基礎知識や対象山岳域の歴史・文化・自然環境等について講義し、参加者の理解を深めるよう配慮した。公募登山の事例として7月16日に行った公募登山は対象山域が山形県の月山、公募参加者17名、会員参加8名、計25名であった。

《プロジェクト・地域振興活動》

宮城支部では従来、独自の自然保護活動は実施してこなかったが、その他の活動として、次の3点がある。①宮城県山岳環境指導員としての山岳自然環境パトロール、②宮城県の依頼により、栗駒山の「世界谷地湿原」の乾燥化を防止するための「葦刈り」への参加、③里地・里山の保全を目的とする市民団体「たけのこ炭の子クラブ」の会員としての活動（当支部会員5名がクラブの会員であり、内1名は会長、1名は幹事長、1名が広報幹事を務めている。本クラブは約11年の歴史がある。

今後は、従来の反省を踏まえ、自然保護に関わりのある諸団体との連携・協働を進めていきたい。また、支部独自の事業として東京電力福島第一原子力発電所の事故によって汚染された可能性の高い宮城県内山岳地域の空間放射線量測定を行うことも検討している。さらに、東日本大震災（特に津波）で被災した地域の緑化活動にも関わっていくことも検討課題である。

《広報・出版活動》

財政難のおり、機関紙「宮城山岳」（支部報）の製作は隔年印刷・発行を余儀なくされている。今後は簡易な支部報として「宮城山岳通信」を年2回発行することを検討している。

次にホームページの作成・管理については、独自のWEBサイトは持っていないが、日本山岳会のWEB上で、極めて活発に情報発信を行っている。日本山岳会のホームページWEB容量の約3割を当宮城支部で占めているとの指摘があるが、本部に対してはWEB容量の増設を要望したいと考えている。

《その他の行事、懇親会》

12月21日（金）、東北工業大学の非常勤講師を務める柴崎徹会員が、東北工業大学一番町ロビーにおいて「ふるさと宮城の山と自然」と題して講演を行い、好評を博した。また翌年2月2日には東北薬科大学からの依頼により、東北薬科大学キャンパスにおいてワンダーフォーゲル部技術講習会が開催され、高橋支部長と佐藤副支部長が講師を務めた。

（須藤　幸蔵）

■秋田支部

秋田支部はこれまでに、韓国山岳会や台湾岳人との交流を深めており、5月に実施した台湾・北大武山に登頂し、これまでに登頂した、南湖大山・玉山・雪山・秀姑巒山を含め、台湾五

岳を完登したことは支部の大きな記録となった。

公益社団法人として出発した日本山岳会の支部として、公益的事業の何をどのように行うのか色々と検討したが、高齢化の進む秋田支部としては、身の丈に合ったこれまで通りの活動の範囲内で、楽しみながら登山道の整備を行うことや、山行時に会員家族や友人を誘いあって、山に親しんでもらうこと等に努めることとした。

《会議》

＊4月7日（土）通常総会　23年度事業報告、決算の承認。24年度事業計画、24年度予算案の審議。出席59名（当日出席20名、委任状39名）。

＊2月23日（土）役員会　25年度通常総会に提出する議案の審議。『300名山登山ガイド』出版事業計画について。事務局担当者会議報告。その他　出席12名。

《山行》

＊5月27日　春の里山山行　館山―男神山―中山―獅子ヶ森　参加者10名（会員8名　会員外2名）。

＊5月7日（月）～14日（月）台湾・北大武山　参加者5名（会員4名　会員外1名）　秋田支部山行として台湾五岳を完登。

＊10月27日（土）秋の里山山行　岩山　P315　参加者13名（会員11名　会員外2名）。

《プロジェクト》

＊6月12日（日）太平山山開市民登山へリーダーを派遣（公益・登山振興）　秋田市からの一般参加者34名をサポート。支部会員参加者13名。

＊11月16日（金）太平山・前岳分岐に案内板設置及び中岳山頂周辺歩道刈り払い（公益・登山振興）参加者11名（会員10名　太平山県立自然公園管理員1名）。

《広報・出版活動》

＊支部会報「秋田山岳」第87号～89号まで3回発行。広報活動として、他山岳会や公民館等に配布。

＊韓国山岳会慶南支部との交流登山「老姑壇・月出山・弥勒山登山報告書」を作成。韓国山岳会慶南支部及び同友会、図書館等関係団体に贈呈。

＊「長白山登山報告書」を作成。図書館等関係団体に贈呈。

《その他》

＊4月7日（土）通常総会終了後、懇親会を開催　出席20名。

（鈴木　裕子）

■山形支部

山形支部は現在会員数62名（会友2名を含む）で、平均年齢は69歳と高齢化している。また支部事業や山行に参加する会員も固定化しているのが現状である。その中で今年度実施した2

回の公募登山は一般参加者も多くサポートする支部会員の協力もあり成功した事業であった。若い世代の会員が支部活動にあまり参加していない状況を打開すべく、25年度は若い世代の意見を反映するように若手を支部役員に加える予定である。

《会議》

＊4月14日（土）　支部総会　山形市ビッグウイング　出席者22名、委任状22名。

＊6月2日（土）　第1回支部役員会　寒河江市　支部役員11名。

＊10月13日（土）　第2回支部役員会　寒河江市　支部役員5名。

＊12月17日（月）　臨時役員会　山形市　支部役員5名。

＊3月24日（日）　第3回支部役員会　寒河江市　支部役員6名。

《山行》

＊6月30日（土）～7月1日（日）
秋田駒ヶ岳と乳頭山（孫六温泉泊まり）　支部会員9名・一般6名参加。

＊9月15日（土）　船形山（柳沢コース）　支部会員9名参加。

＊11月10日（土）　11日（日）　月山　支部晩餐会を兼ねる20名参加。

＊1月26日（土）・27日（日）　蔵王樹氷原を滑る会　支部会員6名、他支部会員6名参加。

＊3月15日（土）・17（日）　鳥海山スキー登山（山雪荘泊）　河原宿から滑降、搬送訓練。支部会員7名参加。

《一般公募登山》

＊第1回　4月29日（日）晴
庄内海岸山脈（草井谷～由良）　一般参加者21名、支部会員10名参加。
鶴岡市高舘山から由良まで日本海岸に沿って約12㎞にわたって続く低い山脈。これまで縦走登山の対象となってこなかったため、部分的に山道が不明瞭だが、ブナ、ケヤキ、ヤマザクラの巨木やシラネアオイやルリソウの群生が見られる、味わい深いルートである。この山地の名称はないので仮に庄内海岸山脈とした。最高峰は307mの荒倉山である。今回は山脈の南半分を歩いた。

＊第2回　10月21日（日）　雷雨のち晴れ　葉山（1462m）
一般参加者32名、支部会員11名参加。
名峰月山の側にあって堂々とした山容の火山であるが、登山者は少ない。奥の院から畑集落に下山する縦走の予定だったが、朝の雷雨のため予定を変更して畑集落から稜線に上がり、葉山信仰の中心であった大円院趾に下山した。

（渡辺　誠）

■福島支部

平成24年度は支部創立65周年の節目にあたり、初の海外遠征登山に挑戦するという記念すべき年となった。この計画はパキスタン・カラコルム6000m級の未踏峰を目指すもので、2年に及ぶ準備期間を経て15名の遠征隊を編成し、最終的に支部精鋭3名とパキスタン隊員4名によって山頂に足跡を残すことができた。奇しくも日・パ国交樹立60年とも重なり、日・パ合同登山隊を編成しての初登頂成功の一報はメディアにも大きく取り上げられ、東日本大震災、原発事故で打ちひしがれた県民からも大きな反響が寄せられたのである。支部は福島県が「世界のフクシマ」でもあり続ける厳しい現実を受け止め、努めて公益的事業に軸足を置き山岳地域の放射線測定や登山道の整備等に取り組んだ。その中で10月の徳本峠越え（古道探訪）、さらに12月の「65周年記念式典・カラコルム未踏峰初登頂報告会」は支部活性化の一助になったものと思う。

《会議等》

＊4月19日（木）　通常総会　平成24年度事業計画　支部創立65周年記念式典開催等決議　出席24人（委任状25／82）。

＊11月6日（火）　役員会　平成25年度事業計画等審議　出席12人。

《山行・野外活動》

＊5月29日（火）　春山山行と懇親会・会津志津倉山　参加13人。

＊7月9日（月）～8月3日（金）　パキスタン・カラコルム未踏峰遠征登山　7月19日（木）日・パ合同隊15人中パキスタン隊員を含めて7人が6105m初登成功「希望の峰・現地語でウメードサール」と命名。

＊9月1日（土）・2日（日）　吾妻小舎納涼会と登山　参加11人。

＊10月13日（土）～15日（月）　秋季山行　島々から入山、徳本峠小屋泊で上高地までの古道探訪　参加5人　上高地山研で休憩。

《プロジェクト・地域振興活動》

＊6月11日（月）、9月11日（火）　廃道になりつつあった吾妻山の一部登山道の整備と刈払い作業。2日間述べ参加17人に及ぶも平成25年度に事業持ち越し。

＊6月16日（土）　吾妻山湿原の植生復元作業支援　自然保護団体主催の荒廃地種蒔きに支部から7人参加。

＊7月16日（月）、7月29日（日）　東吾妻山登山道整備作業実施　熊笹の刈払い、倒木撤去、荒廃箇所の石敷き詰めなど2日間にわたり延7人参加。

＊8月26日（日）　磐梯山の清掃登山を兼ね、「山の日」PRを実施山頂直下の弘法清水、山頂でチラシ配布　参加15人。

《広報出版活動》

＊10月7日（日）　支部機関紙「やまなみ第2号」500部発行関係方面に寄贈、配布して広報。
＊4月上旬から11月　吾妻連峰、安達太良山、那須岳において放射線量調査。
《その他の行事、懇親会》
＊12月8日（土）　支部創立65周年記念式典及び海外遠征登山報告会を開催。JAC副会長西村政晃氏、JAC宮城支部柴崎徹氏、パキスタン登攀隊員ファザール・カリム氏等を来賓に迎え、参加47人。NHKはじめ地元メディアを通じ報道。

（渡部　展雄）

■　茨　城　支　部

当支部は2007年6月に全国で27番目の支部として、21人の会員で発足したが、現在33人となりほぼ隔月の講演会および山行を中心に意欲的にクラブライフを盛り上げて来ている。2012年4月1日よりわが山岳会は公益社団法人として発足した。当茨城支部規約の全8章、19条に渉る中で、特に第4条（2）の登山の指導奨励に必要な集会、研究会及び講習会等の開催、（5）会員相互の親睦、さらに公益性の高い自閉症者への登山支援などを中心に努めて来ている。

すなわち今年度は創立5周年を迎え、5回の講演会および2回の野外研修会と6回の支部山行を実施した。また特別山行として第9～10回の自閉症者協会への登山支援を行った。さらに第6回の3支部合同懇親山行を当支部主催で当県北部の大子町において39人の参加者を得て成功裡に終えることが出来た。

また当会員の酒井国光氏の編著『茨城の山事典』―第Ⅰ版―を公益社団法人日本山岳会茨城支部創立五周年記念誌として2013年1月25日に発行することが出来た。

《会議》
＊6月9日（土）　総会　土浦県南生涯学習センター　新規約の確認、『茨城の山事典』発行の件、3支部懇親山行開催の件、自閉症者協力登山計画、第5号支部報発行の件など。会員23名、委任状10名。
《講演会》
＊4月20日（日）　第25回「間宮林蔵を讃える保存太鼓の20年のあゆみ」　佐藤　勝広氏　会員15名、一般15名参加。
＊6月9日（土）　第26回「こだわりの山々～穂高・黒部・茨城の山」―本支部創立5周年記年講演―　酒井国光会員　会員23名、一般10名参加。
＊9月29日（土））　第27回「南米の山々」椎名正明氏（茨城県山岳連盟海外委員長）会員16名、一般12名参加。
＊11月11日（土））　第28「イラン（ペルシャ）の調査小史とその自然」　長岡正利会員　会員13名、一般10名参加。

＊1月12日（土）　第29回「今までに分かった宇宙の神秘～神の素粒子～ヒッグス粒子の発見」奥井　清会員（副支部長・薬学博士）　会員17名、一般8名参加。

《野外研修会》―会員以外の一般市民にも公開―

＊10月14日（日）・15日（月）第11回「南会津の紅葉とキノコ狩り体験教室・台倉高山登山」講師＝きのこアドバイザー・杉山会員夫妻、酒井夫妻、西川、高木会員参加。

＊11月4日（日）　第12回「奥久慈憩いの森、植物観察会」講師＝森林インストラクター　堀内会員L、山本、西川夫妻、大竹、同友人、高木会員参加。

《支部山行》

＊4月21日（土）　第30回　安達太良山雪上訓練　荒木会員L、山田会員。

＊6月20日（水）、21日（木）　第31回　焼石岳　山田会員L、星埜、荒木、斉藤会員。

＊9月7日（金）～9日（日）　第32回白山　山田会員L、星埜、荒木、斉藤会員。

＊12月20日（木）・21日（金）第33回生瀬富士～立神山忘年山行　山田会員L、他11名の会員。

＊1月19日（土）　第34回高尾山　西川会員L夫妻、山本会員。

＊2月23日（土）　第35回館岸山～加賀田山　高木会員L、柳、山本、山田（茂）会員、他5名。

《特別山行》

＊6月30日（土）・7月1日（日）　第9回日光白根山下見登山（茨城県自閉症協会協力登山）　諏訪会員L、星埜、斉藤、山田（明）会員

＊8月18日（土）、19日（日）　第10回日光白根山登山（茨城県自閉症協会協力登山）諏訪会員L，星埜、高木、柳、斉藤、石原、山田（明）会員。約50人の自閉症者およびその家族の参加者に対し、諏訪会員Lの統率のもと、我々会員は登下山の安全を期して全面的な支援をさせて頂いた。

《第6回3支部合同懇親山行》

２００７年の支部創立以来の近隣3支部会員との親睦行事は毎年の楽しみとなって来ている。第6回の本懇親山行は、２０１３年2月2日（土）・3日（日）に当茨城支部の主催で実施した。栃木支部。千葉支部および当支部の39人が茨城県北部の大子町公民館に参集した。2日の午後の講演では、当支部の星埜由尚支部長の〝信仰と山・地図に見る立山信仰〟、さらに酒井国光会員による『茨城の山事典』の内容説明および〝筑波山神社御座替祭〟の話題提供が行われた。この後各支部の活動報告がなされ、ひき続き近隣の福寿荘において懇親会が開催され楽しい宴会が展開された。

翌3日はA、Bの2班に分かれ、A班は近隣の標高４２０mの生瀬富士への登山に参加、B班は袋田の滝および国寿石

大子硯工房への見学に参加した。両日とも絶好の快晴に恵まれ、このたびの懇親山行は成功裡に終えることが出来た。

《出版活動》

「公益社団法人　日本山岳会茨城支部創立五周年記念誌」として、『茨城の山事典』の出版。当支部会員の酒井国光氏編著によるもので、第Ⅰ版を２０１３年１月25日に発行した。

（浅野　勝己）

■栃木支部

栃木支部は設立して6年目を迎え、設立当時34名で始まった会員数は現在51名である。公益事業・共益事業とも参加者が増え、クラブライフを楽しみながら、ますます充実した活動を行えるようになった。特に本年は、公益社団法人になったことを良い機会として、登山の振興と安全登山教育を目的にして、「親子登山教室」を開催し第1回目としての良い感触をつかむことができた。今後も継続して実施して行きたい。以下は平成24年度の本支部の主な活動報告である。

《会議》

＊6月2日（日）通常総会　事業報告・計画、決算・予算など原案通り満場一致で可決、その後懇親会を実施。　出席30名。

＊4月15日（日）第1回役員会、6月2日（土）第2回役員会、7月7日（土）第3回役員会、8月25日（土）第4回役員会、11月10日（土）第5回役員会、1月12日（土）第6回役員会を開催、支部役員11名と事業委員6名が集まり、支部運営や事業について協議。

《山行・野外活動》

＊4月15日（日）　春山山行・八溝山系花瓶山　参加31名。

＊6月9日（土）・10日（日）　埼玉支部との合同登山　埼玉支部からの提案で袈裟丸山などの登山と懇親会を実施。参加21名（内本支部5名）。

＊8月25日（土）・26日（日）　夏山山行と懇親会　奥鬼怒・奥日光・加仁湯温泉　参加21名。

＊11月4日（日）　秋山山行・会津七ヶ岳　参加12名。

＊1月12日（土）・13日（日）　新年会・冬山山行・足利大坊山・大小山　参加15名。

《プロジェクト・地域振興活動》

＊6月30日（土）・7月1日（日）　日光清掃登山　栃木県山岳連盟との共催　参加約１５０名（内本支部5名）。

＊7月28日（土）・29日（日）　親子登山教室　奥日光の光徳・太郎山で開催、公募による登山教室で、学習院山桜会や栃木県立博物館などの協力を得て実施。参加21名。

＊9月1日（土）・2日（日）　那須岳クリーンキャンペーン　栃木県山岳連盟との共催　参加約50名（内本支部13名）。

《広報・出版活動》

＊4月1日（日）　栃木支部報4、5号を発行。

《講演会》

＊7月7日（土）　第5回山岳映画の夕べ「ニュース映画に見る戦後の山と世相」講師＝羽田栄治氏　講演会後に講師を囲んでの懇親会を実施。参加40名　（羽田栄治氏は平成25年4月5日にご逝去されました、合掌）。

＊11月10日（土）　第6回秋季講演会「日光修験三峯五禅頂」講師＝池田正夫氏　講演会後に講師を囲んでの懇親会を実施　参加48名。

＊12月8日（土）　第4回山ヒマラヤの集い「ヒマラヤアルパインクライミング」講師＝増本亮氏　講演会後に講師を囲んでの懇親会を実施　参加55名。

《その他》

＊12月8日（土）　栃木県山岳団体「山の日」制定連絡協議会発足（JAC栃木支部、栃木岳連、栃木労山で組織）　平成25年6月2日（日）に「山の日を作ろう栃木集会」開催予定。

（渡邉　雄二）

■埼玉支部

埼玉支部は支部設立4年目を迎えて、総会で新支部長に大久保春美氏を選出し、各委員会を中心に多くの支部員が参加できる企画を立案・実施を行った。

《会議》

＊4月7日（土）総会　大久保副支部長を議長に選出、23年度事業報告及び決算報告、規約改正、会友制度の承認後、役員人事で大久保春美支部長が承認され、24年度事業計画、予算案を承認した。出席者41名、委任状69名。

＊支部委員会　4月12日（木）　10名出席、5月10日（木）　12名出席、6月14日（木）　8名出席、7月6日（木）　13名出席、8月9日（木）　9名出席、9月13日（木）　10名出席、10月11日（木）　10名出席、11月15日（木）　6名出席、12月13日（木）　9名出席、1月10日（木）　12名出席、2月14日（木）　9名出席、3月14日（木）　12名出席。

＊1月5日（土）　新年支部懇談会　25年度の支部の方針と各委員会の年間計画と抱負を説明し支部員の親睦を深めた。

《山行・野外活動・講習会など》

＊4月8日（日）　障がい者ふれあい登山　鐘撞堂山　障がい者11名を含む65名が参加。

＊4月14日（土）・15日（日）総会記念山行　3支部合同登山として東京多摩支部20名、山梨支部8名、埼玉支部17名の参加で都県境の雲取山に登山をした。あいにくの雪空であったが、雲取山荘で懇親会を開催し、翌日雪の山頂で3支部の集

合写真を撮影してそれぞれのルートで下山した。
＊6月9日（土）10日（日）に四季の山行〈春山〉　高山・袈裟丸山に栃木支部5名、埼玉支部13名で合同登山。
＊6月12日（火）　第6回安全登山講習会　「山岳気象―気象遭難を回避するために」講師＝㈱ヤマテンの猪熊隆之氏　埼玉支部31名を含む他山岳会、一般参加を合わせて68名が参加。
＊6月16日（土）・17日（日）　和名倉山周辺で、自然保護委員会によるシカ害調査を実施。
＊6月24日（日）　自然保護委員会の第1回「森つくり」を、埼玉県森林サポートクラブと連携して狭山丘陵で幼木の周りの下草刈りを実施。埼玉支部から5名が参加。
＊7月6日（金）～15日（日）インドネシアのスマトラ島のクリンチ山（3805m）に11名が参加。
＊8月11日（土）～13日（月）四季の山行　夏山は剣沢テント場で合宿をして、ロープワークの訓練で長次郎雪渓を登って10名全員が剣岳頂上を極めた。
＊10月13日（土）・14日（日）　四季の山行〈秋山〉　福島県の小野岳、燧ケ岳に9名が参加。
＊10月25日（木）～11月7日（水）　ブータン・チョモラリ・トレッキング　10名が参加。3日間のトレッキングでチョモラリBC（4090m）に到着して5000m峰及び氷河湖まで足を延ばした。
＊12月8日（土）・9日（日）　忘年山行として天覧山と父不見山の清掃登山、及び講演会を開催。
＊1月16日（水）自然保護委員会の第2回シンポジュウム「埼玉の自然を知ろう」を開催。支部員と森林サポートクラブ及び一般参加者を含めて33名が参加。森つくり活動報告、埼玉の絶滅危惧種、シカ害の被害調査を報告した。
＊1月26日（土）　第7回安全登山講演会「こんな場所で山岳遭難!?」講師＝埼玉県山岳救助隊の飯田副隊長　埼玉支部及び一般69名が参加。
＊2月9日（土）・10日（日）　四季の山行〈冬山〉北八ヶ岳・北横岳、茶臼山、他に登頂。
＊2月24日（水）第2回安全登山研修会　「心肺蘇生法とAED使用法」講師＝日赤・渡邊氏　13名が参加。
＊3月12日（水）第3回講習会を陸地測量部の藤野欣也氏、遠山元信氏の協力で「読図講習」を行い埼玉支部及び一般参加者24名が参加。
＊3月16日（土）　鐘撞堂山で読図の実地講習を実施し、15名が参加。
＊毎月現地集合、現地解散で埼玉の50山の山行を実施。
《広報・出版》
＊埼玉支部報は年3回発行（6・7・8号）、ホームページは逐次更新をしている。

■千葉支部

（冨樫　信樹）

2012年5月19日、千葉市において定例総会を開催し、11年度の事業報告及び決算報告、12年度の事業計画案及び予算案が提案通り承認された。今年度も支部の基盤作りを最優先と考え、会員・会友同士の親睦を第一義とした諸山行や懇親会を実施した。さらに今年4月1日に新たに公益社団法人となったことに鑑み、公益事業活動として青少年登山活動支援、各種講演会や自然観察会及び継続事業の房総半島分水嶺踏査等を実施した。年度末会員数は130名（含会友33名）。主な活動は次の通り。

《会議》

＊5月19日（土）通常総会　京葉文化プラザ　出席67名（出席23名、委任状44名）。

＊毎月第4火曜日　役員会　市川市公共施設会議室　役員15名前後。

＊毎月第2火曜日　全国支部懇実行委員会　同所　役員15名前後。

《山行》

＊5月20日（日）総会記念山行　千葉：「御所塚山」　参加者20名。

＊8月5日（日）夏山山行　富士山：大沢崩れ　参加者16名。

＊9月8日（土）初秋山行　丹沢：「くぬぎ山」　参加者18名。

＊10月21日（日）全国支部懇記念山行等　千葉：「笠森グリーンルート」　参加者191名。

＊11月23日（祝日）紅葉山行　奥多摩：「大羽山」参加者16名。

＊12月15日（土）忘年山行　景信山・裏高尾縦走　参加者15名。

＊1月12日（土）・13日（日）新年山行　縞枯山・北横岳　参加者11名。

＊2月3日（日）3支部記念山行　奥久慈：生瀬富士　参加者16名。

＊3月9日（土）・10日（日）残雪山行　東天狗岳　参加者6名。

《房総半島分水嶺踏破事業第20～29回》（公益事業対象）

＊11月3日（土）ルート：観音塚～中山トンネル　参加者6名。

＊11月11日（土）ルート：中山トンネル～運動公園　参加者10名。

＊12月23日（日）ルート：運動公園～照尾トンネル　参加者4名。

＊1月6日（日）ルート：香浅間神社～早物　参加者12名。

＊1月19日（日）ルート：早物～房大山　参加者9名。

＊3月16日（土）ルート：房大山～州崎灯台口　参加者20名。
《青少年野外活動支援事業》（公益事業対象）
＊3月20日（土）高尾山ハイキング　参加者23名。
社会福祉法人　児童養護施設「晴香園」児童引率登山の実施（児童9名、施設職員3名、千葉支部会員・会友11名）。
《懇親会》
＊8月18日　夏季ビールパーティ　高島屋屋上ビアガーデン参加者23名。
《講演会・自然観察会》
＊5月19日（土）支部総会記念総会　京葉文化プラザ　演題「日本300名山」講師：川島由夫氏　参加者25名
＊2月16日（土）房総半島の地震隆起の痕跡を訪ねて　講師：小疇尚氏　参加者15名
《支部便り》
年4回発行（3月、6月、9月、12月）
《本部および他支部行事参加》
＊自然保護全国集会、全国支部懇談会、支部長会議、事務局長会議、年次晩餐会等。
《山の日イベント》
＊講演会、分水嶺踏破等の参加者の一般県民、会員に対してパンフレットの配布、広報活動等を行った。

（諏訪　吉春）

■東京多摩支部

東京多摩支部の活性化を図るための支部活性化プロジェクトを設置した。「東京多摩支部活性化のための提言」を提言し、対外的には「公益・公募事業」の推進、対内的には会員向け活動の強化を掲げ支部会員の各種事業参加の偏り、固定・限定化を打破することを目標とした。これに基づき、立川市との共催による「初心者登山教室」を立上げ、フォローとして「初級登山教室」を実施。2年間をかけて自立した登山愛好者に育成する事業とした。またリタイア会員向け「平日山行」をレギュラー化し、自然観察会を公募事業に形を変えた。これらにより全体の事業参加者が増え、入会者も増える好結果となった。
《会議》
＊5月26日（土）　通常総会　支部規約変更、23年度事業報告・収支決算案、24年度事業計画・予算案などを審議。出席178名（当日出席55名、委任状123名）。
＊幹事会　8月を除く毎月開催　幹事・委員長が延べ180名出席。予算・決算・プロジェクト事業等の審議・活動報告。
＊総務、山行など8つの委員会、3つのプロジェクトチームが毎月委員会開催。
《山行・野外活動》
＊定例山行　3回実施　延べ40名参加。6月30日（土）・7月1

日（日）上州武尊山12名参加、9月29日（土）雁ヶ腹摺山18名参加、3月30（土）・31日（日）北八ヶ岳11名参加。

＊平日山行（毎月第3木曜日実施、10回　114名参加）。
4月19日　岩殿山10名、5月17日　高水三山6名、7月19日日の出山9名、9月20日　大霧山14名、10月18日　本仁田山4名、11月15日　牛ノ寝通り22名、12月20日　浅間尾根17名、1月17日　青梅丘陵13名、2月21日　幕山7名、3月21日大野山12名。

＊都県分境嶺踏査山行（共益）4回　90名参加（うち一般19名）。
支部設立記念事業3年目の最終年である。3年間で延べ51名の参加者となる大事業となった。一般参加者から10名を超えるJAC入会者があった。

＊5月18（金）・19（土）雲取山～長沢背稜～日原31名（一般9名）、7月28日（土）棒ノ折山～一杯水避難小屋24名（一般5名）、11月3日（土）棒ノ折山～小沢峠29名（一般3名）、11月23（金）・24日・（土）大寺山～入小沢ノ峰～三頭山14名（一般1名）。

＊4月14（土）・15・（日）3支部（埼玉・山梨）懇親合同山行
雲取山　43名参加（東京多摩支部18名）。

＊4月18日（水）小河内峠越えとノラボウ菜摘み16名参加。

＊6月14（木）・15日（金）アツモリソウ保護活動体験　12名参加。

＊8月20日（月）御岳山レンゲショウマ観察会　41名参加（一般25名）。

＊11月13日（火）川苔山ゴミ清掃・公益　5名参加。

＊1月8日（火）高尾山シモバシラ観察会　27名参加（一般15名）。

＊3月10日（日）新入会員との交歓自然観察散策「秋川丘陵」33名参加（新入会員10名）。

＊3月30日（土）くにたち第四小学校高尾山ハイク25名（生徒・保護者16名、支部会員5名、他4名）。

《プロジェクト・地域振興活動》

＊立川市との共催で初心者登山教室（6～8月）受講生29名。

＊初心者卒業生対象初級登山教室（10～3月）受講生25名

《広報・出版活動》

＊支部報／4月、7月、10月、1月の4回発行。5月アニュアルレポート発行、ホームページ／年59回更新、メールマガジン／年59回発行。

《その他の行事、懇親会》

＊講演会／11月10日（土）「羽田栄治のニュース映画にみる昭和の世相と山登り」（羽田栄治会員）162名参加（一般109名）。1月27日（日）「ヒマルチュリ登頂に今の山登りをおもう」（田邊壽会員）153名参加（一般50名）。

＊1月27日（日）年始晩餐会　90名参加。

＊8月25日（土）納涼ビアパーティー　22名参加。
＊5地区サテライト・サロン　延べ25回開催　417名参加。

（山本　憲一）

■越後支部

4月1日の公益社団法人への移行に伴い、「公益社団法人日本山岳会越後支部規約及び内規」を策定し、5月の支部総会で審議可決され新制越後支部として出発した。公益社団法人化移行に際し、一般支部会員への意義・内容の説明を重点的に行い、支部会員の参加協力を呼びかけた。越後支部でも会員の減少や高齢化が進むため、将来への組織体制固めと支部基盤確立に対する布石を行ってきた。そして、支部機関誌『越後山岳第12号』も5年ぶりに発刊され、全国関係各位から好評を博し完売となった。

《会議》

＊5月26日（土）　第1回支部役員会　長岡市刈谷田川ニューホテル　出席者20人　平成23年度事業報告・会計報告、平成24年度事業計画・予算計画等説明。
＊5月26日（土）　平成24年度支部年次総会　長岡市栃堀の刈谷田川ニューホテル　出席175名（当日出席40名、委任状135名、有効議決率80％）平成23年度事業報告・会計報告、平成24年度事業計画・予算計画、支部新規約及び内規等を審議可決された。
＊7月7日（土）　第1回三役・委員長会議　長岡市中央公民館　出席者9人。
＊9月30日（土）　第2回三役・委員長会議　長岡市中央公民館　出席者9人。
＊10月13日（土）　総務・越後山岳編集委員会合同会議　新潟市東映ホテル　出席者8人。
＊11月23日（金）　総務・越後山岳編集委員会合同会議　新潟市東映ホテル　出席者8人。
＊12月8日（土）　第2回支部役員会　新潟市東映ホテル　出席者22人。
＊12月22日（土）　総務・越後山岳編集委員会合同会議　新潟市東映ホテル　出席者7人。
＊3月10日（土）　第3回三役・委員長会議　長岡市中央公民館　出席者9人。

《山行・野外活動》

＊5月27日（日）　親睦登山　守門大岳（1432m）と山開き行事に参加　支部参加者25名　（会報「山」№806に報告掲載）。
＊7月22日（日）・23日（月）　中部ブロック4支部交流会（信濃支部主催、上高地で開催焼山登山）に参加　支部参加者10

名。

＊7月25日（水）　第55回高頭祭　松田雄一名誉会員を迎え講演会・懇親会終了後、弥彦山へ移動し併催の新潟県登山祭「松明登山祭」に合流。参加者60名　登山道ゴミ拾いも実施した（会報「山」№808に報告掲載）。

＊10月28日（日）　新潟県山岳協会の親睦登山に参加。　米山（997m）　支部参加者20名。

《プロジェクト・地域振興活動》

＊5月27日（日）　守門大岳（1432m）の清掃登山　支部参加者25名。

＊5月27日（日）　海のウェストン祭（糸魚川市）及び白倉山登山　支部参加者10名。

＊6月30日（土）・7月1日（日）　JAC自然保護全国集会（尾瀬）支部参加者5名。

＊月22日（日）・23日（月）　中部ブロック4支部交流会（信濃支部主催、上高地で開催焼山登山）

支部参加者10名。

＊7月25日（水）　弥彦山登山道の清掃登山　支部参加者50名。

＊2月23日（土）・24日（日）　新潟県山岳協会冬山講習会　妙高関山温泉　支部参加者10名。

《広報・出版活動》

＊6月1日　越後支部報（第4号）発行。

＊9月15日　越後支部報（第5号）発行。

＊12月1日　『越後山岳』（第12号）発刊。　新潟日報（平成25年1月11日）紙上にて図書紹介文を掲載、会報「山」3月号（№814）に報告文掲載。

＊1月25日　越後支部報（第6号）発行。

《その他の行事、懇親会》

＊4月14日（土）　新潟県山岳協会評議委員会及び懇親会出席（新潟市）　山崎支部長、目崎県山協委員長、桐生事務局長参加。

＊5月12日（土）　支部会計監査実施　山崎支部長、遠藤監事、森監事、桐生事務局長参加。

＊5月26日（土）　①講演会（長岡市刈谷田川ニューホテル）「守門山麓と栃尾について」　長岡市郷土史研究家・深滝純一氏が守門岳と地元栃尾の歴史や伝説について説明。参加者40名。

②支部懇談会（刈谷田川ニューホテル）　参加者35名。

＊6月16日（土）　本部総会・支部長会議　山崎支部長参加。

＊6月30日（土）・7月1日（日）　日本山岳会自然保護全国集会（群馬県片品村）　支部参加者5名

＊7月9日（月）　越後山岳編集委員会　参加者3名。

＊7月25日（水）　講演会（弥彦山大平園地）「高頭仁兵衛翁と藤島玄のこと」と題し、日本山岳会名誉会員・松田雄一氏か

ら越後支部の大先輩である両氏の功績や思い出を語っていただいた。　支部参加者60名。

＊7月28日（土）　全国事務局担当者会議に桐生事務局長参加。

＊8月20日（月）　図書委員会、『越後山岳』編集委員会（関川村）参加者3名。

＊10月3日（水）　「山の日」ネットワーク東京会議（国立オリンピック記念青少年センター）山崎支部長参加。

＊10月26日（金）　越後山岳編集委員会（関川村）参加者3名。

＊12月1日（土）　本部年次晩餐会に越後支部より12名参加、永年会員として越後支部より6名（上村幹雄、永島賢司、山崎幸和、渡辺幸栄、井野進、桑原勇蔵）が発表された。

＊12月8日（土）　①講演会（新潟市東映ホテル）「日本山岳会の再生と復権をめざして」　日本山岳会・尾上昇会長より現状と今後の取り組みを説明いただいた。参加者85名。　②講演会（新潟東映ホテル）「中国青海省東崑崙支脈（玉珠西峰）登山報告」越後支部会員で新潟県山岳協会理事長でもある遠藤俊一氏から報告していただいた。参加者85名。③支部年次晩餐会（新潟市東映ホテル）本部より尾上昇会長を来賓としてお迎えし、毎年恒例の越後支部岳人の交流サロンとして開催した。今年度は、加藤明文支部会員の藍綬褒章受章、藤井信支部名誉会員の文部科学大臣賞受賞、七澤恭四郎支部会員の環境大臣賞受賞のお祝いを兼ねて盛大に行われた。参加者85名。

＊1月26日（土）・27日（日）　全国事務局担当者会議に桐生事務局長参加。

（桐生　恒治）

■富山支部

支部総会において公益法人化に伴う規約を制定、山田支部長として3期目をスタートした。新たに選出された川田副支部長が会報企画を担当、支部会報の内容充実にあたった。例会山行は7回実施。日帰り4回は平日に行った。宿泊では9月に念願の東北山行、岩手支部と合同登山を行い交流した。例会は夏・冬2回開催、講話と懇親会。山行、例会とも会員以外からも参加していただいた。恒例の「播隆祭」は晴天に恵まれ、記念登山も無事終了した。5回目の山岳講演会では、辻会員のヒマラヤに対する熱い思いが語られた。これまで会の発展に功績のあった谷村副支部長が6月に逝去された。残念であったが、会員の協力により、支部の行事は予定通り実施された。

《会議》

＊4月13日（金）　支部総会　富山電気ビル　事業・収支決算報告、支部規約、事業計画・予算、役員　出席19名。

＊1月25日（金）　親睦会総会　立山国際ホテル　事業・会計報

告　出席15名。
＊その他役員会4回（5月、8月、11月、3月）。
《山行・野外活動》
＊4月18日（水）例会山行　室堂～弥陀ケ原スキー　参加3名。
＊5月26日（土）27日（日）5支部合同懇親山行　福井・越知山　参加9名。
＊6月6日（水）高柳・中俣会員追悼登山　馬場島・中山　参加14名。
＊7月10日（火）11日（水）例会山行　山研宿泊　徳本峠～上高地～焼岳　参加8名。
＊8月29日（水）～31日（金）岐阜支部研究登山　涸沢～奥穂高～岳沢　参加1名。
＊9月21日（金）～23日（日）例会山行　岩手支部と合同登山　早池峰山、姫神山　参加10名。
＊10月8日（月）～10日（水）例会山行　朝日岳～栂海新道～日本海　参加5名。
＊10月20日（土）・21日（日）全国支部懇談会　千葉　参加2名。
＊11月22日（木）例会山行　五箇山・道宗道　参加5名。
＊3月1日（金）～3日（日）5支部合同スキー山行　妙高前山　滝沢尾根　5支部に先立ち妙高山麓滑走　参加10名。
＊3月8日（金）例会山行　奥医王山　参加8名。
《プロジェクト・地域振興活動》
＊5月19日（土）高頭山登山道整備（公益）参加7名。
＊5月20日（日）第27回播隆祭（公益）富山支部の恒例行事として式典および記念登山（高頭山）実施　参加40名。
《広報・出版活動》
＊7月5日（木）富山支部会報第90号。
＊10月12日（木）富山支部会報第91号。
＊1月30日（水）富山支部会報第92号。
《その他の行事、懇親会》
＊8月8日（水）例会　とやま市民交流館　五十嶋一晃氏講話「棟方志功と立山」。　懇親会　リコ・モンテ　参加24名。
＊12月5日（水）例会　とやま市民交流館　佐藤武彦会員講話「立山信仰の源流と現代」　懇親会　リコ・モンテ　参加24名。
＊2月15日（金）第5回山岳講演会　富山県民会館　辻斉会員「ネパール・ヒマラヤへ～夢の架け橋20年～」　参加76名。

（金尾　誠一）

■石川支部

平成24年度の石川支部の主な活動は公益事業では「ふるさと登山道整備」の一環として、歴史ある廃道を復旧し、それを既存ルートに接続したことで新たな周回ルートが完成し、県内外の山岳関連者の注目を集めた。また、秋には自然観察会を、雪

に閉ざされる冬期には「山岳映画の夕べ」としてK2の記録映画を一般向けに公開し、公益と会員増を意識した事業展開を図った。共益事業では、夏の剱岳八ツ峰等で登攀技術のブラッシュアップを図る等、支部活性化に努めた。

《会議》

＊4月21日（土）　総会　平成23年度事業報告、平成23年度会計報告（監査報告）、平成24年度事業計画（案）、平成24年度予算（案）、支部財産目録、役員改選（案）、公益社団法人化に伴う支部規約（案）、支部旅費・慶弔規程の改訂（案）、入退会会員報告、その他　出席39名（当日出席21名　委任状18名）。

＊9月28日（金）　役員会議　①白山大汝避難小屋の維持管理について、②支部ルームの開設について、③岐阜支部創立40周年記念式典について、その他　出席14名。

＊2月18日（月）役員会議　平成25年度石川支部事業計画（案）、『日本三百名山登山ガイド』リメイク版の執筆について、その他出席　10名。

《山行・野外活動》

＊7月27日（金）・30日（月）　夏山合宿（剱岳八ツ峰～北方稜線）　参加6名。剱沢BCより新人・若人3名と女性1名を含み三ノ窓でビバーク。

＊3月9日（土）・10日（日）　雪洞山行［白山麓西山（857m）］　参加8名　真白な白山を正面に仰ぎ、雪洞技術と満点の星座を学習。

《プロジェクト・地域振興活動》

＊6月2日（土）　ふるさと登山道整備（公益）　浅犀みくまりの道（順尾山～奥高尾山）　参加12名。

＊7月10日（火）、15日（日）　ふるさと登山道整備　火燈古道（火燈山）　参加延べ32名。

《広報・出版活動》

＊支部会報「峰」年間4回発行（季刊6、9、12、3月）。

《その他の行事、懇親会》

＊7月21日（土）　親善ビアパーティー　一線を退いた往年会員向けに企画　参加16名。

＊2月23日（土）　山岳映画の夕べ（公益）　冬期の一般山岳愛好家向けに企画　参加20名。

（前川　陽）

■福井支部

《会議》

＊4月11日（水）　役員会　宮本支部長宅2階例会場。

＊4月21日（土）　通常総会　葵会館　23年度事業報告・決算報告および監査報告が承認され、24年度事業計画案・予算案が

提案され承認される。新支部長選出するに当たり全員一致で、森田信人氏を選任した。出席者59名（当日出席者25名委任状34名）。

＊3月27日（水）役員会　12名参加。24年度の事業計画や活動等の意見交換を行った。

《山行・野外活動》

＊4月28日（土）県民登山大会下見（越知山）　6名参加。

＊5月4日（金）森づくり及び散策路の整備　10名参加。

＊5月26（土）・27日（日）第5回泰澄祭と越知山泰澄ウォーク。この事業に、第12回日本真中五支部合同山行及び懇親会（福井支部主管）も同時に開催した。富山・石川・岐阜・京都滋賀の各支部より25名、泰澄塾4名、福井支部12名参加。27日の越知山泰澄ウォークには100余名の一般参加の方も含めて小川集落より登山する。室堂の神社にて神事が行われ、その後野外コンサートと泰澄汁が振舞われた。下山には五支部の参加者は越前町登山愛好家の方が5年かけて、越知山古道を復活した道（西に日本海、東に白山を眺められ、室町時代の古文書などに出ている「雀ヶ峠」と思われる場所も含む）を悠久ロマンの杜まで歩く。

＊6月24日（日）荒島岳　清掃登山7名の参加。

＊7月21（土）・22日（日）竹幸子水彩画展と長野の山　13名参加。会員の奥様が個展を開かれたお祝いとそれを拝見する。また竹会員には長野の山（鍬ヶ岳と岩岳）を案内していただく。

＊8月17日（金）～19日（日）那須連山（富士山・茶臼山）　7名参加。

＊9月2日（日）夜叉ヶ池　7名参加。山頂で京都支部遭難7回忌の追悼登山に合流する。

＊9月29日（土）県民登山大会の下見「越知山」8名参加。

＊10月20日（土）・21日（日）全国支部集会（千葉支部主管）　2名参加。

＊10月21日(日)県民登山大会　越知山　15名参加。　県スポーツ祭の登山部門が、福井県・福井県教育委員会等の主催にて毎年行われている。今年はJAC福井支部と朝日山の会の担当で行われた。一般参加者とスタッフを合わせて150名の参加であった。5月に行われた、日本真中五支部合同山行の時のコースを行く。

＊10月27日（土）～29日（月）全日本登山体育大会福井大会5名参加。　日本山岳協会主催で行われ、1日目は開会式と講演と夕食交流会、2日目は6コースに別れての登山、我々は登山後の交流パーティと閉会式の担当となる。

＊11月11日（日）森づくり及び散策路の整備　14名参加。道幅を拡幅し、苗木を植樹する。

＊11月17日（土）～18日（日）岐阜支部創立40周年記念式典

7名参加。
＊12月1日（土）～2日（日）本部晩餐会・越前岳　4名参加。
＊12月16日（日）～17日（月）支部晩餐会・登山（護摩堂）　14名参加
＊1月20日（日）日野山　6名参加。
＊2月11日（日）野坂山　10名、オブザーバー3名参加。
＊3月2日（土）・3日（日）五支部合同山スキー（京都主管）妙高山系前山　7名、オブザーバー1名参加。
＊3月9日（土）銀杏峰　6名、オブザーバー1名参加。

（舩田　洋子）

■山梨支部

当支部（支部長・遠藤靖彦、会員75名）は、主な公益事業として第31回深田祭、山岳レインジャー活動、第8回山の博覧会、第53回木暮祭を、共益事業として機関誌『甲斐山岳』第5号の発行、山梨二百山の踏査、定例支部山行、第1回埼玉・東京多摩支部との交流登山、第2回中部ブロック（越後・信濃・山梨・静岡支部）交流会などを行った。

《会議》
＊4月7日（土）ほか　委員会・役員会　12回開催。
＊4月7日（土）定時総会　決算・役員改選・事業計画ほか出席60名（当日出席35名、委任状25名）。

《山行・野外活動》
＊4月7日（土）定例支部山行　韮崎市・苗敷山　参加6名。
＊10月21日（日）定例支部山行　北杜市・五里山　参加8名。
＊1月9日（水）定例支部山行　甲府市・水ヶ森　参加10名。
＊4月14日（土）・15日（日）埼玉・東京多摩支部との第1回3支部交流登山（埼玉支部主管）雲取山・雲取山荘　参加10名。
＊7月22日（日）・23日（月）第2回中部ブロック交流会（信濃支部主管）上高地・西糸屋および焼岳　参加10名。

《プロジェクト・地域振興活動》
＊通年　山梨二百山を踏査　山梨県は平成8年2月「山梨百名山」を制定したが、すでに15年以上経過している。県内外の登山者の要望などもあり、さらに百山を追加選定するため平成22年から引き続き実施。
＊4月22日（日）第31回深田祭（公益）記念登山を深田久弥氏終焉の地「茅ヶ岳」、碑前祭を深田記念公園で行った。参加12名、一般参加100名
＊6月～8月　山岳レインジャー（公益）希少動植物の調査・保護活動　奥秩父＝参加2名、北岳＝参加2名、鳳凰三山＝参加3名。
＊7月7日（土）第8回山の博覧会・公益　参加30名、一般参加400名。会場の山梨学院メモリアルホールはほぼ満席

だった。本年のテーマは「南アルプス特集Ⅱ」。山梨県の「やまなし山の日」および日本山岳会「山の日」関連プロジェクトの一環である。講演は4つ。南アルプス市みどり自然課の広瀬和弘さんの「ライチョウの今と未来」、東海フォレストの河原義彦さんの「森と人との対話」、南アルプス芦安山岳館塩沢久仙さんの「南アルプスは今」、最後に特別講演として渡邉玉枝さんによる女性最高齢の「73歳エベレスト登頂報告」。入場者には「山の日」制定協議会のパンフレットを配布し、「山の日」をPRした。毎回山梨学院大学の絶大な支援と協力をいただいている。25年度は世界文化遺産登録を目指している富士山を特集し6月29日（土）に開催する予定。

＊10月21日（日）第53回木暮祭・公益　北杜市須玉町金山平の碑前で開催、参加12名、一般参加18名。木暮理太郎生誕地の群馬県太田市から「木暮理太郎翁の足跡を語り継ぐ会」の会員も参加。地元増富ラジウム峡観光協会の用意した秋の味覚きのこの「ほうとう」いただきながら交流を深めた。

《広報・出版活動》

＊3月31日（日）機関誌『甲斐山岳』第5号を150部発行。

《その他の行事、懇親会》

＊4月7日（土）懇親会（サロン・ド・エクラン）参加35名。

＊12月19日（水）忘年会　田原屋　参加20名。

＊1月9日（水）新年会　サロン・ド・エクラン　参加31名。

（古屋　寿隆）

■信濃支部

平成24年度通常総会が4月15日（日）に開催され、今年度の事業計画と予算案が承認された。信濃支部の主な行事としては6月第1周の日曜日に行われた第66回ウェストン祭、7月22日（日）23日（月）上高地を主会場として信濃支部が担当した第2回中部ブロック4支部交流会、11月10日（日）・11日（月）上高地で行われた第10代支部長、中野和郎氏の追悼山行である。

今年度も逝去または退会された方が数名あり、入会は若干名。会員の減少と高齢化がみられる。今後どのように解決するか考えなければならない。

《会議》

＊4月15日（日）　通常総会　松本東急イン　出席104名（当日出席32名　委任状72名）。事案内容は、平成23年度事業報告及び収支報告、平成24年度事業計画案及び収支予算案討議、信濃支部規約改正討議、役員改選、第66回ウェストン祭について、その他（中部ブロック4支部交流会等）。

《山行》

＊4月22日（日）常念岳　3名参加。

＊5月4日（金）～6日（日）　立山スキー山行　2名参加。

＊6月24日（日）　十石山　6名参加。
＊8月13日（月）～16日（木）　白馬～栂海新道　3名参加。
＊10月7日（日）　錫杖岳　5名参加。
＊11月25日（日）　茅ヶ岳　3名参加。
＊2月17日（日）・18日（月）　八方尾根スキー山行　10名参加。
＊3月7日（木）～13日（水）　台湾の山・雪山、品田山、他　14名参加。

《プロジェクト》
＊6月2日（土）・3日（日）　第66回ウェストン祭　記念山行＝2日朝6時に島々宿を出発し、徳本峠を越えて上高地へ。一般参加者も入れて150名程参加。記念講演＝「ウェストンさんの置き土産」日本山岳会会長・尾上　昇。
＊7月22日（日）・23日（月）　第2回中部ブロック4支部交流会
　1日目は上高地西糸屋山荘にて懇親会、翌日に焼岳登山　43名参加。
＊11月10日（土）・11日（日）　第10代支部長　中野和郎追悼山行　27名参加。1日目は上高地西糸屋山荘にて追悼の夕べ、翌日ひょうたん池まで往復。
＊岳都・松本「山岳フォーラム」2012　ホテルブエナビスタ。

《広報・出版活動》
＊1月20日、「信濃支部報　第59号」発行。

《その他》
＊1月20日（日）　新年会　松本東急イン　41名参加。

（飯村　富彦）

■岐阜支部

支部創立40周年を迎え11月17日（土）に記念式典、山岳講演会、祝賀会をホテル十八楼で開催。本部より尾上会長、吉永副会長、支部活性化プロジェクト・チームの宮崎氏、神崎日本山岳協会会長、中部圏の各支部長、各支部会員等93名の参加を得て盛大におこなわれた。翌18日（日）の記念山行（金華山）には60名の参加。

《会議》
　毎月の理事会のほか、左記の会議が開催された
＊4月21日（土）定時総会　高山市・三枡屋　事業報告、岐阜支部規約制定、事業計画、岐阜今西錦司賞授与　出席31名。
＊7月10日（火）40周年実行委員会　開催要項、予算について、参加10名。
＊8月22日（水）40周年実行委員会　経過報告、スケジュール検討について、参加10名。
＊10月30日（火）40周年実行委員会　経過報告、細部項目について最終確認、参加8名。

《支部山行》

＊4月22日（日）春期懇親山行　高屹山　参加33名。

＊5月12（土）、13日（日）県外山行　鍬ノ峰　泊り4名・日帰り4名参加。

＊6月3日（日）春期現地小集会　銚子ケ峰　参加12名。

＊6月10日（日）第5回今西錦司記念山行　小谷山　参加17名。

＊7月29日（日）7月例会　焼岳　参加12名。

＊8月29（水）～31日（金）夏季北アルプス山行　奥穂高岳

岐阜医療科学大学　加藤教授の研究協力　参加10名。

＊9月9日（日）9月例会　南木曽岳　参加13名。

＊10月13（土）・14日（日）秋期懇親山行三方崩山　参加5名

＊11月11日（日）秋期現地小集会　ドウの天井　参加7名。

＊12月9日（日）12月例会　雁叉山　参加15名。

＊2月17日（日）冬期現地小集会　南宮山　参加20名。

《他支部主管山行》

＊5月26日（土）・27日（日）　第12回五支部懇親山行

越知山　参加7名。

＊3月2日（土）・3日（日）　五支部スキー山行　妙高山前山

滝沢尾根　参加5名。

《講習会》

＊2月23日（土）・24日（日）　冬山雪上訓練講習会　伊吹山

幕営5名、日帰り参加5名。

《海外山行》

＊8月30日～9月3日　海外山行　白頭山　参加15名。

《講演会》

＊11月17日（土）「槍ヶ岳とともに」槍ヶ岳山荘・穂苅康治氏

聴講者240名。

《権現の森林づくり》

＊4月15日（日）～11月25日（日）　10回　参加65名。林道入口での崩落のため、藤波口からの登山道を登って作業を行ったが、余りにも過酷なため5月から8月までの植樹祭及び作業を中止した。

《自然環境保全》

＊4月～11月　森林パトロール　14回　参加38名。

＊12月9日（日）　金華山山麓めい想の小径修復　参加2名。

《写真展》

＊12月1日（土）～28日（金）　岐阜市長良　喫茶パウゼ

＊1月6日（日）～30日（水）　山県市大桑　香り会館　作品27点　出展者12名。

《懇親会》

＊12月13日（木）　理事会・忘年会　参加17名。

＊1月19日（土）　新春懇談会 岐阜キャスルイン　参加24名。

《会報》

＊9月30日（日）「岐阜山岳　第72号」発行。

＊3月31日（日）「岐阜山岳　第73号」発行。

（今峰　正利）

■　静岡支部

《会議》

4月11日（水）18時30分から静岡県教育会館4階A会議室で支部通常総会を開催した。支部会員133名、入会予定5名、出席37名、委任状出席69名、計106名の出席で成立。長田支部長代行の開会の辞の後、久保田支部長の挨拶を行い、議長に支部長を選んで議事に入った。平成23年度の事業報告、会計報告、監査報告の各案を受けこれを満場一致で承認した。続いて平成24年度事業計画（案）、予算（案）の提案を受けてこれも満場一致で承認した。議事終了の後、新支部会員の白鳥勝治、新入会の竹淵繭さんの紹介を行った。

総会終了後、静岡駅前「御幸通り」の「だんまや水産」で懇親会を行い25名が参加した。

《公益》公益事業としてハイキングセミナーを行った。「座学＋実技」のセットを3回行った。

＊5月16日（水）　第1回　静岡労政会館5階の会議室で座学「読図」講師＝広澤和嘉会員で行った。12名が参加し、久保田支部長以下5名の会員がサポートした。実技は5月20日（日）読図しながらの藪山体験で8名が参加し「静岡・油山温泉～トワ山～大棚山～中村山～奥長島」を歩いた。講師の有元利通会員他6名が指導に当たった。最初の集落の車道歩きで予定より遅れたので心配したが、車道が尽きるところでひと息入れると徐々に慣れてきて良いペースになった。初心者向けにはロングコースで急登も有り大変だったが全員歩き切った。

＊6月6日（水）　第2回は第1回と同じ時間、会場で座学「天気の予測」講師＝有元会員で行った。8名が参加し、会員6名がサポートしたが天気図作成、予測は大変なようであった。実技は6月10日（日）、前回の続きの「奥長島～釜石峠～突先山～大山～谷沢」を歩いた。1，2回連続して参加した人は、前回歩いたコースを振り返って見ることが出来た。

＊10月3日（水）　第3回は同会場で座学「トラブル・遭難対策」講師＝平野雅俊会員（前静岡市消防局山岳救助隊長）を行った。実技のミーティング、アイゼン、ピッケルワークの講習も行った。実技は10月13日（土）・14日（日）に「初冬の富士登山」を行った。初日に岩崎充弘会員にレンタカー（マイクロバス）を運転してもらい、富士山富士宮口新5合目に東部からの参加者も含めて集合した、計9名。新6合目「宝永山荘」まで登って宿泊。翌日は日の出前に出発、實川欣伸会員を中心に久保田支部長、長田支部長代行、有元事務局、小笠

原誠、石間宏美、諏訪部豊、岩崎充弘会員がサポートして全員が初冬の富士山に登頂した。歩きの速度で3グループに分かれることになったが会員もセミナー参加者程度の人員がいたので十分対応できた。第1、第2グループは剣ヶ峰まで登った。また一部は三島岳の頂上も踏むことが出来た。（支部HP参照）

＊7月下旬、田部井会員呼びかけの福島の高校生を支援して富士山に登る企画には、静岡支部からは實川欣伸、石間宏美、竹渕繭の3会員が参加した。

《共益》本年度は会員の意見を反映して会員山行を増やした。

＊4月22日（日）愛鷹山に8名が参加し登った。天候が心配されたが曇り空で持ちこたえ下山後雨となった。山行後諏訪部会員宅に寄り「山の道具博物館」を見学しご馳走にあずかった。

＊6月24日（日）静岡・天狗岳に3名が参加し登った。余りに快速であったので駄賃の山として中保津のピークも踏んだ。

（有元　利通）

■東海支部

東海支部は、平成24年度（2012年度）は前年が支部設立50周年の記念の年であり、51年目の新たな出発の年であった。折しも日本山岳会年も4月1日から公益社団法人として再出発した年であり、支部全体も新たな気持ちで、ボランティア活動や登山教室の充実など通常の活動を続ける中で若い世代への対応・公益法人改革など新しい流れへの対応なども積極的に進められた。

《同好会組織の発足》

東海支部の組織は支部の意志決定機関である常務委員会の下に事業執行組織として各委員会が設置されている。各委員会が支部の事業を分担して各種山行等を企画実施し、常務委員会に報告する仕組みとなっているが、支部員が有意義なクラブライフを一層享受することを目的として同好会を新たに発足させることとした。

同好会とは、東海支部会員が同好の士と本支部の事業目的に沿った多様な活動を通じて有意義なクラブライフを享受しようする集りで、かつ、総務委員長の所定の承認及び常務委員会への所定の報告に基づいて「東海支部同好会登録台帳」に登録された会を云う。同好会は本支部の会議室等の施設、設備、支部報及びホームページを利用することが利用できることとする。同好会の活動は別途定めた同好会規約に従って行うが当然ながら活動内容は東海支部の事業目的の範囲内であり東海支部会員なら入会自由であることが前提としている。年度末には7つの同好会が登録されており、それぞれ活発に活動している。

《登山教室の充実》

東海支部の登山教室は従来から中日新聞、朝日新聞、ＮＨＫの各文化センターに設置され、誰でも入会できる講座を設け、講師を派遣していた。このような中で、最近の山ガールと呼ばれる若い女性の入会希望も多くなり、講座定員を超える傾向が見られることを考慮して、新たに中日教室に山ガール講座を設けることとし、４月から発足させた。希望者も多く、順調に活動している。

《東海Ｙｏｕｔｈの発足》

山ガール講座の発足にともない、その卒業生の受け皿をどうするか、さらに東海支部の東海学生山岳連盟の活発な活動に伴い、若手の育成を組織的に行う必要があるとの観点から「東海Ｙｏｕｔｈ」を発足させることとした。入会資格は、向上心のある40歳未満の登山初心者で、男女を問わず、東海支部が関係する登山教室で一定期間受講した者、もしくは登山教室委員会で承認された者、としている。在籍期間は２年間とした。

《支部友会の改革》

東海支部独自の制度である支部友会は登山教室の卒業生の受け皿として発足して20年が経過した。支部友会制度は東海支部の活性化に大きく貢献し、多い時には２５０名を超えた。もともと、山に馴染むための暫定的な会であったが、いつしか、恒久的で準会員のような制度との認識も生まれて来た。そのため、設立時の機能に戻すべく、在籍期間を3年間として、その間に日本山岳会に入会するか、自らの責任で活動するかの選択をすることとした。現在、組織変更に伴う諸問題への対応を進めているところである。

《猿投の森づくり》

猿投の森づくりは継続的に進めているが、昨年４月の公益社団法人への移行と同じタイミングで猿投の森の隣接地の所有者の遺産相続に伴い、約１５０００㎡の山林の寄贈を受けることが出来た（「ＪＡＣ猿投の森」と命名）。当該地は北西に流れる沢の両岸に接する斜面にある雑木林で、長年人の手が入っていない暗い森である。この森の林床に十分陽が入るように整備して、ヤマザクラを始めとする落葉樹の種類を増やし、それらに依存する昆虫や動物が生息する多様性のある森づくりを目指す。また、ベース基地を建設して多くの人が森に親しみ楽しみながら夢を語らい、それらを育む場にする。なお、この活動は、猿投の森づくりの会と名古屋大須ロータリークラブの協働プロジェクトとして展開する。

《ボランティア活動の拡大》

従来から知的発達障害児の集まりであるスペッシャルオリンピックス（ＳＯ）愛の支援登山を行なってきたが本年も鈴鹿・朝明渓谷にて１泊登山を行なった。又幼稚園児を対象とした親と子のふれあい登山を実施した。さらに視覚障害者支援登山に

も取り組んだ。視覚障害者との登山により健常者自身も登山の意義を再認識することができ、継続的に取り組んで行くこととなっている。

（佐野　忠則）

■京都・滋賀支部

第7回京都「今西錦司賞」は、当会会員の大槻雅弘氏が会長を務める一等三角点研究会の『一等三角点全国ガイド』（ナカニシヤ出版）と作成した会員が受賞した。全国にある標高500m以上の全ての一等三角点について紹介した書籍である。北海道から九州まで全国にわたる一等三角点研究会の会員が三角点の歴史的意義、設置目的等を研究調査する過程で作成された労作である。

2012年総会に於いて「京都支部」を滋賀県在住の会員の要望もあり「京都・滋賀支部」に名称変更した。併せて、一般人を対象にした支部「友の会」制度を新たに設立し、将来の支部を担う人材の養成に着手した。

11月4日に支部創設者である「今西錦司先生の記念山行」での白鬚山で重傷となる滑落事故があり、事故を教訓として支部としての「山行の行動指針」が検討委員会により改定された。

会員の有志の会として、陀羅佛小屋（長野県大町市）管理運営する京都陀羅佛会。滋賀県大津市の滋賀県有林の藤尾の森づくりの会等が活動している。

《会議》

＊4月14日（土）　総会　京都大学楽友会館。

《山行・野外活動》

＊4月20日（金）～4月22日（日）　白馬岳周辺スキー。

＊5月～12月　平日例会山行（9回）　赤坂山・三国岳・高庵～鶴ヶ岡・池原山～布袋岳・大御影・湖北乗鞍・三十三間山・行市山～柳ヶ瀬山・瓜生山～大文字山。

＊5月～3月　山歩会（支部ゆるやか山行）6回　小塩山～善峰寺・瓢箪崩山～金毘羅山・峰山～朝日峯・剣尾山～横尾山・嵯峨野～清滝。

＊5月26日（土）・27日（日）　五支部懇親山行・福井県越知山。

＊6月3日（日）　滋賀県山岳センター人工壁クライミング講習会。

＊7月14日（土）～16日（月）　夏山山行・黒斑山（長野県）。

＊7月28日（土）　大文字山納涼山行。

＊8月23日（金）～26日（日）　夏山山行・唐松岳～五竜岳。

＊9月2日（日）　朝倉英子さん7回忌追悼山行・夜叉ヶ池。

＊9月15日（金）夜～17日（月）　お月見山行　守門岳。

＊10月6日（土）～8日（月）　広島支部合同山行　三倉山。

＊10月9日（土）～11日（月）　秋山山行・頚城山塊。

＊10月20日（土）・21日（日）　東海・関西・京都滋賀自然保護委員会「森の勉強会」　朽木。
＊11月3日（土）・4日（日）　今西錦司先生の記念山行　白鬚山。
＊11月10日（土）・11日（日）　スケッチ山行　長野県安曇野。
＊12月6日（木）　鈴鹿の静かな山歩き　那須ヶ原。
＊1月6日（日）　初詣山行　鞍馬山～貴船山。
＊2月16日（土）・17日（日）　スキー例会　野麦スキー場。
＊3月2日（土）・3日（日）　五支部合同スキー山行　妙高山・前山

《講演会》
＊10月17日（水）　山水会講演「アコンカグア登頂」　京都府立大学山岳部。
＊2月20日（水）　山水会講演「一等三角点研究会と今西錦司先生」　大槻雅弘一等三角点研究会会長。

《親睦会ほか》
＊1月16日（水）　京都支部新年会　南禅寺順正。

（伊原　哲士）

■関西支部

平成24年4月1日をもって公益社団法人日本山岳会関西支部としてスタートした。本部の「新定款」に則り、新支部規約に沿って運営した。その主な事業として、正式に発足した「本山寺山森林づくりの会」に、広く一般から参加者を募り活動を開始した。さらに一般対象事業「登山教室」は昨年初級からグレードアップした中級と本年度の初級の2講座を開講、自立できる登山者の養成を図った。

また、山行の3本柱の主軸としてきた近畿分水嶺踏査は今年度より（続）近畿分水嶺踏査として、日の岬から高見山までのコースを実施し、4000山グランプリと併せてグレードの高い登山を実施することができた。また1月より関西支部県境縦走を開始した。

《支部会議》
＊4月18日（水）　総会　大阪セルロイド会館　18時30分より出席42名。
＊5月23日　第1回委員会　出席17名　＊7月18日　同第2回19名　＊9月19日　同第3回　22名　＊11月28日　同第4回18名　＊12月12日　拡大委員会　11名　＊1月16日　第5回委員会　16名　＊3月27日　同第6回　18名

《その他の集会・会議》
＊6月29～7月1日　尾瀬　全国自然保護集会　出席2名
＊12月20日、1月25日、3月19日　大台ケ原の利用に関する協議会（環境省近畿地方事務所関係）　上北山村・川上村各1名

出席

＊3月30・31日　第7回森づくり協議会　高槻森林観光センター　出席16名（関西支部主管）

《山行・野外活動》

＊（続）近畿分水嶺踏査　9回　延べ日数19日　延べ参加者137名（会友2・ほか5名）。

＊4000山グランプリ　11回　延べ日数30日　延べ参加者133名（会友2・ほか16名）。

＊ゆるやか山行　10回　延べ日数10日　延べ参加者251名（会友31・ほか54名）。

＊関西支部県境縦走　3回　延べ日数6日　延べ参加者108名（会友11・ほか8名）。

＊登山教室　初級12回　延べ日数12日　延べ参加人数68名　中級12回　延べ日数12日　延べ参加人数66名。

＊5月20日（日）宍粟50山　長水山・篠ノ丸　参加13名（会員外4名）。

＊6月2・3日　自然観察山行　四国つるぎ町巨木探勝ツアー　参加12名（四国支部3名）。

＊7月22日（日）上山谷～槇尾山施福寺　参加4名（会員外1名）。

＊7月26～30日　海外トレッキング　長白山縦走　参加8名（会員外2名）。

＊9月2日（日）四国の沢　菅生谷～三嶺　参加5名（会員外2名）。

＊9月2日（日）レスキュー　蓬莱峡　参加9名（会員外2名）。

＊10月18日（木）大船山　参加15名（会友3名・会員外5名）。

＊12月1日（土）孫と一緒にハイキング　ほしだ園地　参加大人13名・子供10名。

＊1月6日（金）陽だまり山行「播磨の山　五峰山・角尾山　参加29名（会友3名・会員外7名）。

＊2月13～15日　近場でスキー　ハチ高原　参加9名。

＊2月23日（土）雪上研修会　びわ湖バレー　参加5名（会友1名）。

＊3月2・3日　5支部合同スキー　妙高前山滝沢尾根　参加9名。

《講演会等》

＊8月29日（水）講演（夏期懇談会）「『天地明察』と山の測量」講師＝上西勝也（京都・滋賀支部会員）大阪凌霜クラブ　参加53名（一般4名）。

＊11月17日（土）著者と語る会「山と昆虫―昆虫少年集まれ」講師＝塚本珪一（京都・滋賀支部会員）大阪府立中央図書館　参加45名（一般18名）。

《自然保護活動》

＊本山寺山森林づくり　5月18日（土）近畿中国森林管理局長と「社会貢献の森における森林整備等の活動に関する協定書を京都大阪森林管理事務所で締結した。6月17日（日）「本山寺山森林づくりの会」創立総会　出席11名。8月より月1回のペースで活動を行い3月末までに延べ58名が参加した。

＊東お多福山ススキ草原復元活動（人と自然の博物館など7団体と協働）　5月16日（水）春の植生調査　参加4名　7月25日（水）夏の植生調査　参加3名　10月10日（水）秋の植生調査　参加5名　11月28日（日）晩秋の全面刈り　参加4名　その他7回の打ち合わせをおこなった。

＊やまみち巡視保全活動　本山寺山森林づくり活動時に、東海自然歩道の保全活動。

＊自然観察会　10月21・22日　第16回森の勉強会（朽木の森トチの大木観察、京都・東海・関西各支部自然保護委員会共催）参加4名。

《懇親会》

＊1月30日（水）　新年会　梅田大東洋　参加42名。

《出版・広報》

＊支部報発行　6月10日（日）147号（350部、以下同）、9月10日（月）148号（400部、12月10日（月）149号、3月10日（日）150号。

＊関西支部蔵書の整理　久野英子会員（6123）より寄贈された図書や支部蔵書の整理を行いリストを作成。

＊支部ブログの開設　http://jackansai.at.webry.info/

（重廣　恒夫）

■山陰支部

《会議等》

＊4月28日　通常総会　米子市公会堂　出席21名。

＊5月26日　5月例会　米子市公会堂　出席9名。

＊6月28日　6月例会　米子市公会堂　出席7名。

＊6月28日「大山概念図」第6版発行。

＊7月28日　7月例会　米子市公会堂　支部資料室開設準備、「雲伯の山々」協議、出席14名。

＊7月28日　支部事務局担当者会議　出席1名。

＊8月25日　8月例会「雲伯の山々」協議　出席11名。

＊9月22日　9月例会　出席7名。

＊10月27日　10月例会　米子市文化ホール「雲伯の山々」協議　出席8名。

＊11月24日　11月例会　米子市公会堂　出席13名。

＊11月24日「大山概念図」第6版発行。

＊12月1日　支部長会議。

＊12月1日　本部晩餐会　参加3名。

＊1月26日　1月例会　米子市文化ホール　出席19名。
＊1月26日　支部事務局担当者会議　出席1名。
＊2月9日　2月例会　米子市文化ホール　出席11名。
＊3月30日　支部資料室検討会　キリン峠位置確認検討会。
＊3月30日　3月例会　米子市文化ホール　出席12名。
《山行・野外活動》
＊5月8日～6月4日　カイラス一周とチョモランマBC・チベットの旅　参加1名。
＊9月2日　三郡山山行・狼煙試験　参加6名。
＊9月9日　「大山頂上トイレキャリーダウンボランテア　参加1名。
＊10月18日　八甲田山山行　参加6名。
＊10月19～21日　第8回霧ケ峰山の会　参加1名。
＊3月9～10日　大山冬山パトロール　参加5名。
＊3月20日　大山冬山パトロール　参加3名。
《その他の行事》
＊11月3～4日　広島支部15周年記念式典　参加3名。
＊11月17日　井上さん（岳獅会）偲ぶ会　参加3名。
＊12月8日　支部晩餐会　参加23名

23年度に「大山概念図」第4版限定200部（非売品）を発行したが、このことが地元新聞に載り大きな反響となる。改訂版発行の要望があったことから、大山遭難防止協会、地元大山町、伯耆町の協力により大改訂を行った。現地調査や名称変更には岳獅会の絶大な協力なくしては成し得なかった点が多い。更に、高田前支部長を中心に山陰支部の総力をあげて第5、6版を発行した。

今後の長期ビジョンは、2020年の創立七〇周年記念事業として、身近な伯耆・出雲の山々について古事記、出雲たたら製鉄などの歴史的探訪を絡め、さらに出雲から大和間の狼煙ルート及び全山名の調査等を含めた「雲伯の山々」（仮称）の発行を検討中である。その過程として記録法と楽しみ方を工夫し、新会員募集の手段にもなるような多目的登山に向けて努力する覚悟である。

（伊澤　寿高）

■広島支部

特筆すべきは念願の支部ルームを購入したこと。11月3日の支部創立15周年記念式典にそれをお披露目することができた。

会員数は期首に129名、入会24名（個人22　団体2）、退会2名で、期末総数151名。

《会議等》
＊通常総会　4月7日（土）　広島ガーデンパレス　事案＝支部ルーム設立ほか　出席101名(当日出席60名、委任状41名)。

＊支部創立15周年記念式典　11月3日（土）　ホテルＪＡＬシティ広島　本部・支部の来賓31名 広島支部出席者63名。
＊役員会　5月17日（木）　西区民文化センター　9月11日（火）、11月15日（木）、1月16日（水）、3月21日（木）支部ルーム。
＊支部ルーム委員会（委員23名）
第1回（4月12日）～第4回（7月12日）　広島市ひとまちネットワーク（過去3年間の会合場所）　第5回（9月13日）　支部ルーム。構想計画から購入先決定、諸手続き、募金活動、仕様決定、什器備品の調達、工事進捗管理。
＊規定の整備　「支部ルームの利用について」、「複写機の利用に関する申合せ」、「会員の連絡体制の整備に関する申合せ」。
＊インターネット環境の整備　支部ホームページの充実。
《山行・野外活動》
＊第1山行委員会例会山行　15回　延べ参加者356名。
＊第2山行委員会例会山行　13回　延べ参加者180名。
＊広島支部アルパインクラミングチーム　ＨＡＴ　例会月1回。
＊支部友委員会例会山行　年4回　延べ参加者53名。
＊京都・滋賀支部交流会（第9回）　10月6日（土）～8日（月）　大竹市・三倉岳　広島支部19名、京都滋賀支部13名参加。
＊北九州支部交流会（第4回）　11月9日（金）～11日（月）　大分県・九重山　広島支部11名、北九州支部14名参加
＊全国支部懇談会（第28回）　10月20日（土）・21日（日）　千葉県・国民宿舎サンライズ九十九里　広島支部3名参加。
＊年次晩餐会　12月1日（土）・2日（日）　東京都・品川プリンスホテル　広島支部3名参加。
《プロジェクト・地域振興活動》
＊中国新聞文化センター登山講座　講師派遣（広島・呉・福山の3地区4教室での「里山ハイキング」、「初級登山講座」、「中級登山講座」のほか「ユース登山講座」、「ジュニア自然学校」計10クラス）　延べ参加者（2月まで）　1388名、延べ講師派遣（2月まで）　239名。
＊第10回ひろしま「山の日」県民の集い「山の日ネットワーク尾道会議」　6月2日　ゲストＪＡＣ本部他8名、広島支部10名。
＊同「八幡湿原再生化事業」　6月3日（日）　広島支部22名参加。
＊西中国山地・高岳山頂付近の景観回復及び環境整備　12月1日（土）　広島支部20名参加。
＊ＪＡＣ森づくり連絡協議会（6月上智大、3月大阪）　各1名参加。
＊大学支援活動（広島市内の大学山岳部等に対する技術支援）

年4回の意見交換会　北アルプス縦走に会員2名引率参加。
＊将来構想検討プロジェクト「未来プロジェクト」　12月4日（火）。

《広報・文化活動》
＊広島支部報「JAC Hiroshima」（季刊）の発行。
＊山楽（さんがく）サロンの開催　講師＝経験豊富な会員　①12月12日（水）「久しぶりのネパールの山」、②1月19日（水）「冬山への備え」、③2月13日（水）「未踏峰に挑んで」、④3月13日（水）「ヒマラヤ花紀行」　延べ参加者112名参加。
＊支部ルーム山岳関連図書の収集　本部からの寄託図書100冊、会員からの寄贈図書300冊、計400冊。

《その他の行事・懇親会》
＊忘年会　12月1日（土）斎山荘　19名参加。
＊新年会　1月5日（土）　支部ルーム　26名参加。

（国枝　忠幹）

■四国支部

四国支部は、2012年2月12日徳島市で設立総会を開き、33名1団体の会員で発足した。4月29日には高知市で第1回通常総会を開催し、四国支部としての活動を開始した。四国4県の会員の交流を図るため、毎月1回定例山行を実施し、10月には支部報「四国山岳創刊号」を発行。公益活動としては、8月から初心者対象の登山教室を毎月1回実施し、関連事業としてエベレスト登頂者の松浦輝夫氏、渡邉玉枝氏を招いて講演会を2度開催した。25年度初めに日本山岳会初代会長の小島烏水の出身地である香川県高松市で「第1回小島烏水祭」を開催するため、全国の会員の協力を得て寄附金募集を行った。

《会議》
＊4月29日（日）通常総会　出席者33名（当日出席20名、委任状13名）。

《山行・野外活動》
＊4月30日（月）　鈴ヶ森（高知）参加8名。
＊5月13日（日）　西門山～東門山（高知）　参加8名。
＊6月10日（日）　黒尊山系縦走（愛媛）　参加12名。
＊7月8日（日）　三嶺の池巡り（徳島）　参加12名。
＊8月19日（日）　かま谷～天狗塚（徳島）　参加6名。
＊9月2日（日）　菅生谷（徳島）　参加16名　関西支部と合同。
＊9月9日（日）　滝下の天狗塚～サガリハゲ山　参加13名。
＊10月14日（日）　沓掛山～黒森山（愛媛）　参加12名。
＊12月9日（日）　石清尾山（香川）　参加11名。
＊1月13日（日）　白猪谷～瓶ヶ森（高知）　参加7名。
＊2月23日（土）・24日（日）お亀避難小屋～西熊山（徳島）　参加8名。

＊3月10日（日）　壇山（香川）　参加13名。

《プロジェクト・地域振興活動》

＊8～3月までの毎月第4日曜日に初心者対象の登山教室を実施した。8月、1月は座学、9月、10月、11月、12月、2月は中津峰山（徳島）、五岳連山（香川）での野外講習、8月、3月は記念講演会　参加は延べ144名。

＊7月29日（日）　旧高ノ瀬避難小屋跡のゴミ収拾　参加3名。

＊9月16日（日）～17日（月）　子ども登山学校　参加55名。徳島県ボーイスカウト連盟と合同開催　徳島県三好市東祖谷菅生でキャンプ　翌17日予定の剣山登山は大雨のため中止。

＊11月18日（日）　天狗峠周辺の登山道整備　参加14名。

《広報・出版活動》

＊10月14日　四国支部会報「四国山岳創刊号」を発行。

《その他の行事・懇親会》

＊7月7日（土）　菅生ロッジで懇親会　参加10名。

＊8月26日（日）　登山教室開講記念講演会「ヒマラヤ登山から得たもの」エベレスト日本人初登頂者の関西支部松浦輝夫会員の体験談　参加60名　懇親会参加25名。

＊12月17日（土）　菅生ロッジで懇親会　参加12名。

＊1月26日（日）　登山教室の後、新年会　参加12名。

＊3月24日（日）　登山教室記念講演会「73歳のエベレスト」エベレスト女性世界最高年齢登頂者の渡邉玉枝会員の体験談参加85名　懇親会22名。

（小林　京子）

■福岡支部

《会議》

「平成24年度（2012年度）通常総会」を2012年5月19日（土）に福岡市中央区の「中央市民センター」にて開催した。支部会員数88名、出席24名、委任状40名、計64名。副島勝人支部長挨拶につづき、平成23年度事業報告、平成23年度会計報告、支部規約改正、役員改選、平成24年度事業計画、平成24年度会計予算等が審議され承認された。

新役員については以下のとおりで承認された。支部長＝中馬董人、副支部長＝高木荘輔、委員（総務）＝渡部秀樹、（会計）＝副島勝人、佐々木耕二、（支部報）＝辻和毅、倉知清司、（自然保護）＝山本博、井上晋、（事業）＝酒匂輝昌、淀川雅之、監事＝浦一美、中嶋正一、顧問＝田中昭男、深田泰三、事務局＝渡部秀樹。

総会後、記念講演として松本愛明氏「北極、南極、両極点を踏査して」を開催した。懇親会は会場を赤坂の「みくに」に移して開催され24名が出席した。

役員会は例年通り各月第2火曜日に開催した。

《プロジェクト・地域振興活動》

＊パハルフェスタｉｎ九重
２０１２年５月12日（土）・13日（日）、大分県九重山法華院温泉山荘にて岩崎元郎氏をゲストに開催した。主催＝パハルフェスタ実行委員会、後援＝日本山岳会福岡支部、東九州支部、他。参加者＝50名（福岡支部会員７名）。
＊「岳人のつどい」山の映画上映会
２０１３年２月３日（日）14～16時に開催した。映画「マナスルに立つ」を上映。映画解説は渡部秀樹氏が行なった。参加者87名（会場：太宰府市太宰府館まほろばホール。また同会場にて懇親会を開催した。参加者48名。）
＊自然観察登山「九州の熊？を訪ねて」
２０１３年３月16日（土）・17日（日）に大分宮崎県境、古祖母山、障子岳にて九州の熊の痕跡を訪ねる登山を行なった。参加者は地元の東九州支部長加藤英彦氏他２名を含めて合計22名（一般参加者数＝10名）となった。16日は、豊後大野市歴史民俗資料館高野弘之氏から、87年に捕獲された熊の剥製の前で、明治以降のクマの捕獲の記録やニホンカモシカの話を聞く。17日は、尾平越え経由で古祖母山に登山、時間の都合で障子岳へは断念した。稜線のスズダケはシカの食害で全滅状態、また立木の樹皮も食され枯木が目立ち無残な林相となっている。「熊？」に遭遇することはなかったが早春の祖母山系の楽しい登山であった。

《山行・野外活動》
＊可也山（糸島市）で福岡支部忘年山行
２０１２年１２月８日（土）に行なわれ会員17名、会員外５名の計22名が参加した。糸島富士とも呼ばれ標高は３６５ｍ。１年間３６５日の忘年にふさわしい山行であった。約４時間の登山後は芥屋の磯の屋にて忘年会も開催した。
《広報・出版活動》
＊支部報№26を２０１３年３月15日に発行した。
主な内容＝１「公益社団法人日本山岳会福岡支部をどう運営するか（支部長・中馬董人）」、２「71歳南北両極点を走破～松本愛明氏講演（高木荘輔）」、３「松本徑夫先生の蔵書について（太田五雄）」、４「古原和美先生と著書[山]80年の回想紹介（太田五雄）」、５「屋久島その後（山本博）」、６「ブータン横断の旅（渡部秀樹）」他。

（渡部　秀樹）

■北九州支部

《会議等》
＊４月28日　第13回通常総会をホテルニュータガワで開催。出席者36人、委任状提出者27人にて総会の成立が確認された。伊藤支部長の挨拶に続き、平成23年度の事業報告、収支決算

報告、監査報告が承認され、引き続き平成24年度の役員改選（案）、事業計画（案）、収支予算（案）が審議され承認可決された。

「親子でアコンカグワ挑戦」の演題で、記念講演会が行われた。講師＝当支部員・竹永計介氏（№14476）。

《委員会》

＊臨時委員会＝4月4日、4月2日。

＊定例委員会＝5月2日、7月4日、9月5日、11月7日、1月9日、3月6日。

《行事》

＊5月26日　英彦山清掃登山、21人が参加、ゴミ41袋を回収。

＊5月27日　英彦山山開き、17人が参加。

＊6月30日・7月1日　自然保護全国集会（尾瀬）、1人出席。

＊10月20・21日　全国支部懇談会（千葉支部主管）、8人出席。

＊11月4日　宮崎ウェストン祭（宮崎支部）、3人参加。

＊11月4日　広島支部十五周年記念式典およびルーム披露、8人出席。

＊11月9～11日　広島支部との交流登山（九重山群の縦走）広島支部11人　北九州支部14人参加。

＊11月17～18日　岐阜支部四十周年記念式典、1人出席。

＊12月1日　年次晩餐会（東京）、5人出席。

＊12月8日　支部「年忘れの集い」は36人出席。

《山行》

＊4月1日　皿倉山での山岳技術専科に10人参加。

＊4月15日　平尾台で岩登り教室に12人参加。

＊5月12日　皿倉山での山岳技術専科に11人参加。

＊6月1～4日　雨飾山～針ノ木雪渓に4人参加。

＊6月12日　黒岩山に16人参加る

＊7月22日　宇部興産の石灰石採掘鉱山で化石採掘体験に16人参加。

＊7月27～31日　加賀白山に9人参加。

＊8月4日　皿倉山での山岳技術専科に10人参加。

＊10月7日　大岩扇山～角埋山に16人参加。

＊11月4日　越敷岳～緩木岳縦走に3人参加。

＊12月2・3日　黒斑山に3人参加。

＊12月18日　霜降山に8人参加。

＊1月20日　英彦山　アイゼン歩行訓練に8人参加。

＊1月27～30日　栂池スキー場でのスキー合宿に6人参加。

＊2月7日～11日　伯耆大山の冬山山行に6人参加。

＊2月23・24日　九重スキー場でのスキー合宿に6人参加。

《自然環境保全事業》

九州森林管理局より委嘱を受けた森林保全巡視活動を行った。また、登山路の清掃などを行った。

《広報活動》

会員相互の情報伝達メディアとして支部報を活用するため、年4回「JAC北九だより」を発行した。

《地域貢献事業》

門司区役所からの協力要請があり、風師山～戸ノ上山を中心とした九州自然歩道の標識整備に関し、種々アドバイスや提言を行った。また，門司区役所が以前に発行した「登山ガイドマップ」の改定作業を区役所、地元の他山岳会と協力して行った。

（伊藤　久次郎）

■熊本支部

日本山岳会で新公益法人への移行問題が提起された頃から、熊本支部としても一般登山者対象の登山教室や研修会、海外登山報告会、山の写真展など、楽しい登山の普及や安全登山の啓蒙に努め、支部活動活性化を図ってきた。更に平成24年度は知的障害者の支援登山や勤労青少年の登山教室を開催し、社会貢献的事業の中で支部会員が学んだことも多かった。

《会議》

＊4月15日（日）　支部総会　熊本交通センターホテル　出席40名（委任18名）

会員数46名、支部会友の参加も多く、新公益法人移行に伴う規約改正等の審議等。

＊支部役員会　毎月第3火曜日（支部役員9名）　支部事業の企画、実施、報告検討。

《山行》

＊5月13日（日）　阿蘇の山野草観察会　北外輪山　参加26名　サクラソウ満開。

＊6月19日（土）～20日　第7回宮崎支部との交流登山　九州脊梁山地霧立越縦走　参加18名（宮崎20名）。歴史とロマンに溢れ、緑の森の命漲る霧立越での交流会は、人との出会いの素晴らしさ、心地よさを感じる山行になった。

＊8月5日（日）　第7回登山研修会　菊池渓谷の沢歩きを満喫。参加12名。

＊9月9日（日）　第9回登山教室　阿蘇南外輪山縦走　参加46名。

＊9月22日（土）・23日（日）　第4回九州脊梁トレールラン協力　参加13名。

＊10月6日（土）・7日（日）　第4回九州脊梁山脈縦走登山。参加10名。

小川岳から三方山～國見岳～白鳥山～不土野峠までの縦走を実質3年で完結。

＊11月3日（土）・4日（日）　宮崎ウェストン祭　高千穂町、祖母山　参加11名。

＊2月3日（日）　第8回登山研修会（冬山）杵島岳・往生岳　参加36名。
＊3月3日（日）　干支の山　阿蘇蛇の尾山、溶岩洞見学　参加32名。
《プロジェクト・地域振興活動》
＊4月22日（日）　・第9回森林保全巡視登山　鞍岳　参加9名。
＊10月27日（日）　・第10回森林保全登山　大金峰・小金峰　参加13名。
＊8月19日（日）　第1回スペッシャルオリンピック支援登山　鞍岳　参加44名。NPO法人「SON熊本」（スペッシャル・オリンピック熊本アスリート会）の知的障害者の皆さんとのふれあい登山。山では花に感動し根気強く登る。閉会式で、アスリートの皆さんの素直で心底からのお礼の言葉に感動、とても幸せな気持ちになった。
＊10月23日（日）　・勤労青少年ホーム健康づくり支援講座「始めよう山歩き」。座学2日　実技　俵山登山　参加33名。熊本市からの要請を受け、熊本支部が担当する。昼間の仕事疲れもあるのに、若者達の熱心な参加態度は立派だった。実技は風雨の中を登頂、皆さん満足そうだった。今後、毎年開催の要望をいただいた。
《会報》
「熊本支部報」3回発行した。目標は年4回だが中々出来ない。現在29号発行。
《その他の行事》
＊8月26日（日）夏期例会ビールパーティー　蔵元　参加26名。
＊12月9日～23日「山の写真展」（会員撮影）　セェルパ・アナン　来場者500名。
＊12月16日（日）　海外登山報告会　木曽会員の、中国西安からローマまでの1万5000km、61日間の壮大な旅の話。14ヶ国の歴史、文化、現在の様子が1度に理解できる旅の報告に感動。大いに旅心を刺激された。
＊25年度からは山の日制定運動にも取り組まなければならない。そのためには支部員自らが森づくりに取り組み、その体験から山の大切さを理解し、語らねばならない。森づくりについては何のノウハウもない熊本支部だが、まず、既に森づくりで活躍している団体の中で様々な体験を積み重ねて、本格的な活動に展開していこうと考えている。

（工藤　文昭）

■東九州支部

公益的事業としては、当支部が初めて一般の受講者を募って実際した「トレッキング入門講座」や11年目を迎える青少年体

験登山のほか、九重の山の安全を祈る集いの実施、平治岳登山道の清掃登山やミヤマキリシマ保護のための雑木除伐作業のボランティア活動参加など。共益事業では月例山行や韓国山岳会蔚山支部との交流登山などのほか合宿登山、忘年山行と忘年会などが主なものであった。これらの事業に例年にも増して多くの支部会員が参加し、公益社団法人初年度としてはおおむね意義ある1年であったといえる。

《会議》

＊支部定期総会　4月14日（土）大分市・コンパルホール（事業報告・決算報告・監査報告、事業計画・会計予算・規約改正など）出席64名（うち委任状出席31名）。

＊支部役員会

第1回　5月9日（水）年度事業計画の実施計画・韓国山岳会蔚山支部交流ほか。

第2回　6月29日（金）青少年体験登山大会の実施計画ほか。

第3回　8月22日（金）トレッキング入門講座の実施計画ほか。

第4回　10月4日（木）トレッキング入門講座の具体的実施計画ほか。

第5回　10月31日（水）トレッキング入門講座の実践講座。

第6回　11月28日（水）忘年登山と忘年会の実施ほか。

第7回　1月16日（水）平成25年度事業計画ほか。

第8回　3月8日（金）平成25年度事業計画、諸規定の整備ほか。

第9回　4月4日（木）定期総会の議案審議。

（役員会会場はいずれも大分市「コンパルホール」）

＊会計監査　日時　4月4日（木）午後2時から。

《山行・野外活動》

公益的事業

＊第11回青少年体験登山大会　7月22日（日）牧ノ戸峠から久住山　参加者64名。

＊トレッキング入門講座　一般対象　受講者38名　座学講座4回・計8時間　実践講座　1泊2日山行2回（11月17日（土）・18日（日）横岳キャンプ場と鋸山登山、12月22日（土）・23日（日）九重ヒュッテと泉水山・黒岩山及び三俣山登山）講師、支部会員10名で実施。

＊平治岳登山道清掃登山　10月21日（日）参加者13名。

＊山の安全を祈る集い　8月5日（日）久住避難小屋上の遭難慰霊碑前　参加者支部員6名。

＊大船山ミヤマキリシマ保護活動ボランティア参加　3月3日（日）参加者10名。

共益事業

＊月例山行　24年度テーマ「近県の最高峰に登ろう」で近県の

最高峰を毎月1回、その日に参加できる会員で山行を実施。月毎の実施計画や当日のリーダーは役員が毎月交代で担当。

6月22日（金）～24日（日）　高知県・徳島県　三嶺（1893・4m）・剣山（1954・7m）　参加者6名。

7月29日（金）～8月1日（月）　長崎県・普賢岳（1359・3m）　参加者12名。

8月18（土）・19日（日）　熊本県・国見岳（1738・8m）参加者6名。

9月22日（土）　福岡県・釈迦岳（1229・5m）　参加者7名。

10月14日（日）　愛媛県・石鎚山（1982m）　参加者10名。

11月3日（土）・4日（日）　合宿山行　参加者9名。

12月15日（土）・16（日）　忘年登山（稲星山、城ヶ岳、雨乞岳）。

1月13日（日）　十二支会歓迎登山会（蛇越岳）。

2月9日（土）～11日（月）　鹿児島県・韓国岳（1700・1m）　参加者7名。

3月23日（日）　佐賀県・経ヶ岳　参加者3名。

＊韓国山岳会蔚山支部との交流登山　5月24日（金）夜別府市で懇親会を実施　山行25日（土）由布岳、27日（日）鶴見岳　韓国参加者16名　支部員参加者23名。

＊合宿交歓会　10月20日（土）・21日（日）　九重・坊ガツル「あせび小屋」参加7名。

＊合宿登山　11月3日（土）4日（日）　大山（鳥取県）参加者9名。

＊忘年登山及び忘年会山行　12月15日（土）九重山系稲星山、16日（日）城ヶ岳と雨乞岳。忘年会は筋湯温泉、参加者27名。

＊支部協賛事業　ネパール・アンナプルナトレッキング実施（アンアプルナBCまで）　11月1日（月）～19日（金）　参加者6名。

《広報活動》

＊支部報発行（季刊）　57号（4月25日）、58号（7月25日）、臨時増刊号（7月25日）、59号（10月25日）、60号（1月25日）。

＊ウエブ広報　日本山岳会ホームページの支部欄に各行事など8回搭載。

（飯田　勝之）

■宮崎支部

日本山岳会が公益社団法人化されて、初年度の年であったが、宮崎支部においては、年間行事計画に基づき地道に支部活動に取り組んだ結果、一応の成果をあげることができた。しかし、高齢化に伴う会員の減少・支部活動に対す参加者の固定化、さらに若年層対策等支部活性化に向けて多くの課題が山積してい

る。これら緊々課題等を今後とも真剣に取り組み　実践して行く必要があると認められる。

《会議》

＊通常総会4月14日（土）出席73名（当日出席46名、委任状27名）。

＊役員・委員長等会議・定例登山研究会（毎月第1木曜日開催）出席延べ463名。

＊支部30周年記念事業準備委員会の開催（7月～1月5回開催出席延べ50名）。

《山行・野外活動》

＊定例山行

4月21日（土）・22日（日）　新人歓迎登山金峰山・開聞岳参加19名。

5月13日（日）　五葉岳・頭布岳　参加16名。

9月9日（土）　笠松山　参加21名。

10月20日（土）　尾鈴山　参加5名。

＊第2回ときめき宮崎の山歩き in 双石山

5月27日（日）　公募による一般参加（公益）38名・支部会員27名。

＊第6回宮崎・熊本支部交流会（宮崎支部主管）

6月9日（土）・10日（日）　霧立越（向坂山・白岩山・扇山）参加38名。

＊第15回こども登山教室（公益）

8月25日（土）～26日（日）　延岡市行縢山　参加生徒14名・会員19名。

＊第28回全国支部懇談会

10月20日（土）・21日（日）　千葉県九十九里ヶ浜（千葉支部主管）参加17名。

＊第28回宮崎ウェストン祭

11月3日（土）・4日（日）　高千穂町三秀台　参加宮崎支部23名、一般約150名。

《自然保護環境保全事業・公益》

＊宮崎支部水源の森づくり育林作業

4月1日（日）　田野の森　広葉樹捕植61本　参加4名。

9月2日（日）　田野の森　草払い　参加8名。

10月28日（日）　野尻の森　枝打ち参加5名。

3月17日（日）　田野の森　捕植、下草払い参加18名。

＊水源の森づくりをすすめる市民の会（宮崎支部団体会員）「わくわくの森Ⅲ」育林作業

7月29日（日）、8月26日（日）、9月23日（日）、11月11日（日）、1月20日（日）、3月10日（日）　参加延べ15名。

＊登山道の点検・清掃

12月8日（土）　斟鉢山～平成登山道　参加15名　危険、整備箇所等を宮崎森林管理署へ報告。

《出版・広報》

＊宮崎支部報　4月1日、7月1日、10月1日、1月1日の4回発行、各A4判・8ページ・200部。

＊支部活動写真パネル展示及び山の日制定PR（公益）

11月24日（土）・25日（日）　宮崎市中央公民館まつり会場展示　参加38名（一般参加延べ1300名）。

2月16日（土）　地域と市民活動の博覧会会場展示　参加5名（一般参加約2500名）。

（末永　軍朗）

委員会の活動報告

■公益法人運営委員会

【経緯】

平成20年12月1日、公益法人制度改革3法が施行された。日本山岳会は平成19年に同法施行令の公布により内容が明らかになった直後の6月の理事会で「公益法人化プロジェクトチーム」の設置が承認され直ちに検討を開始した。その後、公益認定等委員会事務局との打合せを進めつつ、詳細な検討結果を全国の会員に周知させるとともに総会議決を経て平成23年10月24日内閣府に対し公益認定申請を行った。その後、内閣府との折衝・補正・修正作業を終え、平成24年3月7日の公益認定等委員会での審議を経て、同委員会から内閣総理大臣への公益認定の答申がなされ、同月21日、内閣府より公益財団法人として認定する「認定書」を受領した。

それを受けて、同年4月1日、社団法人日本山岳会の解散登記及び公益社団法人日本山岳会の設立登記を行った。

【平成24年度の活動】

本年度は、公益社団法人としての初年度であり、新制度に関する諸問題を、民間公益活動の視点から検討を行うとともに、円滑な新制度への移行に向けた活動に、全力を挙げて取り組んだ。

コンプライアンスの徹底とガバナンスの確立に邁進するため新法人の発足に合わせ従来のプロジェクトチームを「法人運営適正化プロジェクトチーム」に改組し、各種規程類の整備を進めるとともに新法人では全国31支部が従来とは異なり公益社団法人日本山岳会と一体の組織であると位置付けられたため会計処理の一体化をはじめコミュニケーションの円滑化のため総務委員会と協力して支部長会議、支部事務局長会議の充実を図った。

さらに公益法人化に伴い会計処理の確実化、各種寄付の増加に対応するため、必要な規程類の制定に務めた。

これらの課題に加え、内閣府へ報告する事業計画、事業報告の精緻化、決算書類の複雑化に継続的に対応するため、下期からは「法人運営適正化プロジェクトチーム」を常設の「公益法人運営委員会」に改組し毎月2回程度の検討会を開催してきた。

【寄付の取扱い】

公益社団法人への寄付は税制面で優遇措置があり、新法人移行後は寄付の増加が予想されると同時に受け入れた寄付の取扱いにも注意を払う必要があるため「寄付受入及び管理取扱規程」を新たに設け、各

支部にも周知を図った。さらに金銭以外の土地、建物などを公益法人に寄付した場合で一定の要件を満たした場合に寄付者は非課税の扱いを受けることができる旨、租税特別措置法40条に定められている。本会が新法人に移行する直前に東海支部が「森づくり」で活動している猿投の森の隣接地を相続に伴い寄付したいとの申し出があった。関係者で検討の結果、寄付を受け入れることとし、合わせて同法の適用を受けたい旨、国税庁長官に申請した。この申請は脱税防止の観点から複雑な内容であるが、必要な経験を積むことができた。

【今後の対応】

新法人への移行初年度は関係者の努力で乗り切ることができたが、全国規模で活動している本会は新法人として対応すべき課題は山積しており、引き続き公益法人として適正な運営を進めるための活動を続けていく。

（佐野　忠則）

■総務委員会

2012年度（平成24年度）、当会は公益社団法人となった。総務委員会は、従来の活動に準じた体制で1年間活動した。その取り組みは、新生日本山岳会の変化に沿うものとなった。

通常総会は新しい定款の施行に伴って、これまで年2回の実施が1回となり、総会成立に過半数の出席者を必要とするようになった。そのため、その準備と段取りには詳細に検討した。前年の定款変更に伴う議決数確保には及ばないものの、案内状や封筒などに工夫を凝らした。

支部長会議および支部事務局担当者会議では、公益社団法人としての、公益事業・社会貢献活動の理解を求めた。また新入会員対象のオリエンテーションでは、会員として、早く組織になれてもらうため多くの新入会員の出席をよびかけた。

総務委員会の活動は日頃の管理と対処対応的な実務に加えて、年次晩餐会の開催準備に時間や労力をとられる。晩餐会は会員交流・情報交換の場として会員が集う、会員のための重要な恒例行事である。総務委員の長年の経験や知識で毎年の定例開催をこなしているが、慣例や馴れなどからくるマンネリやミスに注意をはらい、参加者に満足してもらえる集りをめざしている。

総務委員会としては、委員の硬直化、高齢化、出席率の低下が問題であるが、ホームページや新入会員オリエンテーションを通じて、新しい委員の参加を積極的に行っている。

またこれまで事務局と総務委員会との役割分担が不明瞭で、事務の円滑化を妨げ、外部からも混同されがちだったため、事務局との役割分担の明確化に着手した。

【委員会について】

委員数、13名。毎月、第1・第3の月曜日6時半より会室で委員会を開催。

【主な会務】

1　第1回支部長会議（6月16日、日本山岳会会室）　新支部長紹介（岩手＝菅原敏夫、埼玉＝大久保春美、福井＝森田信人、四国＝尾野益大、福岡＝中馬董人）。各支部の事業報告。支部への運営交付金・事業補助金支給について。

2　平成24年度通常総会（6月16日午後2時開催、主婦会館プラザエフ、出席者131名）。

3　第1回支部事務局担当者会議（7月28日・29日、31支部の事務局担当者が出席）　支部への運営交付金・事業補助金支給について。

4　全国支部懇談会開催（千葉支部）について。

5　同好会連絡会議（7月2日、25同好会の内18名出席者）。

6　新入会員オリエンテーション（10月27日、日本山岳会会室、参加者28名）。

7　第2回支部長会議（12月1日、品川プリンスホテル）　会務報告、「会計処理の手引き（寄付金処理含む）」について、来年度の全国支部懇談会会場決定（静岡支部）。

8　平成24年度年次晩餐会（12月1日、品川プリンスホテル、晩餐会出席者446名）　図書交換会。海外登山の報告、秩父宮記念山岳受賞者（小泉弘）記念講演ほか。

第2回支部事務局担当者会議（1月26日・27日、31支部の事務局担当者（1支部欠席））　26日（日本山岳会会室）会務報告。支部事業報告。会計報告書提出について。財務状況について。会計処理の手引き。平成25年度事業計画について。寄付の非課税処置と各種助成金について。公益目的事業について。27日（主婦会館プラザエフ）三百名山ガイドブック出版事業について。第29回全国支部懇談会（静岡支部）について。

【その他活動】

1　新入会員のしおり作成（新入会員入会時に配布）。

2　グッズの企画立案（アルパインスケッチクラブ会員の図案のバンダナ、新デザインの長袖シャツ）および販売。

3　常務理事の下、事務局を含め会室に蓄積されていた刊行物やチラシ、書類などの整理を行った。

（今田　明子）

■――デジタルメディア委員会

DM委員会は、インターネット利用によるJAC広報、事務連絡の支援を目的として活動している。

委員会業務は、ホームページの運用、メールマガジンの発行、および会務に関わるメールシステムの運用管理を定常的に行っている。

1　ホームページには広報を目的とし、JACの組織、歴史、また委員会、支部、及び同好会の活動紹介として、イベントの案内、報告、出版物紹介等を掲載している。また、会員専用ページを設け、活動に関わる規程や、活動要領、各種の事務書類の書式を掲載し、会務の利便を図っている。

2　メールマガジンは、ホームページでの委員会、支部等のイベント

紹介にリンクして最新情報とともに、ＪＡＣが協賛するイベントや、登山関連の有用なニュース・情報提供を目的に記事を適時発行している。

3　メールシステムは、委員会、支部、役員等にメールアカウントを準備し会務連絡の援を行っている。

（多田　真弘）

■――――YOUTH CLUB

ＹＯＵＴＨ以前の日本山岳会は「サロン」と呼ばれ、出来上がった登山者の集まりであった。地道に若手を育成してこなかったので、平均年齢が67歳まで上がってしまったのである。今後そうならないように、当委員会は自前で登山者の育成を開始した。しかし、昔と違い多様化したニーズをできる限り幅広く拾い上げなければならないが、スタッフの不足によりなかなか理想的な活動に至っていない。会内から現在の登山に適応できるリーダーとして山へ行ける会員の参加を広く求めている。

【活動】

4月7・8日　青年部馬鹿尾根倶楽部（甲斐駒・黒戸尾根）7名。

5月19・20日　●青年部越後駒ケ岳9名。

5月24・27日　青年部雪上訓練（岳沢＝棚橋、松原講師）16名参加。

6月9・10日　ワンゲル植物観察会（笹ヶ峰＝杉山、吉野講師）11名参加。

7月14～16日　●青年部（穂高～戸隠）5名参加。

8月3～5日　●青年部沢登り（黒部川赤木沢）7名参加。

8月11・21日　青年部夏山合宿（穂高＝松原、稲葉講師）17名参加。

8月25・26日　●ワンゲル夏山合宿（栂池）15名参加。

9月18・23日　青年部、ワンゲル、学生部立山・剣合宿（松原・稲葉講師）29名参加。

10月10・11日　学生部マラソン・クライミング大会（マラソン88名・クライミング21名）。

10月13・14日　青年部、学生部小川山集会（松原、棚橋講師）19名参加。

10月27・28日　ワンゲル（笹ヶ峰・黒姫山＝恩田、稲垣講師）20名参加。

11月29日　雪山入門教室机上オリエンテーション（本会＝松原講師）20名参加。

12月6日　雪山入門教室机上ロープワーク編（本会＝棚橋講師）22名参加。

12月13日　雪山入門教室机上医療編（本会＝野口講師）30名参加。

12月14日　長野県警山岳救助隊講演（本会＝櫛引講師）54名参加。

12月15日　指導委員会雪崩講習、机上医療講習（本会・佐々木講師）12名参加。

12月15・16日　学生部、青年部雪上訓練（富士山＝松原、棚橋講師）16名参加。

12月21日　雪山入門教室机上気象編（本会＝猪熊講師）36名参加。

1月12・14日　●青年部第1回山スキー講習（栂池）15名参加。

1月19・22日　指導委員会雪崩講習会（実技＝稲葉、稲垣講師）山スキー平日合宿19名参加。
1月26・27日　雪山入門教室第1回アイスクライミング（金峰山＝松原、稲葉講師）28名参加。
2月9・11日　ウィンタークライマーズミーティング（山研＝古野、萩原理事）45名参加。
2月9・11日　●青年部、ワンゲル第2回山スキー講習（梅池）16名参加。
2月16・17日　雪山入門教室第2回（八ヶ岳＝松原、稲葉講師）31名参加。
3月9・10日　雪山入門教室第3回雪洞構築（谷川岳＝棚橋、稲葉、北村講師）37名参加。
3月23・25日　●青年部第3回山スキー講習（梅池）15名参加。

＊●は個人山行、それ以外は年度初めから企画されている行事である。
＊比較的大きな物だけ取り上げたが、小規模の講習や個人山行は毎週のように実施している。
＊東海支部にも学生部、青年部があり活発に活動している。

（野澤　誠司）

■『山岳』編集委員会

岡島成行委員長（会員番号8631）の下、専門出版社勤務の経験がある担当理事の節田重節（同6720）と編集者・原邦三会員（同9080）が中心となり2012年、第107号の編集作業を進めた。

まず、表紙の紙を変更、ネパールの女性たちをモチーフに版画を制作されている塚本晴雄氏の作品を拝借して、印象を一新した。デザインは小泉弘会員（同9102）である。「記録」欄には「海外登山助成金」を受けて活動した3隊から登山記録を執筆してもらった。「調査・研究」欄には宮下啓三会員の緑爽会における講演録を再録、図らずもご遺稿となってしまったが、多くの会員から喜んでいただいた。また、2012年は日本山岳会にとって大きな節目の年だった。「公益社団法人」となった新生・日本山岳会について「報告」欄を設け、尾上会長はじめ担当理事にレポートしていただいた。

なお、昨年度の製作費総額は379万4596円であった。内訳は製作費245万7450円、発送費78万6134円、封筒代17万7900円、編集費31万5000円、その他経費5万8112円。印刷部数は5500部である。

（節田　重節）

■会報編集委員会

1　発行報告

従来どおり毎月20日に発行。各号のページ数は広告ページにあたる表4を入れて20ページ、1色。通常総会の報告を掲載する7月号のみ24ページとなった。

2

委員会メンバーについて

２０１２年４月号（８０３号）にて、編集人が神長幹雄から柏澄子に交代した。前任の神長は、２００５年６月号（７２３号）から足かけ７年にわたって担当してきた。

ほかの委員会メンバーおよび編集担当者、担当理事の異動はない。実質的な紙面編集は柏、奈良千佐子委員、節田重節担当理事、萩原浩司担当理事が携わっている。

3

編集方針など

編集人の交代により、若い登山者へ向けてアピールできるような紙面にすること、また女性の視点からなにかを表現できればよいだろうということが、前任者からの引き継ぎだった。

具体的には、日本山岳会が力をいれているＹＯＵＴＨ ＣＬＵＢや若いクライマーの記録となる海外登山基金の報告など若い登山者たちの活動について掲載した。

一方で、従来通り支部や委員会などの活動報告を充実させることの重要と考え、広く原稿が集まるよう、多方面に声がけをした。なるべくわかりやすい表現、文章、読みやすい構成を考えた。

4

２０１３年度に向けて

編集人を引き継いだときから構想している、日本山岳会の新しい財産である若さと会の長きにわたる歴史を融合させられるような紙面、住んでいる場所や年齢、登山におけるバックグランドなどに関わらず、会員達が自由に集える紙面を理想としていきたい。

そのためには、昨年度は１回も開催できなかった委員会を開催し、委員からアイディアを集め、意見交換をしたい。また広く会員からも原稿やご意見など集めたいと考えているので、これまでよりも一層会員の方々からの原稿やご意見をお待ちしている。

２０１３年４月号（８１５号）から連載を始めた「日本山岳会所蔵資料紹介」は、日本山岳会が貴重な資料や絵画を多数所有していながらも、会員がそれらを目にする機会が少ないために始めたもの。一部の資料、絵画は東京・市ヶ谷のルームに展示されているが、地方に住む会員のなかにはルームを訪問する機会がない人も多いはずだ。そういった方々にも、所蔵資料について知ってもらい、日本山岳会がこれまで歩んできた歴史の一端に触れてもらう機会となればよいと考えている。

なお、昨年度の製作費総額は９００万６９２８円であった。内訳は製作費３６９万７９５６円、発送費３３７万５６５１円、発送作業費69万８４００円、帯封代30万３７９５円、編集費79万７２１９円、その他経費13万３９０７円。製作費には50号ごとに作る総索引の製作費30万円が含まれている。毎月の平均印刷部数は５８００部である。

（柏　澄子）

■図書委員会

図書委員会は月例の委員会の中で、会報「山」の「図書紹介」コー

ナーの紹介図書の選定を行なっている。図書室に届いた新刊本の中から、会報に紹介する本と執筆者を検討、その後に執筆依頼を行なっている。会報では毎号、3冊の本を紹介するよう心がけているが、原稿の遅れやレイアウトの都合で掲載スペースが変更することもあり、会報委員会との連携が欠かせない。

また『山岳』の「図書紹介」についても、山岳編集委員会からの依頼をもとに、同様の作業を行なっている。

さらに『山岳』の巻末の横組ページに、1年間に出版された登山関連の「山岳図書目録」を掲載している。目録は1994年から毎年『山岳』に掲載しており、このような継続したリストはほかにはない貴重なものである。

イベントは、24年度は2企画のみ。

「第42回山岳図書を語る夕」　小泉弘氏が語る『装丁山、昧』　10月26日開催

ブックデザイナーの小泉弘氏は、本年度の秩父宮記念山岳賞を受賞。タイムリーであった。

「第30回図書交換会」　12月1日　年次晩餐会で開催

例年はルームで開催していたが、初めて年次晩餐会で開催。広い会場に430冊の山岳書が並んだのは圧巻であった。会場での当日の購入申込者は110名にのぼり（事前の申込者を加えると全申込者は約160名）、支部の会員も参加できる、全会員に向けたイベントとしての手応えを感じた。ちなみに残った本は15冊。

なお、毎年開催していた「山岳史懇談会」、「山を語る」などの講演会を、本年は図書交換会の準備に時間をとられて開催できなかったことは残念であった。ただ、初めての試みとして日比谷図書文化館の図書部門統括責任者を講師に招いて「図書館・図書室についての勉強会」を開催、実りの多い内容だった。今後の活動に活かしたい。

新年度からは、図書管理委員会と合併して、図書室の管理・運営も一本化して担うことになる。「図書委員会」と「図書管理委員会」の2つの委員会があることで、内外に混乱を起こして迷惑をかけていたが、これからは委員会活動がスムーズに運ぶものと期待している。

本会図書室が名実ともに実態を備えたのは1929（昭和4）年、松方三郎、藤島敏男両氏の尽力に負う。その蔵書は第2次大戦の戦火によって灰燼に帰したが、戦後再び諸先輩の努力によって拡充が図られ現在に至っている。

図書室の蔵書は日本山岳会だけではなく、山岳界全体の貴重な財産である。国内唯一の山岳専門の図書室として、よりいっそうの充実を図りたい

（三好　まき子）

■自然保護委員会

この一年は昨年4月に日本山岳会の公益社団法人化が行なわれたこともあって、それに対応し、今後の山岳会活動の中における自然保護委員会のあり方について、検討する年となった。2012年4月～2

０１３年３月まで12回開催された委員会では、活動の位置づけや、委員会の立ち位置などが議論されていく中で最終的に「自然保護委員会の活動に関して」という活動メニューをまとめることができた。新しい年度（２０１３年度）からはこのメニューをベースに「日本山岳会の自然保護活動を代表する活動」「日本山岳会自然保護活動指針をベースとした活動」「自然保護のための調査研究と情報収集」「各支部自然保護委員会の活動のとりまとめ」の４つを柱に活動を行なっていくことになる。

２０１２年４月～２０１３年３月にはほかに次のような活動が行なわれた。

【自然保護全国集会の開催】

６月30日、７月１日の二日間、「尾瀬を考える」をテーマに、自然保護に関心を持つ全国の山岳会会員や山岳関係者が戸倉の尾瀬高原ホテルに集まり開催された。１日目は東京学芸大学教授、小泉武栄氏の基調講演のあと、５つの分科会に分かれてグループ討議を行なった。テーマは「尾瀬の管理のあり方」、「尾瀬の楽しみ方」、「尾瀬の高山植物」、「尾瀬の野生動物」、「私と尾瀬」の５つ。地元、県立尾瀬高校自然環境科の学生も多く参加したなかで、活発な討議が行なわれた。

２日目はアヤメ平コース、尾瀬ヶ原コースなど４コースに分かれたフィールドスタディー。尾瀬周辺の森林の観察やアヤメ平の植生復元状況を見ることで尾瀬の現状を知ることができた。

【機関紙「木の目草の芽」の発行】

隔月刊で98号～１０３号を発行。主な内容は「尾瀬の保全に関する意見書」、自然保護全国集会、「フラワーソン北海道」の紹介、ライチョウ会議報告、埼玉自然保護シンポジウム、南アルプス水車小屋便りなど。日本山岳会の各機関、支部、支部自然保護委員会、一般の購読希望者等に送付し、さらに山岳団体、自然保護団体、マスコミなどの関係機関にも贈呈している。

【山岳写真データベース】

高山植生の昔の記録を保存するために、一般の登山者が過去に撮影した写真を集め、それをデータベース化した。あわせて、同じ場所で最新写真を撮影し、新旧写真の比較から高山帯の植生変化の実態を明らかにする活動も進めている。この活動について『岳人』とのコラボレーションが始まり、誌上で山岳写真の募集が行なわれている。

【山岳団体自然環境連絡会】

日本山岳協会、東京都山岳連盟、日本勤労者山岳連盟、ＨＡＴ―Ｊ、山のエコー、日本山岳ガイド協会、日本山岳会から自然保護の担当者が出席して、概ね月１回情報交換を行なっている。

昨年度の活動のトピックスは４月に行なった「尾瀬問題の意見書」の国への提出である。尾瀬の大部分の土地を所有している東京電力が福島第１原発事故の発生により経営危機に陥ったため、連絡会は尾瀬の環境が維持できるのか危機感を持ち、今後尾瀬を国の責任で管理運営していくことが必要との認識から、「尾瀬の土地を国有化」、「国の主導的管理について」の２点について環境大臣宛に意見書を提出した。

これに対して環境省から、話し合いの機会を持ちたいとの提案があり、7月、12月の連絡会に環境省の国立公園課課長が出席して現状の報告及び意見交換がなされた。

【その他】

10月に岐阜県で行なわれた「ライチョウ会議」に委員がパネリストとして出席。

（近藤　雅幸）

■科学委員会

各年度ごとの活動方針は特に決めていない。常に活動の基本に据えているのは、「山を科学する」精神である。

日常活動は、毎月第3木曜日にルームで開く例会だ。例外は、1月の新年会と8月の暑気払い。この2回は、市ヶ谷のルームを離れて、外の空気を吸い飲み物と食事を楽しむことにしている。暮れには、番外で近隣の低山を歩く忘年山行も行なう。

月例会では、なんでもありの話題が弾むが、やはり、メンバーからして科学の視点からの話が多くなる。題材は広く、豊富である。それを支えているのは、人材豊かなメンバーだ。委員会の名前に恥じず、メンバーの中で学者には事欠かない。各人の専門分野も多岐にわたる。太陽の黒点や電磁波に詳しいのは、地球物理学者である。火山や地質、岩石のことを質問すれば、あちこちからいろんな角度の回答が飛んでくる。氷河の研究第一人者は、愉快な語り口で皆が聞き入る。場合によっては、最新の専門的な話をメンバーに委員長からお願いすることもしばしばだ。トピックとして、原子力の安全についてレクチャーをしてもらったこともある。それがついつい、山岳地帯の放射能に話が及ぶのも、タイムリーな経験であった。自然科学、特に植物、昆虫に強いメンバーには、マダニの危険性について教わった。それもこれも、一流の学識経験者がそろっているおかげである。

【イベント】

初夏の恒例イベントは、探索山行だ。毎年、テーマを決め登山と勉強会のセットで1泊2日のバス旅行をする。12年度の目的地は、日本ジオパークに認定された磐梯山だった。6月23・24日、参加者は一般からの参加も含めて、約50人。選定場所で異なるが、今回の費用は往復の貸し切りバス代、宿泊（1泊2食）、弁当などで1人1万8000円とした。

探索山行の魅力は、単に登山で終わらせないことだ。テーマは火山。初日に磐梯山麓の火山博物館を訪ね、約120年前の山体崩壊と呼ばれたすさまじい大噴火の跡を目の当たりにしながら、副館長に解説をしてもらった。山を科学する、をまさに実感する。翌日は登山本番、好天に恵まれて全員無事に下山した。宿や講師の手配と苦労は多いが、参加者の感謝の一言で報われる。

秋になると、翌3月のフォーラム「登山を楽しくする科学」の準備が始まる。フォーラムは、新聞にも開催案内を掲載してもらうため、参加者は毎年約200人に達する。ほとんどが一般の応募である。同

じタイトルで5年目になるが、内容は多彩だ。山岳会の人材を活用し、これまでは委員会メンバー、山岳会員を講師にしてこなしてきた。

12年度は、この路線に変化を持たせた。テーマは3つに絞り、講師も皆、外部の専門家に登場してもらった。①氷河時代の生き残り、日本の高山植生　②クマと出会ったらどうする　③日本に現存する氷河を立山で確認―とテーマもバラエティに富ませた。講師は現場でバリバリと研究活動を続ける現役のプロフェッショナル、臨場感あふれる話しぶりは大好評だった。

２００人以上が入れる会場の確保だけでなく、これまでの参加者にも案内のメールを送り、会場を聴衆で埋める努力も欠かせない。毎年、終了後に実施するアンケートでも、今回は特に評価する声が高かった。やはり、フォーラムの成否はどんな魅力的なテーマと講師を選定できるかにかかっている。来年のテーマ選びが、楽しい苦労である。

探索山行も、フォーラムも、なにより励みになるのは、リピーターが多いことである。定着してきたリピーターたちに、飽きられないように、今年も知恵を絞らなければならない。そのためにも、科学委員会の課題は、高齢化するメンバーに若くて新しい頭脳とエネルギーを加えることである。

（米倉　久邦）

■――集会委員会

【方針】

集会委員会は、会員相互の交流、親睦、その中で山岳技術の習得、登山技術の向上等を目的に、「会員のお役に立つ、為になる委員会」を目指し、年間を通して、国内、海外の山行、懇話会、講習会等の行事の企画、運営を行なっています。

とりわけ中高年のため、単に山に登るだけの登山に留まらない、もう一つの価値（花、雪、温泉等々）を付け加えた「＋１（プラス・ワン）」の「山行」を企画し、終生、山を愛し、山を楽しむ会員の皆様の少しでもサポートが出来ればと、心掛けて活動しています。

今後も、集会委員会では、北アルプス、南アルプスの全山踏破や八ヶ岳、奥秩父等のシリーズ化を継続実施、スキー懇親会、登山技術講習会等も含め、多彩な行事を実施していきます。

また、全国の支部、委員会等とも行事内容によって、可能な限りコラボレーションを考えていきます。

25年度の年間行事計画は、山岳会ホームページにて4月初めにアップしております。

【活動内容】

5月　新緑と残雪のブナ林を楽しむ「信越トレイル」第2回　斑尾山―仏ケ峰―鍋倉山　2泊3日。

6月　新緑と石楠花の「奥秩父縦走」第2回（西半分）雁坂峠―甲武信岳―国師岳―金峰山　3泊4日。

9月　北アルプス縦走「白馬―栂海新道―親不知縦走」第4回　白馬―雪倉岳―朝日岳―黒岩山―坂田峠―親不知海岸　3泊4日。

10月　海外トレック「マダカスカル島トレッキング」　マダカスカル島第2の高峰ビックボビー峰（2658m）登頂と、マダカスカル島特有のキツネザル、バオバブの木、中央高地の棚田等、マダカスカル特有の自然を楽しむトレック。

紅葉山行「八ヶ岳シリーズ」第1回　1泊2日　稲子湯―本沢温泉―夏沢峠―東天狗岳―ニュウ―白駒池―麦草峠。

集会委員会研修会　1泊2日　集会委員会担当理も参加をいただき、25年度の行事予定検討。

12月　晩餐会記念山行　JAC恒例の晩餐会翌日の記念山行。愛鷹連邦「越前岳ハイキング」　尾上会長、東海支部、その他晩餐会出席の多くの支部員、会員の方々、115名の方が参加。場所柄、静岡支部に多大なご支援をいただいた。

1月　スキー&スノーシュー懇親会　戸狩温泉スキー場。　スノーシュートレックは、現地ガイドをお願いした。2泊3日。

海外トレック「ニュージーランド」　10泊11日　ニュージーランド・サザンアルプスのホックステッタードーム（2670m）、マウント・オリビエ（1933m）登頂。マウント・クックも勇姿を眺め、登頂後は、クイーンズタウン、フィヨルドのハイキングを楽しむ。

3月　登山リーダーのための救急救助講習会　第1回　日本山岳会は、高齢化が進んでおり、引率する側、参加される側とも高齢者になっており、山の技術はいずれも問題はないと考えますが、救急救助に関するスキルは、現実には遭遇する機会は少なく、過去に勉強していても身についていない、忘れてしまっています。そこでこの度、第1回として座学で総括的な講話を医療委員会の悳　秀彦会員にお願いした。第2回を6月に実技編として計画中。

右記月別行事以外に、毎月第1水曜日、ルームにて集会委員会の月例ミーティングを担当理事にご出席いただきき実施しております。なお、各行事の詳細は、山岳会ホームページの集会委員会をヒットしてください。

（下河辺　史郎）

■山岳研究所運営委員会

山研運営委員会は、毎月第2火曜日夜に市ヶ谷のルームで開催される定例ミーティングと4月下旬～11月中旬の上高地開山期間中に「山研」をベースに展開する建物設備の維持管理、会員サービス業務およびミニ水力発電小委員会と連携した自然エネルギー利用研究などを活動の柱としている。

本稿では、自然エネルギー利用の一環として、2012年5月に山研地下談話室に導入したミニ水力発電の電力を利用した照明設備の設置工事について報告する。山研裏手の善六沢の水流を利用したミニ水力発電の実用化研究については、過去の会報などでも報告され、既知のとおりであるが、取水口のゴミ詰まり対策からバッテリーの充・放

写真１　施工前

写真２　施工後

電制御、負荷制御など、これまでの研究成果により、安定した電力が得られる段階、すなわち実用化のレベルに達している。

発電した電力を有効に利用すべく、これまでにも地下の廊下やトイレの照明、換気扇等への電源として供給できるよう工事を行ってきたが、地下資料室の談話室への用途変更を機に照度アップとミニ水力発電のＰＲを兼ねて室内の照明設備を一新することとした。もちろん、電源はすべてミニ水力発電の電力を使用する。

照明器具の選定にあたっては省電力なＨｆタイプの蛍光灯、電球型蛍光灯およびＬＥＤを候補に挙げ委員会内で検討を重ねた結果、落ち着いた雰囲気を演出し、且つ環境問題の取り組みもＰＲできるダウンライト方式のＬＥＤを採用した。

工事は設計から施工まですべて自前、電気配線については電気工事士の資格を持つ委員が作業に当たった。余談であるが山研運営委員会の関係者は、なぜか本職で建築関係をしている人、水回り設備の仕事をしている人、電気・通信関係の仕事をしている人等が揃っており、大抵の設備工事、メンテナンス作業および設備トラブルに自前で対応できる強みがある。

施行は5月1日～2日にミニ水力委員、山研管理人の協力を得て実施。器具取付け位置の墨出しから取付け穴の開口、天井内配線、15台の器具取付け、試験点灯まで2日間で完了させた。写真1は施工前（商用電源のスポットライトと電球型蛍光灯が点灯）、写真2は施工後（ミニ水力ＬＥＤが点灯）を撮影したものである。従来は、商用電源でスポットライト（１００Ｗ×４個）と電球型蛍光灯（約17Ｗ×４個）を点灯させていたが、本工事により談話室すべての照明をミニ水力発電の電力で点灯するＬＥＤ（約８Ｗ×15個）に置き換えることができた。実用的には商用電源の照明と比較し同等の照度を確保、研究の成果が視覚的にアピールでき山研利用者へのＰＲ効果も高いことから、今後は1階食堂をはじめ全館への設置工事を進める予定である。

（柴山　信夫）

＊24年度の「委員会の活動報告」は初めての試みであり、すべての委員会を網羅できず、限られた委員会の報告となりました。

＊図書委員会と図書管理委員会は昨年末に合併し、新たな活動を展開しています。

槍ヶ岳とともに－穂苅家三代と山荘物語	菊地俊朗	信濃毎日新聞社	1000	四六判	207p
雪のチングルマ　※新装版	新田次郎	文藝春秋	648	文庫判	648p
雪山登山	野村　仁	山と溪谷社	1980	A5	247p
雪山放浪記	星野秀樹	山と溪谷社	2200	四六判	271p
よくわかる新田次郎	山と溪谷社/編	山と溪谷社	1800	A5	221p
呼ぶ山－夢枕獏山岳短篇集　※小説	夢枕　獏	メディアファクトリー	1700	四六判	345p
よみがえる富士山測候所2005～2011	土器屋由紀子・佐々木一哉	成山堂書店	1800	四六判	180p
4歳からはじめる親子トレッキング	関　良一	旬報社	1400	A5	159p
【ら】					
利尻 花登山	渡辺敏哉	北海道新聞社	1300	四六判	159p
レンズが撮らえたF・ベアトの幕末	F・ベアト/著　小沢健志・高橋則英/監	山川出版社	1600	A5	221p
65歳から登った関西・近畿百名山	小林昭生	奈良新聞社	2400	A5	402p
六甲山	山と溪谷社/編	山と溪谷社	1500	A5	143p
【わ】					
わくわく登る福井の50山	柚本寿二	北國新聞社	2400	B5	175p
私の山道具2	山と溪谷社/編	山と溪谷社	1500	A5	127p
ワンゲルガイドブックス03 東京周辺の山	山と溪谷社/編	山と溪谷社	2000	A5	222p
ワンゲルガイドブックス05 八ケ岳	山と溪谷社/編	山と溪谷社	1900	A5	207p
ワンゲルガイドブックス06 南アルプス	山と溪谷社/編	山と溪谷社	2000	A5	213p
ワンゲルガイドブックス09 雪山エントリーコース	山と溪谷社/編	山と溪谷社	2000	A5	201p

山・音・色	ＫＩＫＩ・野口かさね	山と溪谷社	1500	Ａ５変	159p
ヤマケイ文庫　凍る体 低体温症の恐怖	舟木上総	山と溪谷社	800	文庫判	254p
ヤマケイ文庫　処女峰アンナプルナ	モーリス・エルゾーグ/著　近藤　等/訳	山と溪谷社	1000	文庫判	377p
ヤマケイ文庫　ソロ 単独登攀者山野井泰史	丸山直樹	山と溪谷社	950	文庫判	381p
ヤマケイ文庫　タベイさん、頂上だよ	田部井淳子	山と溪谷社	880	文庫判	301p
ヤマケイ文庫　ドキュメント生還	羽根田治	山と溪谷社	880	文庫判	301p
ヤマケイ文庫　トムラウシ山遭難はなぜ起きたのか	羽根田治・飯田肇・金田正樹・山本正嘉	山と溪谷社	950	文庫判	365p
ヤマケイ文庫　新田次郎 山の歳時記	新田次郎	山と溪谷社	880	文庫判	317p
ヤマケイ文庫　日本人の冒険と「創造的な登山」	本多勝一	山と溪谷社	880	文庫判	382p
ヤマケイ文庫　森の聖者 自然保護の父ジョン・ミューア	加藤則芳	山と溪谷社	880	文庫判	378p
ヤマケイ文庫　山なんて嫌いだった	市毛良枝	山と溪谷社	880	文庫判	286p
ヤマケイ文庫　遊歩大全	コリン・フレッチャー/著　芦沢一洋/訳	山と溪谷社	2200	文庫判	974p
山テントで、わっしょい！	鈴木みき	講談社	1200	A5	158p
山と写真	野口かさね	実業之日本社	1200	A5	77p
山と山小屋 週末に行きたい１７軒	小林百合子	平凡社	1500	四六判	151p
山に登った虫たち	信州大学山岳科学総合研究所/編	オフィス EMU	980	A5	121p
山に登って考える	大野剛義	幻冬舎	2100	B5	123p
山の「あれなに」図鑑	小泉武栄/監	山と溪谷社	1300	四六判	144p
山の人生－マタギの村から	根深　誠	中央公論新社	860	文庫判	307p
山の単語帳	田部井淳子/著　栗田貞多男/写真	世界文化社	1800	A5	191p
山の地図帳	神崎忠男	成美堂出版	1100	A5	127p
山登り 365 日	山と溪谷社/編	山と溪谷社	2500	A5	319p
山登りを始めたくなったら読む本	岩崎元郎/文　中尾雄吉/絵	山と溪谷社	952	新書判	206p
山は快晴	川北秀樹	文芸社	1400	四六判	287p
山はどうしてできるのか	藤岡換太郎	講談社	880	新書判	238p
山ふたたび	渡辺ひろみ	白山書房	1600	四六判	155p
山ふたり－中央・南アルプスほか編	三輪敏広・三輪和恵	春風社	2380	A5	340p
山へ登ろう。いろんな山へ－子どもたちへの深田久弥のメッセージ	勝尾金弥	桂書房	1800	四六判	287p
山々を滑る登る	熊谷　樋	白山書房	1900	四六判	319p
山をはしる	井賀　孝	亜紀書房	2500	四六判	343p

ヒマラヤを越える子供たち	マリア・ブルーメンクローン/著　堀込＝ゲッテ由子/訳	小学館	1900	四六判	355p
評伝 今西錦司	本田靖春	岩波書店	1160	文庫判	354p
風景遺産富士山 〈上撰〉写真集 ※写真集	ブティック社/編	ブティック社	3500	A4	191p
ふくしまの自然林	樫村利道	歴史春秋社	1200	四六判	180p
富士山	JTB パブリッシング/編	JTB パブリッシング	1500	A5	159p
富士山頂　新装版 ※小説	新田次郎	文藝春秋	560	文庫判	258p
富士山登頂ガイド	枻出版社/編	枻出版社	900	B5	127p
富士山に登った外国人－幕末・明治の山旅	山本秀峰/編・訳　村野克明/訳	露蘭堂	3400	A5	247p
富士山ハイキング案内	伊藤フミヒロ	東京新聞	1525	A5	175p
富士日記 ※写真集	山下茂樹	求龍堂	2800	220 × 310	63p
ブナの森の湖沼群－白神山地・十二湖の水生生物を探る	大高明史	弘前大学出版会	650	A5	94p
ぶらりあるき天空のネパール	ウイリアムス春美	芙蓉書房出版	1800	四六判	181p
フリークライミングのススメ	北山　真	山と溪谷社	1000	新書判	238p
放射線と登山道	野口邦和/監　日本勤労者山岳連盟/編	桐書房	600	A5	79p
北壁の七人－カンチェンジュンガ無酸素登頂記	小西政継	中央公論新社	860	文庫判	323p
北海道きのこ図鑑 ※新装改版	高橋郁雄	亜璃西社	2800	A5	363p
北海道山菜図鑑 ※改訂新版	佐藤孝夫・計良智子	亜璃西社	2800	A5	271p
北海道登山史年表 1871～2012	高澤光雄/編	北海道出版企画センター	500	A5	45p
北海道夏山ガイド４ 日高山脈の山々 ※最新第２版	梅沢　俊	北海道新聞社	2300	四六判	275p
北海道夏山ガイド６ 道東・道北・増毛の山々 ※最新第２版	梅沢　俊・菅原靖彦	北海道新聞社	2300	四六判	323p
本多勝一、探検的人生を語る	本多勝一	新日本出版社	1500	四六判	220p
【ま】					
マウンテン・ギアブランド大全	枻出版社/編	枻出版社	1300	A4	199p
Mt.Fuji カムナビノヤマ ※写真集	大山行男	野草社	2000	B4	44p
松葉杖で歩く世界の山	島津俊樹	白山書房	1600	四六判	270p
学べる！山歩きの地図読み	佐々木　亨	山と溪谷社	1500	A5	111p
まるごと！高尾山こだわりガイド	スタジオパラム/編	メイツ出版	1600	A5	128p
未踏の南極ドームを探る	上田　豊	成山堂書店	2200	四六判	238p
みんなの山道具	枻出版社/編	枻出版社	900	A4	144p
むかしの山旅	今福龍太	河出書房新社	760	文庫判	304p
もっと行きたい！東京近郊ゆる登山	西野淑子	実業之日本社	1200	A5	125p
【や】					
屋久島	山と溪谷社/編	山と溪谷社	1900	A5	215p
屋久島トレッキングガイド	枻出版社/編	枻出版社	1000	B5	128p
八ケ岳トレッキングガイド	枻出版社/編	枻出版社	1200	B5	144p

筑波山と山岳信仰　※改訂新版	西海賢二	崙書房出版	580	新書判	169p
低体温症サバイバル・ハンドブック	栗栖　茜	海山社	470	128 × 100	42p
転倒・滑落しない歩行技術	野村　仁	山と溪谷社	960	新書判	182p
テントで山に登ってみよう	宮川　哲	山と溪谷社	960	新書判	223p
東京「消えた山」発掘散歩	川副秀樹	言視舎	1600	A5	191p
東京近郊トレッキングＢＥＳＴコースガイド	昭文社/編	昭文社	1200	A5	143p
ドキュメント 単独行遭難	羽根田治	山と溪谷社	1600	四六判	221p
栃木百名山ガイドブック　※改定新版	栃木県山岳連盟	下野新聞社	1900	A5	223p
とっておきの高尾山	揺籃社/編	揺籃社	700	A5	63p
富山 地学紀行	藤囲会	桂書房	2200	A5	315p
【な】					
長崎から江戸へ－1861年日本内地の旅行記録	ラザフォード・オールコック/著　チャールズ・ワーグマン/画　山本秀峰/編・訳	露蘭堂	3000	A5	153p
ニッポンの山里	池内　紀	山と溪谷社	1500	四六判	254p
日本人は、なぜ富士山が好きか	竹谷靱負	祥伝社	800	新書判	252p
日本南極探検隊長 白瀬矗	井上正鉄	成山堂書店	2200	四六判	169p
日本100岩場　1　北海道・東北　※増補改訂版	北山　真	山と溪谷社	2000	A5	159p
日本100岩場　3　伊豆・甲信　※増補改訂新版	北山　真	山と溪谷社	2300	A5	208p
日本百名山データBOOK	枻出版社/編	枻出版社	1200	B5	167p
日本百名山を眺めて歩くベストコース30	武村岳男	山と溪谷社	1900	A5	158p
登る、比良山	草川啓三	ナカニシヤ出版	1800	A5	162p
野村直吉船長航海記－南極探検船「開南丸」	野村直吉/著　野村直吉船長航海記出版委員会/編	成山堂書店	3000	A5	181p
【は】					
ハイキングと立ち寄り湯　関東周辺55コース	石丸哲也	山と溪谷社	1800	A5	127p
白山山系の渓流釣り	柚木寿二	北國新聞社	1800	B5	145p
初めての男体山	鈴木栄次	下野新聞社	1000	A5	159p
80歳。山はまだ卒業できない	原　幸多	風人社	1500	四六判	206p
発見！九州の滝　3	熊本広志	海鳥社	1800	A5	167p
バテない体をつくる登山エクササイズ	大森義彦/監	誠文堂新光社	1800	A5	223p
花あるき アポイ岳・えりも	駒井千恵子	北海道新聞社	1300	A5	95p
花の百名山登山ガイド　上	山と溪谷社/編	山と溪谷社	2200	A5	190p
花の百名山登山ガイド　下	山と溪谷社/編	山と溪谷社	2200	A5	191p
花をめぐる九州の山歩き	宮本文雄・宮本恵子	西日本新聞社	1500	A5	165p
バリエーションハイキング	松浦隆康	新ハイキング社	1900	A5	392p
日帰り名山100	枻出版社/編	枻出版社	900	B5	127p
東丹沢登山詳細図	守屋益男・守屋二郎	吉備人出版	900	230 × 114	1p
ヒマラヤの風にのって	吉村達也	角川書店	1500	四六判	223p

信州トレイルを歩こう！公式ガイドブック　※改訂判	信州トレイルクラブ/編	オフィス EMU	1300	四六判	131p
信念 東浦奈良男	吉田智彦	山と溪谷社	1500	A5	223p
神秘の大地、アルナチャル	水野一晴	昭和堂	3400	A5	211p
スイス－歩いて楽しむアルプス絶景ルート	スイス政府観光局	ダイヤモンド・ビッグ社	1500	A5	143p
垂壁のかなたへ	スティーヴ・ハウス/著　海津正彦/訳	白水社	2900	四六判	389p
図説 日本の山	小泉武栄	朝倉書店	4000	B5	166p
生死－縞枯山 2403m　※写真集	八木祥光	アイノア	1500	A4	48p
世界の「富士山」	田代　博	新日本出版社	1600	四六判	190p
世界のワンダー富士山 50　※写真集	渋川育由	河出書房新社	1400	B5	80p
絶対に行きたい！世界の名山	アフロ	中経出版	680	文庫判	223p
全国ご利益登山ガイド	世界文化社/編	世界文化社	1600	A5	192p
全国ベストトレイル　上	アウトドア出版部/編	山と溪谷社	2000	A5	221p
全国ベストトレイル　下	アウトドア出版部/編	山と溪谷社	2000	A5	221p
操山・半田山・楢津山・矢坂山登山詳細図全 72 コース	守屋益男/編	吉備人出版	525	230 × 110	1p
装丁山昧	小泉　弘	山と溪谷社	2400	A5	154p
【た】					
大河紀行 荒川	伊佐九三四郎	白山書房	2000	A5	218p
醍醐百名山 随筆	鈴木三郎	筑波書林	1429	A5	211p
大地と祈り　※写真集	関谷義樹	ドン・ボスコ社	1300	190 × 270	45p
高尾山 おもしろ百科	遠藤　進	揺籃社	953	新書判	64p
高尾山 花手帖	黒木昭三	けやき出版	1300	四六判	215p
高尾山 野鳥観察史	清水徹男	けやき出版	1500	A5	277p
高尾・陣馬・奥多摩をあるく	JTB パブリッシング/編	JTB パブリッシング	1500	A5	191p
高尾・陣馬・中央線日帰り山あるき	桑子　登	実業之日本社	1500	A5	127p
竹澤長衛物語	松尾　修	山と溪谷社	1800	四六判	333p
愉しき山旅	高澤光雄	北海道出版企画センター	2300	四六判	206p
楽しもう 能登の山	柚本寿二	北國新聞社	1600	A5	149p
多摩川 自然めぐり	藤原裕二	けやき出版	1500	A5	231p
探検家、36 歳の憂鬱	角幡唯介	文藝春秋	1250	四六判	237p
丹沢の自然図鑑	山口喜盛	メイツ出版	1800	A5	183p
丹沢山紀行	菅原信夫	白山書房	1600	A5	208p
千曲川源流紀行	寺田和雄/編	茗溪堂	1400	四六判	205p
チベット学問僧として生きた日本人－多田等観の生涯	高木康子	芙蓉書房出版	1800	四六判	173p
チベット高原の片隅で	阿部治平	連合出版	2200	四六判	318p
中高年のための安全登山のすすめ	八嶋　寛	河北新報出版センター	800	四六判	224p
中国・四国の山	岡本良治・石川道夫	山と溪谷社	2400	A5	224p
地理の目で歩くスイス・アルプス	坂本英夫	ナカニシヤ出版	1500	A5	179p

霧満ち、光溢れる大台ケ原　※写真集	河本　禎	光村推古書院	2500	230 × 250	95p
空白の五マイル	角幡唯介	集英社	600	文庫判	318p
群馬の山歩き 130 選	上毛新聞社/編	上毛新聞社	1000	四六判	265p
原寸大　見分ける低山の花 100	新井和也	山と溪谷社	1000	新書判	111p
厳冬期の岩木山	三浦章男	水星舎	2000	218 × 216	95p
高山植物の基本	新井和也	枻出版社	950	四六判	125p
神戸・六甲山の樹木ハンドブック	清水孝之	ほおずき書籍星雲社/発売	2400	四六判	352p
口訳　白山行程記－幕末の白山登山紀行	天方彝之助/原著 村井加代子/著	能登印刷出版部	2400	B5	178p
小島烏水 山の風流使者伝　上	近藤信行	平凡社	1500	HL 判	338p
50 歳からはじめる山歩きの教科書	石川弘行	滋慶出版　土屋書店/発売	1480	A5	143p
古道　古甲州道・古富士道－大菩薩峠を越えた古道	府川公広	揺籃社	1000	A5	128p
子どもと楽しむ山歩き	上田泰正	山と溪谷社	1600	A5	160p
【さ】					
最後の辺境 チベットのアルプス	中村　保	東京新聞	2857	A5	479p
山岳気象の基礎知識	山岳気象研究会	枻出版社	950	四六判	125p
山岳讃歌　新装版　※水墨画集	打矢悳水	日貿出版社	2500	A4	103p
山岳読図シミュレーションBOOK	枻出版社/編	枻出版社	1200	B5	128p
山岳を描く	日貿出版社/編	日貿出版社	2800	A4	119p
山行	槇　有恒	中央公論新社	940	文庫判	372p
山中暦日－辻まことアンソロジー	辻　まこと	未知谷	2000	四六判	190p
山頂への道	山口耀久	平凡社	1400	HL 判	361p
シェルパ斉藤の世界 10 大トレイル紀行	斉藤政喜	山と溪谷社	1600	A5	254p
滋賀の山野に咲く花 700 種	澁谷義行	サンライズ出版	2400	A5	249p
四季折々の山　※写真集	山岳写真同人四季	東京新聞	2800	250 × 242	72p
縦走路　改版　※小説	新田次郎	新潮社	490	文庫判	245p
小説に書けなかった自伝	新田次郎	新潮社	550	文庫判	289p
植物地理の自然史	植田邦彦	北海道大学出版会	2600	A5	200p
諸国名峰恋慕	手塚宗求	山と溪谷社	1700	四六判	245p
白神自然観察園のきのこ 1	弘前大学白神自然環境研究所	弘前大学出版会	750	四六判	32p
白神自然観察園の動物 2	弘前大学白神自然環境研究所	弘前大学出版会	600	四六判	26p
知られざる世界への挑戦―航海・探検・漂流を記した書物百選	京都外国語大学附属図書館/編	雄松堂書店	2000	A4	231p
白きたおやかな峰	北　杜夫	河出書房新社	850	文庫判	336p
新・秋山紀行	白水　智/編	高志書院	2500	A5	245p
信州トレイルと加藤則芳	信州トレイルクラブ/編	オフィス EMU	1200	A5	99p

浅間	堤　隆	ほおずき書籍 星雲社/発売	1500	A5	200p
安心登山の技法	洞井孝雄	東京新聞	1500	A5	287p
飯綱山登山道－植物ふしぎウォッチング	市川伸人	信濃毎日新聞社	1500	四六判	283p
イエティ	根深　誠	山と溪谷社	2000	四六判	325p
イラスト・クライミング ※増補改訂新版	阿部亮樹/著　岳人/監	東京新聞	2200	B5	238p
梅棹忠夫「知の探検家」の思想と生涯	山本紀夫	中央公論新社	820	新書判	234p
ウルトラライトハイキングギア	寺澤英明	山と溪谷社	1500	A5	279p
麗しき花咲く大地	福山孟治	白山書房	1600	B5	175p
エベレスト・南極・パタゴニア ※写真集	種村雄吉	渡辺出版	3600	240 × 310	110p
大谷探検隊研究の新たな地平	白須浄真	勉誠出版	8000	A5	422p
【か】					
風を踏む－小説『日本アルプス縦断記』	正津　勉	アーツアンドクラフツ	1400	四六判	157p
月山 山菜の記	芳賀竹志	崙書房出版	2000	A5	252p
上高地の野鳥	前田篤史	ほおずき書籍 星雲社/発売	1286	A5	96p
カメラをつれて山へ行こう！	矢島慎一	技術評論社	1280	四六判	159p
カラコルム ヒマラヤ 大星夜 ※写真集	藤田弘基	誠文堂新光社	3200	230 × 310	120p
関西から行くゆる登山	ブルーガイド編集部	実業之日本社	1300	A5	125p
関西周辺 週末の山登りベスト120	加藤芳樹	山と溪谷社	1900	A5	255p
関西周辺 登山口ガイド　下	全国登山口調査会	神戸新聞総合出版センター	1800	A5	229p
関西トレッキング BEST コースガイド	昭文社/編	昭文社	1200	A5	143p
関東周辺 週末の山登りベスト120	石丸哲也	山と溪谷社	2200	A5	271p
関東周辺 やまなみ歩き	坂本　勇・中崎高志・上野和夫・遠藤明彦	新ハイキング社	1800	A5	348p
関東 女子の山歩き	ぱらむ	メイツ出版	1600	A5	128p
北アルプス テントを背中に山の旅へ	高橋庄太郎	枻出版社	1400	A5	207p
北アルプスの渓谷をゆく	菊地俊朗/文　日本山岳写真協会松本・北陸支部ほか/写真	信濃毎日新聞社	2000	A4	151p
北の花 名山ガイド	梅沢　俊	北海道新聞社	1800	A5	239p
気分爽快 加賀の25山・25湯	柚本寿二	北國新聞社	1800	B5	141p
気分爽快 富山の25山・25湯	柚本寿二	北國新聞社	1800	B5	141p
九州の山岳	渡邉智倶人	海鳥社	2100	A5	371p
今日からはじめる山歩き	JTB パブリッシング/編	JTB パブリッシング	1300	A5	159p
極限の雪原を越えて－わが南極遊記	木崎甲子郎	成山堂書店	2200	四六判	185p

山岳図書目録（2012 年）

日本山岳会図書委員会

本目録を初めて掲載したのは『山岳』第 89 年（1994 年）です。1992 年と 1993 年に出版された山岳関連書籍を掲載しました。日本語の本だけではなく、1991 年からの英語、ドイツ語、フランス語、イタリア語、スペイン語の本の目録も合わせて掲載する充実ぶりでした。

翌年号からは日本語、英語、ドイツ語、フランス語の目録を毎年掲載してきましたが、第 92 年（1997 年）をもってドイツ語とフランス語、翌第 93 年（1998 年）で英語の目録の掲載を終了しました。正直なところ、息切れと言わざるを得ませんでした。

しかし、日本語の山岳関連書籍については、毎年掲載して今に至っています。19 年間に 20 年分、約 6700 冊（洋書は 7 年間，1100 冊）の本をリストアップしました。

「登山」はさまざまな側面を持っています。「地理」「歴史」「自然科学」「スポーツ」「文学」「芸術」など、多様な視点から語られ、記録され、そして分類されています。そのため目録作成には広い範囲の情報に気を配る必要があります。また、記載した本のすべての現物にあたったわけではないので、リスト漏れや情報の誤りがあるかもしれません。

しかし、このような継続した目録は、ほかにはない貴重な情報です。例えば「百名山」や「山ガール」などのブームが起きると、その前後の時期は関連図書が多く出版されますし、「世界遺産」の登録とその地域の案内書の出版点数にも密接な関係があります。ムックや写真集の出版点数、本の判型なども、大きな流れの中で俯瞰すると、変化や流行があることに気づかされます。

この機会に、過去の『山岳』に掲載された「山岳図書目録」をあらためて開いてみて下さい。この 20 年間の山の世界の変化を、本の世界から感じ取ってもらえることでしょう。

＊判型が数字で表示されているものの単位は mm（天地×左右）、価格は原則として本体価格ですが、ごく一部税込みになっています。

山岳図書目録

書　名	著者名	発行所	価格	判型	ページ数
【あ】					
アグルーカの行方	角幡唯介	集英社	1800	四六判	401p
あこがれの名山 のんびり山あるき山小屋ガイド	中田真二	学研パブリッシング	1900	B5	207p
あこがれの名山 マイカーでらくらく山あるき	中田真二	学研パブリッシング	1900	B5	239p

― 掲載広告一覧 ―

カモシカスポーツ（表２）
山と溪谷社
㈱モンベル
アルパインツアーサービス㈱
アライテント
早月小屋
槍ヶ岳山荘ほか
雷鳥沢ヒュッテ・ロッジ立山連峰
立山室堂山荘
㈱好日山荘
カシオ＜ PRO TREK ＞
キャラバン
㈱アトラストレック（表３）

オールカラーでたどる世界の登山史決定版

英国山岳会・英国王立地理学協会／ドーリング・キンダスリー社編

世界の山岳大百科

氷河時代の〝アイスマン〟から、アルプス初登頂、ヒマラヤ8000メートル峰征服の黄金時代を経て、現代のエクストリーム・クライマーにいたる登山家たちの物語。英国山岳会・王立地理学協会所蔵の豊富な視覚素材を駆使し、人と山が織りなす壮大なドラマを描き出す。

池田常道［監修］　倉橋俊介・後藤泰子・三浦和子［翻訳］

●B4 変型判（301×251mm）／上製かがり綴
オールカラー 360 ページ　●定価 9,800 円＋税

■内容

第Ⅰ章　初期の登山者：アイスマン“エッツィ”、ハンニバル、空海、ペトラルカほか／**第Ⅱ章　科学と芸術のための登山：**ド・ソシュール、ターナー、ラスキンほか／**第Ⅲ章　登山の黄金時代：**アルマー、ティンダル、ウィンパー、ママリーほか／**第Ⅳ章　アルプスを越えて：**コンウェイ、アブルッツィ公、槙有恒ほか／**第Ⅴ章　巨峰の征服：**ヤングハズバンド、マロリー、メルクル、ティルマンとシプトン、エルゾーグとラシュナル、ブール、ディームベルガー、ヒラリー、クジーとテレイほか／**第Ⅵ章　極限を求めて：**コミチ、カシン、ボナッティ、ボニントン、シュイナード、メスナー、ककचिका、ワンダ・ルトキェヴィッチ、クルティカ、マッキンタイア、ロレタン、ファウラー、ハウス、ギリギリボーイズほか（全 97 項、130 人以上を収録）

●山の肖像　モン・ブラン、マッターホルン、エヴェレストなど 6 山　**●山の生活**　プエブロ族、パンディット、シェルパなど 6 項　**●登山用具の革新**　ロープ、ピッケル、クランポン、地図など6項　**●山の体験**　詩、写真、映画、ベストセラーなど 5 項

山と溪谷社

〒102-0073　東京都千代田区九段北 3-2-11　住友不動産九段北ビル 8 階
電話 03-6744-1904 ／ファクス　03-6744-6095　http://www.yamakei.co.jp

軽さと強度の両立

アルパインパック

抜群のフィット感と絶妙な重量バランスで、安定した背負い心地を実現した大容量パック。
デザイン・縫製方法から素材の選定にいたるまで徹底的にこだわり、軽さと強度を両立しました。
背中に合わせてカーブを調整できる超軽量フレームが体の動きに追従し、抜群のフィット感を生み出します。
生地の切り替えが少ないフラットな表面は防滴性に貢献し、スリムなシルエットは狭い山道でも快適です。

#1223323 アルパインパック50 ¥14,800(税込) 容量：50L／重量：1.62kg／カラー：SHAD・HONEY・EVGN
#1223325 アルパインパック60 ¥15,700(税込) 容量：60L／重量：1.65kg／カラー：CNBL・OGBR・EVGN

※女性や小柄な方に対応するショートレングスモデルもご用意しております。

株式会社モンベル 【お問い合わせ】モンベル・カスタマー・サービス 0088-22-0031／TEL.06-6536-5740
※フリーコールは携帯・IP電話からはご利用いただけません。

www.montbell.jp

オリジナルツアーを企画してみませんか。

山岳会、ハイキング･クラブ、山のお仲間などで企画するオーダーメイドの山旅を承ります。ぜひ、お気軽にお申し付けください。

山旅の出張説明会も承ります。

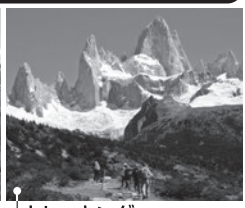
山のお仲間がお集まりの時に、世界の山旅に精通したスタッフが資料や映像をお持ちして皆さまの元へご説明にお伺いします。

ツアーカタログをご請求ください。

世界中の山旅を掲載したカタログを無料でお送りいたします。お電話またはEメールにてお気軽にお申し付けください。ホームページでも最新のツアー情報をご覧いただけます。

世界の山旅･辺境の旅を手がけて44年の実績

日帰りハイキング


トレッキング

登頂ツアー

ネイチャリングツアー

旅行企画・実施

観光庁長官登録旅行業第490号/一般社団法人 日本旅行業協会 正会員

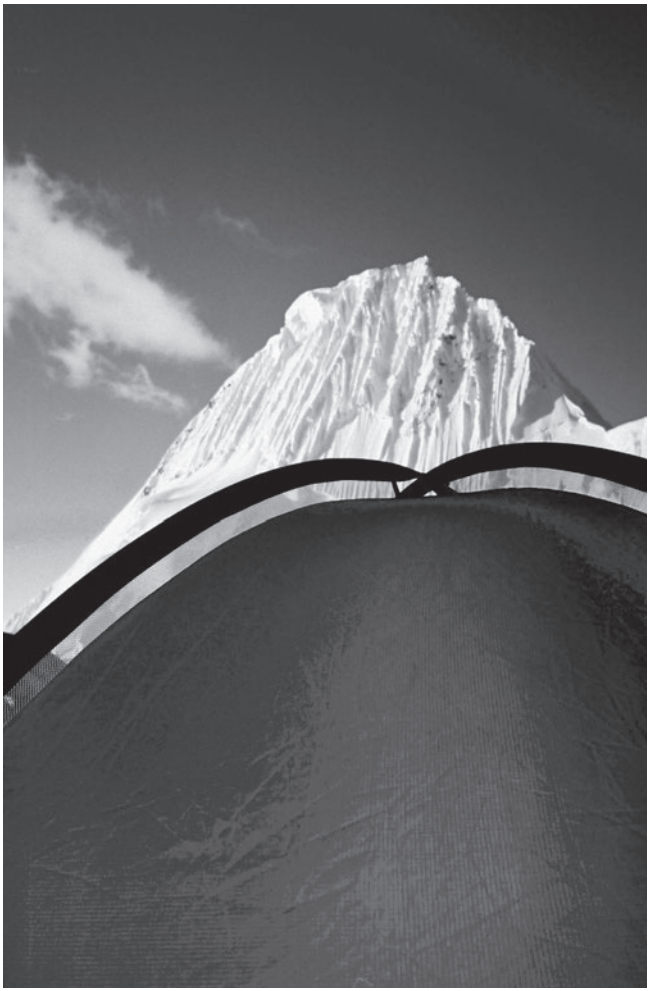
アルパイン ツアー サービス 株式会社

本社／〒105-0003 東京都港区西新橋2-8-11（第7東洋海事ビル4階）

東京/☎03(3503)1911　大阪/☎06(6444)3033
名古屋/☎052(581)3211　福岡/☎092(715)1557
札幌/☎011(711)7106 ((株)りんゆう観光)　仙台/☎022(265)4611(転送)
広島/☎082(542)1660(転送)

アルパインツアー 検索　ツアーカタログをご請求ください。

HP www.alpine-tour.com　info@alpine-tour.com



アルパマヨ西南壁　佐藤嘉彦

ウラヤマでも、ヒマラヤでも

Made in JAPAN

ARAI TENT

www.arai-tent.co.jp | 04-2944-5855

◆ 馬場島から一直線 早月尾根は立派な立山杉や多くのお花も楽しめる尾根で、花の百名山にも載っています。

早月小屋

[シーズン中] TEL.090-7740-9233
[メール予約可] hayatsuki@ma.net3-tv.net

http://www.net3-tv.net/~hayatsuki/ 〒930-1406 富山県中新川郡立山町芦峅寺63-2 佐伯謙一

槍ヶ岳山荘
☎090-2641-1911

槍沢ロッヂ
☎0263-95-2626

南岳小屋
☎090-4524-9448

大天井ヒュッテ
☎090-1401-7884

岳沢小屋
☎090-2546-2100

[事務所]
〒390-0813
長野県松本市埋橋1-7-2
TEL. (0263) 35-7200
FAX. (0263) 35-0637

http://www.yarigatake.co.jp/

無料ARアプリ「COCOAR」をダウンロードしてこの広告にスマートフォンをかざすとAR特選動画が見られます。

奥大日岳をバックに隣接するヒュッテ（左）とロッジ

雷鳥沢温泉 ◆ 湯量豊富な登山とハイキングの宿

雷鳥沢ヒュッテ
［シーズン中］TEL.076-463-1753

ロッジ立山連峰
［シーズン中］TEL.076-463-6004

事務所 TEL.076-482-1617（FAX兼） http://www.raichozawa.net

◆ バスターミナルより徒歩10分

無料ARアプリ「COCOAR」をダウンロードしてこの広告に
スマートフォンをかざすとAR特選動画が見られます。

立山室堂山荘

TEL 076-463-1228
http://www.murodou.co.jp

好日山荘店舗

●関東・甲信越エリア
- 新潟亀田店：025-378-5123
- 松本パルコ店：0263-31-0580
- ララスクエア宇都宮店：028-678-2940
- LALA ガーデンつくば店：029-850-1265
- 浦和パルコ店：048-764-9701
- 千葉パルコ店：043-301-2380
- 銀座 好日山荘：03-6228-5018
- 新宿東口店：03-6380-1515
- 池袋西口店：03-5958-4315
- 町田店：042-739-7017
- 玉川ガーデンアイランド店：03-3700-2550
- 調布パルコ店：042-426-8055
- 瑞穂店：042-568-7913
- イオンモール東久留米店：042-497-4101
- ららぽーと横浜店：045-933-9100
- 横浜西口店：045-317-1049
- さいか屋川崎店：044-281-6036
- さいか屋横須賀店：046-854-5501
- さいか屋藤沢店：0466-24-1977
- ロックランズ店：03-5659-0808

●東海・北陸エリア
- 静岡パルコ店：054-275-0018
- 浜松メイワン店：053-482-7805
- 名古屋栄店：052-269-1821
- 名古屋駅前店：052-414-7100
- 春日井店：0568-86-0051
- 各務原店：058-380-0014
- 四日市店：059-329-7500
- 富山豊田東店：076-426-1001
- 金沢西インター大通り店：076-292-8020
- 福井北四ツ居店：0776-52-7015

●近畿エリア
- フォレオ大津一里山店：077-514-8758
- 京都店：075-708ー5178
- 北大路ビブレ店：075-366-6552
- グランフロント大阪店：06-6485-7230
- なんば店：06-6645-0630
- ならファミリー近鉄百貨店奈良店：0742-93-4555
- 紀三井寺店：073-448-2001
- 川西店：072-744-0315
- 神戸本店：078-265-2045
- 明石大久保店：078-938-2010
- イオンタウン姫路店：079-280-5520

●中国・四国エリア
- 岡山ビブレ店：086-801-3133
- 広島紙屋町店：082-502-1533

●九州エリア
- アイム小倉店：093-512-3455
- 福岡パルコ店：092-791-6654
- Mt GEAR 大名：092-406-7850
- 太宰府インター店：092-513-0030
- マルヤガーデンズ鹿児島店：099-805-0124

常圧低酸素室稼動中　瑞穂店　新潟亀田店
※詳しくは直接店舗までお問い合わせください。

クライミングジム

CLIMBING GYM
GRAVITY RESEARCH
www.gravity-research.jp

【GRAVITY RESEARCH KOBE】TEL：078-855-8043
兵庫県神戸市中央区磯上通 4-3-10 IPSX EAST 1F
【GRAVITY RESEARCH UMEDA】TEL：06-6485-7363
大阪府大阪市北区大深町 3-1　グランフロント大阪ナレッジキャピタル 6F
【GRAVITY RESEARCH NAMBA】TEL：06-6645-0631
大阪府大阪市中央区難波千日前 12ー35　スイングヨシモトビル 3F、4F
【GRAVITY RESEARCH MIE】TEL：059-329-7777
三重県四日市市諏訪栄町 6-4 スターアイランド 3F

好日山荘ウェブサイト

好日山荘ホームページ　http://www.kojitusanso.jp/
好日山荘ウェブショップ　http://www.kojitusanso.com/

株式会社 好日山荘 本社／兵庫県神戸市中央区浜辺通 2 丁目 1-30 三宮国際ビル 6F

CASIO

PRO TREK
Feel the field

PRW-3000-1JF
¥40,000（税込￥42,000）

自然は読める。

より速く、より長く、より正確に自然を感知する
トリプルセンサー Ver.3 搭載。

高度 1秒間隔※／1m単位で計測

方位 60秒間連続計測

気圧 急激な変化をアラーム通知

［大型ダイレクトボタン］

※高度計測を開始してから3分間は1秒計測、
その後は2分/5秒間隔(切替可能)で計測します。

電波ソーラー プロトレック PRW-3000 誕生。

- ○タフソーラー
- ○気圧傾向インフォメーションアラーム
- ○マルチバンド6（世界6局の標準電波に対応）
- ○日の出・日の入り時刻表示
- ○フルオート高輝度LEDライト
- ○10気圧防水
- ○ソフトウレタンバンド

protrek.jp

キャラバンシューズで山へ行こう。

一歩一歩、大地を感じながら、足場を確かめながら、ゆっくりと頂を目指していく。
1954年以来、キャラバンが歩んで来た歴史も、そんな山登りと似ている。
一足の登山靴から始まり、クラフトマンシップを受け継ぎながら、
急がず、流されず、すべての人が満足する
登山靴を追求し続けて58年間。
これからも、本物だけを目指す
私たちのモノづくりの姿勢は変りはない。

GUARANTEED TO KEEP YOU DRY
GORE-TEX PRODUCTS

C1_02

¥13,650（本体価格¥13,000）

重　　量：約575g（26.0cm片足標準）
ワ イ ズ：3E
アッパー：ナイロン／合成皮革（トゥガード+TPU補強）
ライニング：ゴアテックス®メンブレン
ソ ー ル：キャラバントレックソール（ミッドソール：EVA）
フレックス：ライトフレーム（EVAラミネート）
インソール：EVAインソール
オプション：ハーフインソール

カラー／サイズ
100グレー／22.5〜29.0・30.0㎝
220レッド／22.5〜26.0㎝
241ボルドー／22.5〜28.0㎝
335オレンジ／22.5〜28.0㎝
440ブラウン／22.5〜29.0・30.0㎝
671STDネイビー／22.5〜29.0・30.0㎝（NewColor）

□東京本社　〒113-0021 東京都文京区本駒込2-29-24 パシフィックスクエア千石ビル2階
TEL（03）3944-2331（代）　FAX（03）3944-6540
□大阪支店　〒564-0051 大阪府吹田市豊津町15-11江坂石周ビル5階A
TEL（06）6338-3557（代）　FAX（06）6338-3564

キャラバンホームページ http://www.caravan-web.com/

Caravan®

社団法人　日本山岳会
The Japanese Alpine　Club
——1905(明治 38)年設立——
住所：〒 102-0081　東京都千代田区四番町 5-4　サンビューハイツ四番町

2012 年度役員・評議員・支部長名簿

会　　長	尾上　　昇		
副 会 長	吉永　英明	西村　政晃	
常務理事	高原　三平	森　　武昭	小林　義亮
理事	野澤　誠司	中山　茂樹	永田弘太郎
	萩原　浩司	節田　重節	古野　　淳
	川瀬　恵一		
監事	平井　拓雄	浜崎　一成	

常任評議員	宮崎　紘一	橋本　　清	
評 議 員	堂本　暁子	羽田　栄治	箕岡　三穂
	塩澤　　厚	渡邉　玉枝	成川　隆顕
	神﨑　忠男	小川　　武	贄田　統亜
	中世古直子	今村　千秋	内田　　博
	重廣　恒夫	大谷　　亮	南井　英弘

支部長	北海道＝滝本　幸夫	青　森＝大久保　勉	岩　手＝菅原　敏夫
	宮　城＝高橋　二義	秋　田＝佐々木民秀	山　形＝渡辺　　誠
	福　島＝大谷　　司	茨　城＝星埜　由尚	栃　木＝山野井武夫
	埼　玉＝大久保春美	千　葉＝篠崎　　仁	東京多摩＝竹中　　彰
	越　後＝山崎　幸和	富　山＝山田　信明	石　川＝中川　博人
	福　井＝森田　信人	山　梨＝遠藤　靖彦	信　濃＝飯村　富彦
	岐　阜＝早田　道治	静　岡＝久保田保雄	東　海＝小川　　務
	京都・滋賀＝田中昌二郎	関　西＝重廣　恒夫	山　陰＝白根　　一
	広　島＝杉村　　功	四　国＝尾野　益大	福　岡＝中馬　董人
	北九州＝伊藤久次郎	熊　本＝工藤　文昭	東九州＝加藤　英彦
	宮　崎＝末永　軍朗		

編集後記

『山岳』第百八年（２０１３年）号をお届けします。

失礼ながら会員の高齢化に合わせ、前半部の「記録」から「読物」までのページの文字組みを少し大きくしました。今号は幸いバラエティに富んだ原稿が集まりましたので、じっくりとお楽しみ下さい。

「記録」欄は、海外登山助成金を交付された3隊の登山報告を掲載しました。なかでも、過去数回トライされながらも未踏のまま残っていたキャシャール南ピラー初登攀は、第21回ピオレドール（黄金のピッケル）賞を受賞しました。これにより同賞の日本人受賞者は4隊、計10人となりました。

「調査・研究」欄では、「日本にも氷河があった！」という、登山者にとって大変夢のある話題を、立山カルデラ砂防博物館のお二人にレポートしていただきました。すでに会報「山」でご紹介してありますが、本誌ではカラー写真や図版を駆使して分かりやすく解説してもらいました。今後のさらなる調査・研究に期待したいと思います。

今号の「読物」欄は読み応えがあると自負しております。特に藤本慶光会員には、ご体調不良を押して長文をおまとめいただきました。「経典翻訳プロジェクト」に懸ける河口慧海の情熱と、それに応えて支援する財界人がいて、時代があった――。先人たちの度量に敬服するとともに、地道な調査から原稿執筆まで、慧海に負けない情熱を持って取り組まれた藤本さんに対し、敬意を表します。

また、会員のなかに〝俳句界の芥川賞〟といわれる「角川俳句賞」を受賞された方がおられると耳にして、早速、広渡敬雄会員に原稿依頼しました。そして、これに呼応するように倉知敬会員からは松永敏郎会員の年頭短歌集のお話をいただきました。三十余年にわたって年賀状として送り続けられた短歌を再録しましたが、闘争的登攀者たることを身上とする一方、鋭敏な詩的感覚を持つロマンチストでもあった松永さんの姿が偲ばれます。改めて山登りという「文化的な遊び」の奥深さと、豊かな才能集団としての日本山岳会のパワーに感服した次第です。

＊

「支部の活動報告」の後に今号から「委員会の活動報告」を入れました。各委員会はそれぞれ独自の活動をされている訳ですが、委員会のメンバー以外の会員、特に地方会員にとっては、その活動ぶりがよく見えないところがあります。会報「山」に主な活動報告は載っていますが、それらを含めた年間報告として執筆していただきました。初めての試みですので改善の余地がありますが、その活動内容とともに年々充実させていっていただきたいと願っております。

本誌の原稿締め切り時期は特に設けていません。いつでもお受けいたしますので、どしどしご投稿下さい。また、ご意見やご提案をお待ち申し上げております。

（節田　重節）

『山岳』編集委員会
委員長　岡島成行
委　員　高遠　宏、成川隆顕、永田弘太郎
協力委員　児玉　茂、中村　保、五十嶋一晃、池田常道
担当理事　節田重節、萩原浩司

山岳　第百八年（通巻一六六号）
二〇一三年八月一日発行

価三五〇〇円

発行所　公益社団法人　日本山岳会
東京都千代田区四番町五―四
サンビューハイツ四番町
（〒一〇二―〇〇八一）
電話　〇三―三二六一―四四三三
振替口座　〇〇一三〇―一―四八二九

発行人　尾上　昇
編集人　岡島成行

印刷所　株式会社　東京印刷

発売所　株式会社　茗溪堂
東京都千代田区三崎町三―二―一三
電話　〇三―三二二一―一八七〇
振替口座　〇〇一八〇―二―二四七二三

本誌掲載の記事、写真および地図の無断転載を禁じます。